

不老不死の暴君【凍結
中】

kuraisu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

苦い記憶を胸に俺は長い流浪の日々を送っていた。

そんな折、東ダルマスカ砂漠とある少年と出会う。

色々会ってその少年を弟子にしたせいで俺はイヴァリースを揺るがす事件の当事者になるはめになる。

※本作はFF12の二次創作です&作者は原作を一応全クリしています。

※私は小説を書くのはこれが初めてですのでFF12をプレイ或いは実況動画等を見た事があるほうが理解しやすいと思います。

※とりあえず今のところ感想してくれたら絶対に返信しようと思ってます。

※2014/2/12より暁く小説投稿サイトくにてマルチ投稿を開始しました。

【凍結に関して】

凍結した理由はなんだかモチベーションが下がったから。

もしなにかしらの動きがあればまた書くかもしれないが、望み薄だと思ったださい。

あ、アーケード版DFFにラムザが参戦するそうですね。

他作品のキャラとの絡みが楽しみです（原作での戦友クラウドとは絶対絡むだろうが）

目次

プロローグ	1
ある人物の日記	7
ビュエルバ編	
第一話 誘拐事件発生	13
第二話 シュトラール	22
第三話 空中都市	27
第四話 ルース魔石鉱・出入口	33
第五話 ルース魔石鉱・内部	39
第六話 誘拐犯に制裁を!	46
第七話 ビュエルバの反帝国組織	122
第七・五話 侯爵邸にて	55
第八話 ビュエルバの領主	66
第九話 亡国の王女	70
第十話 救出	79
第十一話 脱出	87
第十二話 王女と侯爵	97
第十三話 誘拐された王女と+α	102
レイスウォール王墓編	109
キヤラ紹介(ネタバレあり)	115
第十四話 王女誘拐から数日後	122

第十五話	かつての上司	127	第二十六話	水面下の情勢	204
第十六話	西へ!	132	第二十七話	亡国の王と王女	212
第十七話	霸王	136	第二十八話	口伝	218
第十八話	壁はぶち壊すもの	144	第二十九話	宴	225
第十九話	魔人	149	第二十九・五話	夜の里にて	234
第二十話	幻・落日の王国	157	第三十話	東の聖地へ	238
第二十一話	忠臣の裏切り	163	第三十一話	愚問	246
第二十二話	挑み、あがく	169	第三十二話	ヘネ魔石鉱	255
第二十三話	破魔石の力	177	第三十三話	影	261
第二十四話	大戦の予感	182	第三十四話	姉妹	269
神都編 (旧称:ケルオン大陸編)			第三十五話	暗雲	276
キヤラ紹介 (ネタバレあり)		190	第三十六話	神都	282
第二十五話	力を求めて	198	第三十七話	夢見の賢者	289

第三十七・五話	暗殺劇	297
第三十八話	もうひとつの遺産	
307		
第三十九話	ミリアム遺跡	313
第四十話	人造竜	320
第四十・五話	ケルオン派遣軍	
327		
第四十一話	背徳の皇帝	336
第四十二話	千年神戦争	341
第四十三話	霸王の剣	346
第四十四話	神都炎上	349
第四十五話	傲慢な人の力	355
第四十六話	記憶	361

第四十七話	冷たき者	369
第四十八話	新たな目的	375
第四十九話	セアの過去	380
第五十話	弟子と師	386
第五十一話	帝都への道筋	393
	帝都編	
399		
第五十二話	聖ヲルバ騎士団国	
405		
第五十三話	イヴァリースの外	
第五十四話	船旅	414
第五十五話	海戦	422
第五十六話	船上の戦い	431

第五十七話 水中戦 ————— 440

第五十八話 ぼったくり野郎に制裁を

! ————— 449

第五十九話 セアの家 ————— 458

The birth of the

tyrant of immortal

ity ————— 467

第五十九・五話 ラバナスタの人々

483

第六十話 空賊予備軍 ————— 495

第六十・五話 ロザリアの諜報部

508

第六十一話 国境封鎖 ————— 518

プロローグ

アルケイディア帝国とガルテア同盟（ダルマスカ王国とナブラディア王国の同盟）の戦争終結から約一年後。

旧ダルマスカ王国領東ダルマスカ砂漠にて・・・

一人の少年が砂漠の魔物相手に戦っていた。

少年は傷だらけだったがそれでも魔物めがけて剣を振っていた。

数匹の魔物を倒したところで少年はサボテンの根元に腰をおろし辺りを見渡し・・・

「・・・えっ？」

とんでもない光景に目を疑った。

砂漠のど真ん中で寝ている奴がいるのだ。

東ダルマスカ砂漠は物凄く暑いし、魔物も多いからそんなところで寝るなど正気とは思えない。

思えない。

更にはその人物のすぐ近くに東ダルマスカ砂漠最強の魔物（ワイルドザウルス）がおり、口から涎をたらしているのだ。

少年の目にはどう見ても涎が寝ている人物に当たっているようにみえるのだが彼は

目を覚まさない。

ワイルドザウルスはついに寝ている人物を丸呑みし・・・

「え、ええええええ!!」

少年は物凄く驚いた。

寝ている人物を丸呑みにしたワイルドザウルスが急に血を吐き、体のあちこちから刃物が出てきたと思えば、血がふきだした。

そしてワイルドザウルスの腹を真つ二つにして先ほどまで寝ていた人物がワイルドザウルスの腹から出てきた。

「妙だな・・・俺は確か砂漠で寝ていた筈だが何故魔物の腹の中で寝ているのだ?」

そんな独り言を言いながら寝ていた人物は辺りを見渡し、少年に気がついたのか少年の方に歩いてきた。

「君、酷い傷じゃないか大丈夫か?」

「・・・!」

少年はそんなことより砂漠のど真ん中で寝てたうえにワイルドザウルスに丸呑みされてたあんたの方が傷があるだろうと叫びたがったが彼は血だらけではあったがついている血の殆どがワイルドザウルスの返り血なのか何故か本人は無傷である。

彼は少年にフルケアをかけた。

「これで大丈夫だろう。ところで君この辺りに町はないか？」

「えっと・・・西に少し行ったところにラバナスタって街があるよ」

少年はフルケア・・・上位の白魔法をあつさりやつてのけた彼に驚きながらも答えた。

「ふむ、そうか」

「よかつたら案内しようか？」

「悪いな、じゃあ頼む」

すると少年はひとつの砂丘を指差して

「あの砂丘を超えたらすぐだよ」

「そんなに近いなら砂漠なんかで寝るんじゃないか？」

砂漠で寝るなんて発想でできるほうがおかしいわ！と叫びたかったが少年はこらえた。

もし彼の機嫌を損ねたら一瞬で殺されかねないと思つたからだ。

「あれ？　そういえば君の名前を聞いてなかったな」

「ヴァンだ、お前は？」

「・・・・・・・・セアだ。　ところでヴァンはなんで一人で砂漠なんかに行ったんだい？」

「いや、子ども達みんなと喧嘩してて俺が一番強かったから砂漠の魔物相手でも十分戦

えるとおもつただけだな」

「魔物相手に戦えるようになったのか？」

「ああ」

「そうか」

「あのさ・・・」

「ん？」

「よかつたら戦い方教えてくれないか？」

「うゝん」

「そういうえば暇つぶしに色々な事を学びはしたが誰かに何かを教えるという事はあまりしなかったなとセアは思った。

理由は教えた後にとんでもない事を起こさないかという心配からであるが・・・。
ヴァンは身なりからして平民であるがもし貴族とかだと厄介だし・・・。

「えっと、君は何処に住んでいるんだ？」

「ラバナスタだけど」

「何か仕事してる？」

「・・・ミゲロさんの店の手伝い」

「ミゲロさんって誰？」

「商人」

「もうけは？」

「まあまあ」

・ ・ ・ なんかなあ。

いきなり身分は？とか聞くのは嫌だしなあ。

でも聞かないと戦い方教えて面倒事に巻き込まれるのは嫌だし。

ああ、そういえばラバナスタって聞いたことがあるな。

確か砂漠の国ダルマスカ王国の王都で三大陸の境目のオアシスにある街だっけ。

記憶が正しければ一年位前にダルマスカ王国はアルケイディア帝国に侵略された筈だから・ ・ ・ 。

「君はラバナスタの何処に住んでる？」

「・ ・ ・ 昔は市街地に住んでたけど帝国に負けてからはダウンタウンに住んでる」ということは・ ・ ・ ヴァンはアルケイディア帝国の制度でいくと外民か。

アルケイディア帝国では外民・新民・政民に大きく三つに身分が分かれている。

その内市街地で住めるのは新民・政民だ。

帝国南東の港町バーフォンハイムみたいに自治権をもっていない限り外民は都市部に住めないのだ。

そしてラバナスタが自治権を持っているという話は聞いたことがない。

ということとは別に戦い方を教えても問題は無いとは思いますが一応聞いておくか。

「君は帝国が嫌いか？」

「ああ大嫌いだ！」

なら問題あるまい。

外民でも帝国軍に入るもしくはは帝国に税金を納める等したら新民になれるが帝国嫌いならそんなことはしないだろう。

「そうだな、じゃあ戦い方を教えてもいいぞ」

「ホントか？」

「ああ」

その後ミゲロさんとヴァンとセアで話し合い、セアはダウンタウンで住むようになり、ヴァンを馬鹿弟子と呼び、半年程鍛え、他の孤児達とも仲良くなり、1年後には馬鹿弟子のせいで国家規模の面倒事に巻き込まれるのである。

ある人物の日記

ダルマスカ王国。

この国の始まりはガルテア連邦時代まで遡る。

イヴァリース統一を成し遂げた霸王レイスウォールは次男のバナルガンにガルテア半島を下賜されダルマスカ家を興した。

そして約400年後、ガルテア王家は断絶し、ガルテア連邦は解体された。

ダルマスカ家当主はバナルガンの弟ハイオスを祖とするナブラディア家当主と共に独立を宣言し、ダルマスカ王国が独立した。

そして同時に独立したナブラディア王国とガルテア同盟を締結した。

ダルマスカ王国はバレンディア・オーダリア・ケルオンの三大陸の境目に位置し商業によって栄えてきた。

その経済的・軍事的価値から他国からの侵略を幾度と無く経験している。

ガルテア戦役。

ダルマスカ独立から約300年後、バレンディア大陸ではガルテア連邦に加盟していた一都市国家から軍事大国となったアルケイディア帝国が、

オーダリア大陸では元マルガラス侯国周辺の都市国家群が団結したロザリア帝国が台頭していた。

この二大帝国は互いにイヴァリースの覇権を争っている。

ダルマスカ・ナブラディアはそんな二大帝国の狭間に位置し、あまり領土拡張をしてこなかった為、国力も軍事力も二大帝国とは比べ物にならなかった。

ダルマスカ王国はロザリア帝国との間に広がるヤクト・エンサがある為、あまり二大帝国の影響を受けていなかった。

しかしダルマスカの北に位置するナブラディア王国は領土拡張を続けるアルケイディア帝国と国境を接していたのだった。

ナブラディア王国はアルケイディア帝国に対抗する為、ロザリア軍を国内に駐屯させる政策を打ち出した。

ロザリア帝国のバレンディア進出を危惧するアルケイディアはナブラディアに経済封鎖などの圧力をかけたがナブラディアが折れることはなかった。

だがこれがきっかけでナブラディア王国はロザリアの庇護下に入ろうとする親ロザリア派とあくまで独立性を守ろうとする独立派に分かれた。

最初はそれ程問題ではなかったのだが国王が独立派であった為、ナブラディアの第二王子をダルマスカの王女に婿入りさせた。

親ロザリア派はこれに激怒し、武装蜂起した。

親ロザリア派はロザリア帝国から支援を受けていた為、ナブラディアの国軍との戦いは拮抗した。

そんな中、アルケイディア帝国からナブラディアに援軍を送りたいという旨の手紙が届いた。

内乱に他国の介入を許したら独立性を失いかねない為、ナブラディアはこれを拒否した。

するとアルケイディア帝国はナブラディア王国に対して宣戦布告した。

アルケイディア帝国がこのような過激な方法をとったのには理由がある。

ナブラディア国内にロザリア軍がいるのは厄介とはいえ、まだ主権はナブラディアが握っていた。

しかし方が一親ロザリア派が勝利し、ナブラディア王国がロザリア帝国の傀儡にならばどうか？

考えるまでも無い。ロザリア帝国のバレンディア進出が確定するのだ。

アルケイディア帝国の安全を考える上でなんとんでも親ロザリア派が勝利することは避けなくてはならないのだ。

たとえナブラディア王国という国家そのものを滅ぼしてでも。

帝国の宣戦布告を受けたナブラディア王国はダルマスカ王国に援軍を要請。

ダルマスカは要請を受け、アルケイディア帝国に宣戦布告した。

しかし帝国軍は僅か数日でナブラディアの王都ナブデイスを包囲した。

帝国軍の王都攻略作戦開始直後にナブデイスは原因不明の爆発で消滅した。

こうしてナブラディア領は帝国の支配下に入り、帝国軍は宣戦布告してきたダルマス

カ王国へと進軍した。

そしてダルマスカ王国国境付近にある城塞都市ナルピナが陥落。

ナルピナ戦でダルマスカ王国軍は多くの兵を失っており、ダルマスカは時代の波に

飲まれようとしていた。

忠勇なるダルマスカ騎士団は抵抗を続けるも、帝国の圧倒的に優位な戦況を覆す事は

できなかった。

帝国軍はダルマスカ王国の王都ラバナスタを目前にして進軍を停止。

ダルマスカ王国に和平案を提示。事実上の降伏勧告を行った。

帝国が和平案を提示したのは理由がある。

ダルマスカ王国は間にヤクト・エンサがあるがロザリア帝国の隣国である。

あまりロザリアを刺激したくないため、ダルマスカは帝国の影響下に置ければよかつ

たのだ。

ダルマスカ王国国王ラミナスは和平案を受諾し、占領下のナルビナへと赴いた。

しかし、和平に異を唱えるローゼンバーグ將軍はナルビナにてラミナス国王を含む交渉団を暗殺。

この一件を受け、帝国はダルマスカに和平の意志なしと判断。進軍を再開した。

ラミナス国王暗殺の報を聞いたビュエルバのオンドール侯爵は中立の立場からダルマスカに降伏を促した。

「徹底抗戦を唱え、

ラミナス陛下を暗殺したバツシュ・フォン・ローゼンバーグ將軍は、大逆犯として処刑された。

いまだ戦いを望む者は將軍と同類である。ダルマスカを滅亡へと導く、恥ずべき反逆者である。

真の愛国者よ。劍を捨て祈りを捧げよ。平和を望んだ慈悲深きラミナス陛下の魂に。

そしてまた・・・

祖国の敗北を嘆いて自ら命を絶った、アーシエ殿下の誇り高き魂に。」

王家を失い、帝国に対抗する力も無いダルマスカは降伏し、ダルマスカは帝国の版図となった。

・ ・ ・と大体これがダラン爺から聞いたダルマスカ王国の歴史だ。

いや、王国は滅んだのだからダルマスカ地方の歴史と言ったほうがよいかも知れない。

この一年で馬鹿弟子の腕もたいしたものになってきた。

そろそろ旅に出ようかと思うが折角住居まで用意してくれたのだ。

あと二、三年はここで暮らそうかと考えている。

ビュエルバ編

第一話 誘拐事件発生

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領城塞都市ナルビナにて。

「今回の仕事は面倒だったな・・・」

ナルビナの入り口で一人の人物が愚痴を言いながら街に入ってきた。

容姿は20代半ばで長い銀髪で顔は中の上程度の人物である。

「予想では2週間程度で済むと思ったのだが・・・まあ仕方ないか・・・とつとと飛空挺の予約をしてラバナスタに帰るとしよう」

そうしてその人物・・・セアは城塞の中へと入っていった。

アルケイディア帝国においてナルビナは西方の大国、ロザリア帝国に近いから帝国兵が多い。

南のラバナスタもロザリア帝国に近いが西方のエンサ大砂海に好戦的なウルタンエンサ族の縄張りがあり

ヤクトでもあるため飛空挺を飛ばすことができないため、ナルビナよりは帝国兵が少ない。

またナルビナには出稼ぎの人も多い。

アルケイディア帝国が城塞の修復・拡張の為に雇ってくれるからだ。

「もつと賃金増やしてくれよ！」

「駄目だ！ 2ヶ月前に給料上げたばかりだろうが！」

「給料が増えても仕事も増えてたら意味がねえだろうが！」

「黙れ！ 文句を言う奴は地下牢にぶち込むぞ！」

・・・まあ色々問題はあるようだが。

(当たり前といえども当たり前か)

ナルビナは2年前の戦争の激戦地であつたため損傷が激しく修復だけでも結構な金がかかる。

その上ロザリア帝国に備える為に拡張もしなければならぬのだ。

となると人件費だけでも馬鹿にならない金がかかっている筈だ。

アルケイディア帝国としては人件費を出来るだけ少なくし、それでいて多くの人を雇わねばならない。

しかし出稼ぎの連中からしてみれば帝国の事情等知つた事ではない。

城塞の修復の為に働くのはとても重労働の筈だ。

更にそこに拡張の為に仕事の量はどんどん増えていく。

仕事に見合うだけの賃金を要求するのははつきり言つて当然のことだ。

「まあそんなことどうでもいいか・・・10日程とか言いながら1ヶ月も帰らなかつたんだし馬鹿弟子や他の皆が心配してゐるだろうしなあ」

セアはヴァンを弟子にしてからラバナスタを2週間以上離れたことがない。

絶対にヴァン達がか心配している筈だ。

セアは夕方に高速飛空艇便に乗り、ラバナスタに着くまで仮眠した。

アルケイディア帝国旧ダルマスカ領王都ラバナスタにて。

セアがラバナスタに着いてまず最初の感じたのがなんか雰囲気が変わつたといふことだ。

なんとというか帝国兵がまともになつたとても言えは言いのだろうか？

1ヶ月前迄のラバナスタは帝国兵が我が物顔で商店から商品を金を払わず持つていったり、酒場の2階を占領したりとやりたい放題していたのだが・・・。

気になって市民に聞いてみたらそんな帝国兵は10日前に来た執政官によつて解任か嚴重注意をされたそうだ。

(あ、そういえば出て行く前にアルケイディア帝国皇帝の三男が執政官に就任するつて話を馬鹿弟子から聞いたような・・・)

ということとは皇帝の三男はいい奴か悪い奴かは分からないが有能ではあるのだろう。未だに敗戦の暗い雰囲気を引きずっていたラバナスタが少しだけ明るくなったように見えるのだから。

とにかくセアは商店街にあるミゲロの店に向かう事にした。

「あ、セアさん！」

「カイツ、留守番かい？」

「うんそうってセアさん何処行ってたんだよ!? ヴァン兄が心配してたよ？」

「そうか・・・で、ミゲロさんは？」

「ミゲロさん今いないんだ」

「? 珍しいなミゲロさんが店を空けてるなんて・・・」

「そうだね」

「じゃあ馬鹿弟子やパンネロは？」

「パンネロ姉ちゃんは今日は会ってないよ。ヴァン兄ならナルビナから帰ってきたみたい」

その言葉を聞いた瞬間セアの顔から表情が消えた。

「セア・・・さん？」

カイツが恐がりながらセアに呼び掛けたらセアは目を冷たく光らせ、口を歪めた。

「・・・カイツ」

物凄く低い声でセアは言った。

普段が明るい声であるだけに恐ろしい。

「・・・なに？」

「馬鹿弟子はいつたいなにをやらかしたんだい？」

「王宮の宝物庫に盗みに行つて・・・」

「ほう、中々やるじゃないか」

「え？」

「いやなんでもない、馬鹿弟子がナルビナから帰つてきたことはあまり人前で言わない

ように」

「は、はい」

「あとは・・・馬鹿弟子がどこにいつたかしらないかい？」

「い、いや」

「ふむ、困つたな。とりあえずミゲロさんを探すべきだな」

じゃあねと普段通りの明るい声で言つてセアは店を出て行つたがカイツは未だに脅

えていた。

セアは店を出てすぐ街の人にミゲロを見なかったか聞いて回つた。

幸いミゲロはラバナスタではちよつたした有名人だから直ぐに砂海亭にいると分かった。

セアは砂海亭へと走つた。

砂海亭についたセアは店内を見渡し2階にヴァンとミゲロを見つけた。

・・・なんか見た事無いヒュムの男が2人とヴィエラの女も一緒にいるのだがミゲロさんの店の取引相手だろうか？

いや、それならそこにヴァンはいらないだろうと思ひそこに進んだ。

するとセアの姿を視界に捕らえたヴァンが突つ込んできた。

「何処に行つてたんだよ！ 心配したよ」

「ああ、済まないな」

突つ込んできたヴァンをセアは両手でがっちり掴み、明るい声で謝罪し

「ところで馬鹿弟子・・・カイツから聞いたんだが俺が仕事に行つてる間にナルビナ送りになつたそうじゃないか」

ヴァン耳元で物凄く低いくて小さい声でセアは言った。

するとヴァンの体が震えだした。

セアの声が物凄く低いときは機嫌が悪く酷い事をしてくるのをヴァンは経験上知つている。

「え．．つとそのおツツツツ．．．!!!」

「まったく！ 俺が仕事してる間になにやってんだお前は！ 王宮に盗みに行つたごときで捕まるとは！ 俺の弟子なら財宝を盗んで逃げてみせろ！ 捕まるなんて情け無い

!!!」

「．．．怒るところはそこなのか」

セアがヴァンの首を掴んでどこかずれた説教をし、その風景をみていた見たことも無い金髪のヒュムの男が呆れていた。

「セア、帰ってきておったのか」

「ああ」

ミゲロの言葉にセアはヴァンの首を掴みながら肯定する。

「帰ってきていきなり済まないが．．．パンネロが誘拐された」

「なんだと？」

「ああ、その空族2人に宛てた手紙があった。ビユエルバの魔石鉱に来いと」

どうやら身なりのいい青年のヒュムとヴィエラの女性は空族らしい。

ヴィエラとヒュムのコンビなんて珍しい。

いや、そんなことより

「？ なんで空族に要求するのにパンネロを誘拐したんですか？」

「ヴァンとこの空族が帝国兵に捕まった時パンネロが帝国兵に許してくださいと叫んでいたようにね。それで誤解を受けたようなんだ」

「なるほど」

その後セアはミゲロとヴァンの首を掴んだまま話を続けた。

とにかく空族がビュエルバまで連れて行ってくれるらしくそれにヴァンと空族の2人と金髪の人物で救出に行くということが決まったらしい。

（面倒事を起こしやがって・・・まあ今はそれより・・・）

セアは身なりのいい青年の方に顔を向けた。

「空族の方々、俺はセア。一応この馬鹿弟子の師匠をやっている」

そう言いながらセアはヴァンの首を掴んだまま空中に持ち上げる。

「あなた方はビュエルバまで連れて行ってくださるとのこと。よければ俺も連れて行ってくれませんかね」

「はあ、別にいいぞ」

そう言つて身なりのいい青年の空族は砂海亭から出て行った。

それを見送つたセアはそういえばヴァンの首をさつきから掴みっぱなしだったなと思ひ出して放り投げ、ヴァンの後頭部が床に直撃した。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ・・・痛いじゃないか、セア！」

「自業自得だ」

ヴァンの台詞にセアは酷薄な笑みを浮かべながら明るい声でそう返した。

暫くヴァンとセアが言い合っていたがヴィエラの女性が近づいてきて声をかけてきた。

「私はフラン、先に出て行った彼はバルフレア。その男性は後で紹介するわ」

フランはそうとうと砂海亭の出口の方に歩いていき、金髪の男もついでに行った。

金髪の人物はなにか訳ありなんだろうとセアはあたりをつけ、ヴァンと共に後に続いた。

第二話 シュトラール

消耗品等を買集め、飛空艇のターミナルに着いた。

飛空艇のターミナルは金を払えば私用の飛空艇でもとめる事ができる。

会社は利用者に深入りしてこないので空族でも利用できる。

その玄関でバルフレアが待っていた。

「言つとくがビュエルバはダルマスカの東の空中大陸ドルトニスにある都市国家だ。行つたら暫く戻つてこれないと思つておけ」

「準備ならできてますよ」

「よし、じゃあついて来い」

バルフレアが個人用の格納庫の方に進んでいった。

俺達もその後が続く。

するとそこには変わった形の飛空艇があつた。

「シュトラールだ」

「すごいな………本当に空賊なんだ！」

「俺の首で船が買えるぜ」

この飛空挺の名前はシュトラールというらしい

ヴァンは目の前で飛空挺を見たためかテンションが上がっている。

空族に憧れていたのは知ってるがいくらなんでも落ち着けとセアが突っ込みを入れる。

それでもヴァンは収まらずバルフレア色々聞いている。

バルフレアも流石に鬱陶しくなり顔を逸らし、セアが顔を顰めているのに気がつきセアに話かけた。

「なんか変なところでもあったか？」

「バルフレア……この飛空挺って新品か？」

「いや」

「俺は飛空挺に関してそれなりの知識を持っているんだが……こんな形の飛空挺を知らないが何処の製品だ？」

「……社名は知らないがアルケイディア製だ」

「なるほど……」

「んなことどーでもいいだろ早く乗ろうぜ!!」

「……そうだな」

バルフレアはため息を吐きシュトラールに乗り込んだ。

「どうかしたのか？」

「・・・いいから早く乗れ」

まったく状況を理解していないヴァンにセアは呆れながらヴァンの背中を押してシュトラールに入っていった。

シュトラールの中を見てみるとどうやら本当にアルケイディア製のようだ。

アルケイディア製の飛空艇はスピードを重視するため制御が面倒である。

シュトラールの座席に座ると隣の席に金髪の人物が座った。

「そういえばあなたの名前をまだ聞いてなかったね」

「私はバツシユ、バツシユ・フォン・ローゼンバーグだ」

「・・・どこかで聞いたような？」

確かダルマスカ王国の将軍で・・・2年前の戦争の時アルケイディア帝国との和平を
決断した国王に異を唱えナルビナで暗殺した。

その際にヴァンの兄レックスもバツシユと一緒にいたためレックスにも謀反の疑い
がかけられ帝国に拷問され1年前に死んだらしい。

そのせいでヴァンは肩身の狭い思いをしてきたという話をセアがヴァンから聞いた
のは8ヶ月程前のことだったか。

「そうか、あなたがバツシユ將軍か」

セアは微笑を浮かべながら明るい声でバツシユにそういった。

「・・・それだけか？」

「いや、元からあなたが停戦交渉の際に国王を暗殺したという話にかなり違和感があったね」

「というと？」

「まずレックスの自白によれば自分がナルビナに来たのは国王暗殺の為ということを知らなかったってことだ。ということはもしあなたが代表団の一人でも殺せば連れてきた味方はあなたが乱心したと思いきやあなたが止めようとするはずだ。そうなるあなたは何も知らない味方を連れていない方がよかった筈なのにあなたは連れて行った」

「なるほど」

「大方、帝国側の過激派の陰謀だろう。三大陸の境目に位置するダルマスカは経済的・軍事的価値が高い。そこがアルケイディアの領土になればロザリア帝国と戦争になった場合優位に立てる」

「・・・」

バツシユはセアの予想がおそらく正解で、それに自力でたどり着いたセアがとても有能な人物だと思った。

するとセアがゲラゲラ笑いながら冗談半分に

「そしてなにより、あなたが本当に国王を暗殺したなら今頃ヴァンがあなたを殴り殺してるかあなたがヴァンを切り殺してるでしょう」

「・・・そうだな」

一瞬とんでもないことを言うと言つたが実際自分がやっていたらそのどちらかになつていただろう。

その時のバツシユの顔がおもしろかったのかセアはバツシユの顔を見てまだ笑つていた。

「よしじゃあ出すぞ」

バルフレアがそう言つてシュトラールを発進させた。

これは余談だがその後セアは乗り物酔いして思いつきバツシユの方に向いて吐いた。

第三話 空中都市

空中都市ビュエルバにて。

この都市国家の歴史はガルテア連邦時代まで遡る。

当時、ガルテア連邦では飛空艇が完成し東方の空中大陸ドルトニスに入植しだした。その入植の際に功績を立てたオンドール侯爵家が空中大陸ドルトニスを下賜され、その後ガルテア王家が断絶しガルテア連邦は解体され空中都市ビュエルバが独立した。

またガルテア王家の分家であるダルマスカ王家とナブラディア王家と親交があったため両王家が治める王国と友好関係にあったが2年前の戦争で両王家が断絶してからはアルケイディア帝国寄りの政治を行い、帝国兵の駐屯も認めている。

・・・現オンドール侯爵は帝国の影響を減らしたいため反帝国組織を支援していると
いう噂もあるが。

基本的な収入は観光と魔石鉱からとれる良質の魔石の輸出で土地が農業に向かないため食料は外国からの輸入に頼っている。

「・・・そういえばビュエルバはあちこちに魔石鉱があるがどこの魔石鉱に來いって書いてあったんだ？」

「ルース魔石鉱だ」

ルース魔石鉱・・・ビュエルバでもかなり一番目か2番目くらいに大きい魔石鉱の名前だ。

バルフレアに疑問を返され思考にふけっていると後ろから帝国兵の声が聞こえてきた。

「だめです、いません！」

「よく探せ！」

「はいっ！」

どうやら誰かを探しているようだ。

そんなやり取りを見ながらバルフレアがバツシユに

「あんたは死人だ。用心してくれ。・・・名前も出すな」

「無論だ」

セアはそんなやり取りを見ていてふとヴァンの方を見た。

「なんだよ？」

「いや、なんでも」

セアはそう言っただけで微笑んだ。

ヴァンはその態度に腹が立ったのか外に出て行った。

(俺は別に將軍様がどうなろうと興味がないしな・・・黙っておくか)

セアはヴァンが普通にバツシユと呼ぶの密かに期待し、バルフレア達にヴァンが先に行ったことを伝えた。

バルフレアたちと一緒にビュエルバのターミナルから出たセアは空中都市ビュエルバの風景に見とれていた。

「やはり何時見てもこの風景は格別ですね」

「君は前にビュエルバに来た事があるのか？」

セアが独り言を言っているとバツシユが突っ込んできた。

「ああ、仕事で何度か」

「君はいつたい何の仕事をしているんだ？」

「秘密」

「・・・そうか」

バツシユはセアの仕事に分からなかったのが残念だったのか少し目線を下げていた。

セアからすれば教えたら間違いなく碌でもないことになりそうだからだが。

「もし教えたら将来的に拘束されかねんし・・・」

「ん？」

「いや、なんでもない」

セアはそういうと早歩きで進んでいった。

するとヴァンと身奇麗な少年が話しているのが目に入った。

「おーい、セア！」

「なんだ？」

「こいつも一緒に連れて行っていいだろ？」

「は？」

「だから、こいつも一緒に連れて行っていいだろ？」

セアは最初は自分の耳を疑ったがどうやら正常のようだ。

そうなる则ち自分の弟子はいつたいなにを言ってるのか分かってるのか？

「馬鹿弟子……魔石鉱は魔物だらけだぞ？ そんなところに自分より幼い子どもを連れて

行く気かい？」

「それは俺も言っただけどこいつが分かってるって言ってるし」

それを聞きセアは少年の方に視線を向けた。

「魔石鉱は魔物の巣穴ということがわかってるのかい？」

「はい、覚悟の上です」

「だめか？」

「俺は別にいいけど……」

そう言ってセアはフラン達の方に視線を向けた。

あつちも気づいたのかこっちまでまっすぐ来た。

「どうした？」

「なんだかこの子も一緒に魔石鉱に行きたいらしい」

「なに？」

バルフレアがフランと目を合わせ少年の方に目を向けた。

「なんで魔石鉱に行きたい？」

「奥に用事があるんです」

「どういう用事だ」

「・・・ではあなた方の用事は」

バルフレアの顔が歪んだ。

「・・・いいだろう」

「助かります」

「俺たちの目の届くところにいろよ。その方が面倒が省ける」

「・・・お互いに」

「どうやらこの少年は相当世渡りがうまいようだ。」

ふとセアは少年に話しかけた。

「そういえば君、名前は？」

「はい、ラー・・・ラモンです」

「んじやラモン！よろしくな！」

・・・ヴァンは怪しき満点の自己紹介に何の疑問も感じていないようだ。

ヴァンとラモンが会話をしている間にセアはフランに話しかける。

「いいのか？」

「いいんじゃない？」

フランとは話しづらいなと思うセアであった。

まあラモンの子守はヴァンに押し付けとけばいいかとセアもそれ以上考えなかった。

「たぶん中でいろいろあるけど、心配ないよ」

ヴァンがラモンにそう言って視線をバツシュの方に向け・・・

「なあ、バツシュ」

早速忘れてるなとセアが腹を抱えて爆笑し、バルフレアとバツシュの表情は強張り、フランはヴァンを睨みつけ、ラモンは目を見開いて驚き、ヴァンは状況が理解できず困惑していた。

第四話 ルース魔石鉞・出入口

街道にそって歩いていくとルース魔石鉞についた。

途中にやたら帝国兵がいたが彼らが言うには特別にビュエルバ政府から許可を貰っていると言っていた。

なにかあつたようだ。

「ここって本当に魔石鉞なのか？」

「ああそうぞぞ」

まあ、ヴァンがそう言いたくなるのも分からなくはない。

セアも20年位前に来た時、ここは神殿か何かか？と言いたくなるような入り口だった。

ただの魔石鉞にしてはなんといか立派すぎるのである。

普通なら工夫たちがひっきりなしに出入りしている筈だが何故か人の出入りがない。

近くにいた工夫に聞いてみるところ帝国から視察が来ているらしい。

「帝国から視察ね」

「ここ」の警備は帝国兵が？」

バルフレアが面倒なという顔をしながら呟き、バツシユも疑問を口にした。

「いえ、ビュエルバ政府は特例を除いて、帝国軍の立ち入りを認めていません」

ラモンがはつきりした声で答えた。

「そうなる今回視察は特例というわけか、最近この魔石は品薄らしいって噂があるし本当かどうか確かめに来たってところか？」

「さあ、どうでしょう？」

セアもあらかじめ知っていた情報を元に仮説を立てたがラモンは首を横に振りながら答えた。

(・・・少なくともこの子は帝国民だな、政民でもかなり上の地位の跡取りってところか)

セアは既にヴァンにちゃんと口止めしておかなかったことを後悔しはじめていた。

まさかビュエルバの入り口ともいうべき場所でそんな奴がいるとは。

予想していなかった訳ではないが普通上の地位にいる人物ならば警備をつけていると思っていたため然程気にしなかった。

「とにかく入りましょう」

フランがそう言つて魔石鉱の中に入つて行き、バルフレアがあとに続きセア達も遅れて続いた。

「バルフレア」

「どうしたフラン？」

「もつと早く言おうと思ったけど・・・セアの周りのミストがおかしい」

「なんだと？」

「彼の周りのミストが凍えているみたい」

「どういうこと？」

バルフレアが後ろを振り返り、セアの方を見た。

その視線に気づいたセアが微笑んで手を振った。

それにバルフレアは呆れた。

「誰か来るわ」

フランがそう言うと2人は直ぐ左右の石柱の影に隠れた。

それを見たセアはヴァンの服を掴み隠れ、バツシユはラモンの手を引いて隠れた。

何故隠れたのかは解らなかつたがとりあえず隠れた方がよさそうだと判断したからだ。

「なにすんつが!!!」

「・・・馬鹿弟子が」

隠れた後にヴァンが叫びそうになったのでセアがヴァンの首を掴んで黙らせた。

暫くすると金びかの鎧を身にまとった人物と初老のおっさんが歩いてきた。

「念のために何うが質のよい魔石は本国には無く……」

「全て秘密裏にヴェイン様のもとへ」

「貴殿とは馬が合うようですね」

金ぴか鎧のせいで表情が伺えないが多分、いや絶対笑みを浮かべている。

それに対し初老のおっさんの方はなにか機嫌が悪そうだ。

「それは結構ですが手綱をつけられるつもりはございませんな」

「ふっ、ならば鞭をお望みか？」

初老のおっさんの言葉で金ぴか鎧の機嫌が悪くなった。

絶対あの野郎は器が小さいとセアは強く思った。

「つまらぬ意地は貴殿のみならず、ビュエルバをも滅ぼすことになる」

金ぴか鎧がそう言って魔石鉢から出て行き、初老のおっさんも後に続いた。

完全に魔石鉢から出て行ったことを確認するとラモン達が出てきた。

「ビュエルバの侯爵、ハルム・オンドール4世」

「へえ、今の初老の人がビュエルバの領主か」

ラモンの台詞にセアが関心する

「はい、ダルマスカが降伏した時、中立の立場から戦後の調停をまとめた方です。帝国寄

りってみられていますね」

「あの様子だとビュエルバの独立を守るために苦労しているみたいだな」

セアはそう言ったが実際のところ独立を守るといふより自治を守っていると言った方がよいかもしれない。

先ほどの侯爵と金ぴか鎧との会話を聞く限り良質の魔石の殆どを帝国に流しているようだし。

「そうだな、反帝国組織に協力しているって噂もあるしな」

バルフレアも同感のようだ。

確かにビュエルバの反帝国組織に力があるなら帝国の侵攻に対しての抑止力になる。

「・・・あくまで、噂です」

ラモンはどうやら侯爵を信じているみたいだが。

「よく勉強してらっしゃる・・・どこのお坊ちゃんかな」

「どうだっていいだろ。パンネロが待ってるんだぞ」

バルフレアがラモンに問いつめてるとヴァンがそれを遮った。

「パンネロさんって?」

そういうやラモンはパンネロのこと知らなかったな。

「友達。攫われてここに捕まってる」

そう言ってヴァンも奥には向かった。

そういやパンネロ大丈夫かな・・・変なことされてなければいいが・・・。

セアはとりあえず今はパンネロ救出だと頭を切り替え、腰にある赤みのある黒い剣を抜いた。

第五話 ルース魔石鉱・内部

「なあ、ヴァン」

「どうしたバツシユ？」

「身のこなしから察するに彼はかなりの腕前のようなだが……君からみてセアはどれくらいの強さだ？」

「すっげえ強い、だって……」

「だって？」

「一度セアがモブ退治しにいくのに俺を連れて行ってくれたことがあるんだけど西ダルマスカ砂漠にいたリングドラゴンを一人で倒してたぜ」

「なに？」

バツシユとヴァンの会話を聞いてたバルフレアは驚いた。

ドラゴン……それは神話の時代から伝えられる強力な魔物だ。

それを一人で倒したのならセアは相当な腕前だ。

「おいヴァン、そのドラゴンが何種だったかわかるか？」

「首に輪っかがついてたから輪竜じゃないかな？」

ドラゴンの種類は大きく分けて四つに分かれる。

地竜・飛竜・殻竜・邪竜の四つだ。

ヴァンが言った輪竜は邪竜の別名である。

邪竜種は他のドラゴンの種類と違い知性を持ち、魔法を使用することもできる。

邪竜種は例え下級の竜であっても相当な力をもつ。

「おいおい、あいつどれだけ強いんだ・・・」

バルフレアはセアの方を見た。

セアはウォーミングアップの為に自分が持っている不気味な剣を振っていた。

因みにバルフレア達は気づかなかったがセアが剣を振っている場所から30M程離れた場所でコウモリみたいな魔物が真つ二つになった。

「・・・」

フランはセアの周りのミストが気になっているようだ。

セアもフランから何か探られてるを感じ取っているのか何か嫌そうな顔をしている。

セアが嫌がっているのを見てフランは警戒心を強めた。

「と、とにかく早く奥に行きましようよー」

セアはフランの視線に耐えられなくなったのかこう言つて奥に進んでいった。

「なんか分かったか？」

「いえ、彼の周りのミストは妙ままね」

「気のせいって言いたいところだがヴァンの話を聞いた後じゃ何かありそうだな」

バルフレアはため息をついた。

「まったくヴァンに会ってから面倒事が立て続けにくるな」

「そうね」

「はあ、フランはセアの方を見張つとけ、俺はガキの方を見張つとく」

バルフレアはそう言うトラモンの方に視線を向けた。

バルフレアもセアと同じようにラモンがアルケイディア帝国の上層の人間であるあたりをつけている。

とある事情でアルケイディア帝国の事情に詳しいバルフレアはラモンが面倒事を起こさない訳がないと考えていた。

「まったくこれよセア〜！」

ヴァンがそう叫んでセアの後についていくのを見てバルフレアは更にため息をついた。

「あんな分かりやすい奴ばかりだと楽なんだがな・・・」

バルフレアはそう言うて自分に噛み付こうとしてみた魔物を銃で打ち抜いた。

暫く進んでバルフレアはある違和感を感じはじめた。

「なんでアンデッドが出てこないんだ？」

ルース魔石鉱はアンデッドがよく出てくる場所の筈だ。

結構奥まで来たというのにまだ一体もアンデッドを見ていない。

皆もバルフレアの言葉を聞いてそういえばというふうに頷いた。

「確かにおかしいですね」

ラモンも同じ考えのようだ。

「俺達の運がいいってことだろ」

「・・・可能性が無いわけじゃないが限りなく低いだろうな」

ヴァンの考えにセアはある程度肯定しながらも否定した。

じゃあお前はと言うふうにはバルフレアはセアを見た。

「・・・俺達が来る前に誰かが倒したとか？」

「あのトカゲ共がそんな面倒なことをするとは思えないがね」

セアは自分なりの考えをバルフレアに言ってみたが否定された。

「それにもしそんなら他の魔物も倒されているはずだわ」

フランもセアの考えを否定した。

「なら・・・何故だ？」

バツシユがそう言うのとセアが俯いた。
すると・・・

「そんなの考えてたつて解らないじゃん。早く行こうぜ！」

そう言つてヴァンは走つていった。

それを見てバツシユも続く。

するとバルフレアは大きくため息をついてセアに

「あいつは解つてやつてるのか？」

「1年程度の付き合いだ俺が知る限り解らずやつているな」

「たちが悪い」

「馬鹿弟子が迷惑をかけるな」

「まったくだ」

バルフレアはそういうとフランと一緒にヴァンが走つていった方に歩いていった。

「馬鹿弟子に（空気）というのを教えてやるべきか」

「教えるべきだと思いますが」

ラモンはそこで一旦言葉を切つて。

「でもそのおかげで先程は助かりましたし」

その言葉を聞いたセアはニヤニヤ笑いながら

「まったくだな」

そう言ってセアは立ち止まってラモンの方を向き

「そういえば君はどうして魔石鉱に来たんだい？」

「元老院議員の人から貰った石の原料を調べに……っは！」

ラモンは慌てて自分の口を手で塞いだ。

その様子を見てセアが悪人のような笑みを浮かべた。

その状況が数分間続く。

「元老院議員と知り合いなのか……まあ他のみんなには黙つといてあげるよ」

「……お願いします」

「そのかわりと言ったらただで君の名前教えてくれるか？」

「……ラーサー・ファルナス・ソリドール」

その名前を聞いてセアの顔が固まった。

ソリドール家はアルケイディア帝国皇帝を輩出している名家だ。

確かアルケイディア帝国皇帝のグラミス・ガンナ・ソリドールには4人の息子がいて

上の2人は死んだはず。

そして三男のヴェイン・カルダス・ソリドールはラバナスタの執政官をやっているはずだ。

ということとは目の前の少年は現皇帝の四男つてことになる。

帝国の上層部の人間だとは思っていたがまさか皇帝の息子だったとは。

なんでよりにもよってそんな人物とヴァンがなかよくしてるかなあ。

あとでとりあえずヴァンを一発殴ると決めた。

「あの、セアさん？」

「あ？」

「大丈夫ですか？」

「いや、少し驚いただけだよ」

セアは落ち着いてラモン……いやラーサーに優しい笑みを浮かべて手を差し出した。

「先頭と結構離れちゃったね。急ごうか」

「はい」

ラーサーはセアの手をがっちりと掴んだ。

そしてセアが目にも止まらぬ早業でラーサーを背負い、凄まじい速さで走っていった。

第六話 誘拐犯に制裁を！

魔石鉱の採掘部についた。

あちこちに魔石が埋まっている。

魔石はそれ自体が青く発光しているのでなんとなく神秘的である。

レーザーが懐から石を取り出し落ちている魔石を見比べていた。

「これを見たかったんですよ」

レーザーが嬉しそうに声を上げる。

「なんだ？」

「破魔石です。人造ですけどね」

「はませぎ？」

ヴァンとレーザーの会話を聞いていたバルフレアの視線が周りの魔石からレーザーへと移ったが誰も気づかなかつた。

だからレーザーは何も思わずヴァンの疑問に答えた。

「普通の魔石とは逆に、魔力を吸収するんです。人工的に合成する計画が進んでいて、これは試作品。ドラクロア研究所の技術によるものです」

その言葉を聞いたとたんバルフレアの眼は鋭くなった。

「やはり原料はこの魔石か・・・」

「用事は済んだらしいな」

「ありがとうございます。お礼は後ほど」

ラーサーは回り魔石を見ていたのでバルフレアの眼が鋭くなったことに気づかず御礼の台詞を述べる。

「いや、今にしてくれ・・・お前の国にまでついていくつもりはないんでね」

その台詞を聞いたラーサーがバルフレアの方に振り返り始めてバルフレアの眼が鋭くなっていることに気がついた。

「破魔石なんて古臭い伝説、誰から聞いた？」

ラーサーは答えず後ずさるがバルフレアはかまわず疑問を投げかけ、進んでくる。

「なぜドラクロアの試作品を持つてる？あの秘密機関とどうやって接触した？」

そうやって迫ってくるバルフレアから逃げるようにラーサーは後ずさり壁際に追い込まれた。

「お前、何者だ？」

そう言つてバルフレアはラーサーに問いかけた。

セアがそいつは皇帝の息子ですと行ってやろうかとも思ったがヴァンが帝国嫌いな

ので自分の弟子が皇帝の息子を殴ったりしたら面倒なので断念する。

するといきなり後ろから荒々しい声が聞こえた。

「……待ってたぜ、バルフレア！」

そういつて緑色のバンガが丸い輪つかが先についたチェーンソーのような武器を持って入ってきた。

その後に続いて3人のバンガも入ってきた。

バンガの顔を見てバルフレアが心底嫌そうな顔をする。

「ナルビナではうまく逃げられたからな、会いたかったぜえ？ さっきのジャツジといい、そのガキといい……金になりそうな話じゃねえか。オレも一枚噛ませてくれよ」

まあやりようによつては金になるかとセアは思う。

なんだつてイヴァリースの覇権を争う二大帝国のひとつアルケイディア帝国皇帝の息子だ。

身代金でも要求すればとんでもない大金が手に入れることもできるだろうし、敵対国のロザリア帝国に売り飛ばしてもいい。

アルケイディア帝国から睨まれる覚悟があればの話だが。

「頭使つて金儲けつてツラか。お前は腐つた肉でも噛んでろよ」

バルフレアは子連れで不利な状況なのに敵を挑発する。

その言葉に緑色のバンガが声を荒げた。

「バルフレアアア!! てめえの賞金の半分は、そのガキで穴埋めしてやらあ!!!」
バルフレアは指名手配犯だったな。

そして確か犯人を殺すと賞金が半分になるんだっただけ。
ということはこのバンガはバルフレアを殺す気みたいだ。

「この野郎! パンネロはどこだ!?!」

「アア? 餌はもう必要ないからな。途中で放してやったら泣きながら飛んで逃げたって!」

緑色のバンガがヴァンに気をとられた一瞬の隙を突いてレーザーが持ってきた人造の魔石を緑色のバンガめがけて投げた。

ひるんでる隙にレーザーが投げた魔石を回収して反対方向へにげる。

あれ投げていいのかとセアは思ったがヴァンがレーザーを追って反対方向へ走ったので全員が便乗する。

「こらっ、てめえら・・・逃がすかあっ!」

緑色のバンガが手下を引き連れて追ってきた。

「いちいち相手してられるかって。適当にあしらってずらかるぞ。」
バルフレアの台詞に一人を除いて全員が頷いた。

あの緑色のバンガが持っているのは機械仕掛けの兵器だ。

この世界の地上ではミミック菌という細菌が金属を腐敗させるので機械はもっぱら飛空艇に使われている。

だから地上での戦闘では剣や魔法が主流で機械を使用しているのは少ない。なぜならコストが高すぎるからだ。

もし2年前のダルマスカの兵士全員を機械兵器で統一しようとしたらアルケイディア帝国並の経済力が必要になる。

加えて電気系統が変になっていないかメンテナンスもほぼ毎日しなくてはならないし、毎日武器が取り上げられていたら軍として失格だ。

だから使われるとしても簡単な造りの銃などが精々だ。

そんな武器しかないからあの緑色のバンガの武器は接近戦では圧倒的な強さを誇る。

「ちよつと俺が足止めする。みんなは先に行っててくれ」

「なに言ってるんだよセア！ 早くにげるぞー！」

セアのとんでもない発言にヴァンが逃げようと進めるがセアはヴァンを睨んで……

「行け」

物凄く低い声で言いヴァンは飛んで逃げた。

するとバンガ達が笑いながらセアを罵ってきた。

「お前、そんな武器で兄貴に勝てると思ってるのか?」

「馬鹿じゃねえの」

「違いねえ!」

すると緑色のバンガが話しかけてきた。

「ほう、逃げずに残るとは腕に自信でもあるんだらうな」

「そういえばあなたの名前を知らないがなんて名前だ?」

すると緑色のバンガがにたりと笑い武器を振りかぶって・・・

「バッカモナンだ!」

そういつて武器を振り下ろした。

セアは眉ひとつ動かさず直撃した。

「ああ?」

バッカモナンは予想以上にあっさり仕留められたのに少し拍子抜けした。

するとセアが剣を持っていた右腕が動きバッカモナンの左腕を切りとばした。

「がああああああああ!!」

「馬鹿・モナンね・・・変わった名前だ」

セアは左肩から胸のあたりまで切り込まれていたがその表情は笑っていた。

手下のバンガ達は恐怖にかられ一目散に逃げ出した。

「喧嘩売ってきておいて．．．逃げるんじゃないよ」

そういつてセアは魔法を唱え出した。

するとセアを中心に魔方阵が形成されそこから凄まじい勢いで炎が出て逃げつたバンガ達を襲った。

「「ぎいいいいやあああああああ!!!」」

その叫び声が弱くなったところでセアは使った魔法を止めた。

彼らは黒焦げになったが耳を濟ませるとうめき声が微かに聞こえる。

一応彼らは生きてはいるようだ。

そしてセアは倒れて呻いているバツカモナンに近づいた。

「二度と俺達に手を出すなよ? でなきや．．．ここであなたは死にますよ?」

そういつてセアは剣でバツカモナンに(ポイズン)と(ブライン)の魔法を使った。

別に対象に猛毒をかける(ポイズン)だけでもいいような気がするが対象の目をつぶす(ブライン)も使った方が恐怖感を演出できると思いセアはその魔法をかけた。

実際効果は抜群でバツカモナンは恐ろしくて仕方が無かった。

左肩からは血が出ている。そして体がしんどくて仕方がない。目は何も見えず死に掛けているように思える。

「あ……ああああうううう!」

「いいかい?」

「解った! 止めてくれええ!!!」

「じゃあ俺達のことを忘れるよ?」

「ああ、解った!」

その言葉を聞いてセアはバツカモナンの異常状態をとこうと思つたがちよつともものたりなかつた為、最後に「コンフユ」の魔法を使った。

その効果は対象を混乱状態にする。

「あはああがあ!ぐはあげえあ?おざがはああ!」

バツカモナンは変な声で叫び出した。

周りの黒焦げになつた手下たちもセアによつて様々な異常状態を付加され、バツカモナンと同じように自分たちのことを忘れるように誓わせた上で「コンフユ」を唱えていき全員が混乱状態になると数分放置した。

聞こえてくる悲鳴にセアは満足し失われた魔法を使用してバツカモナン達を元通りにし自分達に関する記憶を消し飛ばした。

「あれ?……どこだ?」

バツカモナンが辺りを見渡す。周りのバンガ達も状況が解らず辺りを見回している。

それを見てセアが優しい笑みを浮かべ明るい声でバツカモナンに話しかけた。

「ここはルース魔石鉱ですよ」

「なんで俺が魔石鉱なんかにいるんだ？」

「大方酒場で酔っ払ってきたんでしよう俺がここに来た時なんかあなた方ここで寝てましたし」

「俺がここで寝てた？」

「はい」

「なんか記憶が曖昧でおぼえてなえな」

「そうですね」

そう言ってセアがそういえばというふうな動きをして

「すいません出口に仲間をまたせてますんでこれで」

「・・・ああ」

バツカモナンとその手下たちはなにか釈然としないもののセアを見送った。

セアは少し離れた場所でバツカモナンにしたことを思い出し腹を抱えて爆笑していた。

第七話 ビュエルバの反帝国組織

スキップをしながらセアは魔石鉱の出口に向かって進んでいた。

出口の近くまで来ると声が聞こえてきた。

「大丈夫。彼、女の子は大切にする」

「フランは男を見る目はあるぜ」

「それは遠まわしに君がいい男って言いたいのか、バルフレア？」

「なんでそんな話をしていたか知らないがとりあえずセアは思った事をそのまま言った。」

するとバルフレアが顔を顰めた。

「あいつらはどうした？」

「馬鹿・モナンだったけ？ そいつなら上手いことまいたよ」

「・・・あいつの名前はバツカモナンだぞ」

「そうか、変な名前だとは思っていたが俺の聞き間違いですか」

「そんな感じでバルフレアと話してたらヴァンが話しかけてきた。」

「それよりセア！」

「なんだ？」

「ラモンがラーサーで帝国の皇帝の息子だった!!」

「知ってるよ」

「え？」

ヴァンが変な声をあげ、周りの奴等もも変な視線でセアを見てきた。

するとセアはバツシユの方を向いて

「なんか変な事言ったか？」

「君は彼が皇帝の息子だと知っていたのか？」

「ああ」

「なら何故黙ってた？」

「だって俺の弟子が帝国嫌いだからばらすと面倒な事になると思ったんで」

「・・・」

なんか嫌な空気が流れた。

空気がまったく読めない筈のヴァンですら黙っている。

「・・・そーいやパンネロは？」

苦し紛れにセアは話題を変えた。

するとヴァンが

「ラーサーが連れて行つたぞ」

セアがどういふことだと説明を求めるとバツシユを見た。

「ジャツジに彼女が賊ではないかと疑われていたのだがラーサーが自分の供だと言いオンドール侯爵の客人として今は恐らく侯爵邸にいる筈だ」

「となると助けようとしたら侯爵邸にいかなきやならないのか」

バツシユの答えにセアが途方にくれた声で答えた。

「侯爵は反帝国組織と繋がりがあつた。そつちの線でいい手があるぞ」

バルフレアはそう言つてバツシユの方を見た。

「侯爵は2年前に私の処刑を発表した。私の生存が明るみになれば、侯爵の立場は危うくなる」

「侯爵を金ヅルにしてる反帝国組織にとつても面白くない話だろうな。『バツシユが生きてる』つて噂を流せば、組織の奴が食いつくんじやないか?」

なるほどとセアは思ったするとヴァンがそれを聞いて

「じゃあさ俺がこんなふうで町中で言つてくるよ」

そういつてヴァンはポーズを決めて大声で叫んだ。

「俺がダルマスカのバツシユ・フォン・ローゼンバーグ將軍だ!!」

その声を聞いた周りの人たちが何事だとヴァンを見て、呆れてどつかに行つた。

その事に気づかずヴァンは得意げにバルフレアに話しかけた。

「どうだ？」

「……まあ目立つのは確かだな」

バルフレアは何とか表情を保ちながら答えた。

そしてヴァンに

「よしヴァン、お嬢ちゃんを助けるためにも、やるだけやってこい。できるだけ人の多い場所だな」

「わかった！任しとけよ！」

「オンドール侯爵と接触できるかどうかはお前次第だ。俺達は酒場にいる。何かあったら戻ってこい」

そうしてヴァンは街の方に走っていった。

「流石は俺の弟子だ。師匠として嬉しい限りだ」

「本気で言ってるのか？」

バルフレアは呆れたような顔でセアを見た。

セアは顔に笑みを浮かべていた。

「さて弟子が頑張っているのに師匠がサボってる訳にもいかないか」

「まさかとは思いますが君もヴァンと同じ事をするきか？」

バツシユは慌てたようにセアに問いかけた。

するとセアは手を振って

「いやいや、ただの弟子へのサポートだよ」

「何をやる気だ？」

「ヴァンがあなたの真似をしているところでヴァンに関しての根も葉もない噂を流すんですよ」

「例えば？」

「ヴァンは帝国の間者だとかそんな噂だよ」

そう答えるとセアも街の方へ歩いていった。

その後姿を見ながらフランはバルフレアに話しかけた。

「師匠があれだと弟子はああなるのかしら」

「・・・」

バルフレアはまたため息を吐いていた。

街の十字路の中心でヴァンがポーズを決めながら大声で叫んでいた。

「バツシユは生きてるぞー！」

それを聞いたビュエルバのガイドがヴァンになにか言おうと近づいていくとヴァンは走っていた。

セアはヴァンになにか言おうとしたガイドへ話しかけた。

「まったく変な奴がいるものですね」

「ほんとうですね」

ガイドが同意してきた。

「そういえばあの少年さつきジャッジとなにか話してましたよ」

「え!？」

ガイドがおどろいてセアを見る。

セアはびつくりしたという演技をしながらガイドに話しかけた。

「いや、魔石鉱の所で金ぴかの鎧を着たジャッジと話してるのを見たんです」

「金ぴかの鎧ってそれってジャッジマスター・ギースじゃないですか?」

あの金ぴか鎧がジャッジマスターだとはセアは解っていたが名前がギースということはこの時初めて知った。

「そーいやジャッジの紋章が入ったマントを着けていたような・・・」

そう言っつてセアは頭をひねる真似をしてガイドに話しかけた。

「ま、俺は別に政治なんかに興味がありませんからね」

そうやってセアはターミナルの方へ歩いていった。

そこで暫く待っているとヴァンが走ってきて大声で叫んだ。

「オンドール侯の発表は嘘っぱちだ！」

そういつてるところビュエルバの警備兵に見つかりヴァンが警備兵に説教されていた。

その様子にセアは軽く笑みを浮かべたが直ぐに消しターミナルの入り口にいるガイドに話しかけた。

「ターミナルで聞いたんだけど街中に侯爵を貶めるような演説している少年がいるって本当なんですかね」

その台詞を聞いたガイドは顔を顰めた。

「ターミナルでも噂になっていいるのですか」

「ええ、なんでもロザリア帝国の工作員だとかなんだとか……」

「は？」

「え？」

「アルケイディア帝国の工作員って噂じゃないのですか」

「いや、俺が聞いたのは侯爵と帝国の関係を悪化させるって話だったけど？」

「……私が知っている噂と違いますね」

「まあ噂なんて尾ひれがつくものだし信憑性なんてないみたいなものですよ」

「そうですね」

「そうだよ」

そう言つてセアは酒場の方へ歩いていった。

酒場に入るとバルフレア達が席に着いていた。

セアは無関係を装い酒場のカウンターにいる女性に話しかけた。

「酒をひとつ」

「はいよ」

「それにしても街中で変な演説してる少年の噂聞きました？」

「ええ」

「まったく馬鹿らしいですよ。彼がビュエルバの反帝国組織の一員だなんて」

「え!?!」

女性が驚いた顔でセアを見る。

何故か周りの店員達も驚いたようにセアを見ているがセアは無視した。

バルフレア達もセアに変な視線を向けてきたがそれも無視。

セアは店員たちが自分を見てきた理由を思い当たり内心で笑いながら思い出すよう

にして話を続ける。

「確か帝国寄りの侯爵を排除する為にやってるって話でしたよ」

「・・・そう」

「そもそもビュエルバは独立国ですよ？反帝国組織なんかあるわけ無いじゃないですか！！」

「そうね」

そう言つてセアはカウンターから酒を受け取りバルフレア達が座っている隣のテーブルに酒を置いて座つた。

そして酒の入つたボトルのフタを空け、ボトルを叩つた。

20分程すると変な演説をしていた少年が黒いバンガに担がれて酒場に入つてきた。

セアはバツシユの方に視線を向けた。

流石は將軍。ただそれだけでセアが言いたいことを察したようだ。

バツシユはヴァンを担いだ黒いバンガに話しかけた。

「すまない。彼は私達の知り合いだが・・・彼がなにか？」

「なんだとじゃあ奥に入れ！」

黒いバンガがそういうと店員達がバルフレア達を囲む。

その様子を見ていたセアが自分の予想が当たっていたことを確信した。

ここが反帝国組織のアジトなのだ。

情報が集まる酒場が本拠地とはまた古典的な。

バルフレア達がここにいたのもヴァンが連れ去られたという情報が入手し易いからだ。

そしてセアはちやつかり店員達の囲みの中に入った。

バルフレア達と一緒にセアも酒場の奥へ連れて行かれた。

そして黒いバンガが座っている人物へ話しかけた。

「連れてきたぜ、ハバード」

「似ても似つかんぞ」

「やっぱり偽者かタチの悪い悪戯しやがって」

「だがそこらのガキがローゼンバーグ将軍を名乗るとは思えん」

ハバードはそこで一旦言葉を止めた。

その隙を逃がさずセアが爆弾発言を投下する。

「ローゼンバーグ将軍はそつちじゃなくてこつちだよ」

セアがバツシユを指差しながら言った。

すると反帝国組織の人たちまたまたタチの悪い悪戯かとセアを睨んだ。

しかしハバードの言葉によってその誤解は解ける。

「あんたは……本当に生きていたのか！」

「ああ」

そうなることセアに向いていた視線はバツシユの方に移る。

「いかにも裏がありそうだとは思ったがまさか本人のご登場とはな。このことを侯爵が知ったら・・・」

「さて、なんと言うかな。直接会って聞いてみたい」

ハバードはその台詞を聞き後ろにいるレベ族の人物に話しかける。

「・・・どうすんですかい、旦那」

「致し方あるまいな。侯爵閣下がお会いになる。のちほど屋敷に参られよ」
やっと面倒事の終わりが見えてきたなセアはため息をついた。

第七・五話 侯爵邸にて

ヴァンがビュエルバの街で「俺がバツシユだー！」と言いまくつてる頃。オンドール侯爵邸の貴賓室に少女と少年の二人が話していた。

「ヴァンは元気なんですね。帝国に連行されたから、もう……」

ヴァンの話を聞いたパンネロはそう言った。

ラーサーは書類を書きながら話す。

「すぐに会えますよ。それまでは僕があなたをお守りします」

「そんな」

そう言つてパンネロは俯いた。

するとラーサーが書類を書く手を止め、話しかける。

「それにしても……ラバナスタの帝国軍はやりすぎのようですね」

先程ラーサーはパンネロから聞いたラバナスタの帝国軍の有様を聞いた。

パンネロとしてはラーサーが帝国の上流階級の人だと思つていたので帝国兵が偉そうみtainな曖昧な表現しかしていなかったが。

具体的に言うると多くのダルマスカ人は市民権を買えなかった為、外民であった。

外民が住むのがダウンタウンで、その住民に対する帝国兵の暴行や凌辱など日常茶飯事だった。

色々原因はあるが一番の原因はヴェインの前のダルマスカ地方執政官の性格である。

その執政官は大の外民嫌いだったのである。

新民になり税を納めるダルマスカ人には寛容ではあつたが外民には凄まじい差別を行った。

それを批判する外民には無実の罪を着せナルビナ送りにしたり、死刑にしたりした。執政官に言わせれば新民や政民のように税も払わず、国家に貢献もしない奴などに寛容である必要など感じなかつたのだ。

ヴェインが執政官に就任してからはヴェインの指導の下、外民差別は急速に減つていくのだがパンネロはヴェインが執政官職に就いて直ぐに誘拐されたため、その事を知らない。

その為、ラーサーにはそれがラバナスタの現状だと思ひ、言葉を続ける。

「僕から執政官に話しておきます」

パンネロは少し驚いた顔でラーサーを見た。

するとラーサーは椅子から立ち上がり、パンネロのほうを向く。

「ヴェイン・ソリドールは僕の兄です」

パンネロは驚いて声を出せなかった。

ラーサーはパンネロの方に近づきながら話を続ける。

「執政官の仕事はダルマスカの安定を守ること。そして兄はどんな仕事もできる人です。今はうまくいっていないかもしれませんが・・・ラバナスタの暮らしはきつとよくなります」

ラーサーは自分の兄を尊敬し、信頼していた。

その為、兄が執政官になったのだからラバナスタの治安は回復すると疑ってなかった。

だからラーサーは景色を見ながら自信のある声でパンネロに言った。

「大丈夫ですよ。兄は凄い人ですから」

「あの人・・・恐いんです」

「えっ？」

パンネロの言葉にラーサーはパンネロの方に振り返る。

「すいません。お兄様のことを。でも、あの戦争で傷ついた人がたくさんいて・・・私も孤児です」

「帝国が恐いんですね」

ラーサーの言葉にパンネロは頷いた。

するとラーサーはパンネロの前で方膝をつき話しかけた。

「パンネロさん。ソリドール家の男子は人々の安寧に尽くせと教えられて育ちます。あなたを守るのも僕の仕事のうちなんですよ」

「信じていいんでしょうか」

パンネロは躊躇いながらそう言った。

するとラーサーは立ち上がり

「僕の名誉にかけて。兄もわかってくれます」

そうラーサーは言った。

第八話 ビュエルバの領主

ビュエルバの侯爵邸にセア達が来たのは昼過ぎだったが既に日は暮れあたりは暗くなっている。

侯爵の執務が終わるまで待たされたからだ。

そして警備兵に呼ばれ侯爵の執務室へ案内された。

初老の侯爵が大きい机を挟んで反対側に座っていた。

「バッシユ・フォン・ローゼンバーク卿。私は貴公が処刑されたと発表した立場なのだが？」

「だからこそ生かされておりました」

バッシユの言葉を聞き侯爵が手を組んで俯いた。

「つまり貴公は私の弱味か。ヴェインもおさおさ怠りない・・・で？」

「反乱軍を率いる者が帝国の手に落ちました。アマリアという女性です。・・・救出のため、閣下のお力を」

「貴公ほどの男が救出に乗り出すとは・・・よほどの要人か」

侯爵とバッシユの会話を聞き、セアは小声でヴァンに聞いた。

「アマリアって誰だ？」

「そういえばセアは知らないのか・・・王宮から逃げるときにガラムサイズ水路で会ったんだけど俺達と一緒に捕まっちゃって・・・」

「ちよつとまで、ガラムサイズ水路まで逃げれたなら何でお前は捕まったんだ？」
「え？」

「水路に飛び込んで東ダルマスカ砂漠の方に続く川まで泳げば逃げ切れただろう」

「無茶苦茶だぞ」

「まあいいや」

そう言つてセアは侯爵とバツシユの方に視線を戻した。

「立場というものがあるのだな」

そう言つて侯爵は席から立った。

立場というものがあるということは帝国と表向きは敵対したくないということだ。

当たり前といえは当たり前だ。

ビュエルバは都市国家で対するアルケイディア帝国はイヴァリースに覇を唱えんとする二大帝国のひとつだ。

軍事力も経済力も比べ物にならない。

要するにもし侯爵がバツシユに助力した場合、帝国がビュエルバに攻め込む大義名分

が出来てしまう。

そしたらビュエルバは帝国に滅ぼされてしまうのだ。

バツシユの願いは叶わないだろうとセアは思い侯爵に話しかけた。

「ラーサー殿に会わせてはもらえませんか？俺の知り合いが一緒にいる筈なので
すると侯爵はセアの方を向いて残念そうな声で

「・・・一足遅かったな。ラーサー殿の御一行はすでに帝国軍に合流された。今夜到着予定の艦隊に同行してラバナスタに向かわれる」

その台詞を聞いたヴァンが何かしそうな雰囲気だったなのでセアが羽交い絞めにした。

「放せ！放せつてばー！」

「落ち着け・・・」

セアがヴァンを宥めるように言った。

さっきの侯爵の台詞をそのまま受け取ると艦隊はラバナスタに行く。

ラーサーなら上手い事取り計らってラバナスタでパンネロをおろすだろう。

力づくで助けるより余程安全だ。

しかしヴァンは解っていないようだ。

「早くしないと、パンネロが・・・！」

「やめろー！」

どうやらバルフレアも同意見のようだ。

当たり前かこれ以上面倒事に首を突っ込みたくないだろうし。

「ローゼンバーグ將軍」

外野の騒ぎなど知らないとしても言いたげに侯爵はバツシユに話しかけた。

「貴公は死中に活を見いだす勇将であつたと聞く。あえて敵陣に飛び込めば、貴公は本懐を遂げるはずだ」

侯爵の台詞を聞いたセアとバルフレアはその本当の意味を素早く察し、バツシユの方に向く。

するとバツシユはセア達の方を向き真剣な顔で腰の剣を抜いた。

「悪いな、巻き込むぞ」

「侵入者を捕らえよ！」

侯爵のその言葉を待っていたとばかりに警備兵が執務室入ってきた。

そして侵入者^{セア}一行は警備兵に捕縛^{逮捕}された。

「ジャツジ・ギースに引き渡せ！」

「放せよ！ なにすんだよ！」

・・・どうやらヴァンはまったく理解できていないようだ。

そのヴァンを見てセアはヴァンに観察眼というものを育ててやろうかとも考えたがそれでは素直さが無くなってしまおうとヴァンの観察眼を育てる事を諦めた。

セア達が捕縛されて数時間後。

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領王都ラバナスタにて。

「帝都の老人どもに足止めされている間に、この復興ぶりだ。まったく・・・この国はたくましいな」

ダルマスカ地方の執政官ヴェイン・カルダス・ソリドールは王宮から市街を見て眩いた。

机の反対側にいる人物・・・ジャツジマスター・ガブラスは報告を続ける。

「現在ラバナスタの反乱分子は孤立しておりますが・・・今後、外部勢力からの支援を受けると厄介です。特にビュエルバの反帝国組織は不自然なほど資源が豊富です」

反帝国組織の中でビュエルバの組織はそれ程大きい方ではない。

数ある反帝国組織の中で見れば精々中規模程度・・・先日壊滅寸前まで追い詰められた反乱軍より少し大きい程度である。

しかし大規模な反帝国組織は南のケルオン大陸の植民地に集中している。

宿敵の力を削ごうとロザリア帝国が支援しているからだ。

まあアルケイディア帝国もケルオン大陸のロザリア帝国の植民地にある反抗組織を支援しているからお互い様である。

しかしビュエルバの反帝国組織は違う。

位置的な問題でロザリア帝国が支援できる筈がないのだ。

それなのにダルマスカ王国の敗残兵の殆どを吸収して結成された反乱軍と同程度の規模があるのはおかしい。

となると・・・ビュエルバの領主が反帝国組織を支援している可能性がある。

「オンドールを押しさえるべきです」

ガブラスはヴェインに進言した。

將軍パッシュユの生存を公表すれば反帝国組織のオンドール候への信頼も揺らぐだろう。

しかしヴェインは笑みを浮かべて書類を取り出した。

「ところが彼から連絡があつてな。檻から逃げた犬を捕らえて、ギースに引き渡したそうだ」

表向きは罪人の將軍を帝国に引き渡したという侯爵の忠誠ともとれる内容だ。

しかし同時に侯爵は將軍の生存を知っているということの表明だ。

これでは將軍の生存を公表したとしても大した効果は無いと見るべきだ。

「奴を殺すのは私です」

しかしガブラスはそんなことはどうでもいいようだ。

「……見上げた弟だ」

ヴェインが感心したように言った。

恐らくかつて自分が兄2人を断罪した皮肉も混ざっているのだろうが。

「ああ、ギースがラーサーを連れ帰る。明朝ビュエルバを発つそうだ。卿に本国まで送ってほしい。ドクター・シドが来るのでな、外してくれ」

そう言つてヴェインはガブラスに退室を促し、ガブラスはそれに従い扉の方に向いた。

すると初老の眼鏡をかけた人物……ドクター・シドが独り言を言いながら入つてきた。

「現物を確認せねば話にならない。ナブデイスの件もある。……ああ、偽装はしている。馬鹿どもには幻を追わせるさ」

ガブラスは無視して部屋から出ようとしたが

「そうだ、歴史を人間の手に取り戻すのだ！」

その言葉を聞きガブラスは少しシドの方を向いたが直ぐに退室した。

シドは今、ヴェインがそこにいるのが気がついたかのように話しかけた。

「おお、ヴェイン。執政官職を楽しんでいるようだな」

「二年も待たされたのでな。帝都はどうだ、元老院のお歴々は？」

「まめに励んだるよ、あんたの尻尾をつかもうとな」

シドは茶化すように言った。

するとヴェインは楽しげな笑みを浮かべた。

「フツ・・・やらせておくさ」

アルケイディア帝国の前身、アルケイデイス共和国の頃は元老院が国を動かしていた。

しかし軍部出身の護民官が皇帝を名乗り国は軍部の独走を許す事になった。

そこで当時法務庁を統括していたソリドール家と元老院が協力し帝国を安定させた。

その後はソリドール家出身の皇帝が四代に渡り政治を行っている。

元老院は政治的決定権を持たないが皇帝の承認権と退任を要求する権利を持っている。

これはかつて軍部が暴走したときの反省のためだが今では皇帝と元老院の対立に利用されている。

「元老院がなにを企もうが同じ事だ」

そう言つてヴェインは再び窓から市街を見下ろした。

「・・・全てはソリドールの為に」
ヴェインは小さい声で呟いた。

第九話 亡国の王女

バツシユのせいで侯爵邸に侵入という冤罪を着せられたセア達は翌日の朝に帝国に引き渡され戦艦リヴァイアサンに移送された。

セアはてつきり独房に連れていかれると思つたが戦艦リヴァイアサンのメインコントロール室に連れて行かれた。

そこには相変わらず派手な金色の鎧を身に纏つたギースと見た事無い女性がいた。

女性はバツシユを見ると顔に怒りを浮かべてこつちに来た。

「殿下……」

バツシユが小さい声で呟いたが女性は構わず全力でバツシユにビンタする。

「なぜ生きている、バツシユ！……よくも私の前に！」

まったく状況が理解できずセアがヴァンに問いかけた。

「おい、バツシユにビンタしたの誰だか知ってるか？」

「昨日話したアマリアだけど……」

ヴァンの表情を見る限りアマリアのことを知っているヴァンも困惑しているようだ。

バルフレアやフランも同様である。

するとギースがからかうような声で

「君たち、いささか頭が高いのではないかな。旧ダルマスカの王女……アーシエ・バルガン・ダルマスカ殿下の御前であるぞ?」

「こいつが!」

ヴァンが驚いて声を上げたが他も同じである。

セアはそのことに驚き、そしてアマリア……いやアーシエを睨みつけた。

霸王の次男のバルガンが興したダルマスカ王国の王女……つまりはあの霸王の血族。

2年前の戦争であの忌々しい血は途絶えたと思っていたのに!

だがセアはアーシエに気づかれる前に睨むのをやめ俯いて誤魔化した。

「もつとも身分を証明するものはないのでね、今は反乱軍の一員にすぎない」

「解放軍です」

「執政官閣下はダルマスカ安定のため、旧王族の協力を望んでおられる。だが証拠もなく王家の名を掲げ、いたずらに治安と人心を乱す者には……例外なく処刑台があてがわれましょう」

「誰がヴェインの手先になど!」

アーシエがそう言ってギースを睨みつけた。

するとバツシュがそこに横槍を入れる。

「亡きラミナス陛下から預かったものがある。万一の時には私からアーシエ殿下に渡せと命じられた。ダルマスカ王家の証【黄昏の破片】……殿下の正統性を保障するものだ。私だけが在処を知っている」

「待て！父を殺しておきながらなぜ私を！生き恥をさらせというのか！」

「それが王家の義務であるなら」

その言葉を聞きアーシエは屈辱に歪んだ顔で手に力を入れた。

そして空気を読まないヴァンがアーシエに叫んだ。

「いい加減にしろよ。お前と一緒に処刑なんてイヤだからな」

「黙れ！」

アーシエが叫んだ直後ヴァンのポケットが光った。

ヴァンはその光っている魔石を出した。

「ヴァン、それは！」

「王宮の、宝物庫で……」

「おいおい……」

バツシュがヴァンの持っている光っている魔石を見て驚き、ヴァンは恐る恐る何処で手に入れたかを言い、そのことにバルフレアは言葉にならないが声に出さずにはいられ

なかった。

ヴァンが持っている魔石・・・【黄昏の破片】をみたギースが笑い声をあげた。

「はっはっはっはっは！ けっこう！ もう用意してありましたか。手回しのよいことだ」

「やめなさい！」

アーシエはギースの手を止めるように塞いだ。

ヴァンはどうしていいかわからず後ろに振り返った。

するとバルフレアが頷いたのでヴァンはギースに【黄昏の破片】を渡した。

「約束しろよ、処刑はなしだ」

ギースはヴァンから渡された【黄昏の破片】を眺めながら言った。

「ジャツジは法の番人だ。連行しろ。アーシエ殿下だけは別の部屋へ」

どうやらギースはヴァンが【黄昏の破片】を渡したにも関わらず処刑する気のようなのだ。

後でこの世に生を受けたことを後悔させてやるとセアは強く決意し帝国兵に連行された。

ギースは【黄昏の破片】を見ながら呟いた。

「ヴェイン・ソリドール・・・なぜこんなもののために・・・」

ダルマスカ王家の証・・・確かに重要な品だがアルケイディア帝国次期皇帝確実と呼

ばれる人物が欲する品とは思えない。

そういうものに興味があるならまだわかるがヴェインは先日発見された隠し宝物庫にあつた品々に何の興味も示さなかつた。

なぜかヴェインは2年前の戦争終結直後からダルマスカの執政官になることを希望していた。

ヴェインの才覚を恐れる元老院に霸王の血筋を断絶させた事を理由に足止めされたがそれでもダルマスカ行きを希望した。

政民達の間ではヴェインは本国に対抗できる程の戦力を手に入れるつもりではとう噂もあつた。

確かにヴェインの才覚を持つてすれば本国に対抗……下手すれば本国を滅ぼせるくらいの戦力を整えることができるとはギースも思う。

しかし執政官に就任してからのヴェインの行動にそのような物騒なことは欠片も感じない。

ただダルマスカの支配と今回のような王家の証の入手等のよくわからない任務しか受けていない。

「私や本国が見抜けない価値があるとでもいうのか？　ダルマスカに……」
ギースはヴェインがなにを考えているのかわからずにいた。

一方そのころセア達はリヴァイアサンの廊下で話し合っていた。
バツシユはヴァンに向かって

「きみが持つていたとはな。これも縁だろう」

「俺を巻き込んだのも縁かよ」

バルフレアが不機嫌そうな声でバツシユに言った。

バツシユが余計な真似をしなかったら今頃空賊家業に戻れている筈なのだから当然だ。

「あの場では手はなかった。仕方あるまい」

「任務が優先か、さすが將軍閣下。それにしてもあれが王女とはねえ・・・」

「同感だ」

バルフレアの台詞にセアも同意した。

するとバツシユが少し顔を顰めた。

「貴様ら、さつきから静かにしろと・・・」

「うるさい！」

セアを殴ろうとしてきた帝国兵をの攻撃をよけ手枷の角で帝国兵の後頭部を殴った。

他の奴等も経緯は違えど近くにいた帝国兵を倒したようだ。残っている帝国兵は二人。

数ではこちらが有利だがこちらは丸腰の上に両手が繋がれている。

すると帝国兵の後ろからジャツジがきて帝国兵の胴をぶった切った。

ジャツジが兜を脱いでバツシユの方を向いた。

「ウォースラー！」

セアはその名前に聞き覚えがあつた。

あれは・・・ダラン爺と談笑していた時の話だったか。

ダルマスカ王国軍の生き残りでラバナスタの反乱軍の実質的な指揮者。

ウォースラー・ヨーク・アズラス将軍の話が話題にのぼった。

セアがラバナスタに来た当時の反乱軍の活動の露出度に文句をいっただころダラン爺がワシからアズラスに言っておこうというと言う形で。

最初は冗談だと思っていたが直後に反乱軍の活動が解りづらくなつたので本当だったのかとセアは気づき、ダラン爺みたいに歳をとってたらこんな感じに自分はこんな爺さんになっていただろうとセアは感じた。

「侯爵の手引きか」

「初めて頭を下げた」

そう言つてウオーズラは鍵を取り出しバツシユの手枷を外して、鍵をセアに渡した。

「いいか、ダルマスカが落ちて二年。俺はひとり殿下を隠し通してきた。敵か味方かわからん奴を、今まで信じられなかつたのだ」

「苦労させたな、俺の分まで」

「助け出す。手を貸してくれ」

「ああ」

そして捕まるときに押収された武器を取り戻すため押収品がある部屋へと5人は急いだ。

第十話 救出

押収された品が置いてある部屋に着いた。

セア達は自分の武器を見つけると素早く身に纏った。

ウオースラは全員が装備を着けたのを確認するとこのリヴァイアサンの地図を出した。

「今俺達がいるのがここだ」

そう言つてウオースラが地図に書いてある部屋のひとつを指差した。

続いてアーシエが囚われている独房を指差し目立たず素早くアーシエを救出した上で艦載艇を奪つて脱出する事が目的だと告げた。

「ちよつとまてよ。パンネロはどうすんだよ!？」

ヴァンが声を荒げたがウオースラはパンネロのことを知らないので首を傾げた。

セアがヴァンを宥めようと声をかける。

「あんなヴァン、パンネロはラーサーが……皇帝の四男が直々に保護しているんだぞ？俺達が助けに行けば帝国兵が勘繰つてパンネロを殺すかもしれない。ここは王女を救出しにきた反帝国組織の仕業にした方がいい。それにこの艦隊はラバナスタに向

かつてる。そこでパンネロは降りれるだろうし」

「そうだな、その方が安全か」

バルフレアも同意し、ヴァンは渋々黙り込んだ。

セアはウォースラの方を向き話しかけた。

「ひとつ聞きたいことがある」

「なんだ」

「向かってきた帝国兵は殺してもいいのか？」

「かまわん」

その言葉を聞きセアは赤みのある黒い剣を抜いた。

「それじゃあそろそろ行きましようか」

セアの言葉に全員が頷き、部屋から退出した。

前もって警備の薄いところをウォースラが知っていたのであまり戦闘にはならなかった。

仮に帝国兵がいたとしてもバルフレアの銃で撃たれるか、もしくはフランの弓で射られ、倒れた。

そしてアーシェが囚われている独房の前の部屋の前まで来た。

独房の前の部屋には帝国兵が五人とジャッジが一人いる。

流石に不意打ちで倒すのは無茶な数だ。

「ここは強行突破しかないな」

「ああ」

ウオースラの呟きにバツシユが答えた。

「とりあえず敵が味方を呼べないように出口を塞ぐ必要がありますね」

セアがウオースラに問いかける。

「出来ればそうしたいがここは無理だろう・・・奥に出口がある」

「なら俺がそこを塞ぎましょう」

「なに？」

ウオースラがセアの方を見た。

「だから部屋に突入すると同時に反対側までいつきに走り、敵が部屋から出るのをふせぎましょう」

ウオースラは唸っていたがバツシユが許可を出した。

「大丈夫なのか？」

「彼の腕前はたいしたものだ。信用できる」

「・・・お前がそう言うなら」

ウオースラはセアに不安を感じていたがバツシユの言葉を信じることにした。

そしてセア達は部屋に突入した。

すぐさまセア達の入ってきた側の扉の近くにいたジャツジが反対側の扉の近くにいた帝国兵2人に味方と呼んでくるよう指示を出し自分は周りにいた帝国兵3人と一緒にセア達の通行を妨害する。

しかし帝国兵の斬撃を軽くいなし、セアは反対方向の扉に向かっていた帝国兵の首を跳ばした。

そしてその近くにいた帝国兵がセアの背中に剣を振り下ろしてきたがセアは間接を無視して体を捻ってその剣を受け、その帝国兵の首も跳ばした。

ふうと軽く息をふき、入ってきた扉の方を向いた。

既に帝国兵3人は倒されており、戦っていたジャツジとウォースラも数秒もしない内にウォースラが隙をつき胸に剣を叩き込んだ。

ウォースラはジャツジの死体から四角い板のようなものを出した。

「それってなに？」

ヴァンがウォースラに問いかけた。

「カードキーだ。詳しくは知らんが鍵のようなものらしい」

そう言つてウォースラはアーシエのいる独房の方へ進んだ。

独房の横にあるコンピューターにカードキーを差込み、独房をあけた。

「殿下、ご無事で……」

「ウォースラ」

独房にあるイスに座っていたアーシエはウォースラを見て立ち上がった。

囚われていたせいで気をはったのかアーシエはよろけ、咄嗟にウォースラが彼女の肩を持ち支えた。

「殿下」

「ありがとうございます、大丈夫です。私……」

アーシエの顔には先ほど迄安堵の表情を浮かべていたがバツシユを視界に捉えたとたん彼を睨みつけた。

「ぐずぐずするなよ、時間がないんだぞっ！」

「さっさとしてくれ、敵が来る」

ヴァンとバルフレアの声が聞こえてきた。

「……話はのちほど」

ウォースラも時間がないことは承知していたのでひとまずその場を切り上げる。

アーシエは頷いたが顔には困惑の表情を浮かべていた。

独房からでるとリヴァイアサンに警報音がなり響いた。

「さすがにばれたか」

セアが呟いた。

バツシユは隣にいたアーシエに話しかけた。

「殿下、我らが血路を開きます」

「私は、裏切り者の助けなど！」

「なんとしても必要です。自分が、そう判断しました。．．．引き返すぞ、艦載艇を奪つて脱出する」

バツシユの言葉にアーシエは反論したがウオースラがそれを止め、指示を出す。

アーシエは俯きながら走っていった。

その様子を見ていてセアは思った。

仮にダルマスカ王国が再興したとして．．．彼女は王としての責務を果たせるのだろうか。

あの様子ではとても果たせるとは思えない。

彼女がダルマスカ王家の最後の一人である以上ダルマスカ王国を再興させるには彼女が王位につくしかない。

となると．．．このまま王国が再興すれば目端の利く貴族か他の国が実権を握り、彼女はお飾りになってしまう。

霸王の血族に嫌悪感をセアは持っているがそう思うと同情してしまう。

「このままじゃ仮に再興しても傀儡になってしまいうだろう」

「そうかもね」

セアの呟きにフランが答えた。

「君が話しかけてくるとは珍しいね」

「そうかしら?」

そう言つてフランは走つていった。

セアもやれやれと首を振りながらあとに続いた。

警報音がなっている事もあつて帝国兵とは結構あつたが途中からいなくなつた。

不思議に思っていると目の前に小さな少年と見知つた少女がいた。

「ヴァン……!」

そう言つてパンネロはヴァンに抱きついた。

その様子を見てセアがニヤニヤ笑つていた。

「恥ずかしいからやめろ!!」

「なんでだよ? ベつにいいじゃないか!」

セアに見られてるのが恥ずかしいのかヴァンが声を荒げたがセアは軽く受け流した。

パンネロはヴァンに抱きつくのをやめるとセアの方を向き

「セアさんもセアさんです! 一体一ヶ月も何処に行つてたんですか?」

「え？ なにこの扱いの差……」

セアがパンネロにしかられてる横でラーサーがアーシエの方を見て言った。

「ギースが気づきました。早く脱出を」

そしてラーサーは隣にいるウオースラに目を移す。

「アズラス将軍ですね。僕と来てください。先回りして飛空艇を押さえましょう」

「正体を知った上で逃がすのか」

ウオースラの言葉を聞いたラーサーは再びアーシエに視線を移す。

「アーシエ殿下、あなたは存在してはならないはずの人です。あなたやローゼンバーク将軍が死んだことにされていたのは……何かが歪んでいる証拠です。今後あなたがたが行動すれば……もっと大きな歪みが見えてくるように思えます。だから行つてください。隠れた歪みを明らかにしてください。私はその歪みを糾して、帝国を守ります」

【帝国を守る】……その言葉にアーシエは戸惑いを覚えたがまずは生きてここから出なくてとラーサーの提案に承諾した。

「……わかりました」

その言葉に笑みを浮かべたラーサーだった。

「どうもな【ラモン】」

「……あの時はすみません」

ヴァンはからかい半分でビュエルバであった時のラーサーの偽名で呼んだのだが、ラーサーは後悔しているような声で答えた。

ラーサーはパンネロの方に向いた。

「パンネロさん、これ、お守りがわりに」

そいつでラーサーは人造破魔石を渡した。

その様子を見てセアはパンネロを呼んだ。

「パンネロ？」

「なに？」

「まさかとは思うけどラーサーに惚れた？」

「ちよ、なに言ってるんですか！セアさん！」

そのパンネロの反応を見てセアは人の悪い笑みを浮かべてゲラゲラと笑った。

ラーサーもその場に居づらくなったのかアズラス将軍に話しかけた。

「い、行きましようか。アズラス将軍」

「・・・」

そうしてラーサーはウォースラを連れ、逃げるように部屋から退室した。

セアは手馴れた様子でパンネロを宥め、周りに話しかけた。

「じゃあ俺達のやる事はラーサー達が艦載艇を押さえるまで金ぴか鎧のジャツジマス

「ターをどうにかしなくちやな」
セアの言葉に全員が頷いた。

第十一話 脱出

戦艦リヴァイアサンの飛空挺発着所。

ここにギースは帝国兵数名と共にいた。

確かにここを押さえておけばセア達が艦載挺を奪ったとしても脱出は出来ない。

「残念ですな。ダルマスカ安定のために協力していただけるものと信じておりましたが……」

そう言いながらギースがこちらに歩いてくる。

セア達が入ってきた扉から帝国兵が数十名入ってきた。

「まあ、王家の証はこちらにある。よく似た偽者でも仕立てればよいでしょう」

ギースは魔法を唱え、右手の手のひらに火の玉を出現させる。

セアはギースを器の小さい奴と過小評価していたがギースはアルケイディア帝国に18人しかいないジャツジマスターの1人。

力が無ければその座に座る事は出来ない。

「貴女には……王家の資格も価値も無いッ！」

そう言つてギースは魔法を爆発させる。

だが魔法がかき消されてしまった。

「！」

ギースが驚いてパンネロの方を見た。

「なんなの・・・!?!」

パンネロの手の中で人造破魔石が発光していた。

レーザーから貫つた人造破魔石がギースの魔法を吸収したのだ。

ルース魔石鉱でレーザーが普通の魔石とは逆に、魔力を吸収するっていう話を聞いたことをセアは思い出しその光景に納得した。

「破魔石か」

バルフレアも同じ事を思い出したのかそう呟いた。

アーシエは剣を抜いてギースに切りかかったがギースはそれを簡単に避けた。

「ご立派ですな。殿下！ 名誉ある降伏を拒むとはまったくダルマスらしい！」

そう言ってギースは腰の金色の剣を抜き、左手に分度器のような武器を持って構えた。

ギースの言葉を聞いてアーシエが怒気を含んだ声で叫ぶ。

「貴様になにがわかる！」

その光景を見てバツシユもギースに近づこうとするが帝国兵達に止められる。

バルフレアは銃でギースを狙い発砲したがそれにギースは剣でアーシエの剣を受け止めながら左手に持っている武器で銃弾を防御する。

フランも近くの帝国兵を蹴飛ばしているが帝国兵の数が多すぎる。

セアはギースとの距離が何メートルも離れているにも関わらずギースにめがけて剣を振り下ろした。

「ぐおっ！」

ギースの兜が吹き飛び、ひるんだ。

アーシエはギースがひるんでるのを見て剣を振る。

ギースは左手の武器でアーシエの剣を受け止めセアの方を見た。

(將軍ならともかく他に遠隔攻撃が使える奴がいるとは……)

遠隔攻撃。それは近接用の武器で遠距離攻撃するための技である。

空気中のミストを伝導させて攻撃するため直接攻撃する数分の一程度にまで弱体化するが空中の敵もしくは遠距離の敵を攻撃するのに有用である。

ギースはこれを警戒してバツシユにあたる帝国兵は多めにしていたがセアが使ってくるとは予想外だった。

(この王女より銀髪の男を始末する方が先決だな)

ギースはアーシエの剣を受け流し、近くにいた帝国兵にアーシエの相手を任せセアの

方に走った。

そして帝国兵の相手をしているセアの背中に剣を振り下ろす。

だがセアは帝国兵を切りとばして素早く反対を向きギースの剣を受け止める。

奇襲に失敗したギースは左手の武器でセアを吹っ飛ばす。

セアは膝を曲げ口から血を吐くがギースが目の前にいたためすぐさま立つて構えな

おしギースに剣を振り下ろす。

ギースは左手の武器でガードしようとしたがセアの剣があつた瞬間に武器が壊れた。

「なにいい?!!」

ギースは素早く左手に持っていた武器を放し、後方に飛び去る。

だが着地に失敗し尻餅をついた。

セアはその隙をつきギースの顔を思いつきり蹴飛ばし、ギースは気絶した。

ジャツジマスターが倒れたからか他の帝国兵にも動揺が走る。

そこにウォースラが走ってきた。

「飛空挺を抑えた! 来い!」

「アトモス? トロい飛空挺だな。主人公向きじゃない」

バルフレアはそんなことを愚痴りながらウォースラの後に続いた。

アトモスって確か輸送機だったな。

セアは周りが敵だらけなのに目立ったら駄目だろうと内心で突っ込む。

ジャツジ専用のパンデモニウムが確保するよりよっぽどましだ。

「俺が飛ばしてもいい?」

「また落ちたいの?」

ヴァンの要望にフランが拒否する。

その会話を聞いたセアがヴァンに話しかける。

「お前が乗ってた飛空艇が墜落でもしたのか?」

「・・・飛空艇じゃなくてエアバイクだけど」

エアバイクって・・・技術者のモーグリ達が沢山住んでる機工都市ゴークの最先端技術じゃないか。

なんでそんなものにヴァンが乗ってたんだ?

セアはヴァンに疑問をぶつけようと思ったが今は脱出が先だと走っていったフランの後に続いた。

第十二話 王女と侯爵

リヴァイアサンからの脱出に成功し、空中都市ビュエルバのターミナルにいる。

セアは前々からこの会社は空賊の利用を認めている時点で限りなくブラックに近い会社だとは思っていた。

しかし今回の件で完全にブラックゾーンに突入していることを確信した。

だっていくらなんでもアルケイディア帝国軍の輸送機に乗っていて深入りしてこないなんて。

セアの疑問を今の日本で解り易く言うのと空港に自衛隊の火薬などを運ぶ輸送機を一般人が止めて誰も疑問を言わないみたいな話である。

この会社の本社は帝都アルケイデイスにあるらしいが政府からなにも言われないのだろうか？

セアはそんな思考に耽っていた。

パンネロはバルフレアに近づきハンカチを手渡した。

「あの。これ……洗っておきました」

「光栄の至り」

バルフレアは丁寧にパンネロに礼をした。

バツシユはアーシエにオンドール侯爵に会うべきだと進言していた。

「オンドール侯に？ でもあの人は……」

「お会いになるべきです。表向き帝国に従っているように見えてもそれは侯爵の本心ではありません。こうして殿下をお助けできたのも侯爵の「助言」があればこそです」

そしてバツシユは少し俯き、一言付け加える。

「……少々危険な手段ではありませんが」

実際には少々どころかとても危険な手段である。

侯爵がしたことはバツシユ達を罪人として帝国に引渡し、ウオースラを帝国兵の中に紛れ込ませただけである。

「……まあ実際アーシエは助ける事が出来たからよしとするべきだろう。」

「自分も同感です」

ウオースラもバツシユの進言に同意を示す。

「これまで距離を置いてきましたがもっと早く侯爵を頼っていれば……自分が愚かでした」

「ウオースラ」

ウオースラの言葉を聞きアーシエは侯爵に会ってみる事にした。

「殿下。私に時間をください。我々の力だけでは国を取り戻せません。別の道を探ります。……自分が戻るまではバツシユが護衛を勤めます。まだ彼を疑っておいででしょうが国を思う志は自分と変わりません」

「あなたがそこまで言うなら……任せます」

ウォースラからナルビナの調印式の罫の事をアーシエは聞いていたがまだバツシユの事を疑っていた。

そのことを察しウォースラはアーシエに説明しバツシユの方に向いた。

「殿下を頼む。オンドール侯爵のもとで待っていてくれ」

バツシユが頷くとウォースラはまたターミナルの奥に向かった。

セアはウォースラが出て行くのを見て横にいたバルフレアにはなしかけた。

「ようやく面倒事が終わったか……」

「いや、まだだろ？」

予想外の言葉を聞きバルフレアの方に体を向けた。

「面倒事がまだあるんですか？」

「ああ、王女の救出に協力したんだぜ？ 侯爵から礼をもらわないと」

「……流石空賊」

「まあ別にいらぬならお前達に分まで俺が貰っておくが？」

バルフレアの台詞を聞きヴァンは侯爵邸に行く気になってしまった。セアが無理やりラバナスタに連れて帰ろうかと思つたが礼だけなら貰つておくかと思ひ侯爵邸に行く事にした。

侯爵邸に行くとオンドール侯の政務が終わる夜まで待たされることになった。

そして警備兵に呼ばれ、執務室に案内された。

机の向こう側に初老の侯爵が座つてゐるのは前に来た時と同じだ。

最初はアーシエとバツシユとオンドール侯爵で情報交換をしていた。

「あの調印式の夜……父の死を知つたウォースラはラバナスタに戻つて私を脱出させました。ヴェインの手が伸びる前にあなたに保護を求めようと」

「ところが当の私が貴女の自殺を発表……帝国に屈したように見えたでしょうな」

侯爵がアーシエを見るとアーシエが頷いた。

それを見て侯爵は発表の経緯を話した。

「あの発表はヴェインの提案でした。当時は向こうの意図を掴めぬままやむなく受け入れましたが……狙いは我等の分断であつたか」

そう侯爵がアーシエの自殺の発表をしなければアーシエとウォースラは侯爵と協力

しもつと効果的に帝国に抵抗できたはずだ。

だが侯爵がヴェインの提案を受け入れたせいで王女と侯爵は分断されてしまった。

「でもそれも終わりです。私に力を貸してください。ともにヴェインを！」

アーシエの言葉を聞いた侯爵はため息をついて立ち上がりアーシエを見た。

「抱っこをせがんだ小さなアーシエは・・・もういないのだな」

侯爵は感心したような声で言った。

「殿下は大人になられた」

「それではおじさま・・・」

「しかし仮にヴェインを倒せたとしてその後は？」

侯爵はそう言いアーシエから顔をそらし窓の方に体を向ける。

「王国を再興しようにも王家の証は奪われました。あれがなければブルオミシエイスの

大僧正は殿下を王位継承者とは認めんでしょう」

「それは・・・」

「王家の証を持たない殿下に今できることは何ひとつございませぬ」

そう言いながら侯爵はアーシエに振り返った。

「しかるべき時までビュエルバで保護いたします」

「そんな、できません」

「では今の殿下になにができると?」

侯爵が少し怒気を含ませた声で言った。

その様子を見ていたバルフレアが侯爵に話しかける。

「王女様を助けた謝礼はあんたに請求すりやあいいのか?」

侯爵はバルフレアの方に向き、アーシエは部屋から出て行った。

「まずは食事だ。最高級のやつをな」

「用意させよう。少々時間がかかるが?」

「だったらそれまで風呂でも入るさ。いくらか冷や汗掻かされたもんな。あ、あとは着替えもいるな」

・・・流石空賊。侯爵相手にタメ口とは。

セアは素直に感心していた。

王国再興の話の最中に報酬の話をするのはどうかと思うが元々セアはダルマスカ王国の再興に関心がないので気にしない。

ふとセアは窓から夜のビュエルバの街を眺めた。

侯爵邸から見る夜のビュエルバの景色もまた格別だなと思いつながらテーブルにあつたワインを飲んでいた。

なにはともあれようやくパンネ口を救出できた。

最初は誘拐犯を半殺しにしてパンネロを救出してラバナスタに帰るつもりだったのだが大分倒な事に巻き込まれたものだ。

セアはそう思いながらビュエルバの景色を眺めていた。

その後バルフレアが言った最高級の食事を食べ直ぐに寝た。

疲れがたまっていたからだ。

そのせいでセアが寝ている間に空賊が誘拐事件を起こしたことには気づかなかつた。

第十三話 誘拐された王女と+α

アルケイディア帝国領帝都アルケイデイスにて。

謁見の間でアルケイディア帝国皇帝グラミス・ガンナ・ソリドールはジャツジ・ガブラスから報告を受けていた。

「ドラクロア研究所・・・ドクター・シドか」

「ヴェイン様の資金援助を確認しました。ナブデイス壊滅の件に関わっているのも確かですがあの作戦を指示したジャツジ・ゼクトが行方不明では・・・真相を掴みきれません」

「このグラミスも老いたな。息子を読みきれんとは」

グラミスが自嘲の言葉をこぼし咳き込んだ。

ガブラスが心配そうに近寄ってくるのをグラミスは手で制した。

「かまわん。死病だ」

そうグラミスは言い、思考に耽る。

「さて・・・予の後継は誰やら。有能すぎるヴェインを恐れて元老院が幼い皇帝を望んでおる」

そう呟きグラミスはガブラスを見る。

「ガブラス。かつて予はそちの祖国を攻めた」

「ランデイス共和国は消えました。いまや帝国こそがわが祖国です」

「・・・だがそちの兄は帝国の支配を認めず・・・ダルマスカに流れたと聞く。兄の後を追おうと考えたことはないか？」

「すでに追っておりませぬ。帝国の敵として斬り捨てるのみです」

ガブラスにとって自分と母と国を捨てた兄に同情などない。

あまつさえ流れた国さえも守りきれず今なお帝国に盾突く奴など斬り捨てるのみだ。

「祖国の敵なら兄をも斬る・・・か」

ガブラスの言葉にグラミスはそう言いながら頷く。

「ガブラス。そちはそれでよい。予はその非情さを評価しておる。しかしラーサーはそちやヴェインのようにはなれん。あれを支えてやってくれ」

「ラーサー様に代わって手を汚す剣の役を務めろと？」

ガブラスの質問にグラミスは顔を横に振る。

ラーサーの剣の役目は昔からヴェインがやっているのだから。

「むしろ盾だな。よいか、引き続きヴェインを監視せい。あれはいささか鋭すぎる」

グラミスが心配なのはその剣が持ち主に危害を加えないかということだ。

2年前の戦争以来ヴェインの行動には不可解な点が多すぎる。

「・・・御意」

ガブラスはグラミスの命令に服従する。

「頼むぞ、ガブラス。予はな息子たちが争う姿を・・・二度も見とうはないのだ」

そう、かつて自分の息子2人が反乱を企て自分はヴェインに2人の始末を命じた。

あれ以来ヴェインとは疎遠になってしまったがそのことに文句を言うことなく職務を遂行している。

父として皇帝としてヴェインのあり方は頼もしくあり・・・不安でもあるのだ。

空中都市ビュエルバにて。

セアは起きると太陽が既に昇っていた。

「少し・・・寝すぎたか」

セアが寝室からでると・・・警備兵に声をかけられた。

「侯爵閣下がお呼びです。執務室まで」同行願えますか？」

「今からですか？」

「ええ」

セアは激しく疑問を感じた。

侯爵は夜まで政務をおこなっているはずだ。

それを真昼間の今に……？

セアは警備兵に連れられ侯爵の執務室に連れてこられた。

すると侯爵が頭を抱えて座っていた。

セアは何事かあったなとあたりをつける。

「昨日の夜、空賊に殿下が誘拐された」

「空賊？」

「貴公と一緒にいた空賊だ」

どうやらバルフレアがアーシエを誘拐したようだ。

セアが見る限りではバルフレアは面倒事に首を突っ込むような奴ではないと思っていたが……。

「それで……俺と一体何の関係があるのでしょうか？」

まさかとは思いが俺まで同罪扱いで極刑とか嫌だぞ。

「彼らがどこに行ったか心あたりはないか？」

「ありません」

すると侯爵がハアとため息をついた。

「……手がかりは無しか。貴公以外は皆攫われてしまった」

「……え？」

「どうかしたか？」

「いや、俺以外全員誘拐されたのですか」

「そうだが？」

ヴァンめバルフレアについて行きやがったな。

というかこれどうするんだよ？

ミゲロさんにどう説明すればいいんだ？

セアは手で頭を押さえた。

「……」

昨夜やっと面倒事が終わって帰れると思ったのに……

一夜明けたら面倒事が増えるとは……

「退室してもよろしいでしょうか？」

「かまわない」

「失礼します」

セアは侯爵に礼をして退室した。

そして肩が震えながら呟く。

「俺はもう知らんぞ．．．馬鹿弟子」

セアはヴァンとパンネロが誘拐されたことを無視してラバナスタに帰ることにした。

レイスウォール王墓編

キャラ紹介（ネタバレあり）

＋十メインキャラ

簡単に言うとうとFF12のパーティとセアのこと。

＋セア

「不老不死の暴君」の主人公。何故か不死身。ヴァンを弟子にしている。

ふざけた力の持ち主でバツカモナン一味を一蹴し、ギースを簡単に倒した。

霸王レイスウォールとなんらかの因縁があるらしく彼の血族に嫌悪感を持っている。

また長く生きてきたためか少し冷酷な部分がある。

因みにオリジナルキャラで原作FF12には登場しない。

＋ヴァン

ラバナスタに住む少年。2年前の戦争で兄を失っており、空賊に憧れている。

孤児達にかなり慕われており、孤児達によって形成された空賊を指そう団のリー

ダーでもある。

＋バルフレア

最速の空賊と呼ばれる義賊。彼の首にかかつてる懸賞金で飛空艇が買える。

＋フラン

バルフレアの相棒。ヴィエラ族。

＋バツシユ・フォン・ローゼンバーク

帝国の罫にかかり、名誉を失った將軍。公式には処刑されたことになっている。

＋アーシエ・バナルガン・ダルマスカ

ダルマスカ王国の王女。公式には二年前に自殺したことになっている。

＋パンネロ

ラバナスタに住む少女。ヴァンとは幼馴染。

＋十ラバナスタ

旧ダルマスカ王国の首都。

＋ウオースラ

ダルマスカ王国の將軍で騎士団残党によつて結成された解放軍の幹部。

名目上のリーダーはアーシエだが実際はほとんど彼が解放軍を率いている。

＋ミゲロ

バンガ族の商人。ヴァンや孤児達の保護者的存在。

十カイツ

戦争孤児。空賊目指そう団のメンバー。

十トマジ

砂海亭の店員。

十ダラン

物知り爺さん。何故か色々なことを知っている。

十+アルケイディア帝国

二大帝国のひとつ。二年前にナブラディア・ダルマスカを侵略した。

十ヴェイン・カルダス・ソリドール

皇帝の三男で戦争の天才と呼ばれる。今の役職は西方総軍指令及びダルマスカ地方
執政官。

またシドと共になにか企んでいるようである。

十ラーサー・ファルナス・ソリドール

皇帝の四男でルース魔石鉱に行く際にセア達と行動を共にした。

十シドルファス・デム・ブナンザ

通称ドクター・シド。ドラクロア研究所所長。独り言が不気味。

＋ジャツジ・ギース

ジャツジマスターの一人で戦艦リヴァイアサンの艦長をしている。

＋ジャツジ・ガブラス

ジャツジマスターの一人で皇帝よりヴェイン監視の命を受けている。

＋グラミス・ガンナ・ソリドール

アルケイディア帝国皇帝。ヴェインの行動を警戒している。

＋＋ビュエルバ

空中大陸ドルトニスにある都市国家。魔石輸出国。

＋ハルム・オンドール四世

ビュエルバの領主。2年前にアーシエの自害とバツシユの処刑を発表した。

表向きは親帝国の政治をしているが裏では反帝国組織を支援している。

＋＋＋＋＋＋＋

＋＋種族

＋ヒュム族

イヴァリースに住む種族の40%がこの種族。

戦争を繰り返し、国を造り、歴史を動かし続けてきた。

+ ヴィエラ族

基本的には森と共に生きる閉鎖的な生活を営んでいる。

森の声が聞けるらしいが俗世と関わりを持つと失われる。

+ バンガ族

全体的に気性の荒い者が多い。

バンガに「トカゲ」と言うのは禁句である。

+ シーク族

知能が他種族に比べ低め。

肉体労働に駆り出されることが多い。

+ モーグリ族

手先が器用なため飛空艇技師を勤めているものが多い。

イヴァリースでヒュムに次ぐ生存圏を有している。

+ アン・モウ族

高い知力と魔力を持つ少数種族。

多くはキルティア教の長老を務めている。

+ レベ族

少数種族。戦闘力が高い。

＋ウルタンエンサ族

縄張り意識が強く、好戦的で人間社会に馴染まない。

＋ガリフ族

狩猟種族。生まれたときに仮面を授かりそれを死ぬまで外さない。

＋バグナムス族

非生産的な種族。酸素は彼らにとって有毒でガスボンベを常につけている。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

＋＋＋＋＋＋＋

＋＋重要な用語

＋ミスト

魔力の源で空気中に含まれている。

無色透明だが濃くなると黄色い霧のように視認できる。

＋ヤクト

ミストが不安定な地域。凶暴な魔物が住み着いていることが多い。

またその性質上ヤクトの多くが無法地帯となっている。

＋魔石

ミストが貯まっている石。

+ 飛空石

魔石の一種で飛空挺はこれで浮力を得ている。ヤクトでは使用できない。

+ 破魔石

ミストを吸収する特殊な魔石。ドラクロア研究所で人工的なものがつくられている。

+ ミミック菌

金属を腐敗させる細菌。この細菌のせいで地上では機械兵器があまり使われない。

+ 飛空挺

数世紀前にモーグリ族が開発した空を飛ぶ船。

+ グロセア機関

魔石を燃料にして動く装置。飛空挺等の動力として使われている。

第十四話 王女誘拐から数日後

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領王都ラバナスタにて。

王女誘拐の話を侯爵から聞いた日の昼過ぎにセアは飛空艇に乗ってラバナスタに帰ってきた。

その後色々ありましたよ。まずターミナルを出たところでカイツと会って。

「セアさん！ 無事だったの!? パンネロ姉ちゃんとヴァン兄は？」

「えつと・・・2人ならもう少し冒険してくるって言ってたよ？」

「ええ〜！」

とかそんなやり取りがあつたり、店に入るとミゲロさんが話しかけてきて。

「おう、セアは無事だったか。それでパンネロは無事か？」

「・・・無事だったんだけどね」

「とうとうと」

「2人ともと空賊について行っちゃった」

「なっ！ あの2人のが死んだらあの2人の親の墓前でなんて言えばいいんだい!？」

「・・・夢にすがって死にました？」

「ふざけるんじゃない!!」

そんなの俺に言われなくても・・・詳しく話せば解ってくれそうだがダルマスカの王女が生きてましたとか言いたくないしな。

絶対そんなこと教えれば面倒事がミゲロさんにも降りかかってくるだろうし。それでダラン爺に話に行つたんだ。

因みにダラン爺には詳細を詳しく教えたよ。

なんというかダラン爺を相手に隠し事が出来そうになかったからだ。

・・・10ヶ月前に話したときに自分の秘密を教えちゃったし。

聞き出されたと言つた方が正しいかもしれないが。

「ふむ、悪ガキも結構な冒険をしたようじゃの」

「それで・・・王女様は何処行つたと思う?」

ダラン爺が髭をさすりながら答えた。

「恐らく・・・レイスウォール王墓に向かつたのでは?」

「何故?」

「王家の証は霸王が持つていた3つの魔石だ。それをひとつずつ息子に分け与えたものなのじゃよ」

「直系の王族とナブラディア家そしてダルマスカ家の3つか」

「その通りじゃ。そして直系の王家が断絶した際、当時のナブラディア家とダルマスカ家の当主がその証を王墓に封印したと伝わっておる」

「その王墓は何処にあるんですか？」

「オーダリア大陸東部の何処かとしは知らんのう」

範囲が広すぎるだろ。

ヴァンとパンネロを強引に連れ戻してミゲロさんを安心させようと思ったけど無理だ。

ムシャクシャしてきた俺はウサ晴らしに砂海亭に酒を飲みに行ったんだ。

トマジが俺の愚痴に付き合ってくれた。

「ヴァンを止めろだのって俺が寝てる間にいったんだから仕方ねえじゃん！」

「まあ、おちつけよ」

そう言つてトマジは酒瓶を持ってコップに酒を注いでくれたよ。

「まあヴァンも子どもじゃないんだし、好きにさせればいいと俺はおもうよ」

「おお、トマジ有難う！」

そんな感じで酒を結構飲んだんだよ。

結構長い時間いたからね。

するとトマジが思い出したように

「あ、そろそろ勤務時間終了だ。話はこの辺で」

そう言つて店の奥にトマジが入つていた時は別になんとも思わなかつたよ。だから勘定の時に大金を請求されて驚いたよ。

どうやら俺は最高級の蛇酒ばかり飲んでいたらしい。

トマジがコップが空になると酒を入れてくれたからトマジの仕業だ。

トマジに殺意を覚えながら俺は全財産の九割を砂海亭に払う事となつた。

そして今・・・

「金がない」

とある理由で別に俺は食事を取らなくても生きていけるがずっと空腹はつらい。

セアの計算ではあと三年は働かずに暮らせるだけの金があつたのに。

今では一ヶ月の家賃だけで金が尽きる。

セアがブルーな気分で王宮を眺めていた。

「クライス殿ですか？」

名前を呼ばれセアは振り返ると帝国兵が立っていた。

「そうだけど・・・なんのよう？」

「ドラクロア研究所の所長が呼びびです」同行願えますか？」

普段なら面倒くさいのでセアは断る。

しかしセアは現在一文無しで断つてもやることがないので快くセアは承諾した。

第十五話 かつての上司

セアは帝国兵に王宮の一室に案内された。

案内された部屋は大きな机とたくさんの綺麗なイスがあり、セアはそのイスのひとつに座った。

しばらくするとセアが2週間程働いていたドラクロア研究所の所長シドルファス・デム・ブナンザ・・・通称ドクター・シドが入ってきた。

「久しぶりだな、クライス」

そう言ってシドはセアの反対側のイスに座った。

セアは愛想笑いでシドに話しかける。

「そうですね。それで・・・俺になにかようでしょうか？」

「いや、ただ君がローゼンバーグ將軍と一緒に行動していたとヴェインから聞いてね」

その言葉にセアは顔を顰める。

シドを笑いながら言葉が続ける。

「君がラバナスタに住んでいるという噂を聞いた時は驚いたぞ。だれにも実態の掴めない【不滅の研究者】の異名をもつ君がね」

「そうですか」

「ひとつ聞きたいのだが・・・君は何故ローゼンバーグ將軍と共に行動していたのだ？」

「なりゆきですよ」

「なりゆき？」

「ええ俺があなたの研究所で2週間程仕事をして帰ったら俺の知り合いが賞金稼ぎに誘拐されてましてね。その時になぜか俺の弟子と一緒に彼がいたんですよ」

「・・・君に弟子がいるのか？」

「戦闘技術以外は教えていないのですが・・・まあはつきり言つて馬鹿ですよ」

「そうか・・・君の弟子にも会わせてもらえるか？」

「いやそれがビュエルバでローゼンバーグ將軍共々とする空賊に誘拐されました・・・行方不明なんですよ」

「それでは・・・王女と共に西の王墓へ行ったのではないか？」

「西の王墓？」

「うむ、ナム・エンサの死者の谷にあるレイスウォール王墓へ向かったと情報が入っているぞ」

「貴重な情報ありがとうございます」

「そう言いセアはシドに頭を下げた。」

シドはかまわんよと言いとある疑問を口にした。

「ところでクライスというのは偽名なのかね？ ローゼンバーグ將軍からはセアと呼ばれていたと聞いたが」

セアはそれを別に答えても問題ないと思ひそれに答える。

「どつちも偽名ではありません。俺の名前はクライス・セア・グローリアです」

その答えを聞いたシドは納得したように頷いた。

そしてさつきまでのからかい半分の声をかえ、真剣な声でセアに話しかける。

「雑談はこのへんにして・・・本題に入ろうか」

「・・・どうぞ」

セアは息を呑み、先を促した。

「そう遠くない日に我が帝国は歴史を動かす戦争をする。その時君も手を貸してはくれないか？」

「俺のモットーとして国に仕えたりはしないのですが・・・歴史を動かすということとは口ザリア帝国と戦争でもするのですか？」

その言葉を聞いたシドは何を馬鹿なというふうに笑い声をあげた。

「口ザリアだと？ 確かに口ザリア帝国とは戦争をするが口ザリアなど前座にすぎん！」

その言葉を聞きセアは首を傾げた。

このイヴァリースでアルケイディア帝国と互角に戦える国家はロザリア帝国以外に存在しない。

そのロザリア帝国が前座にすぎないというアルケイディア帝国は一体何と戦うというのだ？

「よくわかりません・・・ロザリア帝国が前座ということはアルケイディア帝国の真の敵は何処なのですか？」

「その内解る事だ・・・その時に君がヴェインの下で戦ってくればいい」

そういうとシドは態々呼び出してすまなかつたねと帝国兵に命じセアを退室させた。

するとシドは誰もいないところに話しかけた。

「どうだ彼は？・・・そうか、少なくとも奴等となんらかの関係があると見たほうがよいか・・・ん？ それも微妙だと？」

シドはまるで目の前に誰かがいるように独り言を続けていた。

一方セアは王宮の外で独り言を呟いていた。

「相変わらずあの所長はよく解らない」

セアはため息を吐き、西の空を睨んだ。

「やるこゝろがなにもないからとりあえず馬鹿弟子を殴りに行くか・・・」

そう呟きセアは暗い笑みを浮かべた。

第十六話 西へ！

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領西ダルマスカ砂漠にて。

西ダルマスカ砂漠は交易路としてあまり使われない為東ダルマスカ砂漠と比べ危険な場所である。

そんな砂漠をチョコボに跨り西へ進む人物が一人。

もちろんチョコボに跨っているのはクライス・セア・グローリアである。

彼は勝手に空賊について行ったヴァンに自分がぼったくられたことに対する八つ当たりをするため西へと向かっていた。

因みの乗っているチョコボはラバナスタ西門にいたチョコボ屋ガーディからレンタルしたものだ。

レンタル料でセアの全財産が無くなってしまった。

しかしレイスウォール王墓にある宝でどうにかしようとセアは考えていた。

個人的には墓荒らしなどしたくないが幸い嫌悪しているあの覇王の墓だ。心は痛まない。

そんな事を考えながらチョコボを走らせていると砂嵐が出てきた。

面倒だと思いながらセアは自分を中心に魔法障壁を展開させた。

しばらく進むとチヨコボが震え出し足を止めた。

何事かとセアが考えると前にかなり大きいドラゴンの影が見えた。

東ダルマスカ砂漠にいるワイルドザウルスの5倍はあるなど思いながらセアは大きい影に向かって剣を数回振り下ろした。

セアの遠隔攻撃を受け大きい影は断末魔の悲鳴を上げながら倒れ、砂嵐が晴れた。

セアは首を傾げた。砂嵐が晴れるのは予想外だったからだ。

影が倒れたところに近づいてみると上級地竜の一種のようだ。

その姿を見てセアは伝説の八竜のひとつで砂嵐をおこすアースドラゴンのことを思い出した。

なんでそんなドラゴンが西ダルマスカ砂漠にいるんだよとかアースドラゴンならもっとでかいはずだとか思いながらもセアはチヨコボを走らせた。

考える事をやめ、自分は何も知らないということにしたのである。

しばらくすると人工的な施設が見えてきた。

どうやら西ダルマスカ砂漠をこえ、エンサ大砂海に入ったようだ。

ナブラディア王国とダルマスカ王国が滅びた今となつてはエンサ大砂海がアルケイディア帝国とロザリア帝国の緩衝地帯である。

セアがここから先は徒歩の方がいいなと思ひチヨコボからおり、人工的な施設に登った。

この施設はかつてロザリア帝国が建設したもので石油をとる施設だ。

しかしグロセア機関があらゆる装置に転用されるようになると思はれた。

放置された理由はもうひとつあるが・・まあ直ぐにわかることだろう。

西へ向かつて走つてゐるセアの頭に矢が直撃しセアは矢が飛んできた方をみた。

そこには矢を持った亜人種がいた。

セアは亜人種めがけて氷系の上級魔法（ブリザガ）を唱え、亜人種を氷付けにし、遠隔攻撃で氷を砕いた。

「ウルタンエンサ族の縄張りに入ったみたいだな・・」

セアは小さく呟き、西へ再び走り出した。

ウルタンエンサ族。それがエンサ大砂海の事実上の支配者だ。

ウルタンエンサ族は国土を持つ風習を持たないが、縄張り意識が非常に強く、同族間の争いが絶えない。

まったく面倒なと思ひながらセアは四方に気を配り視界に入ったウルタンエンサ族を片つ端から遠隔攻撃で倒し、近くにいた奴は真つ二つに斬り、西へ走った。

途中でウルタンエンサ族を主食にするウルタンイーターを見かけついでにそれも魔

法で襲われてるウルタンエンサ族ごと焼き尽くした。

西へ西へと走っていると砂海が北の方へずれ始めた。

どうやらそろそろ死者の谷に着くみたいだ。

未だに襲ってくるウルタンエンサ族を魔法や剣技で倒しながら、谷へ入って行った。すると大きい建物が見えてきた。

レイスウォール王墓だ。

なんでこんなところに墓を建てたのかセアは凄まじく疑問だったがとりあえずヴァンたちが来ていないか入り口の方に向かった。

そしてセアは床に顔を近づけ床をよーく調べた。

「新しい足跡はないな．．．ヴァンたちはまだか」

ヴァン達はまだ来ていないことを知ると急に眠気がこみ上げてきた。

周りを見てみると大分前に日が沈んであたりは闇に包まれていた。

セアは床に寝転び、寝てしまった。

セアが寝て1分後、王墓の守護獣ガルルーダが侵入者の気配を察知して飛んできた。

すると王墓の入り口で寝ているセアが目に入った。

ガルルーダは腹も減っていたので寝ているセアは一口で飲み込むと空へ再び飛んでいった。

第十七話 霸王

セアがガルーダに捕食された翌朝。

レイスウォール王墓にとある一行が到着した。

「ここがレイスウォール王墓かー」

ヴァンが王墓を見ながら叫んだ。

バツシユやウオースラも声には出さないものの王墓の偉大さに驚いていた。

アーシエも王墓に入ろうと近づくと魔物の咆哮が轟いた。

ヴァン達はあたりを警戒し武器を構えると空からガルーダが飛んできた。

「体が発光しているな。あのガルーダは原種か」

バルフレアは銃口をガルーダに向けながら呟いた。

ガルーダは体が発光している原種と退化した発光しない種がいる。

原種はその神々しさから聖獣として崇められることもある。

もし生け捕りできたら高い値段で売れそうだと考えながら発砲した。

バツシユやウオースラも遠隔攻撃で、フランは弓矢でガルーダに攻撃する。

ヴァンはガルーダが攻撃してきたところを剣で攻撃していたがヴァンのダメージも

大きくそれをパンネロが白魔法（ケアル）で回復させる。

全員がガルードダに向け攻撃するがガルードダは縦横無尽に飛び回り、攻撃を回避しているので中々効果的な攻撃が出来なかった。

ガルードダは立ち止まっているアーシエ目掛けて突っ込んでくる。

それを待っていたかのように戦闘が始まってからずっと詠唱していた魔法（サンダラ）をガルードダに放った。

（サンダラ）の直撃を受けたガルードダは苦しそうに咆哮を轟かせ上空へ飛び去った。

・・・因みに（サンダラ）の直撃を受けていた人物がもう一人いた。

「ギャババババツ!!!」

昨夜寝ている間にガルードダに捕食されたセアである。

魔法の直撃を受けセアはあたりを見渡しどうやらまた魔物に食われたようだと言から剣を抜きガルードダの胃を内側から切り裂いた。

するとガルードダは凄まじい絶叫があたりを響き渡る。

しかしヴァン達はまさかセアが中にいるとは思わなかったためガルードダが怒り狂っている勘違い警戒を強める。

セアはというと内側から剣で数回斬りつけたが外に繋がる気配がない為魔法を詠唱しだした。

するとセアを中心に魔方阵が形成され詠唱が終わると同時にそこから暴風が吹き荒れ、ガルダは内部からの暴風に耐えられず空中分解した。

ガルダが空中分解されるとセアはガルダの血とガルダだった肉隗と一緒に空中に放り出される。

セアは落ちるまでの間になんとか着地の体勢を整え、砂の地面に着地した。

ウオースラとバツシュがセアだと解らずセアに剣を向け警戒する。

なにせウオースラ達の視点から見れば守護獣の血の雨と共に空から降ってきた返り血を浴びた不審人物である。

しかしヴァンは最初は警戒していたが目の前の光景に軽いデジャブを感じ不審人物の正体に気づいてしまった。

「ひよっとしてセア?」

「俺以外の誰かに見えるのか馬鹿弟子?」

その会話を聞きアーシエ達は驚愕した。

セアは鋭い目つきでヴァンを睨みつけながら物凄く低い声で話しかける。

「馬鹿弟子・・・お前、俺に黙ってどっか行くとはいいい度胸だね」

「い、い、いや、だだ、だってセアに教えたら絶対とめるじゃん」

「ああ、ミゲロさんや他のみんながどれだけ心配していると思ってるんだ?」

「はい、ごめん」

「まったく俺もミゲロさんに叱られてイライラしてヤケ酒したらぼったくられるしよ」

「・・・誰に？」

「トマジに決まっているだろ」

「・・・あいついい奴だけど金にがめついからなあ」

ヴァンは空を見上げ呟いた。

するとバツシユがセアに話しかける。

「何故君は魔物の中にいたのだ？」

「いや、それが昨日の夜に王墓に着いて寝たんだ。で、気がついたらなんか魔物の胃の中にいたから寝ている間に食われたみたい」

セアが頭を掻きながらしくったなという表情を浮かべ明るい声で答えた。

ヴァンとパンネロは東ダルマスカ砂漠でワイルドザウルスに丸呑みされたことを知っているので呆れるだけだがそれ以外の全員はセアの神経を疑った。

アーシエはセアの神経を疑いながらもさっきの言葉に疑問を感じセアに問いかけた。

「まったくください。何故あなたはここに来たのですか？」

「ヴァンたちを追ってですが？」

「では何故私達が王墓に向かっていると解ったのですか？」

・・・ドラクロア研究所の所長に聞きましたなんて答えられないな。

ダラン爺に濡れ衣を着せるかとセアは嘘を混ぜて答えた。

「ダラン爺に貴女の事を話すと西の王墓にある王家の証を取りに向かったのではと聞いたからです」

「ダラン爺？」

「ラバナスタに住んでいる物知りの爺さんの名前です」

そう言つてセアはヴァンの方に向く。

「大方、王宮への進入方法もダラン爺から聞いたんだろ？ 馬鹿弟子」

「げっ！ バレた・・・」

その様子を見てアーシエはダラン爺とは一体なものなのだろうかと思慮に耽つていた。

王家の証が王墓にあることや王宮への進入方法を知っているなんて・・・

そんなことを考えているとパネロが話しかけてきた。

「すごい大きなお墓ですね。レイスウォール王つてどんな人だったんでしょうか？」

「御伽噺でしか知りませんがそれでよければ」

パネロが頷いたのを見てアーシエは王家に伝わる話を語り始めた。

「往古、神々に愛されたレイスウォール王は・・・バレンディアからオーダリアの両大陸

にまたがる広大な領域を一代で平定し……ガルテア連邦を打ち立てました」

アーシエの話をパンネロ以外も聞いていた。

そしてセアはなにか嫌そうな表情をしながらアーシエの話を聞いていた。

「霸王と呼ばれてはいますが……連邦樹立後のレイスウォール王は民を愛し、無用の戦を憎み……その精神は後継者にも受け継がれ平和と繁栄が数百年もの間続いたのです。アルケイディアもロザリアもその源流はガルテア連邦に属していた都市国家であり……レイスウォール王が築いた平和の中で生まれ育ったようなものです」

そういえばアルケイディア帝国の前身アルケイイス共和国もロザリア帝国の元になつた都市国家群もガルテア連邦に属していたことをセアは思い出す。

「レイスウォール王は霸王の血統の証となる3つの遺産を残しました。その内「夜光の碎片」はのちのナブラディア王家へわたり……「黄昏の破片」はダルマスカを建国した我が父祖へ……最後のひとつ「暁の断片」はここに封じられて……その存在は王家にだけ伝えられてきたんです」

ん？じゃあ何故ダラン爺は王家の証が王墓にあることを知っていたんだ？

セアはダラン爺が何か問題をおこして王家から追放でもされたのかという想像が浮かんだ。

意外とありえそうだと思うセアであつた。

「霸王は今日の事態を見越しておられたのでしょうか」

ウオースラがそうアーシエに言うが幾らなんでも無理だとセアは思った。

ダラン爺から聞いた話では直系の王家が断絶した際にナブラディア家とダルマスカ家の当主が【暁の断片】を封印したと聞いた。

しかしアーシエの話を信じるならば当初より【暁の断片】はここに封印されていたようだ。

まあ数百年も昔の話だし諸説があるのだろうとセアはあまり深く考えなかった。

アーシエは王墓を見上げながら話を続ける。

「代々の王のみに許された場所ですから証を持たない者が立ち入れば・・・」

「生きて帰れる保障はなし。墓守の怪物やら悪趣味な罠やら・・・そんなところか」

バルフレアがアーシエの言葉に続け喋った。

バルフレアの台詞にアーシエは頷き続きを話す。

「その先に眠っているのです。【暁の断片】も霸王の財宝も」

「話が上手すぎると思ったよ」

「バルフレアがここにきた理由は財宝目当てか」

アーシエとバルフレアの会話からバルフレアの目的を財宝と推測したセアはからかうような声でバルフレアに話しかけた。

するとバルフレアは嫌そうな声でセアに言う。

「そっだよ。そういうお前の目的は？」

「ヴァンたちを生き返らせてラバナスタに帰すことだよ」

あまり乗り気ではないが同じく遺産狙いの為セアは苦笑しながら嘘をついた。

第十八話 壁はぶち壊すもの

王墓の入り口にあった装置に触れるとセア達は王墓の中へ飛ばされた。

理解不明な現象にヴァンがバルフレアに質問し、バルフレアは

「古代遺跡にはよくある装置で触れると何処かに飛ばされる。空賊にはそれで十分だろ」

と答えていたが幾らなんでもアバウトすぎないだろうか？

セアがヴァンに説明してやろうかとも考えたが説明するには前提として魔法理論を50前後は最低教えなくてはならないためやめた。

ヴァンは釈然としない表情で先にある一本道に走っていった。

セア達は罨が無いかと心配したがなにもないみたいでセアを除く全員も一本道に足を進めた。

すると一本道の入り口にあった石像が壁ごと動き一本道を閉ざした。

だが、突然石像は跡形もなく砕け散ってしまった。

全員が唖然としてるところへ砕けた石像を踏み潰しながらセアが一本道を歩いてきた。

「どうした？」

「いや、いまのセアがやったのか？」

「なんか後ろに光つてるところがあつたから斬りつけてみたらあつさり壊れたぞ」

「そうか」

全員が胡散臭いものを見る目でセアを見ていたがセアは気づかないフリをして口笛を吹き、ステップをしながら一本道の奥へと進んでいった。

その様子の全員が呆れながらもセアの後に続いた。

一本道の奥にあつた扉を空け次の部屋に進むと真つ暗だったが赤い光がふたつ光つたとおもうと辺りの燭台も火が点いた。

燭台の炎に照らされ最初に点いた赤い光はこちらに迫ってくる石像のものだと分かつた。

そしてここも一本道で逃げようにも扉に鍵がかかつて逃げられない。

ここで石像を倒すことが出来なければ扉と進んでくる壁に挟まれ潰されるといふことだ。

先ほどバルフレアがアーシエに言っていた通りたちの悪い罠だな。

そんなことをセアが思っていると周りが武器を構え、迫ってくる壁に向かっていく。

全員が自分から結構離れた事を確認するとセアは赤みのある黒い剣を迫ってくる壁

にむかつて遠隔攻撃を20回前後おこなう。

すると石像は凄まじい音をたてながら崩れさった。

セアは立ち尽くしている皆を見て笑みを浮かべバルフレアに近づき話しかけた。

「まさかとは思うが数百年の間に罫が風化して作動しなくなってるのか？」

「・・・だといいがな」

バルフレアはため息をつき正気を取り戻し奥へ進み出したアーシエの後に続いた。

セアはというと噴出すのをこらえるのに必死であった。

一本道を抜け、奥にある大きな扉を開けると吹き抜けの広間にでた。

「なんと壮大な・・・」

ウォースラが感嘆の声をあげる。

そしてバルフレアとフランを見て不機嫌な声で呟く。

「あのような墓荒らしの同行は認めたくないものです」

「けれど私達では明らかに無力。それが現実でしょう？」

自分が仕える主の言葉にウォースラは黙り込む。

「あの人は自分の利益だけを考えているわ。利益を約束できれば裏切らないはずよ」

「しかし殿下。自分は・・・」

「話は後で。今はまず【暁の断片】を手に入れないと」

アーシエは突き放すようにそう言った。

そして吹き抜けの広間を見上げながら呟く。

「眠っているわ。地下の置く深くで」

「おわかりになるのですか？」

ウオースラは少し驚いた声でアーシエに尋ねた。

「・・・呼ばれている気がするの」

アーシエは自信無さ気にそう答えた。

一方セアはバツシユに気になっていた事を質問していた。

「なあバツシユ。俺はダラン爺の推測を信じてここに来たんだが・・・ウオースラは何故ここに王女様達が向かっていると分かったんだ？」

「オンドール侯から聞いたと言っていた」

「ビュエルバの侯爵から？」

「そうだが・・・」

バツシユはセアが念押しに聞いてくることを不自然に感じながらも答えた。

セアは顎を手で掴み、思考に耽る。

（侯爵から聞いた？ 侯爵は王女が王墓へ向かったことに気づいていなかったはずだ）

ということとはウォースラは嘘をついているということだ。

では何故嘘をつく必要があるのか？

（そういえばウォースラがビュエルバから旅立つときになんて言っていた？ 確か・・・

別の道を探ると）

そこでセアは嘘をついている理由が解ってしまった。

武力以外でダルマスカ再興の道などひとつしかない。

外交である。そしてウォースラは交渉相手からアーシエ達が王墓へ向かったことを

知ったのだ。

（また面倒事の予感・・・いや霸王の財宝を少しばかり頂けばもう王女達に付き合う必要はない・・・すぐヴァンとパンネ口を連れてラバナスタに帰ればいいだけだ）

セアはそう考えそれを口に出さないことにした。

そう別にセアはダルマスカに限らず国の興亡に興味がないのだから。

第十九話 魔人

レイスウォール王墓を地下へ地下へと進んでいくと黄色の霧のようなものが出てきた。

パンネロはそれを見ながら呟く。

「地下なのに霧が出てる・・・？」

「霧ではないわ。ミストよ」

フランはパンネロの呟きに答えた。

ミストとはこのイヴァリースでは空気中に存在する魔力の源のことである。

しかしミストは普段は無色透明のほずである。

「ミストって目に見えるんですか？」

「ここではそれだけ濃いということ。魔の気配が満ちているのよ」

「危険・・・ってことですよね」

フランの言葉をそのまま受け取るとそういうことになる。

「けれど役にも立つわ。濃密なミストは魔力の回復を早めてくれる」

「覚えておきます」

そう言つてパンネロはセアとヴァンの方を見た。

「セアさんもヴァンも無茶ばかりだから私がしつかりしないと」

因みにパンネロが心配している2人はというところ……

「霸王の財宝つて高く売れるのかな？」

「なんでそんな事気にするんだ？」

「トマジにぼったくられたから金が無くてね……出来れば少しほしい」

「俺も盗つていいかい？」

「普通ならとめるところだけどまあ仕方ないか」

「よし、セア公認だ！」

霸王の財宝を盗む気満々であった。

それはそうと地下なのになにか暑いなど感じながら階段を降りていくとひらけた場所に出た。

そして奥に扉があり、その前に魔物と人を混ぜた化け物のようなものが立っている。

最初は変なオブジェだと思つたがヴァンが近づくと周りから炎があがる。

「魔物か!？」

ヴァンはそう叫び後方に後ずさり武器を構える。

するとオブジェだと思つていたものが動き出し近くにあつた斧か槍がよく解らない

武器をとりヴァンに振り下ろす。

ヴァンは吹き飛ばされ壁に激突した。

「ヴァン！」

そう叫びセアは〔フルケア〕を唱え、ヴァンの傷を治す。

先ほどの攻撃でただの魔物では無いと判断したウォースラとバツシユは遠隔攻撃でけん制する。

すると化け物は〔バオル〕を唱え防御力を強化しウォースラに急速に接近し武器を横に薙いだ。

ウォースラは咄嗟の判断で剣で防御したが剣を飛ばされウォースラは倒れた。

倒れたウォースラ目掛けて武器を振り下ろす瞬間バルフレアの銃が化け物を打ち抜いた。

化け物がバルフレアを視界に捉えると〔ファイア〕を唱えた。

炎がバルフレアにあたる前にフランが間に入り込み〔ブリザラ〕を唱え相殺した。

化け物が次の魔法の詠唱を開始するがバツシユの遠隔攻撃で妨害され、バツシユに近づく。

化け物はバツシユに攻撃を繰り返すがバツシユは上手い事避けながら時間を稼ぎその間にアーシエとパンネロがウォースラに近づき〔ケアルラ〕で回復させる。

「あの化け物は一体？」

「まさかかつて霸王に仕えたという魔人では……」

アーシェがかつて父から聞いた霸王と魔人にまつわる物語を思い出しながら答えた。

「大丈夫か？ 馬鹿弟子!？」

「なんとか」

セアはヴァンの声を聞くとポケットから魔石を取り出しヴァンに渡した。

「これは？」

「気にするな！ いいか俺達があの化け物の引き付けてる間にそいつを化け物にあてろ

！」

「え!？」

「外したら承知しないぞ！ いいな!？」

「ああ!!」

ヴァンの返事を聞くとセアはバルフレアとフランに近づき話しかける。

「あの化け物の注意をヴァンからそらしてくれないか？」

「ああ？ なんでだ!？」

バルフレアは目線と銃口を魔人に向けたままセアに答える。

「ここにくる途中暑いと思わなかったか？ おそらくアレは炎の属性をもっている」

「それで!？」

「ヴァンにウオタガの魔片を渡した。隙を見て投げろと!!」

「了解。ヴァンから注意を逸らせばいいんだな?」

バルフレアが軽くこちらを見たのでセアは素早く領き魔人の方へ走った。

ウオースラも目が覚めたようでも魔人に斬りかかっていた。

セアも魔人の注意をこちらに向けるために斬りかかる。

すると魔人の背後からできるだけ目立たず近づいてきているヴァンの姿が見えた。

フランも正面から「ブリザラ」を放ち魔人の注意をこちらに向ける。

しかし注意を引き付けている事に気づいたのか魔人が後ろに振り返りヴァンを視界に捉えた。

魔人はヴァンに目掛けて武器を振り下ろした。

「うおおおおお!」

ヴァンは魔人の攻撃を紙一重で避け（偶然）若干ヤケクソな感じでウオタガの魔片を右手に掴んだまま魔人に近づき殴りつけた。

魔人は水系の上級魔法（ウオタガ）の直撃を受け、重症を負いながらも魔法の詠唱を開始した。

セアはその詠唱を聞き顔を青くする。

魔人が今唱えているのは「ファイジャ」という魔法だ。

セアがルース魔石鉱でパンネ口を攫ったバンガに使ったあの魔法だ。

あれを加減せずに放てばセアはともかく他の奴等が死んでしまう。

魔人を中心に魔方阵が形成され始めたところでセアは魔人の右腕を切り飛ばした。

すると魔人はミストを放ちながら倒れ、青い魔石が残った。

その魔石をセアが拾い、フランが語り始めた。

「かつて神々に戦いを挑んだ荒ぶる者ども……敗れた彼らの魂はミストにつなぎとめられて時の終わりまで自由を奪われた……ン・モウ族の伝承よ」

「俺はン・モウ族の伝承は知らないが似たような話ならしってるぞ。大分昔に聞いた神々に挑んだ12体の人智を超えた異形者の御伽噺。そーいや人と魔物を混ぜたような異形者がいたっけ」

「異形者ってなんだ？」

「詳しい事は知らんが……かつて神々が創った存在だそうだ」

「ふーん」

「確か人と魔物を混ぜた容姿の異形者の名前は白羊の座の魔人ベリアスで「神に創られた闇の異形者にして聖域の番人。人とモンスターとが融合しているように見えるため魔人と呼ばれるようになった。数ある異形者の中でも失敗作と位置付けられ、本来の役

割をあたえられることはなかった。魔人は怒り神々に戦いを挑んだが敗れてしまい、封印された」だったけ」

「なんでそんなのが王墓にいるんだ？」

「さあ？」

ヴァンとセアの会話を聞き聞きアーシエもある物語を語り出す。

「王家には霸王と魔人にまつわる物語が伝わっています。若き日のレイスウォール王は魔人を倒して神々に認められたと。以後魔人は霸王の忠実なしもべになったそうです」

「・・・忠実なしもべね」

セアはそう言つて拾つた魔石に魔力を注ぎ込んでみた。

すると先ほどまで戦つていた魔人が姿を現した。

全員が警戒をするがセアは踊れと魔人に命令してみた。

すると魔人は文字では説明できない凄まじい踊りを踊り始める。

かなりシニールな光景である。

ヴァンとセアが大笑いし、他は苦笑してセアに躍らせるのをやめると説得しだした。

セアが渋々魔石に魔力を注ぐのをやめると魔人は跡形も無く消え去った。

ヴァンは魔人が踊りながらミストを放ち消えていくのを見て少しがっかりしていた。

「さしずめ召喚獣とでも言ったところか・・・これは貴女がもっているべきですね」

そう言つてセアは魔石をアーシエに渡した。

それを見ていたバルフレアが呟く。

「なるほどな。それで召喚主の霸王の命令に従つていまだに財宝を守つてたわけだ」

「いいえ、財宝とはこの召喚獣そのものでしょう」

「なんだと?」

アーシエの言葉にバルフレアは疑問の声をあげる。

「私たちが手に入れた魔人には計り知れない価値があります」

アーシエの言う通り霸王のように覇をとえんとする者には計り知れない価値があるだろう。

しかしバルフレアのような空賊には縁の無い話だ。

「おいおい・・・オレとしてはもうちよいわかりやすい財宝を期待してたんだがね」

バルフレアの台詞にセアも同感である。

セアは霸王の財宝を少し盗みそれを臨時収入としてこの金欠状態から抜け出そうとしていたのだ。

どうやって金に都合つけようかと途方に暮れるセアであった。

第二十話 幻・落日の王国

魔人ベリアスがいた部屋の奥の扉を開けるとまるで神殿のような雰囲気を持つ場所に出た。

奥の台には蠟燭のようなものがあつた。

しかし光っているのは火ではなく王家の証のひとつ「暁の断片」である。

「どうした」

バツシユがウオースラが何か迷っているような表情を浮かべていたため声をかけた。

するとウオースラは軽く首を振りアーシエの方を向く。

「殿下。急ぎましょう」

ウオースラに促されアーシエは「暁の断片」に近づいた。

すると「暁の断片」が輝き出した。

すると目の前に死んだアーシエの夫の姿があつた。

「ラスラ……」

アーシエは夫の名前を呟いたが周りの殆どはアーシエの呟きの意味が理解できなかった。

何故ならラスラの姿が見えていないからである。

しかし見えている奴もいた。

「なあパンネロ。あの人誰だ？」

「何言ってるのヴァン？」

ヴァンもラスラの姿が見えていたのだ。

パンネロとヴァンが言い合っているのを見かねたセアはヴァンに話しかけた。

「何を言ってるんだ馬鹿弟子？ ミストにでもあてられたのか？」

「え？ だってあそこに……」

ヴァンはアーシエの少し前を指差す。

それを見てセアは呆れたような声でヴァンを宥める。

「確かに何故かミストがあのだ辺りに固まっているな……だが人なんかいないぞ」

「え、でも……」

「いないぞ」

「……はい」

ヴァンが機嫌を損ね黙り込んでしまった。

セアがそれを見てヴァンに同情してしまった。

何故ならセアもラスラの姿が見えていたからだ。

(薄っすらだが・・・これは・・・魔法だ)

セアは気づいていないフリをしたほうがいいと判断したのだ。

こんな魔法は数百年間生きてきたセアでも見たことが無いからだ。

そしてまた碌でもないことに巻き込まれつつあるのかとセアは長考し始めた。

アーシエはと言うと・・・ラスラとの結婚式から国が滅びるまでのことを思い出していた。

当時ナブラディア王国は急速に領土を拡大する隣国アルケイディア帝国に危機感を感じており、アルケイディアの宿敵ロザリアの軍隊を国内に駐屯させる政策を打ち出した。

ロザリアのバレンディア大陸進出を危惧したアルケイディアはナブラディアに圧力をかけたがナブラディアが折れることは無かった。

さらにナブラディアはダルマスカとの同盟関係の強化の為にナブラディア王国第二王子ラスラ・ヘイオス・ナブラディアをダルマスカ王国女王アーシエ・バナルガン・ダルマスカに婿入りさせた。

俗に言う政略結婚だったのだが両国は建国当時から友好国であり、二人とも何度も面識があり縁談の話が出来て直ぐに仲がよくなった。

結婚式、あの時はアーシエはとても幸せだった。これからこの人と一緒に人生を歩ん

でいくのだと。

だがそうはならなかった。結婚式から僅か1週間後。

アルケイディア帝国がラスラの故郷ナブラディア王国に侵攻したのだ。

ナブラディア王国は数日で滅び同盟関係にあったダルマスカにも帝国は侵攻を開始した。

そしてラスラは自ら父にナルビナ行きを志願した。

出陣の際アーシエはラスラに言った。

生きて帰ってきてくださいと。

ラスラは領き僅かな兵を率いて北の国境のナルビナへと赴いた。

そして・・・ラスラは死体になって帰ってきた。

あの時ほど泣いた事はいまままでなかっただろう。

しかしまだ悲劇はそれで終わりではなかった。

アルケイディアはラバナスタを目前にして進軍を停止し和平交渉を打診してきた。

父のラミナスはそれを受け占領下のナルビナへと向かった。

アーシエはまだラスラの死から立ち直れてはいなかったがこれで戦争が終わるのだと信じていた。

だが数日後ウオースラが真つ青な表情でアーシエに告げた。

陛下がナルビナで暗殺されたと。

夫に続き父まで失った悲しみでアーシエは気を失った。

次に目が覚めるとウォースラと共にダルマスカの辺境の町にいた。

そして・・・その気を失ってる間にダルマスカはアルケイディアに降伏していた。

ビュエルバのオンドール候が中立の立場から降伏を促し、アルケイディアが進軍を再開する前に無条件降伏をしたらしい。

アーシエはオンドール候に感謝した。降伏とはいえラバナスタを戦火から守ってくれたのだから。

しかしウォースラの次の報告でその思いは無くなってしまうた。

侯爵が自分の自殺を発表したという事を聞いて。

要するに侯爵は帝国側に回ってしまったのだ。

そしてウォースラもまた何を信じればいいのかわからなくなっていた。

互いに信じあっていたバツシユが陛下を暗殺し、頼りの侯爵も帝国の傘下に下ってしまった。

その結果・・・ラバナスタの解放軍は孤立化していった。

アーシエもウォースラも信じきれぬ人物が全くいなくなっていたからだ。

そのようなことを思い返しているとラスラの幻がアーシエの横を通る。

アーシエは引きとめようと手を伸ばしたがラスラの幻はアーシエの手をすり抜け何事も無かったのように歩き続ける。

それを目で追いながらアーシエは呟く。

「仇は必ず……」

ラスラの幻はアーシエに振り返ることなく部屋の出口へ歩いていった。

するとヴァンもラスラの幻を目で追っているように見えた。

気のせいかと思うと自分の左手になにか違和感を感じ左手を目の前に持つていく。

すると左手は輝く「暁の断片」を握り締めていた。

そして左手につけている結婚指輪を見て死んだラスラの事を思った。

その様子をバルフレアはなにか言いたげ顔で眺めていた。

第二十一話 忠臣の裏切り

【曉の断片】を手に入れたセア達は王墓から出た。

すると空にリヴアイアサン艦隊が飛んでいてセア達は再び帝国兵に捕まりリヴアイアサンのメインコントロール室に連行された。

そこにはギースが机においてある自分の兜を手でなでていた。

ギースは兜をなでるのを止めアーシエに話しかけた。

「再びお目通りがかなって光栄ですな殿下」

そう言うとギースは兜をなでるのをやめ、アーシエの方に向く。

「先日は実にあわただしくご退艦なされたので・・・我々に無礼があったのではないかと心を痛めておりました」

セアは前に来た時に無礼以外の何かをしたのかと衝動的にギースに聞きたくなつたが堪えた。

アーシエは不機嫌そうな声でギースに話しかける。

「痛む心があるというの・・・本題に入りなさい」

「破魔石を引き渡して頂きたい」

「破魔石って……」

ギースの台詞にパンネロが反応しラーサーから貰った人造破魔石をポケットから取り出す。

「そのような模造品ではない」

ギースはイラつきを混ぜた声でパンネロを黙らせ話を続ける。

「我々が求めているのは……霸王レイスウォールの遺産である【神授の破魔石】だ」

ギースが左手に拳を握りながらそういった。

しかしアーシエは意味がわからないという顔をする。

その様子を見てギースは後ろにいる人物に視線を向ける。

「まだ話していなかったのかね……アズラス将軍」

その言葉を聞きアーシエの顔に驚愕が浮かぶ。

ウォースラはアーシエに近づき話しかけた。

「殿下【暁の断片】を。あれが破魔石です」

「なぜだウォースラ！」

アーシエに【暁の断片】を渡すように促すウォースラを見てバツシュが叫ぶ。

「帝国は戦って勝てる相手ではないっ！ ダルマスカを救いたければ現実を見ろ！」

ウォースラはバツシュに怒気を含んだ声でそう返した。

バツシユが口惜しいように黙り込む。

「アズラス將軍は懸命な取引を選んだのですよ。我が国は【暁の断片】と引き換えに……アーシエ殿下の即位とダルマスカ王国の復活を認めます」

ギースは一旦そこで言葉を区切りアーシエの方に視線を向ける。

「いかがです？ たかが石ころひとつで滅びた国がよみがえるのです」
「で、あなたの飼い主が面倒を見てくださるわけだ」

ギースの言葉にバルフレアは皮肉をこめた言葉を返した。

バルフレアの言うギースの飼い主とはヴェインのことだろう。

ギースはバルフレアの発言に顔を少し歪めた。

確かにギースは有能な武人ではあるが他の公安支部局長……ジャツジマスターと比べると幾らか差がある。

数年前から損得勘定でヴェインを支持していたギースは元は生まれならの政民で13局に勤めるジャツジにすぎなかった。

しかし2年前の戦争で第13局の先代局長フォリス・ゼクトが生死不明になりヴェインの推薦があつてギースがその座に就いたのだ。

ギースがジャツジマスターになった後はヴェインの命令しか殆ど聞いてはいない為、確かにヴェインの飼い犬のような状態である。

ギース自身もそのことには気づいているが次期皇帝確実と呼ばれる人物に顔を覚え
てもらえば損にはならない為我慢している。

その為若干不服でありながらも飼犬を演じている訳だが・・・

ギースは滾る怒りを押さえ平静を装いアーシエに話しかけた。

「彼をダルマスカの民とお考えなさい。殿下が迷えば迷うほど民が犠牲になる」

ギースはそういつて腰の金色の剣を抜きバルフレアの首下にむける。

「彼は最初のひとりだ」

「まわりくどい野郎だな。ええ？」

そのやり取りを見ていてセアは確信した。

最初見たときから思っていたが目の前にいる金ぴか鎧は確実に器が小さい。

それにしても流石空賊とでもいうべきだろうか命の危機に相手に喧嘩を売る余裕が
あるとは。

セアがバルフレアに感心しているとアーシエが悔しそうな表情を浮かべながらギ
ースに「暁の断片」を手渡した。

ギースは手に取った「暁の断片」を眺めながら呟いた。

「王家の証が神授の破魔石であったとは・・・ドクター・シドが血眼になるわけですな」

「今なんつった！」

バルフレアが眼を鋭くして問いかけたがギースは無視する。

そしてウォースラに命令した。

「アズラス将軍。ご一行をシヴァへ。数日でラバナスタへの帰還許可がおりる」

ウォースラは帝国兵と共にセア達を連行させる。

ギースがウォースラ達が退室したのを確認すると自分以外の軍人がいないか確認する。

そして随伴している研究員に話しかけた。

「すぐに魔力を測定しろ」

「本国に持ち帰るまで手をつけるなどのご命令では？」

青年の研究員が疑問を口にする。

今回の任務は青年が所属するドラクロア研究所が一枚噛んでおり、破魔石が危険極まりないものであることを知っている。

もしなにかの反動で複合崩壊でもおころうものならとんでもない被害が出る。

だから所長を中心に本国に持ち帰るまで手をつけるなど青年もきつく命令されているのだ。

勿論ギースもそのことは知っているため誤解だというふうに首を振って言った。

「あらかじめ真贋を確かめておかないでどうする？」

その言葉を聞き青年も偽物の破魔石を持って帰るよりはマシかと思いを承した。「わかりました。直ぐに部下に命令し魔力測定の準備をさせます」

第二十二話 挑み、あがく

リヴァイアサン艦隊軽巡洋艦シヴァにて。

手枷をつけ、アーシエ達を連行しているウォースラは遠慮気味にアーシエに話しかけた。

「ラバナスタに戻ったら市民に殿下の健在を公表しましょう。あとは自分が帝国と交渉を進めます。ラーサーの線を利用できると思っています。彼は話がわかるようです。信じてください」

その言葉を聞いたアーシエは立ち止まりウォースラの方を向き彼を睨みつけた。

「いまさら誰を信じろというの」

その言葉を聞きウォースラはアーシエから顔を逸らし黙り込んだ。

その様子を見たアーシエは再び歩いていった。

ウォースラも国の為とはいえ主君を裏切ってしまった。

少し後悔の念を抱きながらウォースラはアーシエの方を見、呟いた。

「ダルマスカのためです」

同時刻リヴァイアサンの研究室にて。

「設備が限られておりますので当艦の動力を利用して判定します。石を機関に接続しその反応を……」

「手順の説明などいらん。結果を見せろ」

研究員が「暁の断片」をリヴァイアサンの機関に接続しながら説明するがギースは説明は不要だと切り捨てた。

説明を拒否されたのを気にも止めず研究員は「暁の断片」の接続を続ける。

そして接続が終わった瞬間魔力を現すメーターが跳ね上がり始めた。

研究員はそのメーターを見ながら数値を叫んでゆく。

「……6700。6800。6900。7000！ 間違いありません神授に破魔石です！ 限界が見えませんか!!」

研究員の悲鳴のような報告を聞きギースは眩いた。

「これが神授の破魔石……まさに神々の力だ。手にした者は第2の霸王か？」
そう言つてギースは軽く笑い声をあげる。

「ヴェインでなくてもかまわんわけだ」

ギースがそう眩くとリヴァイアサンに警報が鳴り響いた。

研究員の一人が驚いたような声をあげる。

「なんだこれは!?」 反応係数が・・・」

「どうした?」

ギースは研究員に疑問をこぼした。

同時刻軽巡洋艦シヴァにて。

【暁の断片】の放つミストにあてられフランが凶暴化し手枷を力ずくで壊し手当たり次第に帝国兵を蹴飛ばしていた。

その様子を見たパンネロが困惑しながら疑問の声をあげる。

「どうしちゃったの?」

「束縛されるのが嫌いなタイプでね」

そう言いながらバルフレアは器用に自分の手枷を外す。

そしたらバルフレアの横にフランが蹴飛ばした帝国兵が悲鳴をあげながら落ちてきた。
た。

「・・・ここまでとは知らなかったが」

バルフレアは自分の横に落ちてきた帝国兵を見ながらそう言いアーシエの方を向く。

「あんたはどうだい?」

「彼女と同じ。脱出しましょう」

手枷を外したヴァンが自分達を連行してきた飛空艇の方に走る。

「やらせるかつー！」

ウオースラがヴァンに向けて剣をふる。

ヴァンは咄嗟に足元の気絶していた帝国兵を蹴り上げ、ウオースラの攻撃を防いだ。

ウオースラは素早く剣を構えなおし叫ぶ。

「空族ごときにダルマスカの未来を盗まれてたまるか！」

そしてウオースラは帝国兵から押収品を回収し自分が渡したダルマスカ騎士団の剣を持つて構えているバツシユの姿が眼に入った。

「なぜだバツシユ。お前なら現実が見えるだろうが！」

「だからこそ・・・あがくのだ！」

その言葉を聞いたウオースラはバツシユに素早く近づき剣を横にふる。

バツシユは剣でウオースラの剣をふせぐ。

ウオースラは自分の攻撃が防がれたことに気づくと素早く切り返す。

バツシユは防御が間に合わないと後方に下がりよける。

するとウオースラは今度は剣を横にふり、遠隔攻撃をした。

バツシユはしやがみウオースラの遠隔攻撃をよけ、そのままウオースラに斬りかか

る。

ウオースラはバツシユの剣を受け止めつばぜり合いの状態になった。

「あがくだと？ ハツ、俺が2年間解放軍を率いてきてわかったことはひとつだ！

我々では帝国には敵わない!!」

「だがそれでも挑むことをやめる理由にはならん!!」

「2年も死んだ事になっていたお前がほざくなっ!!」

そういうとウオースラとバツシユの戦いは再び激しいものになった。

(あの2人の戦いに割り込むのは無粋だな)

セアは2人の戦いを見ていてそう思った。

セアが余所見をしていると帝国兵がセアの背中に斬りかかった。

セアは背中への剣を向け帝国兵の攻撃を止め、後ろに振り返る。

振り返る途中にセアの間接がありえない方向に曲がっていたがセアは気にも留めない。
い。

帝国兵はセアに気持ち悪さを感じ少し震え出した。

その好きにセアは帝国兵の首に向けて剣をふり、帝国兵の頭と体を切り離れた。

そしてセアは自分が殺した帝国兵の懐から財布を奪う。

「金欠なんだ。許してくれ」

セアは顔に笑みを浮かべながらそう言った。

そしてこの状況では先に脱出用の飛空艇を奪った方がよいと考え実行に移す。

「ヴァーン！ パンネロ！ 一緒に来てくれ飛空艇を奪う」

セアの台詞にヴァーンが帝国兵の喉笛を切り裂き答える。

「でもあいつが！」

ヴァーンが剣でウォースラを指し示す。

「ウォースラの相手はバッシユに任せよう。俺達は脱出用の飛空艇を奪うんだ！」

セアの言葉にヴァーンとパンネロは頷き、近づいた。

そしてセアは「バニシガ」を唱えた。

それは対象を透明状態にする魔法でが影が消えないので注意深く見ればばれてしま
う。

しかし今ウォースラはバッシユとの戦闘に気がとられていたため、セア達は飛空艇の
制圧に向かう。

「うおおおお!!」

ウォースラが叫び剣をバッシユにむけ剣を横にふる。

バッシユはそれを避け、剣をウォースラに向け突き出す。

するとウォースラは突き出した剣に向けて剣を振り下ろした。

「なっ！」

バツシユの剣が折れた。

武器が壊されたバツシユは防戦一方になりウオースラの剣を避け続け壁際に追い込まれた。

「終わりだ！バツシユ！！」

ウオースラは剣を振り上げ満身の力をこめて振り下ろした。

ウオースラの剣は壁を切り裂きホコリが宙をまっただ。

そしてウオースラの右ひざに激痛が走る。

「なっ……！」

バツシユは先ほどの攻撃をよけ、折れた剣をウオースラの右ひざに叩きつけたのだ。

ウオースラは剣を落として膝を突きバツシユを見上げた。

その様子をアーシエは辛そうな表情で見ていた。

するとそこにヴァンの声が響いた。

「飛空艇を抑えたぞ！」

その言葉を聞いたバルフレアは凶暴化していたフランに肩を貸し、アーシエに話しかけた。

「アーシエ。行くぞ」

しかしアーシエはバルフレアの言葉には従わずバツシユとウオースラの方を見ていた。

「俺は祖国のためを……」

ウオースラはそう言い、腕を床につけた。

「わかっている。お前は国を思っただけだ」

バツシユは昔ランデイスのためを思い国を出た自分が脳裏に浮かんだ。

その言葉を聞いたウオースラは後悔をまぜた声で話す。

「ふん。功を焦ったのも事実さ。焦りすぎたのか……お前が戻るのが遅すぎたのか……」

そうだ。せめて王宮への襲撃よりまえに戻ってきてくれていたら……

ありもしない仮定をしても無駄な話だとウオースラは自嘲した。

どちらにせよ……主君を裏切った臣下等必要あるまい。

「俺はもうお仕えできん。殿下を頼む」

かつての戦友の願いにバツシユは領き、セア達が奪った飛空挺の方に走っていった。

第二十三話 破魔石の力

戦艦リヴァイアサンにて。

「機関出力急速に低下・・・馬鹿なマイナスだと!? 艦の浮力を保てません!」
「何が起きたというのだ!」

操縦者の報告にギースが疑問を叫ぶ。

「破魔石です! 艦の動力を吸収しています!」

研究者が破魔石を接続した機関をみながら叫ぶ。

「止めろ! 早く止めんか!」

「やっています! ですが・・・」

「まずい! 反転した!!」

接続していた機関が爆発した。

既に機関出力は墜落寸前のところまで落ちている。

「限界到達まで300! 複合崩壊だ!!」

軽巡洋艦シヴァにて。

ウオースラは天井を見上げていた。

思えば2年前の調印式の際バツシユが陛下を暗殺したことを信じられなかったがダ
ルマスカ兵の数名が目撃者で否定できなかった。

互いに信じあつた戦友が裏切り徹底抗戦を唱え、陛下を暗殺したと目撃者から聞いた。

そして自分はラバナスタに戻り、殿下を盟友のオンドール侯に助けを求めようと思つた。

だが・・・オンドール侯はバツシユの処刑とアーシエの自殺を発表しダルマスカに降伏を促した。

オンドール侯も帝国に屈してしまつたのだと思つた。

そして自分はダルマスカ騎士団の残党を結集し解放軍を組織し帝国と2年間戦い続けてきた。

しかし解放軍を抜ける者・帝国と内通する者もでてくるようになった。

度重なる裏切りを受けた自分は誰も信じきれなくなつてしまつた。

そんな時バツシユが生きてラバナスタに帰つてきた。

そしてあの調印式は帝国の罠であつたことを知つた。

バツシユはあの時にこう言った。

共に戦えるかと。

だが疑心暗鬼の状態であつた自分はそれを拒否した。

しかし少しだけまた他者を信じてみようかとビユエルバに赴きオンドール候と面会した。

そしてバツシユが殿下を助けるためにリヴァイアサンに乗り込んだと知つた。

自分が手をこまねいている内に戦友は既に行動を起こしていたのだ。

自分はオンドール候に頭を下げジャツジの鎧を身に纏いリヴァイアサンに乗り込み殿下を救出した。

そして侯爵を通じて入ってくる情報に自分は帝国から祖国再興をはたす展望が描けなくなつた。

そこで・・・ラバナスタに戻つた際ヴェインから提案がきた。

帝国は「暁の断片」と引き換えにダルマスカの復活を認めようと。

自分も最初は拒否した。

だが・・・他に祖国を取り戻す方法が思いつかなかつた。

そして渋々ではあつたが結局ヴェインの提案に乗つてしまった。

たとえ戦い続けたとしても独立を取り戻すことが出来ると思えずに・・・

結果としてダルマスカ王国の名門アズラス家の騎士が主君を裏切ることとなってしまった。

ウオースラは自嘲の笑みを浮かべた。

その直後、シヴァは異常な量のミストによって吹き飛ばされた。

セア達はシヴァで奪った飛空艇レモラに乗り、ミストの暴風に揺られていた。

「おい！冗談じゃねえぞ！」

「ミストよ。ミストが実体化してる！」

「ありかよ！そんなの!？」

周りが愚痴を言いながら騒いでいたがセアは酔いが気にならないほど窓の外を凝視していた。

この力を自分は見たことがある。

かつて霸王が使っていた力だ。

そして自分の故郷と家族を奪った力だ。

セアに怒りが込み上げてくるが理性でそれを抑える。

一体目の前に広がる忌々しい力を使ったのは誰だ？

「見てー！」

パンネロが指差すほうをセアは見た。

リヴァイアサン艦隊を吹き飛ばしたミストの中心に光り輝く石があった。

それを見てアーシエが眩く。

「暁の断片!?!」

「拾ってくださろー！」

そういいバルフレアはレモラを光り輝く石の方へ向けた。

因みに急にレモラを方向転換した時にセアの気持ち悪さがピークに達して吐いた。

・・・でセアが吐いた液がバツシユに直撃した。

バツシユはセアが狙ってやっているのではと少し疑ったがセアが乗り物酔いで失神しているのを見て疑いは晴れた。

第二十四話 大戦の予感

アルケイディア帝国帝都アルケイデイスにて。

皇帝グラミスは元老院の議会に出席していた。

「ロザリア帝国大本営が演習を装って大軍を集結させております。開戦の大義名分が整うのを待つて……我が国に先制攻撃するはらかと」

「これほど緊張が高まった時期にリヴァイアサン艦隊を失ったのは痛手でしたな」

「いまロザリアに攻め込まれれば苦戦は確実。かかる事態を招いた全責任は……独断で艦隊を動かしたヴェイン殿にあります」

元老院議員の議論を聞き、元老院議長グレゴロスはグラミスに話しかける。

「ヴェイン殿は裁かれねばならない。それが元老院の総意です。陛下。ご子息とはいえど厳正な処分を」

「ヴェインを庇うか、予が皇帝の座から降りるか……ふたつにひとつという訳か」

グラミスは拳を握りながらそう言った。

「ご心痛のほど。お察し申し上げます」

グレゴロスがグラミスにそう言うのと隣の議員が声をあげる。

「なに。ヴェイン殿のかわりはラーサー殿が立派におつとめになるかと」

「あれはヴェインになつておるしまだ幼い」

グラミスはグラゴロスの横にいる議員の方を向きそう言った。

ラーサーはまだ12歳である。

それに今の状態でラーサーが皇帝になれば元老院の傀儡になりかねない。

しかし別の議員が声をあげる。

「いつまでも幼くはありますまい。今はヴェイン殿の動きを探っておられるとか。活躍の場を得て意気込んでおられるようですね」

「誰がそそのかしたものやら」

グラミスはラーサーをそそのかしたのは元老院であると考えている。

そしてその考えはあたってはいる。

元老院がラーサーに人造破魔石を渡し、ラーサーは信頼していたヴェインに不信感を募らせている。

「さて．．．かつてヴェイン殿も兄君ら過ちを断罪されたではありませんか．．．あの時は陛下のご命令でしたが」

グラミスは思い出したくないことを思い出し顔を俯ける。

そして死病の症状でせきがでた。

グレゴロスはグラミスのせきが収まるのを待たず話しかけた。

「ご安心ください。グラミス陛下。われら元老院が支える以上……アルケイディア帝国は安泰です」

「よからう。至急ヴェインを帝都に戻す」

グラミスはそう言つて会議を打ち切つた。

まだ多くの問題を抱えている今ヴェインを処断するの論外だ。

しかし元老院に対抗しようにも古い先短い自分では恐らく途中で死んでしまふ。

次期皇帝になるべきヴェインは元老院に恐れられており、リヴァイアサン艦隊壊滅の件を理由に皇帝になることは承認しないだろう。

だから元老院はラーサーを自分達に都合のいい人形として皇帝にするのは簡単に予想できる。

ヴェインを呼び戻し元老院への対抗策を考えなくてはならない。

ロザリア帝国帝都ルブラにて。

琥珀の谷にある都市の王宮でロザリア帝国皇帝ユリウス・マルガラスは諜報部を統括するアルシド・マルガラスからの報告を受けていた。

「大本営め・・・また私の許可を得ずに行動しおって」

「ですが、オードリア東部及びケルオン大陸にある植民地に分散して軍事演習という名目ですので許可をとる必要がありません」

ロザリア帝国では前マルガラス朝が終焉して以来大本営と皇帝が対立している。

一番の原因は皇帝が直接軍を支配下においていないからだ。

軍の演習も一定数を超えない限り大本営の独断で動かすことができる。

ユリウスは頷き、報告の続きを促す。

「国外諜報課の報告は？」

「ビュエルバの領主オンドール侯爵が病を理由にビュエルバを離れ、反帝国組織を結集し始めているそうです」

「確かか？」

「確かな筋の情報です」

「面倒な。国内諜報課からの報告は？」

「報告によると大本営にいる強硬派の將軍達も東部へ赴きいております。侯爵が動けば、彼らも動くでしょう」

「あまりよい報告が無いな」

「しかし対アルケイディア諜報課よりよい話もあります」

「なんだ？」

「アルケイディアの反戦派と協力をとりつけることができたとのことですがそれは吉報だ。

ユリウスは大戦を望んでいない。

内政に力をいれたいので戦争など願ひ下げである。

「反戦派からの手紙でございます」

そういつてアルシドは胸のポケットから書類を出し、ユリウスに手渡す。

そしてユリウスは手紙の内容を読み、アルシドに話しかける。

「これはまた大した奴が反戦派の代表だな」

「私が陛下の代理人としてそこに書いてある場所に行くつもりです」

「ふむ、許可する。頼んだぞアルシド」

「はっ」

アルシドはユリウスに礼をして退室した。

廊下を歩いていると黒い髪をした人物が話しかてきた。

「よおアルシド。大本営には手を焼かされるな」

「ああ。アダス」

黒い髪の人物の名はアダス・マルガラス。

国内の災害や疫病の情報を収集する国内諜報課の統括である。

だが大本営が常に暴走状態のロザリアであるから殆どが大本営の情報の収集ばかりのため対大本営諜報課とも言われている。

「東の方に行くんだろ。クライスさん元気かな？」

「貴方はまた昔の上司の話か」

「そうだよ。悪いか？」

「いや」

20年程前に諜報部に入った時の上司のことをアダスは尊敬している。

アルシドもアダスと同期で同じ上司であったが彼は大した手腕の持ち主であった。

1年ほどで彼は諜報部から抜けたが情報操作の上手さはアルシドも評価しているが会うたびに言われても。

「アルシド様」

美しい声が聞こえてきた方向にアルシドとアダスは向いた。

そこには綺麗で長い金髪の笑顔が似合いそうな美女がいた。

体系は・・・ボンツキュボンツとでもいえばいいだろうか。

「カナート・・・どうしました？」

「準備が整いました。直属の部下も全員連れて行くのでよろしいのですね？」

「ああ」

するとアルシドはカナートについて行こうとするとアダスがアルシドの肩を掴む。

「なんだ？」

「毎回言っているような気がするが……何故お前の直属の部下は綺麗な女性ばかりなんだ？」

「私の趣味だ」

そう言っつてシドはカナートと一緒に向こうへ歩いていきその様子をアダスは呆れた顔で見っていた。

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領王都ラバナスタにて。

セア達はラバナスタのターミナルにいた。

もう前からこの会社はブラックゾーンに入っていることは知っていたがセアは呆れていた。

だつてこの前のアトモスと違いレモラは戦闘機だ。

それをターミナルに止めても会社はなにも言っつてこなかった。

今の日本でたとえたと空港に爆撃機を止めてなにも尋ねてこないみたいな話。

そのことに呆れているセアに街の噂話が聞こえてきた。

「一体何の騒ぎだ？」

「西の砂漠で帝国の飛空艇が事故を起こしたらしい」

「冗談はよせ。西の砂漠はヤクトだぞ」

その噂話を聞きセアはアーシエに話しかけた。

「騒ぎが収まるまで姿を隠したほうがよいかもしれません」

「そうだな。で？ 何処に隠れるんだ？」

バルフレアの言葉にセアは軽くを傾げ、何か思いついたという風に手を叩いた。

「周りが冷たい視線で見ていることに気づきポケットから鍵を出し、パンネ口に渡した。」

「これミゲロさんの店の倉庫のかぎじゃない」

「だからそこに身を隠してもらおう。ヴァンと俺でミゲロさんに説明しに行くからパンネ口は王女様達を案内してやって」

そう言つてセアはヴァンを連れてミゲロの店に向かった。

店に着くと勝手に何処に行つてたんだ!とミゲロの雷がセアとヴァンに落ちたのは言うまでも無い。

神都編（旧称：ケルオン大陸編）

キヤラ紹介（ネタバレあり）

＋十メインキヤラ

それぞれが目的を持ち、共にイヴァリースを旅している。

＋クライス・セア・グローリア

年齢・700歳以上。性別・男。種族・ヒュム？ 出身地・不明。

オリジナルキヤラで本作の主人公。

昔ロザリア帝国の諜報部にいたことがあるらしい。

＋ヴァン

年齢・17歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・王都ラバナスタ

FF12の主人公。セアの弟子。

原作より空気では無くなってる筈by作者。

＋バルフレア

年齢・22歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・不明

「最速の空賊」の異名で呼ばれる空賊。

あくどい奴ばかりターゲットにしている義賊である。

＋フラン

年齢・不明。性別・女。種族・ヴィエラ。出身地・エルトの里。

バルフレアの相棒。ミストに敏感。

会話に参加させにくいby作者。

＋バツシユ・フォン・ローゼンバーク

年齢・33歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ランデイス共和国。

ダルマスカ王国の元將軍。表向きはアルケイディア帝国に処刑された事になっている。

名譽は帝国によって奪われたが騎士の誓いは未だに忘れていない。

＋アーシエ・バナルガン・ダルマスカ

年齢・20歳。性別・女。種族・ヒュム。出身地・ダルマスカ王国。

ダルマスカ王国の女王。表向きは自害したことになっている。

祖国再興と帝国への復讐を願っている。

＋パンネロ

年齢・16歳。性別・女。種族・ヒュム。出身地・王都ラバナスタ。

ヴァンの幼馴染。家族がいたが2年前の戦争で全員死んでいる。

踊り子を目指しているということが忘れられてる気がするby作者。

＋＋アルケイディア帝国

バレンディア大陸に覇を唱える二大帝国のひとつ。

2年前にナブラディア・ダルマスカの2カ国を侵略した。

＋グラミス・ガンナ・ソリドール

年齢・63歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・アルケイディア帝国。

アルケイディア帝国皇帝で死病に冒されている。

元老院に対抗するためにヴェインを帝都に召還した。

＋ヴェイン・カルダス・ソリドール

年齢・27歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・アルケイディア帝国。

「戦争の天才」と称され、次期皇帝確実と呼ばれる人物。

現在はグラミスからの召還状によって帝都にいる。

＋ラーサー・ファルナス・ソリドール

年齢・12歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・アルケイディア帝国。

ヴェインの弟。アーシエとバッシユの生存を知って以来ヴェインに不信任を募らせ

ている。

幼い部分も多く残っているが聡明な人物である。

＋ジャツジ・ガブラス

年齢・33歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ランデイス共和国。

「帝国こそわが祖国」と言い、己の力のみで外民からジャツジマスターに成り上がった。兄がいるらしくその兄を憎んでいる。

＋ジャツジ・ギース

年齢・41歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・アルケイディア帝国。

第13局のジャツジマスター。第8艦隊艦長。

【暁の断片】の暴走で第8艦隊もろとも消滅した。

＋シドルファス・デム・ブナンザ

年齢・58歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・アルケイディア帝国。

ドラクロア研究所所長。ヴェインとは親友。

独り言が激しく、父に恐怖を感じた息子が家出したとかなんとか。

＋グレゴロス

年齢・57歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・不明。

元老院議長。ヴェインを失脚させ、ラーサーを自分達の傀儡として皇帝の座につけようとしている。

因みに年齢は適当by作者。

＋＋ダルマスカ地方。

2年前にアルケイディア帝国が滅ぼしたダルマスカ王国の領土の事。
ヴェインが執政官に就任してからは治安は回復していつている。

＋ウオースラ・ヨーク・アズラス

年齢・38歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ダルマスカ王国。

ダルマスカ王国の将軍。祖国が滅びてからは解放軍を率い帝国と戦ってきた。

最終的に帝国との交渉により祖国再興を目論むがバツシュとの一騎打ちに破れ、第8艦隊と運命を共にした。

＋ミゲロ

年齢・不明。性別・男。種族・バンガ。出身地・ダルマスカ王国。

ラバナスタの商人で商売はかなり成功している。

ヴァンやパンネロの保護者的存在。

＋カイツ

年齢10歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・王都ラバナスタ。

ヴァンを兄のように慕う孤児。

手先が器用。

トマジ

年齢・18歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・不明。

砂海亭の店員。セアから金をぼったくった猛者。

トマジがこんなキャラになったのはF F 1 2 R WのP Vのせいだby作者。
タダラン

年齢・不明。性別・男。種族・不明。出身地・不明。

物知り爺さん。何故か色々なことを知っている。

多分その気になればこの爺さんは政治家になれるとおもうんだby作者。

十ビユエルバ

空中大陸ドルトニスにある都市国家。魔石の輸出と観光が主な財源。

この国は代々オンドール侯爵家が治めている。

十ハルム・オンドール四世

年齢・61歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・空中都市ビユエルバ。

ビユエルバの領主で親帝國的な政治をしているが裏で反帝国組織を支援している。

第8艦隊が壊滅した頃に病を理由にビユエルバを離れ、反帝国組織を結集させ解放軍

を組織しようとしている。

＋十ロザリア帝国

オーダリア大陸に覇を唱える二大帝国のひとつ。アルケイディアとは犬猿の仲。常に大本営が暴走状態であり、皇帝の権力がアルケイディアと比べ低い。

＋ユリウス・マルガラス

年齢・30歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ロザリア帝国。

ロザリア帝国皇帝で10年ほど前に帝位に就いた。軍を直接自分の指揮下におこうとしている。

＋アルシド・マルガラス

年齢・37歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ロザリア帝国。

諜報部を統括する人物。アダスとは同期。

若干性格弄りすぎたかもしれんby作者

＋アダス・マルガラス

年齢・37歳。性別・男。種族・ヒュム。出身地・ロザリア帝国。

国内諜報課を指揮する人物で大本営の情報収集をしている。

アルシドの女癖に辟易している。

十カナート・イグス

年齢・24歳。性別・女。種族・ヒュム。出身地・ロザリア帝国。
アルシド直属の部下で美人。

彼女がアルシド直属の部下のまとめ役的存在。

第二十五話 力を求めて

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領王都ラバナスタにて。

ミゲロの店の倉庫に身を隠して4日後。

セア達は倉庫に集まっていた。

「帝国の艦隊を消し飛ばしたのは【暁の断片】なのだな」

「察しいいな」

「あの桁違いの破壊力・・・心当たりがある。アーシエ様もご存知のはずです」

バツシユの言葉を聞き、アーシエは呟く。

「ナブデイス・・・」

アーシエの言葉にバツシユは頷き、続ける。

「旧ナブラディア王国の都・・・ラスラ様の故郷だ。先の戦争中帝国軍が突入した直後に原因不明の大爆発で敵味方もろとも・・・あの国にもレイスウオール王の遺産のひとつ

【夜光の碎片】が伝わっていた」

バツシユの説明にバルフレアも何か嫌そうな声で言う

「破魔石・・・か。奴等が夢中になるわけだ」

アーシエは「暁の断片」を掴み声をあげる。

「あの戦争も調印式の罨もヴェインはこの力を狙って……！」

アーシエは決意をするように言う。

「レイスウオール王の遺産……破魔石は帝国には渡せません」

「とつくに渡つてる。【黄昏の破片】にたぶん【夜光の破片】も。でなきや人造破魔石なんて合成できるか」

「では【暁の断片】の力で帝国に対抗するだけです」

バルフレアの台詞にアーシエは立ち上がって反論する。

「ダルマスカは恩義を忘れず、屈辱も忘れず刃を以って友を助け、刃を以って敵を葬る。

私の刃は破魔石です。死んでいった者達のため……」

アーシエはそこで一旦言葉を区切り、決意した表情で続ける。

「帝国に復讐を」

部屋に重苦しい空気が流れ、全員が黙り込む。

沈黙を破つたのは空気を読めないヴァンである。

「使い方わかるのかよ」

アーシエはヴァンの方に振り向くが実際使い方を知らないため反論は出来なかつた。するとフランが呟いた。

「ガリフならあるいは」

セア以外の全員がフランの方に視線を向ける。

「古い暮らしを守るガリフの里には魔石の伝承が語り継がれているわ。彼らなら破魔石の声が聞こえるかもしれない。．．．危険な力の囁きが」

「危険だろうと今必要なのは力です」

アーシエはフランにそう言いながら近づき言葉を続ける。

「無力なままダルマスカの復活を宣言しても．．．帝国に潰されるだけ。ガリフの里までお願いします」

「オズモーネの平原を越えた先よ」

「遠くないか？」

フランとアーシエの会話を聞き、バルフレアが声をあげる。

「また報酬．．．ですか」

「話が早くて助かるね。そうだな。そいつが報酬だ」

バルフレアはアーシエの左手の指輪に指をむけそう言った。

「これは．．．何か他の．．．」

「嫌なら断る」

バルフレアはそう言ってアーシエに手を差し出す。

アーシエは躊躇いながらラスラとの結婚指輪を外し、バルフレアに渡した。

バルフレアは軽く指輪を見てアーシエに言う。

「そのうち返すさ。もつといいお宝を見つけたらな」

「なんだよもつといい宝ってさ？」

バルフレアは出口に向かいながら話す。

「さあな。見つけた時にわかるのかもな。ヴァン、お前なら何が欲しい？何を探している？」

「オレ？そりゃあさ、その・・・ほら、あれ。・・・オレは・・・」

そんな事を言っているうちに倉庫の中にはセアとヴァンだけになった。

セアは・・・こちらの世界で言う考える人の彫刻のような体勢で固まっていた。

そんなセアに気づきヴァンが声をかける。

「セア」

名前を呼ばれたにも関わらずセアは微動だにしない。

ヴァンは大きく息を吸い込んでもう一度呼んだ。

「セア!!!」

「・・・ん？どうした馬鹿弟子」

セアはヴァンにいつもの明るい口調で話しかけたがヴァンが心配気味な声で言う。

「セア、どこか悪いのか？ 倉庫に集まった時からずっと黙ってたけど」
「……いや、ただ考え事をしていただけだ」

セアはこの倉庫で交わされた会話が気にならないほど考え込んでいた。それはアルケイディアの……いや、シドの目的である。

覇王の遺産を集めるのはわかる。

あんなものが他国にあるなら心配で夜も眠れない。

だが何故人造破魔石を造る必要がある？

破魔石がひとつあればロザリア帝国に圧勝する事も可能だろう。

なにせあんな小さな石ひとつで艦隊や都市を跡形も無く消し去る力があるのだから。

だから破魔石はひとつでよく、他国に渡ることを防ぐために残りの2つは破壊してもいいくらいだ。

なのにその製造を試みているとはどういうことだ？

そこで思い出すのがリヴァイアサンでギースが言っていた台詞だ。

ドクター・シドが血眼になって破魔石を調べているということ。

そして王宮でのシドとの会話を思い出す。

ロザリアなど前座にすぎないと彼は言っていた。

ということはアルケイディアはロザリアなど目ではない脅威があるともいうのか

?

とりあえず・・・

(面倒だが知りたければ王女についていくのが一番か)

セアはそう思いアーシエに同行することを決めた。

セアが国家の思惑に関心を持ったことなど何百年ぶりであろうか・・・

第二十六話 水面下の情勢

「ダラン爺になにか用があるのですか？」

ダランに会いたいと言うアーシエにセアは疑問をぶつけた。

「いえ、ですが王墓に王家の証があることを知っていた人です。破魔石についてもなにかご存知ではと」

「・・・確かに聞いてみる価値はありますか」

セアはバルフレアに話しかけた。

「旅の準備は俺と王女様抜きでやっていてくれないか？」

「ああ」

バルフレアが了承し、セアがバザーから離れようとするバツシユが話しかけてきた。

「君もガリフの里に行くのか？」

「ああ。馬鹿弟子とその友達が心配なので」

「・・・君は面倒事が嫌いだとおもっていたのだが」

「ああ、そうだよ。普段ならヴァンを無理やりにも止めるだろうな」

「なら何故だ?」

「明確な理由はないが好奇心と言っておこう」

セアはそう言うのとアーシエを連れてダウンタウンの方へ歩いていった。

ダウンタウンは元は下層部分にあった倉庫で、2年前の戦争で帝国の市民権を持たないダルマスカ人はこの下層部分に転居させられた。

そんなダウンタウンの入り口付近に住んでいる変なじいさんがいる。

そのじいさんこそものしりのダラン爺である。

セアがダランの家に入るとダランが声をかけてきた。

「おお、セア。一体何処に行っておったんじゃ?」

「ちよつとヴァンたちと一緒に霸王の墓を荒らしてきた」

「ほほう。つい最近王宮の宝物庫から宝を盗み出しおったと思えば今度は霸王の遺産でも盗み出しおったか?」

「・・・一応」

セアは苦笑しながらそう答えた

あの魔人が一応遺産だから盗んだといえ盗んだいえるのだが・・・

セアの答えにダランは軽く笑い、アーシエの方に視線を向けた。

「それで、そちらの女性は誰じゃ?」

「ああ、前に説明した王女様だ」

「アーシエ王女か・・・して、この古いぼれになんのようかの？」

ダランがアーシエに問うとアーシエは偽らず答えた。

「あなたは破魔石というものをご存知ですか？」

「破魔石・・・」

ダランは首を捻って唸っていたが少しすると顔をあげ、アーシエの方を見た。

「破魔石か・・・確か霸王と破魔石に関する伝説があつたのう」

「それは？」

「【かつてレイスウォールは神に認められ、剣を授かり、己に与えられた試練を耐え、破

魔石によって乱世を平らげた】

「・・・？」

ダランの語った伝説の無いようが理解できず、首を傾げた。

その様子を見てダランも黙り込む。

「意味がわからないな・・・」

「ええ・・・」

アーシエとセアはそういうとダランが

「破魔石に関する伝説はかなり古い書物にしか書かれておらんからの・・・そしてそれら

に書かれているのも信憑性があまりない」

「どうしてですか？」

「何故なら破魔石に関する話になると必ずと言ってもいいほど【神】という存在が出て、それを誰かに授けたという話しかないのじゃ」

「神・・・か」

「どうしたセア？」

「いや、そういうえば霸王も神々に愛されたとか伝説で語られていたなと思ってな」

「そういうえばそうじゃのう」

「ところで話が変わるがなんで王家の証が王墓にあるってしてってんだ？」

「書物を読み漁っていたらでてきただけじゃよ」

「さすがだな」

「だてにものしりを名のつとらんよ」

そういうとダランは少し真剣な声で話しかける。

「破魔石のことはひとまずおいといて、今の情勢をお前達は知っておるか？」

ダランの言葉にセアもアーシエもひとまず破魔石について考えるのをやめる。

そしてアーシエが切り出した。

「なにかあったのですか？」

「西のヤクトで西方総軍の第8艦隊が全滅したという話はしつとるか？」

ダランの問いにセアとアーシエは首を縦に振る。

「帝国の発表によれば【事故】らしいがの・・・まあ、それはおいとくとして、そのせいでヴェインが帝都へと帰った」

「なんでだ？」

「元老院から西方総軍司令としての責任を問われてな」

「相変わらずアルケイディアはソリドール家と元老院の仲が悪いな」

セアの言うとおりアルケイディア帝国ではソリドール家と元老院との対立が100年以上続いている。

主に政治は皇帝が取り仕切っているため、元老院は廢帝権などの権力を持つ事を除けばお飾りに近い。

だから自分達の影響力を強めようと元老院は必死なのだ。

「それにビュエルバの侯爵もなにやら動きがあるようでの」

「おじさまが？」

「表向きは病氣療養のためにビュエルバからいなくなつたと言っておるが・・・どうやら各地の反帝国組織に働きかけておるようじゃのう」

「どうしてそんなことを・・・」

「ダルマスカに張り付いておった第8艦隊が全滅し、厄介じゃったヴェインも本国へ帰ったからじゃろうな」

「で、今のアルケイディアはどういう状況なんだ？」

「グラミス皇帝は死期が近いらしいからの……このままいけばヴェインは元老院によって失脚するといったところかのう」

「ヴェインの動向はなにかあるか？」

「理由はわからんが対ロザリアの最前線にいるジャツジマスター達を召集令をだしたようじゃが……」

「帝国軍はどうなっているのですか？」

「アルケイディア軍はダルマスカ地方に駐屯しているガルテア機動軍を除いて平時体制じゃ」

「何故ガルテア機動軍だけ平時体制じゃないんだ？」

「ロザリア帝国に動きがあった」

セアとアーシエが表情を変えた。

アルケイディア帝国の長年の宿敵、ロザリア帝国に動きがある。

ダルマスカ再興を目的とするアーシエにとって好ましい事態ではない。

「ロザリア帝国東部に軍事演習という名目で大軍を集結させておるようじゃ」

「随分と大胆な行動に出たな」

「アルケイディア軍の精銳が集まっておったりヴァイアサン艦隊が全滅し、【戦争の天才】と称されるヴェインはダルマスカからいなくなってしまったからじゃろう。アルケイディアに隙あらばロザリアが攻め込んできて戦争がおこるかもしれない」

「ただでさえアルケイディアとロザリアの両帝国は犬猿の仲なのにアルケイディアがダルマスカを占領してからは何時開戦してもおかしくない状況だったからな」

「ロザリアからしてみればナブラディアに軍を置きバレンディア大陸進出の足がかりとするつもりじゃったのに2年前の戦争でナブラディアは敗れ、アルケイディアのオーダリア大陸進出を許してしまったからのう」

「表向きはヴェインは本国に戻り、侯爵は病気でビュエルバにいないくて、ロザリアは国境付近で軍事演習か」

「だけど水面下では元老院がヴェインを蹴落とそうとしていてヴェインも何か企んでいる。おじさまは反帝国組織を束ねていて、ロザリアは何時でもアルケイディアに攻め込んできてもおかしくない状況」

「どう考えても穏やかな状況じゃないな」

「更に言うならアルケイディアとロザリアの間で戦争が起これば主戦場となるのは……」

「……ダルマスカ」

アーシエは自分の無力さに怒り自分の手を握り締めた。

セアはダランの話を聞きあることを思っていた。

もうダルマスカ再興というような一国で収まるような規模の話ではない。

なんと表現すればいいのかわからないがガルテア連邦崩壊の時に感じたものと同じ。
いる。

恐らくこれは時代が動く前触れなのだろう。

その先にあるのが二大帝国のどちらかの栄光か、それとも二大帝国が力を失い再び群雄割拠の時代へともどるのか。

あるいは・・・

新しい時代の訪れをセアは予感していた。

第二十七話 亡国の王と王女

セア達はダウンタウンから出て、商店街の方を歩いてきた。するとカイツと出会い話しかけてきた。

「セアさん。久しぶり！」

「ああ、カイツ久しぶりだな」

「隣の人、誰？」

セアは軽くアーシエの方を見て、セアはカイツに話しかけた。

「この人はアマリアって言って、これからガリフの里に行くんだよ」

「ガリフの里って・・・ケルオン大陸にある？」

「ああそうだ。で、俺や馬鹿弟子が護衛として一緒に行くんだ」

「すっげえ！ でもケルオン大陸って危ない場所なんだよね？」

「ああ、危険と言えば危険か。でも別に未開の地って訳じゃないんだからさ」

ケルオン大陸はバレンディア・オーダリアの両大陸に比べるとミストが不安定でヤクトが多い。

強力な魔物が多く、野蛮な亜人種もいるので確かに危険ではある。

「まあ、ケルオン大陸って言ってもガリフの里があるのは北西部のバングール地方だからな。あそこはミストが安定しててそこにいるガリフ族も危険な存在じゃないし」

「へえー。ガリフの里ってバンクール地方にあるんだね。知らなかった」

「まああまり知ってても意味無いからな」

そんな感じでカイツとセアは暫く話していた。

するとカイツが急に声を小さくして話しかけてきた。

「ねえ、セアさん」

「なんだ？」

「ヴェインが帝都に帰っちゃたのって知ってる？」

「ああ」

「ヴェインが帰ったのを惜しむ人が結構多いんだ」

カイツの言葉を聞いたアーシエがなにか言いたそうにしていた。

セアはそれを認め、アーシエに小声で言った。

「黙っててください」

「！」

アーシエにそう言うとセアはカイツの方を向き、会話を続ける。

「なんでだい？」

「だってヴェインが来てからラバナスタの暮らしはよくなったんだ。帝国兵も我が物顔でうろつかなくなつたし」

「そうか」

「ねえ、ヴェインって信じてもいいのかな？」

アーシエは激情に任せ反論しそうになるのを必死に自制する。

するとセアはカイツにこう言つた。

「君が決めればいいんだよ」

「え？」

あまりに予想外な返答を聞き、カイツは首を傾げる。

「だってさ、他人に振り回される必要なんかないだろ？ 周りがヴェインの事を信じて

ても君が信じられないなら信じなければいいし、逆でもそうだろ？」

「う、うん」

「ところでカイツ。ミゲロさんの店の手伝いしなくていいのか？」

「いつけね。忘れてた！」

そう言つてカイツは走り出した。

セアはカイツの後姿を見ながら声をかける。

「ミゲロさんや他のみんなによろしくな！」

「うんー！」

その言葉が聞こえて直ぐカイツは人ごみの中に消えていった。

商店街を出て、バザーを歩いているとアーシエが話しかけてきた。

「何故あのような事を言ったのですか？」

「ん？ なにか変なことでも言いましたか？」

「だってあなたはヴェインが2年前の戦争でした事を知っているでしょう!？」

怒気を含めながらアーシエはそう言った。

するとセアは何処か納得したように頷いた。

「ええ、そうですね」

「なら何故、ヴェインを信じないほうがいいと言わなかったの!？」

「では、2年前の戦争はアルケイディアから見るとどうだったのでしょうか？」

「どういう意味？」

「恐らくヴェインは戦争前から破魔石の事を知っていたのでしよう。そしてそれを持つナブラディア王国が宿敵のロザリア帝国と手を結んでいた訳です」

「それがどうしたの？」

「・・・もし親ロザリア派がも勝利した場合、ナブラディアの『夜光の碎片』はロザリア

に渡っていたでしょう。そしてそうなればアルケイディアは間違いなくロザリアに滅ぼされます。アルケイディアの平和を考える上で当然でしょう」

「ですが、帝国はダルマスカにも攻め込んできたのよ!!」

「宣戦布告された以上、アルケイディアがダルマスカに攻め込むのは当たり前だと思いますが」

「・・・ではあの調印式の罫は?」

「善悪抜きで効率だけ考えれば・・・まあ悪くない判断でしょう。ダルマスカが【黄昏の破片】を持っている限り、アルケイディアは安心できないでしょう」

セアは個人的なヴェインに対しての評価を言っただけのつもりだった。

普通に考えれば彼は帝国のために動いただけだ。

善か悪で言うなら調印式の罫は確かに悪であろう。

だが悪を内包しない正義など存在しない。

大体ヴェインほどでは無いにしろそんなことはどの国でもしていることだ。

元一国の主であるセアから言わせれば正義の反対は悪ではない。

正義の反対は唯の悪役気取りである。

何故なら正義など偽善と大した差などないからである。

が、ふとアーシエの方を見ると口惜しそうに拳を握っている。

それを見てセアの胸にどす黒い感情が溢れてくる。

はつきり言つてセアにはアーシエに王としての資格があるとは到底思えない。

セアのアーシエに対する評価は霸王の末裔だから下がりやすいと自覚しているがそれでも酷いと思つている。

そんなことを思っていると己の感情が抑えづらくなり、セアは頭を下げる。

「・・・失礼しました。俺は他に用事があるので先にヴァン達と合流しててください」
そう言つてセアは早足でバザーの奥へとまるで逃げるように消えていった。

第二十八話 口伝

ケルオン大陸バンクール地方オズモーネ平原にて。

ラバナスタの南にあるギーザ草原を越え、セア達はオズモーネの平原にいた。

「あちこちになんかあるぞ?」

ヴァンが何かの残骸を指差しながら言った。

「あれは昔の飛空艇の残骸だ。馬鹿弟子」

「なんでそんなのがあるんだ?」

「昔この場所で飛空艇同士の激戦があつたんだ。残骸の数を見る限り結構な数が死んだだろうな」

ミストが安定せずヤクトが多いケルオン大陸において北西部のバンクール地方はミストが安定しており、豊かな土壌を持っている。

そのためこの地を多くの国家が狙っていた。

軍部の独裁政権時代のアルケイディア帝国と前マルガラス王朝時代のロザリア帝国とのバストウーク戦争以来バンクール地方は中立地帯と存在している。

そんなことをセアがヴァンに教えているとスレイプニルの群れが襲ってきた。

まあバルフレアが銃で撃ち殺したり、フランが弓で射殺したり、セアが裏拳で敵の頭蓋骨を粉砕したり、他のやつらが斬り殺したりして事なきを得たが。

(馬か・・・懐かしいな・・・)

セアはスレイプニルの死体を見ながら、昔のことを思い出していた。

(父上から聞かされたグリーンニルの騎士物語を思い出す)

かつて騎馬部隊が戦の勝敗を左右した時代。

セアの故郷の英雄グリーンニルが愛馬スレイプニルに乗り十倍近い敵を倒し国を守った。

そしてグリーンニルの愛馬の名前がそのままその種類の馬の品種の名前になった。

だがガルテア連邦時代から馬と比べ安い、早い、繁殖しやすい、持久力が高いチョコボが主流になっていき、ガルテア連邦解体の時には騎馬は戦場から姿を消していた。

「どうかしたのか?」

ずっとスレイプニルの死体を見つめていたセアを心配してバツシュが声をかけた。

「いや、なんでもないよ」

セアはなんでもないという風に笑みを浮かべた。

オズモーネ平原を越え、ソゴト川を渡るとガリフ族の集落ジャハラが目の前に見えた。

集落の入り口に走っていったヴァンは門番のガリフに止められた。

「何だ。お前？　ここはガリフの住む里だ。ヒュムの子供が尋ねてくる場所じゃないぞ」

「彼らはただの旅人だ」

セア達の後ろから別のガリフの声が聞こえた。

「彼らがオズモーネを越えてきたのを見た。かなり腕の立つ戦士なのだろう。平原の魔物にもまったく動じていなかった」

「・・・戦士長、またひとりで平原に？」

「・・・」

戦士長と呼ばれたガリフはヴァンの方を見た。

「・・・ガリフの地に何か用があるのか？」

ヴァンが頷くのを見て戦士長と呼ばれたガリフは門番のガリフの方を見て言った。

「彼らを通してやってくれ。責任は私が持つ」

「戦士長がそう言うなら・・・」

「・・・というわけでお前達、入っていいぞ。ここのところ、なんだかヒュムがよく来るな」

そう言われてヴァン達はガリフの集落に入って行った。

すると入り口で戦士長と呼ばれていたガリフが話しかけてきた。

「……まだ名乗ってなかったな。私はスピネル。この里の戦士長を務めている。本来、ガリフは外の者に対して寛容だ。しかし近頃はヒュムの世が何かと騒がしい。ゆえに、この里も警戒を強めているのだ」

スピネルが言っていることは本当だ。

ガリフ族は生まれた時に仮面を授かり一生はずすことが無く、狩猟種族だから筋骨隆々であるため恐ろしい印象があるが基本的にとってもいい奴が多い。

セアも1000年位前にガリフの里を訪れた時にガリフの人たちは宴を開いて歓迎してくれた。

「里を守る戦士の長として、今一度お前達に問う。何の用があつて、この地を訪れたのだ？」

スピネルの問いにセア達は包み隠さず正直に答えた。

「ほう……。お前達も破魔石とやらの話を聞きに来たのか。ガリフは口伝で知識を後世に教えている。破魔石について長老方は知らないようだから知っているとするれば最長老くらいだと思うが安易に面会を許すわけには……。」

「私は破魔石について知らなければならぬのです」

アーシエはスピネルの方を向いてそう言った。

「どうか最長老にお伝えください。私は霸王レイスウォールの血を引くダルマスカ王家の人間です。あなたたちガリフが古の記憶を今に伝えているなら、霸王が手にした破魔石についても、ご存知のはずです」

「お前が霸王の末裔だという証拠はあるのか？」

「それは……」

スピネルの問いにアーシエは首を横に振った。

「……」。お前達を信じよう。最長老はこのつり橋を渡った先におられる」

そう言つてスピネルはつり橋を渡り、アーシエ達も後に続いた。

その先にはこの里の最長老が座っていた。

最長老はスピネルになにか言われるとアーシエに話しかけた。

「そなたが霸王の末裔か。何の用かな？」

「ええ、この破魔石についての話をお聞きしたいのです」

そう言つてアーシエは「暁の断片」を最長老に渡した。

最長老は「暁の断片」を火にかざししばらく眺め、アーシエに問いかけた。

「そなた、この破魔石を使ったのだな？」

「私ではないのです。私には扱い方がわからずそれで……」

アーシエの答えを聞き、最長老は少し面白そうな声で言った。

「ほう、どう使うか知らんのか。ならばガリフと同じよの」

「え？」

最長老は自分が若い頃に聞いた口伝を語り始めた。

「往古。ガリフは神々より破魔石を賜った。しかしガリフには破魔石を扱えんのでう。神々はガリフに失望して石を取り上げ……今度は人間の王ヒュムに授けた。王は破魔石の力で乱世を平らげ、霸王と呼ばれた。奇態なことよ。霸王レイスウオールの血を引くそなたが破魔石を扱えぬとは」

「待つてください！では、あなた方は破魔石の使い方を……」

「まことにお恥ずかしい。せつかく霸王の末裔にお会いできたというに……何ひとつ教えられん」

そう言つて最長老は【暁の断片】をアーシエに返し、最長老は言葉が続けた。

「もっとも使い方がわかったとてどうにもならんよ。その石は長年蓄えたミストを放ち、力を失つてる。再び使えるようになるのはそなたの孫子の代かのう」

【暁の断片】は帝国に対しての力にはならない。

そんな思いがアーシエの心に浮かぶ。

「力の失せた、うつろなる石……飢えておるな。空しさを満たそうとあらゆる力を求めておる。人の力、魔の力……良き力、悪しき力。破魔石を求める者は破魔石に求めら

れる者でもある」

最長老は火を見つめながらそう言うど優しい声で

「口伝を語るのはこの辺にしてそなたらを歓迎する宴を開くでしょう」

仮面をつけているので分からないが多分最長老は笑みを浮かべていた。

その様子を見てセアは100年前と変わらないなど呆れてるのか感心してるのかわからない目で最長老を見ていた。

第二十九話 宴

最長老の意向でセア達を歓迎する宴が開かれた。

「ほう、数日前に宴を開いたのにまたか」

ガリフの長老の一人がそう言い、その長老にセアは問いかけた。

「数日前に誰か来たのですか？」

「ああ、ヒュムが来たぞ。お前さんらよりは小さかったが」

「その人はまだいますか？」

「ガリフの戦士と共にオズモーネへ行ったが直ぐに戻ってくるじやろう」

ガリフの長老はそう言うと思ひ出してように自己紹介をする。

「自己紹介が遅れたな。ワシの名はヤザルじゃ。でお前さんの名前は？」

「セアです」

「ではセアよ。スピネルを知っておるか？」

「戦士長のひとですよね」

「ああ」

そういうとヤザルは自分の服から木片を取り出した。

「少し頼まれてくれんか？　これをスピネルに渡して欲しい」
「それは？」

「ジャヤの木片つというお守りみたいなものじゃ。風水士のユクギルから預かってたのじゃが渡すのを忘れてての」

「……ご自分でスピネルさんに渡せばいいのでは？」

「また忘れそうじゃ」

おいおいと思いつながらセアはジャヤの木片を受け取った。

そしてパンネロの踊りを見ながら酒を飲んでるスピネルに肩をたたいた。

「なんだ？」

「これ。ヤザルっていう長老さんから」

そう言つてセアはスピネルにジャヤの木片を渡す。

「これはジャヤの木片？」

スピネルは手に取つたジャヤの木片を見ながらそう呟く。

「ありがとう」

「どういたしまして」

そんなやり取りをしてパンネロの方を見ると彼女が固まっていた。

なにがあつたんだろうかとセアが周りを見ると直ぐに原因が分かった。

だって酒を飲んでるガリフ達に混ざってラーサーが座ってたんだから。おもわずセアはラーサーに近づき話しかける。

「ラーサー……」

「あ。お久しぶりですセアさん」

「なんで君がここにいるんだ？」

「破魔石の話聞きに来たんです」

「最長老に？」

「……僕は会えませんでしたけど」

「それでなんとか会おうとここにいたのか」

「いえ、ここに来たのはついでなんです」

「ついで？」

「ええ、ここから東にあるブルオミシエイスへ行く予定なんです」

「ブルオミシエイス？ たしかキルティア教の聖地だったよな？」

「ええ、そこに行つてオンドール候の動きを止めないとロザリアが動きかねない状況なんです」

「なるほど大僧正に協力して両国の動きをどうにかしようつて魂胆か」

キルティア教はイヴァリース全域とまではいかないがかなりの範囲で信仰されてい

る。

旧ダルマスカは勿論。ビュエルバ・アルケイディアもキルティア教圏国だ。

ロザリアも東部ではキルティア教が信仰されている。

そのキルティア教のトップ大僧正を味方につければそれなりの力になる。

「お見通しなんですネ」

「まあな」

「そういえばなんでセアさん達はガリフの里に来たんですか？」

「・・・俺達は王女様に付いてきたんだよ。な、パンネロ？」

「あ、はい」

固まっていたパンネロは軽く体を動かし、頷いた。

「アーシエさんも一緒なんですか？」

「ああ」

「てつきりセアさんと一緒に旅行でもされているのかと・・・」

「まあ、あまり間違つては無いか」

「どういう意味ですか？」

「・・・さつき破魔石の話聞いたんだがあまりいい話じゃなくなてな。王女様は落ち込んで宿舎に今いるんだけどヴァンは気にせず宴の料理食い散らかしてるし、空族達と俺は

酒を飲みまくっている」

「そうですか……」

ラーサーは呆れたような顔でセアを見た。

セアは軽く笑い、話題を変える。

「ところでさ……王女様をブルオミシエイスに行かないか誘ってみたらいかがい？」

「アルケイディアとロザリアが戦争をするなら戦場はダルマスカだろ？　なら王女様も

協力してくれるんじゃないか？」

「……そうかもしれないですね」

ラーサーは少し考え、そう言つて頷いた。

セアは内心で笑みを浮かべた。

はつきりいうとさつきまでセアはこれからどうしろと？　という思いに囚われていた。

少なくとも帝国の意図がわかるまではこの話に関わると決めていたのに初っ端から

暗礁に乗り上げた。

ラーサーを使う事で別に目的を持てばあの王女も動くだろうとセアは考えたのだ。

セアはその場から立ち、違う集まりで料理を食い荒らしてるヴァンを目掛けて酒瓶を投げた。

ヴァンは飛んできた酒瓶を掴み、セアの方に向く。

「なんだよセア？」

「王女様を呼んできてくれ馬鹿弟子。ラーサーが王女様と話したいらしい」

「ラーサーがここに來てるのか？」

「話し合うのは明日にしろ。国家間の争いごとに知識が無いだろお前は」

「・・・うん」

そう言つてヴァンは宿舎の方に走つていった。

セアはラーサーの方に振り返る。

「ヴァンに王女様を呼びに行かせたから」

「・・・呼び方が酷くないですか？」

「ヴァンは俺の弟子だぞ？ あれ位どうつてことないよ」

笑みを浮かべながらのセアの回答を聞きラーサーは頭を抑えた。

しばらくして・・・

「ブルオミシエイスへ？」

ラーサーからブルオミシエイスに行かないかと聞かれ、アーシエが疑問の声をあげる。

「明日にでも発ちましょう。大戦を防ぐためにあなたの力を貸してください」

「大戦……?」

アーシエは事情を知らないと思い、状況を説明する。

「オンドール侯爵がわが国に対抗する反乱軍……あ、失礼。解放軍を組織しているのはご存知ですよ。でも今あの人が行動を起こすとまずいんです。……ロザリア帝国が動きます。ロザリアは解放軍への協力を大義名分に我が国に宣戦布告し……ふたつの帝国が激突する大戦になります」

二大帝国は互いに強大な国力・軍事力があり、実力はほぼ互角。

もし戦端が開かれれば凄まじい長期戦になりイヴァリースは治安は低下の一途を辿る。

そのことを知ってかしらさかアーシエの顔が少し曇る。

「ですからブルオミシエイスに行きましょう。大僧正アナスタシスげいか下が承認して下さいば……あなたは正式に王位を継ぎ、ダルマスカ王国の復活を宣言できます。女王として帝国とダルマスカの友好を訴え……オンドール侯爵を止めて下さい」

ラーサーの言葉を聞きアーシエ顔に怒りが浮かぶ。

「……友好?!」

その言葉には憎しみが混ざっていた。

「勝手なことを！ そちらから攻めてきてなにもかも奪って、それを水に流せとでも！」
アーシエは怒りを含んだ声でそう叫んだ。

だがラーサーも必死に反論する。

「戦場になるのはダルマスカなんです！ ラバナスタを第2のナブデイスにしたいんですか！ 兄は破魔石を持っているんです！」

ラーサーの反論を聞き、アーシエは黙り込んでしまった。

確かにこのままではダルマスカ王国再興の前にダルマスカ地方そのものがイヴァリースの地図から消えてしまうかもしれない。

「すみません。凶々しい話です。血が流れない方法を他に思いつけなくて……信用できないのであれば僕を人質にしてください」

ラーサーが申し訳なさそうにそう言う。

大戦を止める為とはいえ、耐え難いことを頼んでいるのにラーサーは自覚があったためである。

一方そのころセアはというと……

「そなた……昔どこかで会わなかったか？」

「いえ、そんな筈はないと思いますが……」

「勘違いか？」

「そうではないでしょうか？最長老さん」

「うん？そういうえばまだ名乗ってなかったな」

「あ、そういうえばそうですね」

「名はウバルⅡカという」

「・・・へえ、・・・そうですか」

セアは1000年位前に共に戦ったガリフ族の戦士のことを思い出した。

当時20歳くらいだった戦士の名前はウバルⅡカである。

予期せず1000年位前の知人と会ってしまったセアは表情に出さなかったが凄まじく動揺していた。

そんなことがあったためセアは宴が終わると直ぐに寝てしまった。

第二十九・五話 夜の里にて

ケルオン大陸バンクル地方ガリフの地ジャハラにて。

宴も終わり夜の帳があたりを支配しているとき、アーシエはラーサーとの会話のことを思い出していた。

確かにラーサーの言うとおりのままの状況が続けば解放軍とアルケイディア軍が戦端を開く。

そしてロザリア帝国は解放軍への協力を大義名分にアルケイディア帝国に宣戦布告する。

そうなれば主戦場となるのは二大帝国の狭間に位置するダルマスカだ。

更に帝国は2個も破魔石を持っている。

〔夜光の破片〕2年前に使われているが〔黄昏の破片〕がまだある。

となればダルマスカが第2のナブデイスになるのは避けられない。

だから私がダルマスカ王国の復活を宣言し、帝国との友好を訴え、解放軍を思いとどまらせる。

そうすればダルマスカは戦禍から逃れる事ができる。

そう、頭ではわかつている。だが・・・

死んでいった者達に誓った復讐を成し遂げることは出来ない。

この前ラバナスタで復讐を改めて誓ったばかりだというのに・・・

そんな事を思いながらアーシエは里を歩いていった。

すると目の前に最愛の夫の姿が見えた。

「ラスラ・・・」

アーシエはラスラの幻影の方に走る。

すると

「あの人が見えたのか？王墓の時みたいに」

ヴァンに声をかけられた。

アーシエは少し驚いた。

「やはり、あなたにも・・・でも、どうして」

「変だよな。オレ、アーシエの顔だって知らなかったぐらいで・・・王子のことなんてな

にもわからないのにさ」

ヴァンは橋から水面を見ながら自分の考えを言う。

「もしかしたらオレが見たのは兄さんだったのかもかもしれない」

「バッシユから聞いたわ」

「降伏間際に志願したんだ。馬鹿だよ。負けるってわかってたのに」
「守ろうとしたのよ」

「死んで何が守られたっていうんだ。お前は納得できたのかよ。王子が死んだ時」

ヴァンの言葉にアーシエは思わず顔を背けた。

その様子を見てヴァンはまた喋りだす。

「帝国が憎いとか、復讐してやるとか・・・怨みばかりふくらんで・・・けどその先は全然。どうせなんにもできやしないって気がついて空しくなって。その度に兄さんのことを思い出して・・・。オレそういうの忘れたくてとりあえず【空賊になりたい】とか・・・景気のいいこと言ってたんだろいな」

ヴァンはそう言うとき少し間をおいて

「兄さんの死から・・・逃げたかったんだ。アーシエについてここまで来たのもきつと逃げたいからなんだ」

ヴァンは幼い頃に両親を流行り病で亡くした。

だから兄のレックスはヴァンにとって親のような存在でもあった。

レックスが軍に志願したときヴァンは必死にレックスを止めた。

でも国のためだと言われ渋々認めてしまった。

それでダルマス力を守れたなら、いや国のために戦って死ねたならここまで兄の死に

囚われなかっただろう。

実際には違うが反逆者バツシユの仲間として扱われ、帝国に拷問され、廃人のようになつて帰つてきた。

そして一年後・・・レックスは亡くなった。

ヴァンはその理不尽から逃げたかったのだ。

レックスが死んで数日後に東ダルマスカ砂漠に魔物狩りに行ったのも無力な自分が許せなかったからだ。

「でも、もうやめる。逃げるのはやめる。ちゃんと目標みつきたいんだ。オレの未来をどうするかその答え。アーシエと行けばみつかると思う」

「みつかるかな・・・」

「みつけるよ」

そう言う二人は夜空を眺めた。

ヴァンは過去を受け入れ、前に進もうと決めた。

アーシエは過去だけを見ずに未来もみようと考えた。

第三十話 東の聖地へ

翌朝。ガリフの地ジャハラの入りにて。

「共に行きます。ブルオミシエイスへ」

アーシエはラーサーにそう言った。

「そう言っていただけだと信じてました」

「まだ心を決めたわけではないのです。向かう間に答えをみつけます」

「会ってほしい人がいます。ブルオミシエイスで落ちあうことになっているんです」

「誰です？」

「敵ですが味方ですよ。あとは会ってからの楽しみです」

ラーサーは軽く微笑んで、外に出て行った。

その会話を見ていてヴァンがアーシエに話しかける。

「ああいうところあるんだよな」

「悪気はないのでしょうかね」

「いやつだよ。帝国なのにさ」

ヴァンとアーシエはそう言ってラーサーの後に続いた。

後ろにいたパンネロも後に続く。

それを少し離れたところから見ていたバツシユが呟く。

「神都ブルオミシエイスはヤクト・ラムーダの北部だ。ヤクトに入れば飛空艇による追撃は避けられるか」

「望み薄だな」

バツシユの呟きを聞いていたバルフレアが自分の考えを述べる。

「リヴァイアサンはヤクト・エンサを飛び越え直接レイスウオールの墓に乗りつけた。ヤクトでも飛べる新型飛空石・・・可能にしたのはどうせ破魔石だ。つたく奴らが必死に狙うわけだよ」

「それではきみこそ何が狙いだ？ 同道してくれるのは心強いが」

バツシユはバルフレアに疑問をぶつける。

少なくともバルフレアは今まで自分の利益にならないことはしなかった。

アーシエを攫い、レイスウオール王墓に連れて行ったのも霸王の遺産狙いだったし、ガリフの里に案内したのも指輪を貰ったからだ。

「破魔石を奪うつもりじゃないかって？」

バルフレアはバツシユに言葉の続きを予想してそう言った。

「まあ仕事柄疑われるのは慣れてるが今そんな気は欠片もない。なんなら剣にでも誓お

うか？」

「……すまん。殿下はきみを頼っている。真意を知っておきたかった。きみが石にこだわっているように見えてな」

「物語の謎を追う……主人公なら誰でもそうだろう」

そう言つてバルフレアは近くにいたフランと共に里の入り口の方に歩いていった。

「苦勞が耐えませぬ」

「君か」

バツシユ後ろに振り返り、声の主に問いかける。

「きみはヴァン達がブルオミシエイスマで行くのを止めないのか？」

「いや、今回の一件はとことん関わると決めたので」

セアの返答を聞きバツシユは顔を顰める。

「まあ、俺もバルフレアと同じく破魔石を奪う気はないんで気にしないでいいですよ」

セアは顔に笑みを浮かべバルフレアの後に続いた。

アルケイディア帝国帝都アルケイデイスにて。

皇帝宮の廊下をふたりのジャッジマスターが歩いていった。

「元老院がなにを企もうとヴェイン殿の失脚などありえん。参謀本部を始め軍部はヴェ

イン殿支持だからな。あのお方こそ帝国の敵を討ち滅ぼす剣だ」

歩いているジャツジマスターが隣を歩いているジャツジマスターに話しかけるが彼は無視して歩き続ける。

すると後ろの方から声が聞こえてきた。

「卿は2年前のゼクトに似ているな」

その言葉を聞き2人のジャツジマスターは声が聞こえたほうに振り返る。

そこには唯一の女性ジャツジマスター・ドレイスがいた。

「ヴェイン殿を信じて従った彼がどうなった？ ナブデイスで消息不明ではないか」

「ジャツジ・ゼクトへの愚弄は許さん」

2年前のゼクトに似ているとドレイスに言われたジャツジマスター・ベルガは反論する。

自分が馬鹿にされるならばまだ我慢できるがジャツジの模範と言われたゼクトへの愚弄は黙って見ていることはできない。

「彼はまことの武人だった。その彼が信じたヴェイン殿を疑うというのか」

「かつて実の兄君らを斬った男だ。人とは思えん。非情に過ぎる」

「非情だと？ 大いにけっこう！ たとえ肉親であろうと反逆者は容赦なく討つ。帝国の背負う者のあるべき姿ではないか」

そう言つてベルガは奥の方に歩いていった。

「おめでたい男だ」

ドレイスは俯きながらそう呟いた。

そして残つているジャツジマスターに話しかける。

「ザルガバース……まさか卿も信じているのか？あのおふたりが反逆など！」

「それがグラミス陛下の結論だ。口を慎めドレイス。あの事件はとうに終わった」

「ご一同召集令です」

反対方向から歩いてきたガブラスがそう言つた。

「事故死」したギースを除けば対ロザリア最前線にいるジャツジマスターがここに集つたことになる。

「ヴェイン殿がご到着なさいました」

「承つた」

ベルガはそう言い、ザルガバースと共に奥へ進んでいった。

ドレイスはガブラスに話しかける。

「ラーサー様はブルオミシエイスへ向かわれた。大僧正に働きかけて反乱軍の動きを封じるおつもりだ。オンドールが諦めるとは思えんが……反乱軍の行動が多少なりとも鈍ればよい。これでロザリアの侵攻も遅れ……わが国が備えを固める時間を貸せげる」

「グラミス陛下の狙い通りか」

ジャツジは帝国の法と秩序の番人であるがソリドル家の親衛隊という面も持ち合わせている。

必然的にジャツジが支持するのはソリドル家の者が多くなるが誰を支持するかは様々である。

例えばベルガはヴェイン派であるがガブラス・ドレイスはグラミス派である。

そしてロザリアの侵攻が予想されている今は穏健派のグラミスを支持する者の肩身が狭い。

「ともあれ頼もしい成長ぶりではないか。元老院の能無しが驚く顔が目につかぶ。あの老人ども・・・幼い皇帝を影からあやつる気だろうか・・・ラーサー様は人形で終わるお方ではない」

「そうだ元老院が望んでいるのは人形の皇帝だ。元老院がヴェイン殿の才能をどれほど憎んでいるか思い出せ。ラーサー殿が自分達の思い通りにならんと知れば・・・元老院は掌を返して潰しにかかる」

ガブラスの懸念を聞いたドレイスは元老院ならやりかねないと思った。

「まずいな。陛下にも報告しておく。ガブラス・・・卿と私でラーサー様を守り抜く。いいいな」

ドレイスの言葉にガブラスは頷き、ベルガ達の後に続いた。

同時刻ケルオン大陸バングール地方オズモーネ平原東端にて。

森の入り口でバツシユはアーシエに話しかけた。

「ダルマスカと帝国の友好……ですか」

「頭ではわかっているの。今のところ大戦を防げる唯一の手段だわ。でも私に力があればそんな屈辱……!」

アーシエは自分の無力さを憎みながら拳を握る。

アーシエは王国再興が目的であるが例え今回の方法で王国が復活したとしても形だけである。

ウオースラが選んだ帝国の属国として復活するのとあまり差がない。

結局帝国にとって余計な真似をすればまた圧倒的軍事力で滅ぼされることになる。

「我々にとつては恥でしょう。しかし民は救われます」

バツシユの言うとおりアーシエ達が恥をかければ民は救われる。

もしこのまま状況が悪化すればダルマスカは二大帝国の戦争の激戦地になるだろう。

更にアルケイディアはまだ魔力が残っているであろう【黄昏の破片】がある。

それを使えばダルマスカ地方ごとロザリア軍を粉碎する可能性すらある。

それはアーシエも分かっているが心情的に納得できない。

「あなたは受け入れられるの？」

「私はヴェインに利用されて名誉を失いましたが・・・今なお騎士の誓いを忘れてはおりません。人々を戦乱から守れるのであれば・・・どのような恥であろうと甘んじて背負います。国を守れなかつたその恥に比べれば・・・」

「・・・みんな帝国をにくんでいるわ。受け入れるはずがない」

「希望はありません」

そう言つてバツシユはヴァン達の方を見る。

「あのように手を取り合う未来もありえましよう」

ヴァンとパンネロとラーサーが楽しく会話している光景がアーシエの目に映つた。

確かにそんな未来もあるかもしれないとアーシエは思う事にした。

アーシエ達の会話を聞いていたセアは心にある思いが浮かんでいた。

(こんなことならウォースラの提案を受け入れていけばよかつただろうに・・・)

第三十一話 愚問

ケルオン大陸ヤクト・デイフオールのゴルモア大森林にて。

古代の形のまま残る森を東へと進んでいたヴァンたちだったが結界に通行を阻まれていた。

「なんだこれ・・・?」

ヴァンが結界を見ながら言う。

「ゴルモアの森が拒んでるのよ」

「私達を?」

「私を・・・かしらね」

フランはそう言つて結界と反対の方に歩いていった。

「何それ。ていうかどうすんだよアレ」

「少し黙れ馬鹿弟子」

「なんでだよセ・・・ガッツツツ!」

「まったくこの馬鹿弟子が・・・」

セアはそう言いながらヴァンの首を掴んで黙らせた。

すると反対方向に歩いていくフランにバルフレアが声をかけた。

「寄ってくんだな」

「ええ」

「過去は捨てたんじゃないのか」

「他に方法がないから。あなたのためでもあるのよ」

「ん？」

「焦っているでしょう。破魔石がそうさせているの？」

フランの言葉にバルフレアの顔が僅かに動く。

「あなた意外に顔に出るのよ」

フランはそう言って魔法を崖にかけ始める。

バルフレアはその様子を見てため息をついた。

そこに遅れてきたセア達も来る。

セアはヴァンを掴むのを止めるとヴァンは息を整え、フランに問いかけた。

「つまり・・・どういうこと？」

「(こう)いうことよ」

フランが魔法をかえおえると崖に道が出来た。

「この森に暮らすヴィエラの力を借りるわ」

その言葉を聞き、パンネロがフランに聞く。

「もしかしてここってフランの……?」

「……今の私は招かれざる客よ」

「招かれざる客なのは俺達もだろ?」

フランの言葉を聞き、セアが話し出す。

「ヴィエラ族は俗世間を好まず、外界との接触を拒むように暮らしており、同種族間でも必要以上の連絡はとらない。それはヴィエラたちが精霊の声を聞くことによつて、森で起きている出来事を把握できるからでもある。イヴァリースの歴史においてヴィエラ族が表に出ることは少なく、森での風習や種族の掟など一般に知られていないことが多い。」つて昔なんかの本で読んだ。もし俺の記憶が正しければ俗世と関わったフランに限らず俺達も招かれざる客だ」

「ヴィエラつてよく街で見かけるけど?」

ヴァンはラバンスタでよくヴィエラを見かけるのでそんなに閉鎖的な生活をしてい
るとは思えなかった。

するとセアが少し呆れた顔で言う。

「はつきり言つて亜人種がごちゃ混ぜで住んでるラバナスタなんかイヴァリース全体で見ればかなり特異な街だぞ」

「え？」

ヴァンは驚き、セアや他の皆は頭を抱えなくなった。

ケルオン大陸ヤクト・デIFOールのエルトの里にて。

里の入り口でフランはヴァンに話しかけた。

「この先の里にミュリンという子がいるは呼んできて。私が行かなくてもミュリンならわかってくれるから」

ヴァンは軽く頷いた。

するとセアが森の入り口辺りで座って言った。

「じゃあ俺もフランと一緒にここで待ってるからさ」

「なんでだ？」

「いや、なんというか苦手なんだ。森の掟を守って暮らすヴィナ・ヴィエラは」

森で暮らすヴィエラをヴィナ・ヴィエラ。俗世に関わって生きるヴィエラをラヴァ・

ヴィエラということがある。

主に精霊の声が聞こえるかどうかの差といってよい。

身体的な差としてはヴィナは耳が真っ白だがラヴァは黒いものが混ざってる。

だがバルフレア質問を続ける。

「なんで苦手なんだ？」

「・・・ちよつとトラウマがあるんだよ」

セアの返答を聞き、バルフレアは軽くフランに目線を送り里の中に入っていった。しばらくするとフランがセアに話しかけた。

「どうして一緒に行かなかったの？」

「バルフレアに答えたの聞いてたよね？」

「あなた周りのミストがおかしいのがばれるから？」

フランの言葉を聞き、セアは顔を顰めた。

「・・・ばれてたのか」

「自覚があつたのか？」

「ああ、前に他のヴェイエラから言われたことが・・・」

そこまで言うときセアは笑みを浮かべ笑った。

そして少し真剣な声でフランに話しかけた。

「里に入ればどうだ？」

「何故？」

「疎遠でも家族はいるんだろ？会ってくればいい」

「でも・・・」

「……俺にはもう帰る故郷も迎えてくれる家族もないんだ」

どこか暗い目でセアは空を見上げながらそう言った。

フランは少し迷っていたがやがて里の中に入っていた。

「はあ、やれやれ」

そう言つてセアは寝転んで里の風景を眺めていた。

「妙なものだな。かつて霸王に全てを奪われ、今は霸王の子孫に手を貸しているとは……

これが運命とでもいうやつか」

セアは誰に言うでもなく、そう呟いた。

セアが里の入り口で寝転がっているとヴァンたちが里から出てきた。

バルフレアにセアは話しかけた。

「どうだった?」

「ああ、ヴァンが上手い事里の長から情報を引き出してくれたぜ」

バルフレアの返答を聞きセアは意外そうな顔をした。

弟子のヴァンは交渉事にはとても弱いはずだ。

なのにどうやって情報を引き出したんだ?

「やるじゃないか。あんなのから情報を引き出すとはね」

バルフレアはヴァンを珍しく褒めた。

ただヴァンはなにか納得いかないのか腕を組む。

「さて、人間の穴とか言ってたが」

「バンクール地方のヘネ魔石鉱でしよう」

ラーサーが自分の推測を述べる。

「オズモーネ平原の南ですね。あの一帯は我が国の植民地なんです。．．．軍もいるでしょう」

ヴァンが里の長から引き出した情報は正確には「ミュリンは森を出て西に向かい、鉄くろがねをまとう人間ヒュムどもの窖あなぐらをさまよっている」である。

おそらくだが鉄をまつう人間とは帝国兵のことで帝国兵がいる西の窖はヘネ魔石鉱が思いつく。

バンクール地方はロザリアとアルケイディアが互いに手を出さないということで一応数百年間戦乱から逃れている。

だがロザリアでマルガラス家が帝位に返り咲いた時にアルケイディアがバンクール地方南東部を植民地にすることを認めさせた。

ロザリアは政変直後であつたためアルケイディアとの戦争を避けたかつた為、渋々認めることになった。

「それがどうした？行くぞヴァン」

そう言つてバルフレアは里から出ようとしたがヴァンが呼び止めた。

「あのさ」

「うん？」

「さつきほらヨーテが言つてたろ。その50年前がどうか・・・つて」

「それで？」

フランの問いにヴァンが少し悩みながら質問した。

「フランつて何歳？」

空気が凍つて、沈黙が場を支配した。

セアは噴出しそうになつたがなんとか堪えた。

あまりにも静かな為、小鳥の鳴き声やあまり会話をしないヴェイエラ達の話し声まで聞こえる。

フランは恥ずかしくなつたのか質問に答えず里から出て行き、バルフレアは声を出さずに「馬鹿」と口を動かしてフランの後に続く。

他のみんなはというと

「はあ・・・」

「・・・」

アーシエはため息をつき、バツシユは無言で通り過ぎ、

「失礼ですよ」

「ほんと子供なんだから」

ラーサーとパンネロはヴァンを非難する言葉を言つて里から出て行つた。

セアはその光景をみてヴァンの腕を掴み

「少しは常識というものを覚えろ！馬鹿弟子!!」

と言つてヴァンを爆笑しながら里から出口にひきずつていく。

ヴァンは女性に年齢を聞くのはちよつと失礼だと知つてはいたがここまで周りからここまで罵倒されるとは思わなかつたのである。

だが、それでも聞いてしまうあたりがヴァンらしいところである。

だからつい不満そうな声で一言呟いた。

「納得いかないって……」

第三十二話 ヘネ魔石鋏

バンクール地方オズモーネ平原南東にて。

全員が驚きの表情を浮かべた。

ヘネ魔石鋏の入り口にたくさん帝国兵が倒れていたのだ。

そして研究者のような装いをしたものたちも倒れている。

「ドラクロアの研究員です。どうしてこんな場所に……」

「どうせろくでもない研究さ」

ラーサーの疑問にバルフレアはそんな言葉を返した。

「なんか面倒なことがおきてるみたいだな」

「それってまずいよな？」

「まあな。が、悪い事だけじゃねえさ」

「なんかいいことあるのか？」

「例えば見張りの帝国兵が気絶してるんだから堂々と魔石鋏に入れるぞ」

セアの言葉を聞いて全員が魔石鋏の穴へと入っていった。

へネ魔石鉱に入ると所々で帝国兵が気絶していた。進んでいくと通路で扉が閉まっていた。

説明書を読む限り隣のボタンを押すと開くらしい。

「なに・・・をし・・・って・・・いる・・・そこを・・・あげ・・・だら・・・デ・・・リー・・・げ！」

重症で横になつている帝国兵がそう言った。

だが意味が分からなかったのでヴァンがボタンを押した・・・

因みに帝国兵の怪我で内容が分かりにくい言葉を補完すると次の通りである。

「なにをしてる！そこを開けたらゼリーがっ!!」

つまり不用意に扉を開けてしまったため液状の魔物ゼリーの大群が溢れてきたわけである。

ゼリーの大群はヴァンに忠告した帝国兵に留めを刺すとヴァン達に襲い掛かっていた。

「俺のせいじゃないぞ!!」

ヴァンはゼリーの一体に向けて剣を振りながらそう叫んでいた。

文句を言いながらもゼリーに遅れをとっていないあたりセアの特訓の凄さを物語っている。

バッシュはゼリーの大群に全く動じずゼリー片っ端から切り飛ばしていく。

バルフレアとフランも空賊だからこのようなことは慣れっこみたいで冷静に対処していた。

アーシエやパンネロは他の4人に比べるとややぎこちないもののちゃんと戦えていた。

セアも近くにいたゼリーを剣で真つ二つに切った。

が、開いた扉から次々とゼリーが溢れてきてきりが無い。

ゼリーに限らずスライム系の魔物は増えやすいことで有名なのである。

何故ならスライム系の魔物は自分の命が尽きかけると分裂していくのである。

因みにこの特性を利用して頭部からカaramelがとれるスライム系の魔物プリンを痛めつけ、大量のプリンを養殖されている。

更はそのカaramelを使った魔物プリンを模したデザート「プリン」がイヴァリース中で大流行している。

ゼリーのあまりの多さにイラツとしたセアは「ファイガ」の詠唱をし、ヴァンの方に向けて放った。

ヴァンは「ファイガ」を紙一重で避け、「ファイガ」はゼリーの大群へと襲い掛かった。

ゼリーは火に弱いためあつという間に全滅した。

「危ないじゃないかセア！」

「ちやんと避けられるように加減したから別にいいだろ？」

「だからつてもつと余裕を……」

「まあ今回は無事だったんだからいいじゃないか！」

ヴァンの文句をセアは華麗にあしらっていた。

暫くヴァンは機嫌を悪かったが今度「プリン」を奢ってやるとセアに言われヴァンは機嫌がよくなった。

かなり進んでと魔石鉱の奥の採掘部についた。

あちこちに魔石が埋まっている。

そしてルース魔石鉱と同じように埋まっている魔石が光を放ち、なんだか神秘的である。

「この魔石、ルース魔石鉱のものとよく似ています。ドラクロアは新たな魔石鉱を探しているんでしょうね。解放軍が動けばビュエルバ産の上質な魔石を輸入できなくなりますから」

「確かにな……。それでビュエルバが駄目なら植民地からつてか？」

「そういうことになりますね」

「まあ、俺がこの光を見て思い出すのはお前が緑のバンガに人造破魔石を投げて走って

逃げたことだな」

「セアさん……」

「もうそのことはラーサーが謝ったじゃないかセア」

「あのな馬鹿弟子……俺はなラーサーをからかって楽しんでるだけなんだよ」

「ひでえ！」

「酷いですよ。セアさん!!!」

「あーなんだ、そのー、とりあえず三人とも落ち着け」

ヴァン・パンネロ・ラーサー相手に反論できずにセアは最終的に土下座した。

その光景を見ていたバルフレアは

「ガキの相手は大変だな」

と小さく呟っていた。

ふと横をみると相棒の様子がおかしい。

「どうした？」

「あの子なの？ でも、このミストは……」

フランはなにか認めたくないという風になっていたが、「あの子」がフランの視界に入
た。

そしてフランは「あの子」の名前を叫んだ。

「ミュリン！」

フランの目線の先には一人のヴェイエラがいた。

足取りがおかしく、目の焦点があっていない。

「人間の^{ヒュム}におい。力の^{ヒュム}におい」

そんなことを呟きながらミュリンは歩いていた。

「どうしたの？」

アーシエはフランに聞いた。

だがフランから返事は無く、代わりにミュリンがアーシエを睨みつけ、指をさし……

「寄るな！ 力に飢えた人間^{ヒュム}が！」

そう叫ぶとミュリンはフラフラに走りながら魔石鉱の奥へと入っていった。

第三十三話 影

この世には、人智の思い及ばない「何か」が存在しているのだろうか？

人はそれを神と呼び崇め、或いは悪魔と呼び恐れているのではないだろうか？

諭えるならば地上に樂園を築き、数多の竜を支配下においた神々が存在したとして、或いは異界の魔物を率い、地上を地獄に変えた悪魔が存在したとして、

神々や悪魔といった存在が私の前に現れたならばどちらであつても私が感じる感情は同じだろう。

そしてその感情とはおそらく恐怖であると私は考える。

なぜなら神や悪魔といった人智を超えた存在は人間には「理解できない」からだ。

人は理解出来ないものをなにより恐れる。

だから我等は相手が普通の存在なら知ろうとし、或いは力でその存在を排除しようとする。

しかし、人智を越えた存在を人智で測れることなどできず、

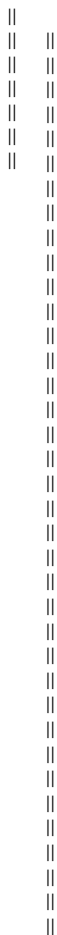
また、力も相手の方が強いので排除することもできはしない。

その為、その存在を無理やり人智に当てはめた結果、その存在を神や悪魔と人は呼ぶ

のである。

抜粋〈

〈神学者シエカバの論文より



ミュリンを追いかけていくと開けた場所に出た。
そこにはそれなりに大きい竜がいた。

かつて西ダルマスカ砂漠で倒した上級地竜よりやや小さいから中級だろうか。だが、首や手足に輪っかがついていているところを見ると邪竜種だろう。

イヴァリースにおいて竜は強力な存在だ。

その竜の中でも邪竜種はもつとも強力な存在だ。

かなり大雑把ではあるが上級地竜が下級邪竜よりやや強い程度で、中級邪竜だとやや劣り、上級邪竜になると比べることすら馬鹿々々しいといったレベルなのだ。

無論、「伝説の八竜」や【世界最強の魔物】の異名を持つパイルラスタなどと言った伝説クラスの上級地竜ならば上級邪竜にも劣らないのだが。

そんな邪竜種の竜ティアマットに向かってミュリンは近づいていく……。

「あぶないッ!!」

ヴァンが叫びティアマットに近づいたが、ティマットの前足で蹴飛ばされそうになり咄嗟に回避する。

が、体勢が崩れヴァンは転んでしまった。

ヴァンが転んだ事を確認するとティアマットはミュリンの方に近づいていく。仕方が無いかとセアがティアマットに斬りかかろうとしたその時だった。

「「「「えっ?」」」」

ヴァンを除く全員が目の中の光景に驚いた。

なんとティアマットがミュリンに向かって跪ひざまずいたのだ。

ミュリンはティアマットが跪いたのを確認するとふらふらと奥の方へ歩いていった。

「ミュリン!!」

フランがミュリンに近づこうとするとティアマットがフランに近づき噛み付こうとする。

その様子を見たバルフレアが銃をティアマットに向けて撃った。

弾はティアマットにあたり、ティアマットはバルフレアの方に顔を向ける。

バツシユはティアマットに遠隔攻撃で牽制し、ラーサーとアーシエとパンネロを後方へと下がらせる。

ティアマットはバツシユの遠隔攻撃を受けながら「エアロ」の魔法を唱え、バツシユに向かって風の弾が襲い掛かる。

邪竜種が竜の中で最強と呼ばれる理由は幾つかあるがその中のひとつが魔法が使えらることだ。

バツシユは風に軽く吹き飛ばされたものの受身をとって然程ダメージはなかった。

ティアマットが魔法を使った隙を突きヴァンが足元を斬りつけた。

ティアマットはヴァンを蹴り飛ばし、炎を吐くブレスを気絶したヴァンに向けて放つ。

ブレスの炎がヴァンに当たる前にセアがヴァンの右手を掴んで避け、レーザー達の方に走る。

「ヴァンは大丈夫なんですか!？」

「落ち着けパンネロ。気を失ってるだけだ。ヴァンの治療を頼む」

「任せてください!」

そう言つてレーザーはハイポーションの入ったピンをヴァンにふりかけた。

すると傷が無くなり、ヴァンは目を覚ました。

ヴァンは少し呆然としていたが直ぐに正気を取り戻しセアに問いかける。

「あの輪竜どうすんだよ?」

「そうだな・・・とりあえず・・・」

セアはヴァンの耳を掴んで何か吹き込んだ。

少しヴァンの顔が青ざめたがセアは真剣そうな声で

「できるか?」

「もうヤケクソだ! やつてやる!」

「俺はいい弟子を持ったな・・・じゃあいくぞ!」

そしてヴァンとセアはこちらに向かつてきたティアマットに対して左右に分かれて斬りつける。

が、ティアマツトはそれを無視してレーザー達狙って（エアロ）を唱える。

邪竜種には知性があり、それが邪竜種が竜の中で最強と呼ばれる理由のひとつでもある。

その為、後方にいるレーザー達が回復係だと思い先に始末した方がよいと考えたのだ。

（エアロ）の詠唱が終わり、レーザー達目掛けて風の弾が襲った。

そしてその時にセアがヴァンを踏み台にしてティアマツトの背中に乗り、首の部分に剣を突き刺した。

ティアマツトは悲鳴をあげながら暴れ、背中からセアが落ちた。

そして暫くした後ティアマツトは息絶え倒れた。

「おいおい……」

バルフレアはあまりに無茶苦茶な倒し方に呆れてそんな声を出した。

バツシュの方も呆然としている。

レーザーは自分以外の回復係が傷を負っていることに気づき、慌てて回復薬をふりかけていた。

「なんとかなったな……大丈夫か馬鹿弟子？」

「な、なんとか……」

ヴァンは頭を抑えてそう言った。

セアが思いっきりヴァンの頭を踏みつけてティアマトの背中に飛び乗った為、首も痛めている。

とりあえず全員の無事を確認し、中央に集まった。

するとミュリンが奥からこちらに向かつて歩いてきた。

ミュリンは右手からなにかを落とし、それは青く輝き砕けた。

その光景を見てラーサーは顔色を変える。

それは人造破魔石だったのだから。

フランはミュリンに近づこうとしたが、ミュリンの背後にミストから溢れ、そのミストが集まり、不気味な影の形を成した。

その影は白く、目は黄色に光っており、禍々しさを見るものを感じさせる一方で何処か神々しさも感じさせる。

フランはその影に睨まれ、思わず足を止めてしまった。

数秒後、その影はやがてミストを放ちながら消えていき、跡形も無くなった。

そして影が消えたのとほぼ同時にミュリンは気を失い倒れた。

「なんだったんだ。今の・・・？」

ヴァンが少し怯えた声で誰に言うでもなくそう呟いた。

フランは倒れたミュリンを抱き起こした。
するとミュリンは目を開け

「姉さん・・・？」

そう呟くとミュリンはまた気を失った。

第三十四話 姉妹

「森に帝国兵が現れた時も里の仲間は無関心でした。森が荒らされない限り、ヴィエラは外からの何もかもを無視するんです」

そこで一旦言葉を切り、少し不安そうな声で続ける。

「でも私は不安で・・・帝国の狙いを突き止めたくて」

「それでここまで調べに来たらとっつかまったと」

バルフレアの言葉にミュリンは軽く頷いた。

「無鉄砲は姉譲りかねえ」

バルフレアは少しからかうようにそう言った。

だがミュリンはそれにも留めず少し恐がっている声で言う。

「あの人たち、私に【石】を近づけたんです。人体がミストを取り込むとかヴィエラが最適だとか言つて、その【石】の光を見たら、私——」

「リヴァイアサンね」

ミュリンは声を途中で止め、フランの方を見るとフランが後に続いた。

「あの時【暁の断片】が私を狂わしたようにこの子の心を奪ったのは——」

「——人造破魔石」

ラーサーの答えにフランは頷いた。

「パンネロさん。僕が差し上げた石、まだ持ってますか？」

「はい、もちろん」

パンネロがポケットから人造破魔石を取り出すとラーサーは人造破魔石を取り上げた。
た。

手に持った人造破魔石を見つめてみると妖しく、不気味に青く輝いているようにラーサーには見えた。

「僕の想像以上に危険なものでした。あなたに渡すべきではなかった。すみません。こんなものを！」

「私にとってはお守りだったんです。リヴァイアサンでもみんなを守ってくれて」

パンネロを言葉聞いてラーサーの罪悪感が少し減った。

その会話を聞いていてアーシェが自分に言い聞かせるような声で言う。

「危険な力だろうと、支えにはなるのよ」

「——かも知れないけどさ」

ヴァンが少し心配そうな声でそう呟いた。

「まあ、ヴァンの言うことも一理あるな」

セアが少し大きな声で言った。

「どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味だ。あまり危険な力に頼りすぎると大切なものを見失いかねん。案外パンネロみたいに軽い気持ちで持っているのが正解なのかもな」

「・・・」

セアの言葉を最後に軽い沈黙が訪れた。

だが、セアに対し抱いていた疑問を抑えきれずミュリンは話しかけてしまった。

「あの・・・？」

「ん？どうしました？」

「あなたの周りのミストがおかしいのですが何故ですか？」

「・・・そう、だな。昔にミストが視認できるほど濃い場所に行ったことがあってね。そのときミストの嵐に巻き込まれたことがあるからそのせいかな？」

「なんでそれが原因だと思っただ？」

セアの言葉を聞いてバルフレアが問いかける。

確かにそんなことを聞かれてすぐに答えられるような答えではない。

バルフレアの目を見ると疑っていることがはっきりとわかった。

しかしセアが答えた先程の答えは半分以上嘘なのだ。

さてどうしたものかとセアは軽く頭を搔く。

ばれにくい嘘というのは真実を幾らか含むことだ。

「ああ、あれ以来どういうわけか不老になったみたいでな。もう二、三百年前のことだからな」

「「「「「なッ！」「」」」」」

先程セアが言った言葉のうち本当のことを言っているのは

【昔に】【ミストの嵐に巻き込まれた】【あれ以来どういうわけか不老になったみたい】の三つだけである。

が、セアはそのことをおくびにも出さず呟いた。

「まあ、そりゃあ、驚くよな」

その後暫くセアは周りの質問攻めを食らったことは言うまでも無い。

ケルオン大陸ヤクト・デIFOールのエルトの里にて。

里の入り口にセア達を出迎えるように3人のヴィエラがいた。

ヴァン達によると真ん中のヴィエラが里の長ヨーテらしい。

するとヨーテが話しかけてきた。

「森のささやきを聞いた。持っていけ」

するとそのヨーテの左にいたヴィエラが首かざりをヴァンに渡した。

「【レンテの涙】がお前を赦す。森を越えてどこへなりとも行くがいい」

ヴァンはレンテの涙を受け取ると里の出口の方へ下がった。

するとミュリンがヨーテに話しかけた。

「それだけの。森を出て知ったわ。世界は動いている。なのにヴィエラは、何もしいというの」

「人間の世にかかわるのは——ヴィエラの性^{さが}ではない」

「嫌なのよ！ イヴァリースが動こうとしているのに、ヴィエラだけが森にこもっているなんて！ 私だって森を出て、自由に生きたいのよ」

「やめておきなさい」

ミュリンの後方から声が聞こえてきた。

その声の主はフランだった。

「あなたは人間^{ヒューム}に関わらないで。森にとどまり、森とともに生きなさい。それがヴィエラよ」

「でも、姉さんだって——」

「もうヴィエラではなくなったわ。森も里も家族も捨て——自由を手に入れた代わり
に過去から切り離されてしまったの。今の私には森の声も聞こえない」

フランは思わず離してしまっていた目線をミュリンに戻し問いかける。

「ミュリン。あなたもそうなりたい？」

「姉さん——」

「いいえ。あなたの姉はもう、ひとりだけ。私のことは忘れなさい」

ミュリンはなにかフランに言いたそうだったが、何も言わず里の奥へと走っていった。

するとヨーテがフランに話しかける。

「嫌な役をさせたな」

「あの子は掟に反発している。掟を支えて里を導くあなたより——掟を捨てた私が止めたほうがいいわ」

ヨーテは軽く隣にいるヴィエラたちに視線を送った。

それだけでヴィエラたちは察して里の方へと歩いていった。

「頼みがあるの。私の代わりに声を聞いて。——森は私を憎んでいる？」

ヨーテは目を瞑った。

すると周りの木々がざわめいているように感じる。

そしてヨーテの周りを風が舞った。

暫くするとヨーテは目を開け、フランに

「去っていったお前をただ懐かしんでいるだけだ」

「嘘でも嬉しいわ」

そう言つてフランは里の出口の方を向いた。

「気をつけろ。森はお前を奪つた人間ヒュムを憎んでいる」

その言葉を聞いたフランは振り返りヨーテに言った。

「今の私は人間ヒュムと同じよ。そうでしょう?」

ヨーテは肯定も否定しなかったが、フランそれを肯定ととつた。

「——さよなら、姉さん」

フランはそう言つて里から出て行つた。

迷い無く、自由に生きる妹の姿を見て、ヨーテは自分も気づかないほど僅かに微笑んでいた。

第三十五話 暗雲

ケルオン大陸ヤクト・ラムーダのパラミナ大峡谷にて。

ゴルモア大森林を抜けたセア達はヤクト・ラムーダに入った。

このパラミナ大峡谷は雪が年中積もっている極寒の地である。

かなり着込んでいるはずだが、寒さを感じる。

神都のある北東を目指して歩いてしていると南の方から人だかりがきた。

なにやら薄汚い人たちとそれを守るようにキルティア教の印がある服をきた人たちが囲んでいる。

薄汚いのは難民で難民を守っている兵は僧兵団の団員だろう。

難民。それは戦争や疫病で住処を失った人たちの総称である。

恐らく彼らはキルティア教会に保護を求めにくのだろう。

キルティア教会は難民達に援助を行っているというのは有名な話だ。

だが、ダルマスカやナブラディアと言った資金援助をしてくれる国が減び、財政難になっっているらしい。

そして僧兵団とはキルティア教会が保有する軍隊のようなもので主な任務は神都の

治安維持とパラミナ大渓谷にでる凶暴な魔物退治。

修行を終えた敬虔なキルティア教徒ばかりが所属していて、規模は数千名だという。キルティア教の修行は大雑把に言えば以下の3つだ。

断食（1ヶ月何も食べてはいけない。水はOK）

荒行（ふんどしだけ着けた状態で燃え盛る炎の中に突っ込む）

仙修（パラミナ大峽谷を武器・防具禁止で十日間自給自足する）

と、まあこんな修行を終えたキルティア教徒ばかりで編成されているため、たとえ素手の状態でも同じ数で白兵戦なら二大帝国の軍隊の精鋭にも劣らない。

「どこかの侵略国家のせい、ああいう難民が増えるのさ」

バルフレアが難民達を見ながらそう言った。

「どこかの侵略国家のせい」確かにその通りだ。

ロザリアとアルケイディアの二大帝国の覇権争いで多くの国が滅んでいて、難民は増える一方である。

「これ以上増やさないために、友好を訴えて大戦を防ぐんです。父は必ず平和を選びます」

「必ず？　たいした自信だな」

ラーサーの言葉にバルフレアはどこか馬鹿にしているような声で言った。

そして不機嫌そうな声で一言吐き捨てる。

「父親だろうが、結局他人だろ」

バルフレアはそう言うのと再び歩き始めた。

ラーサーは言い返すことができず、そのまま立ち尽くしていた。

「あんまり気にすんなよな」

ヴァンはラーサーを心配して慰めの言葉をかけた。

するとセアに肩をたたかれ、ヴァンが振り返るとセアは首を振っていた。

ヴァンは首を傾げたが、セアに「逆効果だ」と耳元で呟かれ、黙り込んだ。

同時刻アルケイディア帝国本国領帝都アルケイイスにて。

帝都の中心にある皇帝宮の謁見の間である二人が密談をしていた。

グラミスは玉座に座り、密談相手のヴェインは机を挟んで立っている。

そしていつも皇帝宮の警備についている親衛軍の兵士は今の謁見の間にはいなかった。
た。

「私わたくしひとりが消えて済む問題ではありません。元老院はソリドール家の存在自体を憎んでいます」

ヴェインはここで一旦言葉を区切り、少し力をこめて続けた。

「奴らを抑える口実が必要です」

ヴェインの言葉を聞いて、グラミスは玉座から立ち上がった。

「必要だと？　そうか、必要か——。そちの決まり文句だな。血を流す決断に毛ほどのためらいもない」

どこか責めるような口調でそう言いながらグラミスは窓際へよった。

グラミスが責めているのはヴェインか、それともヴェインをそうしてしまった己自身にか……

そう言ったグラミス自身にもわかっていなかった。

「ソリドールの剣つるぎに迷いは不要。その剣を鍛え上げたのは陛下ご自身です」

「復讐のつもりか」

グラミスはそう呟いた。

グラミスは11年前、ヴェインに兄二人を処断しろと命じたことを恨んでいるのでは
と
思
っ
て
い
た。

あの日以来ヴェインが職務で私情をあらわにしたことが無い。

どのような凄惨な任務でも無表情で成し遂げてきた。

グラミスはいつかヴェインが自分を殺すかもしれないと心の奥底ですつと思っ
た
の
だ。

だが、ヴェインは声を乱さずに話す。

「必要だと申し上げました」

ヴェインの言葉にグラミスは僅かに唸った。

「今やらねば、もうひとりの未来も奪われます」

ヴェインの言うことは常に理がある。

確かにこのままでは帝国はソリドール家という旗印を失う。

現皇帝であるグラミスは古い先短く、ヴェインは第8艦隊の件で失脚寸前。

ラーサーは元老院の傀儡として皇帝になるか・・・

否、ラーサーが傀儡で終わるような人物ではない。

だが、まだ幼いラーサーが元老院をどうにかできるとは思えない。

となれば元老院によって幽閉されるか殺されるかのどちらかだ。

「白い手の者に代わり、その手を汚すか」

「すでに血に染まっています。ならば最後まで私が」

ヴェインの返答を聞き、グラミスは窓から帝都を眺める。

己の一生を捧げ、栄えさせてきたアルケイディア帝国の首都。

この繁栄を手に入れる為に、いったいいくつの国々を滅ぼしてきたのだろうか？

いったいどれだけ莫大な量の血を大地に流させたのだろうか？

グラミスは少し目を瞑る。

「すべてはソリドールのために——か」

グラミスはそう呟き、黙った。

なに、この国の為に血を流すことなどまだ自分が幼い時から覚悟していたことではないか。

そう、嘘え血を流すのが自分であつたとしても——

「エイジスとラナード卿をここに呼べい。それとヴェイン、グレゴロス議長に明日の朝に謁見の間にくるよう伝えよ」

「ハッ」

グラミスの命令にヴェインは臣下の礼をとり、謁見の間から出て行つた。

「——死なば諸共か、誰が言い始めたのか知らぬがよく言つたものよ」

グラミスは目を閉じ、誰に言うでもなく呟いた。

第三十六話 神都

キルティア教会直轄領神都ブルオミシエイスにて。

このブルオミシエイスはキルティア教の総本山である。

そもそもキルティア教とは今から約2000年前にオーダリアで予言者キルティアが始めた宗教である。

古来、イヴァリースでは平和と自由を象徴する女神への信仰が多数存在していた。

開祖キルティアはその女神を光の神フアーラムと規定、オーダリア各地の民族宗教を二元論で体系化しキルティア教が成立した。

その後、開祖キルティアは布教の旅を続け、晩年はブルオミシエイスに身をよせ、教えを広めていった。

開祖の死後も教えは広められ、後に信者達によって神殿も築かれている。

要約するところの神都ブルオミシエイスは偉大なるキルティア教の創始者が没した聖地なのである。

「キルティア教の大僧正アナスタシスげいか猊下がおわす神都ブルオミシエイスは、神に最も近い安息の地。あなた方の魂にも平安がもたらされますよ」

入り口にいたキルティア教徒が難民達にそう言っていた。

そして難民達は安堵の表情を浮かべている。

確かにキルティア教会は諸国と不可侵条約を結びキルティア教が迫害されない限り、内政不干渉を貫いている。

その為、余程のことが無い限り神都は諸国の軍隊に襲われる事は無い。

それに僧兵団が魔物退治もしているので魔物に襲われる心配も無い。

「神都は万人の魂が安らぐ地。貴方達に神の加護あれ・・ファールム」

キルティア教徒が難民達に話をしているところを通り抜けると避難してきた難民達のテントで溢れかえっている。

そしてその奥の少し高いところにキルティア教の神殿がある。

セア達はそのテントの間を通り抜け、神殿の方に向かう。

「オレはナブラディアの生まれなんだ。2年前の戦争で村を焼かれてどうにかここまで逃げてきたんだ」

「そうか、俺達はランデイスって国から避難してきたんだ」

「たしかランデイスってバレンディアにあった国の名前か？」

「ああ、今から10年以上前にアルケイディアに滅ぼされた小国の名前さ」

「はあ、ある意味オレはランデイスが羨ましいよ」

「なんでだ？」

「だってさ、ナブラディアは文字通り跡形もなく無くなっちゃった。ランデイスは占領されてだけじゃねえか」

「・・・それもそうだな」

と、失った祖国のことを話している避難民もいれば、

「まったく、どいつこいつもしれてやがんなあ。金目のもんがありやしねえ」

「おいつ!! そのバンガ!! 俺の金返せ!!!」

「やべっ!!」

「何の騒ぎだ!!」

「あ、僧兵団の方ですか? あいつを捕まえてください!! 俺の金を盗んだんです!!」

「なにっ!!!」

と、避難民相手に盗みを働いている奴もいれば、

「ここは厳しい土地だけど毎日暖かい飯が食えるいいとこだよ」

「まったく、シークならキルティア教徒がやってる力仕事手伝えよ」

「手伝つても手伝わなくても暖かい飯は毎日貰えるよ」

「こんな豚が大勢いるからキルティア教会は財政難なんだな」

「まあまあ、そんなことはどうでもいいだろ! お前がまだ生きてるのってキルティア教

「おかげだろ？」

「そうだけどき。ずっとこのままでもいいのかな？もしどっかの国が攻め込んできたら・・・」

「こんな大して豊かでもないヤクトの辺境をキルティア教を敵に回してまで欲しがる馬鹿な国なんかねえだろ」

「その通り!!お偉い大僧正アナスタシス様のひとにらみで王様も皇帝もたちまちふるえあがるって話だ」

「それならこんな山奥にこもってないで、戦争に夢中な連中をどうにかしてほしいですよ」

「違えねえ!!」

と、キルティア教会に助けてらつてくるくせにキルティア教会を批難する駄目な奴等もいる。

「どうした馬鹿弟子？」

セアはなにか不機嫌そうなヴァンに声をかけた。

まあなんで不機嫌なのかは想像できるが・・・

「だってさこいつら自分で何もして無いくせになんで偉そうにして・・・」

「そうだな。昔の馬鹿弟子みたいだな」

「はあ!？」

「だってそうだろう？ 自分で何も出来ないから末端の帝国兵相手にスリしまくってた頃のお前と大差ないだろ」

「で、でもオレはちゃんとミゲロさんの店で働いてたぞ!!」

「そういえばミゲロさんから聞いたんだが、お前はよくサボってたらしいな?」

ヴァンはその言葉を聞くと黙り込んだ。

そしてセアは神殿の方に目をやった。

(しかし、俺が17の時に神都に来た時のことを思い出すな)

セアはそう思い、瞼を閉じて神都に来た時のことを思い返す。

17歳の頃のセアは国王として即位したばかりで、年の終わりごろに巡礼でブルオミシエイスを訪れていた。

「いや、本当に神に一番近い地と言われることはあるな。なんとも美しい」

「そうですね」

セアの隣にいる女性が答える。

その女性の身なりはよいが、容姿は人並みでどこか不機嫌そうな表情である。

「どうした？ なにやら顔色が悪そうだが?」

心配そうにセアがその女性に声をかける。

「クライス陛下……いえ、セア。あなたには私とこの景色のどちらが美しいのですか？」
真剣な声で女性はセアに問いかけた。

だが、当時の自分はそっち方面というか女性関係には疎かった為、

「……どういう意味かな？」

などという質問を返してしまった。

すると女性は眉を顰めて、言い返した。

「いえ、ただあまりにも他人行儀ではないですか。愛する男性にそういう態度をとられるのは悲しいです」

「は!？」

セアは素っ頓狂な声をあげ、暫く考えた後に問いかけた。

「………なんていった？」

「愛する男性と言いました」

「本当に？」

「神に誓っても構いません。それに貴方の妻になってもう2年ではありませんか？」

「い、いやそうだけど……」

「まさか私はそういう対象では見てなかったのですか？」

見てたとも見てなかったともいえない。

確かに着飾った姿を見て綺麗だと思った事は何度かあるが恋愛など自分ができずががないと思ひ込んでいた。

「い、いや。そ、そういう意味では。その、ほらだって・・・俺たちの結婚は父上達が勝手に決めたことじゃないか？」

「だったら夫を愛してはだめなのですか？」

「あ、そういう意味では、その、え〜つと・・・」

あまりの気恥ずかしさにセアの顔は真っ赤になり、頭から煙が出ている。

「セア、その大丈夫ですか・・・？」

「ふえっ?・・・」

その後セアの頭は限界を迎え、気を失った。

セアは後にも先にも精神的な理由で倒れたのはあれだけだったなど微かに微笑んだ。

第三十七話 夢見の賢者

神都ブルオミシエイスの神殿はキルティア教会の記録によると今から1800年程前に造られたらしい。

本当に1800年前からあったのかどうか知らないが少なくとも約700年前にセアがこの地に来た時には既にあった。

ブルオミシエイス自体が神殿と言っても過言ではない荘厳な建造物であり、キルティア教会の要職についている者達の住居と礼拝堂で出来ている。

そしてその神殿をぐるりと囲むように避難民達のテントで溢れている。

そんな神殿の入口に入ったセア達はキルティア教徒たちに歓迎された。

なぜこの時に来ることが分かったのかと聞いたところ大僧正が貴方達が来られるのを悟ったかららしい。

そう言つてキルティア教徒達はセア達を光明の間に案内した。

光明の間の奥でキルティア教会のトップ大僧正アナスタシスが瞑想をしていた。

大僧正アナスタシスは色々逸話の多い人物だ。

まず彼はヘルガス族という長命な少数種族で現在184歳。

因みにヒュム換算すると1200〜1300歳だという。

不老で700歳越えしているセア程では無いにしろかなり異常だ。

さらに僧兵団に所属していた頃にたった一人でパラミナ大峽谷でファークヴニルという邪竜を単騎で討ち取ったと言う。

しかもその竜は円月輪が外れていた邪竜というのだ。

キルティア教の神話では天地創造の際に神が地上に12人（一説には13人）を地上に遣わしたという。

だがその地上には使者達が来るより前に邪竜達が地上を支配し使者達と戦った。

邪竜の力は強く、ある竜は竜巻であらゆる物を吹き飛ばし、ある竜は業火で森を焼き尽くし、

ある竜は地を割り生命を奈落に突き落とすし、ある竜は水を操り地上を水で覆った。

その邪竜達の所業をみかねた光の神・善神ファークラムは邪竜達と戦い円月輪を嵌め、その凶暴な力を封じた。

竜に輪を嵌める話は他の宗教の神話やガリフ族の口伝にも似たような話があるので円月輪が邪竜の力を封じてるのは真実だとされている。

そんな邪竜をたった一人で倒せるというのだからアナスタシスの全盛期の力は凄まじいものなのだったのだろう。

更に胡散臭い話だがアナスタシスは神の声を聞いたことがあるというのだ。

そんな逸話の多いアナスタシスの瞑想している姿は神秘的な雰囲気纏っている。

「寝てないか？」

しかし空気の読めないヴァン君は小声でそう言ってしまった。

全員がヴァンを注意しようとする

『(なに、眠っておるようなものよ)』

直接脳内に響くように声が聞こえた。

アナスタシスは相変わらず瞑想したままで口も動いていない。

しかしその声が目の前の者からのものだど何故かわかった。

これがアナスタシスが「夢見の賢者」と呼ばれる所以である。

『(夢をみておる。夢ゆめまぼろしと現世うつしよは表裏の一重を成すものゆえに。夢は真まことを映す鏡よ)』

「アナスタシスげいか狛下。私は——」

『(語らずともよい)』

アーシエの言葉を遮り、アナスタシスは続ける。

『(ラミナスの娘アーシエ。そなたの夢をみておった。【暁の断片】を手にするそなたこ

そダルマスカの王統を継ぐ者。王国再興を願うそなたの夢、私にも伝わっておる)』

「それでは大僧正だいそうじょう狛下。アーシエ殿下の王位継承は——」

アナスタシスの言葉を聞いてラーサーがアーシエの即位の話を始めようとする。しかし入り口の方から聞こえた大声によってそれは遮られた。

「おおっと、そいつはあきらめてもらえませんかね」

そういつた男はグラサンをかけた遊び人っぽい姿で後ろに美女を侍らせていた。

その男をみたセアは僅かに驚いた顔をした。

が、その男はセアに気づかずラーサーに話しかける。

「よお、皇帝候補殿。呼び出されてやったぞ」

そう言われてラーサーは右手を差し出したがその男は握り返さずラーサーの頭をなでた。

するとラーサーは鬱陶しそうに左手でなでる手を払いのけた。

そしてラーサーはアーシエの方に振り向いて話しかける。

「彼に会わせなかったんですよ。この人。これでもロザリア帝国を治めるマルガラス家の方なんです」

「山ほどいるうちのひとりですがね。私だけじゃ戦争を止められないんで、ラーサーに協力を仰いだってわけ」

そう言うマルガラス家の男はかつこよくグラサンを外して隣に侍らせていた美女にグラサンを渡した。

「アルシド・マルガラスと申します。アーシエ殿下におかれましてはご機嫌麗しゅう」
そう言つてアルシドは跪き、アーシエの左手の甲に接吻した。

王族の手の甲に忠誠ある貴族や騎士が接吻するのは別にありえない話ではないが……
間違つても初対面の王族にやるようなことでは決して無い。

「ダルマスカの砂漠には美しい花が咲くものですな」

その様子にアーシエは困惑し、ラーサーはため息をついた。

だが、まだまだこのカオスな状況は終わらない。

セアがいきなりアルシドの後頭部に向かつて飛び蹴りを繰り出した。

しかしアルシドも諜報部を統括してただけあつてそれを華麗に回避したが、回避した
方向に飛んできた鞘が脇腹に直撃した。

「よお、久しぶりだなアルシド。大体20年ぶりかな？ 俺のこと覚えてる？ クライ
スだよ？」

物凄く低い声でそう言つてセアはアルシドに微笑む。

微笑んでいるのだが目が笑っていない上に目が冷たく光ってる。

「ク、クライスさん」

アルシドが2つの意味で驚き、そして絶望した。

2つの意味で驚くというのは「なんで老けてないんだ!？」と「何でこんなところにい

るんだ!」である。

そして絶望した理由はクライスさんの声が物凄く低いときは酷い事をしてくるのをアルシドは経験上知っている。

「ええっと、セアさんはアルシドさんと知り合いなんですか?」

「ああ、20年位前にちよつとロザリア帝国で働いてたときがあつてね。その時に知り合つたんだよ」

ラーサーの質問に答えた後、セアは無表情になつてアルシドを睨みつけた。

「さーで覚悟は出来てるかな? アルシド君」

アルシドは既に今日の晩飯はなにかなく?と現実逃避を試みていた。

だがその試みは空しくセアの鉄拳によつて実行不可能となつた。

アルシドがセアによつて半殺し(途中で美女が妨害してきたがセアによつて気絶させられた)されて10分後。

セアの魔法でアルシドが回復したのを見計らつてアナスタシスが会話を再開する。

『(アルケイディアにはラーサー。ロザリアにはアルシド。彼らは戦の夢を見ておらぬ。両帝国が手を取り合えば新しいイヴアリスがひらかれよう)』

「それこそ夢物語ですな。現実には戦争が起こりかけてる」

「私を招いたのも、大戦を防ぐためと聞いておりましたが、私が王位を継いでダルマスカの復活を宣言し、帝国との友好を訴え解放軍を思いとどまらせる——と。なのに今になって、あきらめろとは？」

アーシエの疑問にアルシドは頷いて説明を始める。

「姫のお言葉があれば解放軍は動けず、我がロザリアも宣戦布告の大義名分を失う——
—そういう狙いでしたがね。流れが変わつちまいました。2年前、お亡くなりあそばされたはずのあなたが、実は生きていたなんて話が出るとかえって事態が悪化する状況でしてね」

「私に力がないからですか」

「いやいや、あなたのせいじゃありませんよ」

「ではなぜ!?!」

アルシドのアーシエに対する返答にラーサーが疑問を呈する。

「アーシエさんから友好の呼びかけがあれば——僕が皇帝陛下を説得します。陛下が平和的解決を決断すれば——」

「グラミス皇帝は亡くなった。暗殺されたんだ」

一瞬ラーサーはアルシドの言葉が理解できず呆然とする。

そして理解してしまうと弱々しい声で一言だけ呟いた。

「父上が!？」

第三十七・五話 暗殺劇

少し時間を遡り、

アルケイディア帝国本国領帝都アルケイデイスにて

皇帝宮の廊下を歩いている人物が2人。

一人は親衛軍に所属している親衛円卓艦隊指揮官ラナード卿。

そしてもう一人は第1局ジャツジマスター・エイジスである。

親衛軍は皇帝直属の近衛兵団で、規模は小さいが忠誠心の高い者達で編成されており、ジャツジに監督されていない唯一の軍である。

西方総軍に所属する艦隊に次いで最新の戦闘機で構成されている。

一応、司令官は皇帝ということになっているが殆ど親衛円卓艦隊指揮官が親衛軍を統制している。

第1局は帝都の上流階級——いわゆる政民達を裁くのが主な任務である。

またエイジスは第1局局長のほかに第1艦隊の指揮官も務めている。

彼らは謁見の間に入るとグラミスに向かつて頭を下げた。

そしてグラミスから今回の企みについて2人は聞かされた

「陛下。本気でございますか？」

「ああ。もう決めた事だ」

「確かにそれを成せば元老院の一派を排除できるでしょうが・・・」

「ラナード卿。既に君命は下されたのですぞ」

「貴様!!このようなことがまかりとおつてよいと思つておるのか!!」

「思つてはおりませんがロザリアの侵攻が迫るこの時に内輪もめをしている場合ではない」

「それとこれとは話は別だ!!第一陛下は——ッ!!」

「そこまで言うとならぬラナード卿はグラミスの方に顔を向けた。

「そういう、ことなのですか？」

「既に死病に侵されてる身だ。なに今一度祖国の為に血を流すだけではないか」

「・・・」

ラナード卿はグラミスの言葉を聞いて黙りこんだ。

それを見てエイジスはグラミスに話しかける。

「陛下。暗殺の実行犯の捕縛は私達にお任せください。共犯者達の捕縛は私の方から第

2局に要請しましょう」

「頼むぞ」

そう言つてグラミスは机の上に置いてあつたワインをグラスに注いだ。

そしてそのワインが入つたグラスを3人に配る。

「陛下に40年仕えてきた私にとつて今回の企みは本当はやめてほしいのが本音ですがもう何を言つても無駄でしょうな」

「すまん、ラナード。共にお前達と戦場を駆け回つた日々が懐かしいわ」

「・・・私も本当はお止めしたいのですがなにより国の為です。致し方ありません」
「そんな泣き顔で言われても説得力がないぞ? エイジス」

からかうような声でグラミスはそう言い、グラスを掲げる。

その様子を見て戦友達も持っているグラスを掲げる。

それはかつて戦場に赴く際に3人でしていたことだった。

「では今一度戦場に向かうとしよう」

「陛下。私もお供したいですぞ」

「おいおい、ラナードまで逝つてしまつたら誰が親衛軍を纏めるんだ?」

「最後まで大きい大目に見んか。この若造が」

「ははッ、久しぶりに若造なんて言われたよ」

「かわらんなお前らは」

そこで会話は途切れ、暫くしてグラミスが叫ぶ。

「アルケイディア、万歳!!」

「アルケイディア、万歳!!」

そう叫び乾杯すると彼らは一気にグラスの中のワインを飲み干し、床に叩きつけた。

その後、二人は何も言わず謁見の間から退室した。

そして翌朝にグラミス皇帝が暗殺されたと言う報告が親衛軍司令部に届いた。

ジャツジ・ガブラスは謁見の間の方に向かって歩いていった。

グラミス皇帝暗殺の報を聞き、ヴェインが帝都にいるジャツジマスター達に召集をかけたのだ。

「何故我等が陛下を手にかけてねばならん……」

「おのれ、謀ったな……このままではすまさんぞっ!!」

元老院議員達が怨嗟の声を漏らしながら帝国兵に連行されているのをガブラスは横目で見ながら謁見の間に入った。

そこにはグラミス皇帝と元老院のグレゴロス議長の死体そしてヴェインと兜を外した4人のジャツジマスターがいた。

「元老院の犯行ですと——!?!」

ドレイスがエイジスを睨みつけ、問いかける。

「ああ、犯人はグレゴロス議長。警備についていた親衛軍の兵士によると陛下に毒をもったことを認め、潔く自決したようだ。そしてラナード卿から私の方に連絡が入り現場に急行した」

「それで第1局から元老院議員を全て捕らえるよう我が第2局に要請があつてな。取調べの結果元老院議員の大半が共犯者だ」

「よつてただちに議会権限を停止。私が臨時独裁官として事態の收拾にあたる」

「たわごとを——！私が真の反逆者を見抜けんと思うか!?!」

ドレイスはそう言つてヴェインを睨みつける。

今回の暗殺はあまりにも不可解な点が多すぎる。

まず元老院がグラミスを暗殺する理由がなさすぎる。

元々グラミスは死病に犯されており、古い先短い命だったのだ。

既に第8艦隊の件でヴェインを失脚させる算段があるのにそんな手段を取る理由が無い。

グレゴロスはどうしようも無い奴だが伊達に元老院議長の地位を守り続けている訳ではない。

それくらいのことでは分かなければそもそも政民でいられるかどうかも怪しい。

だから口封じにヴェインによって殺されてしまったのだろうか。

更にヴェインが臨時独裁官に就任・・・これで疑うなという方が無理な話だ。

臨時独裁官。元老院議員そして皇帝ですら政民と新民による公正な選挙で決めるアルケイディア帝国において有事の際に何らかの理由で元老院や皇帝が機能しなくなった場合公安総局から一時的に国家元首を任命するという法律がある。

要するに一時的ではあるがヴェインが帝国のトップとして君臨することになったのだ。

「言葉が過ぎるぞドレイス！」

「ザルガバース！卿までもが茶番を演じるのか!？」

ザルガバースはグラミス派ではないがヴェイン派でもない。

派閥に属さず、君主よりも国家に忠を尽くすタイプの中立派である。

ある意味一番法の番人としてふさわしい人物である。

ドレイスもそのことについてザルガバースを評価していたので彼を睨みつけ、問いかける。

一方ザルガバースも今回の件がヴェインの仕業であると薄々感づいている。

だが、これ以上混乱を長引かせるの得策ではないと考えていた。

何故なら・・・

「——ロザリアの侵攻が迫る今はヴェイン殿の力が必要だ」

「チッ！」

ドレイスは盛大に舌打ちし、顔を背ける。

その様子を見てヴェインはグラミスの死体を見ながらはつきり聞こえる声で呟く。

「ソリドール家も私とラーサーを残すのみとなった」

「まさかラーサー様をも——」

この男ならやりかねない。

11年前に自らの兄2人をその手で殺し、そして自らの父を死に追いやった男だ。

己の障害になるなら目の前の男は容赦なく自らの弟に手をかけるだろう。

ドレイスはそこまで考えると剣を抜き、ヴェインに向けた。

「ヴェイン・ソリドール！法の番人たるジャツジマスターとして貴殿を拘禁させていた

だく」

そう言つてドレイスはヴェインを睨みつけた。

だが、後ろから殺気を感じドレイスは軽く首を曲げて後ろを見る。

ベルガの剣が自分の首下にあつた。

「ヴェイン閣下を独裁官に指名したのは法を司る公安総局だ。わかるか、ドレイス？

閣下に剣を向けた瞬間。お前は法に背いた」

「貴様も茶番の共演か——！」

ドレイスはゆっくり剣を下ろし、ベルガに横なぎに斬りかかった。が、ベルガの左手で剣の刃の部分を掴まれ止められた。

ありえない。剣で防がれたというならまだ分かるが素手で……

ドレイスが現状を受け入れるのに苦労している間にベルガは左手でドレイス剣を払い、顔を驚つかみにし、反対方向に放り投げた。

「この——力は——」

ドレイスは放り投げられ全身が痛み、朦朧とする頭で思う。

さっきのは人間の力ではない。

「ザルガバース。アレキサンダーを与える。ベルガをともなつてラーサーを連れ戻せ」

「はあつ」

ザルガバースはヴェインの命に頭を下げ、謁見の間から出て行こうとした。

すると入り口の方から声が聞こえた。

「閣下。ラーサー殿の保護は私が」

「私を監視しなくていいのか？ あれこれと探りを入れてグラミス陛下に報告していた

そうだが」

「それは——」

ヴェインの皮肉にガブラスは言葉を詰まらせた。

「卿は陛下の犬だった。いまさら飼い主を変えるつもりなら———そうだな。ジャツジマスターの職務を全うしてみせろ」

ガブラスはヴェインの言葉の裏に隠された意味に気づき、倒れているドレイスの方を見た。

「法に背いた者を裁け」

「閣下。それはあまりに！」

「そうです。それに第13局に続き、第4局までジャツジマスターの地位が空位になるのもどうかと」

ヴェインの命にザルガバスとエイジスが諫言する。

だが2人の諫言はヴェインに黙殺された。

ガブラスは床に落ちていたドレイスの剣を取り、ドレイスの胸元に剣を向ける。

だが、共にラーサーを守ると誓い合った仲。

ガブラスの中に迷いが生じる。

「かまわん———やれ———」

ドレイスの弱々しい声を聞き、ガブラスはドレイスの顔を見る。

荒々しい息をしながらドレイスはガブラスに話しかける。

「生き延びて———ラーサー様を、守って———」

暫くガブラスは黙り込んだ後、呟いた。

「——すまん」

「頼む——」

ドレイスの返答を聞き、ガブラスは一気にドレイスの心臓を貫いた。

ドレイスは僅かに悲鳴をあげた後、絶命した。

その一部始終を見終ったヴェインは死んだグラミスの手を取り、誰にも聞こえないような声で呟いた。

「すべてはソリドールのために——」

第三十八話 もうひとつの遺産

「仮に姫が平和的解決を訴えたとしましょう。グラミス皇帝なら戦争回避を優先したでしょうが——相手はヴェイン・ソリドール。姿を現した姫を、偽者だとか断定して——解放軍を挑発するんじゃないですかね」

そこでアルシドは一瞬ラーサーを見て、またアーシエに視線を戻して続ける。

「ヴェインは戦争を望んでいる。都合の悪い事に、あいつは軍事的天才だ」

『（私も夢に告げられた。そなたが姿を現せば戦乱を招き、ヴェインが歴史に名を遺す^{のこ}）』
アルシドとアナスタシスから告げられた予測はアーシエにとって辛いものだった。

最早二大帝国の激突は目前まで迫っている。

「帝国軍は全軍あげて開戦準備を進めてましてね。うちの情報では——」

アルシドは侍らせている美女から渡された書類を見て、読みあげていく。

「ヴェイン直属の西方総軍が臨戦態勢に移行し——新設の第12艦隊が進発。それと本国の第1艦隊も戦艦オーディーンの改装終了を待つばかり。でもってケルオン派遣軍の第2艦隊が——第8艦隊の穴埋めに駆り出されますな。——つまり、どえらい大軍だ」

「それってどれくらいの数なんだ？」

アルシドの言葉にヴァンが疑問を呈する。

「2年前のガルテア戦役の際にアルケイディアで編成されたガルテア鎮定軍は第8艦隊を中心に西方総軍の3分の1で編成されていた。馬鹿弟子にも分かりやすいように説明するなら帝国がナブラディア・ダルマスカに侵攻した時の兵力の最低でも3倍以上。それに本国軍やケルオン派遣軍からも増援がくるとなると5倍はいくんじゃないか？」

「そんなに・・・？」

パンネロがあまりの数の多さに絶句した。

2年前のガルテア戦役の時にダルマスカにアルケイディアが侵攻させた兵力の最低でも3倍以上。

明らかにアルケイディアの狙いがダルマスカ王国再興を目的とする解放軍の鎮圧ではなく、解放軍への協力を大義名分に参戦してくるであろうロザリア帝国軍を迎え撃つことだというのが動員した兵力から子供でもわかった。

「そして、切り札は破魔石」

アーシエの言葉にアルシドは頷いた。

アーシエはアナスタシスの方を向き、話しかける。

「大僧正猊下。王位継承の件は、しばし忘れます。力を持たない私が女王となっても、何

も守れません。より大きな力を身につけてから、あらためて」

『(そなたが夢見るのは、破魔石の力か?)』

「破魔石以上の力です」

その言葉を聞いてアナスタシスは目をカッと開き、初めて肉声で話し始めた。

「力をもって力に挑むか。まこと人間の^{ヒユム}子らしい言葉よ」

「私は霸王の末裔です」

「ならばレイスウオールが遺したもうひとつの力を求めなさい」

「そんなものがあるのですか!」

「パラミナ大峽谷を越えて、ミリアム遺跡を訪ねなさい。レイスウオールが当時の大僧

正に委ねた力が眠っておる。破魔石を断つ【霸王の剣】」

その言葉を聞き、ミリアム遺跡に行こうとアーシエは出口の方に向いた。

その様子を見てアナスタシス僅かに神の意思に背きながらアーシエに語りかける。

「おのが覇業を支えた破魔石を砕く力を——なぜ子孫ではなく他者に託したのか。剣

を手にして悟らなければ王国再興の夢は、夢のままよ」

その言葉を聞いてアーシエはレイスウオールが他所に【霸王の剣】を託した事に疑問

に思いながらも今は力が必要と言う事で考えないことにした。

そうして神殿の外に出ようとしたときに呆然としているラーサーが目に入った。

アーシエもラスラや父が亡くなったと聞いて同じような状態になったことがあるので同情する。

だが、こういうものは落ち着くまで時間が必要だと思いつながら外へ出た。

セアも先程の【霸王の剣】を他者に託した理由について考えていた。

彼は早くも自分なりの結論を出していたがそれを認められずに不機嫌そうな顔をしながら外に出た。

『(私の夢も、やがて醒めるか——)』

アナスタシスは瞑想を再開して一言呟いた。

神殿の外でセアはアルシドと久しぶりに話し合いをしていた。

「そういえばクライスさん。アダスの奴が会いたがってましたよ」

「そうか。でもロザリア帝国に入るのは……」

「なぜ？」

「……俺って諜報部を抜けたとき周りからなんて言われた？」

「辞職したって聞きましたか？」

アルシドが質問の意味が分からず首を傾げる。

「いや、本当は辞職願を上司に提出したんだが拒否されてな。だから夜逃げして国境を

越えたんだよ」

「え・・・？」

「だからさ、そのく、ロザリア帝国に入ったとたん首をはねられる危険性があるからあと十数年くらいいたら行くって言つといて」

「わかりました」

実はセアが話したことは半分嘘で上司に辞職を拒否され、「どうしても辞職したいなら皇帝陛下に提出しろ」と言われて上司の言葉通りにその時のロザリア帝国皇帝の部屋に侵入し、辞職願を出した。

結果は不敬罪の罪を着せられて処刑されかけた・・・というかされたのがロザリアに行きたくない理由である。

既にロザリア帝国の記録上は故人であるから別に行ってもいいような気はするが念のためもう少し時間をおきたい。

「ところで話は変わるが・・・」

「・・・なんですか？」

アルシドは何か嫌な予感を感じて身構える。

「お前の部下はどうなっているんだ？」

「・・・というところ？」

「だからなんでお前の部下は美女ばかりなんだ？」

セアが横目で下にいるアルシドの部下達を見る。

色気たつぷりのカナートを筆頭に美女ぞろいのアルシド直属の部下が14名。

「た、たまたま能力で選んだらそうなたただけで・・・」

「よし、質問を変えよう。ここにいるお前の部下何人に手を出した」

「・・・・・・・・・・・・・・・・全員です」

「俺が上司だった時より悪癖が悪化してるとは・・・な」

「いや、あの頃と違ってちゃんと彼女達は有能ですよ本当に!!!」

「そうか、そうか。まあお前が侍らしてた奴も中々の腕だったしな」

「そうです!!」

「で、お前と今まで関係を持っている女性は何人だ？」

「え、えくと、ちゃんと数えた事はありませんが、3桁を少し越えたくらいで・・・」

「・・・呆れるほどの女好きだな。お前は」

セアは虫でも見るような目でアルシドを睨みつけた。

第三十九話 ミリアム遺跡

キルティア教会直轄領ミリアム遺跡にて。

僧兵団団長以下数名にセア達はミリアム遺跡に案内された。

パラミナ大峽谷の南に位置するミリアム遺跡は元々キルティア教で剣と力を司る神ミリアムを奉っている神殿である。

この神殿は約1700年前にキルティア教会に政治的権力を与えた大国が建造したと教会の記録ではなっている。

だが、約1500年前にその大国も滅び神殿も教会から放置されて遺跡になった。

これがミリアム遺跡に関するキルティア教会の表向きの記録である。

だが実際には約700年前にイヴァリース統一を成し遂げたレイスウォールが当時の大僧正に【霸王の剣】を託し、大僧正がこの遺跡に封じた。

このことは歴代の大僧正及び僧兵団団長とミリアム遺跡の管理を行っている教徒達だけが知っている秘密である。

何故当時の大僧正がミリアム遺跡に【霸王の剣】を封じたのかは不明だがレイスウォールの血族の殆どがミリアムを信仰しているキルティア教の宗派だったからでは

ないかと秘密を知るもの達からは推測されている。

「アーシエ殿下」

「なんででしょうか？」

「代々僧兵団では団長に就任するとき、先代団長からある伝承を受け継ぎます。大僧正に導かれ、ミリアム遺跡に挑む者が現れたときにその伝承を伝えよと言われております」

「その伝承とはなんででしょうか？」

「【霸王の剣は血を流すための刃ではない】」

僧兵団団長の言葉にセア達は黙り込んだ。

バツシユが団長に問いかける。

「どういう意味だ？」

「さあ、私も先代に伝承の意味が理解できず尋ねたのですが先代は「我々が理解する必要はない」と仰っておりました」

「・・・【霸王の剣】を扱う者が理解できればいいというわけか」

「もしそうなら一刻も早く【霸王の剣】を手に入れる必要があるわね」

アーシエはそう言つて遺跡の入り口の方に顔を向けた。

もしバツシユ言う通りなら【霸王の剣】は手に入れたらすぐ使えるというような都合

のいいものじゃないのかもしれない。

「王女様」

セアの声が聞こえた方向にアーシエは振り向いた。

するとなにか小難しい顔をしているセアがいた。

「ダラン爺から聞いた伝説を覚えますか?」

「確か【かつてレイスウォールは神に認められ、剣を授かり、己に与えられた試練を耐え、破魔石によって乱世を平らげた】でしたか」

「ああ、その伝説で登場している【剣】って【霸王の剣】のことじゃないか?」

「なるほどな。じゃあ大僧正が【神】の代わりかよ。まあ伝説つてのは誇張が激しいからありえない話じゃないかもな」

「しかしバルフレアの言うとおりでとすると順番が滅茶苦茶だな」

「あ?」

「まず俺達は役立たずとはいえ【暁の断片】をもっている。伝説の中じゃ一番最後に出てくるのにな。そのことを無視するにしても【神】に仕える偉大な大僧正に認められたとはいえ【試練】というのがミリアム遺跡の仕掛けのことを指しているなら【霸王の剣】を手に入れるよりまえに俺達は【試練】をうけることになる」

「それはあくまでレイスウォールの時の話だろ? 順番は別にどうでもいいんじゃないか

？」

「・・・なら【神】が大僧正のことを指すとは考えにくい」

「なんでだ？」

「霸王は元を辿ればバレンディア大陸に存在した小国の貴族だ。その頃はまだ飛空艇もなかった筈だし位置的にキルティア教会と霸王になる前に接触を持つのは無理があるだろう」

「なるほどな」

実際にはレイスウォールはバレンディアの小国の貴族だが、十代の頃は遊歴をしていた為バレンディア大陸に居なかったというのは今の時代の人間は知らない。

尤も二十代前半で反乱を起こし国のトップに立ったレイスウォールが遊歴をしているなど考えられなかったので当時ですら遊歴中のレイスウォールに会ったことのある人間を除き知らないのだが。

「とりあえずこの遺跡にある【霸王の剣】を手に入れるのが先だろ。後のことはそれからでいいじゃん」

ヴァンはそう言うとパンネロの手を取って遺跡の入り口の方に走っていった。

その様子を見てアーシエはため息をついた。

「まあ馬鹿弟子の言うことも一理あるか。道すがら僧兵団団長に聞いた話では遺跡内部

は700年前から手付かずらしいから罨が盛りだくさんだろうな」

「レイスウオール王墓みたいってわけか。ったくめんどうだな」

「でも宝がある可能性もあるぞ?」

「霸王の財宝みたいなオチなら何も無いほうがいいがな」

「まったくだ」

そう言つて他の4人も遺跡に入っていった。

「.....」

セアは遺跡の一室で10体の動く石像に囲まれていた。

石像の大きさは目測10Mくらいで右手に変な形の武器を持っている。

セアは石像の攻撃を避けながらここにくるまでの状況を思い出していた。

ミリアム遺跡に入ると王墓でも見たことのある古代装置が設置されていた。

特に何も考えずにヴァンはその古代装置に触れようとした。

だがそのときに

だがその古代装置にこう記されていたのだ。

【余と新たな契約を望む者は、これに触れよ。

証をたずさえているならば、道を示さん

レイスウォール ここに記す】

証・・・考えるまでもなく王家の証のことだろう。

そして装置に触れようとしているヴァンは「暁の断片」を持っていない。

そこまで考えが及ぶとセアはヴァンを蹴飛ばして古代装置を中心に描かれている魔方陣から出した。

だがすでにヴァンは古代装置に触れていたみたいで魔方陣が浮かび上がりセアは飛ばされた。

そして今の状況に至る。

「とりあえず今回の一件が終わったらあの馬鹿弟子を半殺しにしよう。そしてヴァンが飛空艇を買うために帝国兵相手のスリで貯めた金も没収してやろう。うん、そうだ。それがいい」

セアは早口にそう言うとは一番近くにいた石像の足の部分を斬った。

その石像はバランスを崩してよろめき、その隙に「エアロラ」を唱え、その石像にぶつける。

するとその石像は吹き飛んで周りいた3体石像を巻き込みながら粉碎した。

そして石像が吹き飛んだほうに走りながら「ウオタジャ」を唱えた。

するとセアを中心に魔方陣が形成され、残っていた6体の石像は水の激流に飲み込まれ壁にぶつかって壊れた。

セアは壊れた石像を一瞥するとあたりを警戒しながら遺跡の奥へ進んでいった

第四十話 人造竜

動く石像や魔法生物を倒しながら奥に進んでいくとセアはとある大広間に出た。

キルティア教において世界は女神ファールラムが世界を創り、そこに12人ないしは13人の使者を送ったとされている。

彼らはファールラムが創りし世界に降り立ったが、凶暴な邪竜たちが地上の神々や精霊を力で支配していた。

使者達はファールラムが創りし世界を取りもどす為には邪竜たちに戦いを挑んだ。

最終的にファールラムの助力を得て邪竜たちを退けた使者達は世界をファールラムの意思の下、正しい方向へ導き始めます。

邪竜たちに虐げられてきた様々な地上の神や精霊の助力をえて・・・。

しかしそんな地上の神々の中でファールラムを快く思わない神がいました。

闇の神・業神ケイオス、彼は邪竜に虐げられていても使者達が来るまで自分達を放置していたファールラムを憎んでいました。

彼は使者達を誑かし、使者達の心を悪に染めていき、地上を闇で覆い支配しました。

これを見かねたファールラムは黄道十二宮の紋章が刻まれた宝石を地上の使者達に送

りました。

ケイオスは使者達にファールラムから宝石が届いたと聞き、彼らを呼び集めて宝石を見せるようにしていました。

だが、その宝石は宝石とは名ばかりの路傍の石ころに王道十二宮の紋章を描いただけのものでした。

その石からなんの力も感じなかったケイオスはファールラムも惚けたと言い使者達にそれ以上干渉しなかった。

その後、使者達が石を持って集まったときその石は神秘的に輝き、使者達の心を清め、地上を覆った闇を祓った。

こうして使者達は善の心を取り戻したが心の奥底で悪の心は燻っていた。

その状態の使者達がこの世界における知的生命体の祖先であるといわれている。

そして聖なる宝石が輝き、ケイオスの闇を打ち払う絵が大広間の天井に描かれています。

そして大広間の中央に転移装置が設置されている。

「ここまで一本道だったからこの装置に触れるしかないか」

そう呟くとセアは転移装置に触れた。

すると転移装置を中心に魔方陣が浮かび上がりセアを別の場所に飛ばした。

ヴァンは迷子になっていた。

正確に言えば動くでかい頭の石像（以降デカ頭）3体と戦っているうちに落とし穴におち、落ちた場所にいたゾンビの大群に追われてはぐれてしまった。

「うわゝ、またか」

通路を進んでいると再びデカ頭が現れた。

デカ頭が体当たりをしてきたのでヴァンはそれをよけ、後ろに回りこみ斬り込む。

デカ頭の動力部に傷をつけたことでデカ頭は停止した。

そのまま進んでいくと・・・

「なんか、ひろいところに出たな」

少し大きい広間になっており、壁一帯に壁画が描かれている。

そして部屋の中心に転移装置があり、セアが飛ばされてきた。

「セア、無事だったんだな！」

「よお馬鹿弟子・・・元氣そうだな」

とりあえずセアはヴァンの頭を殴った後、部屋を見回す。

壁画に13人の使者が描かれており、奥の扉に使者達に襲い掛かる邪竜が描かれている。

「いつてえ……」

「それくらいで済んだだけありがたいとおもえ。というか空賊を目指してるなら無闇に古
代装置に触るのはやめろ。早死にするぞ」

「うん、わかった」

そんなことを話しながらセアとヴァンは邪竜が描かれた扉を開いた。
するとそこはなにかの祭壇のような場所であった。

中央に見たことも無い紋章、そしてその紋章を中心に三角形の大穴があった。

しばらくすると大穴から火が吹き、何かが出てきた。

鉄でできた3つの竜の首のようなものが最初に目に付いた。

そして胴体の部分は首の付け根から前足の部分までは鉄でできていて、それが空中に
浮いており、そして胴体の上の部分には9対の羽がついていた

最後に目に入ったのが頭の部分だが、それは不気味な人の顔をした鉄仮面がつけられ
ていた。

左の仮面は耳を、真ん中の仮面は口を、右の仮面は目を覆われている。

そして真ん中の口を覆われている部分に「ヴィヌスカラ」と古代文字で彫られている。

それを見てセアは驚いた。

生前にヴィヌスカラという存在の話聞いたことがあったからだ。

古代の人々は人造竜を造り出し、ヴィヌスカラと名づけたという。

古代の人々が何のためにヴィヌスカラを造り出したか不明だが、その力は中級邪竜に匹敵するという。

ヴィヌスカラは大きく首を動かし襲い掛かってきた。

ヴィヌスカラは3つの首をセアに目掛けて勢いよく叩きつける。

セアは2つの首を避け、目が覆われた鉄仮面をつけている顔に斬りかかる。が、凄まじい金属音と共に斬激の勢いは殺された。

「なっ！」

よく見ると目が覆われた仮面の口が、セアの剣を噛んでとめていた。

ヴィヌスカラはそのまま右の首を動かし、セアを壁に叩きつけた。

「セア！」

ヴァンがセアの元に駆けつけようとするが、ヴィヌスカラの口を覆われた鉄仮面をつけた顔の目が光るとヴァンは床にへばりついた。

「ぐっ、重い……」

ヴィヌスカラは動けないヴァンに目掛けて顔を叩きつけようと振りかぶった。

が、突如飛んできた赤みのある黒い剣に胴体の中央を貫かれ、僅かに狙いが外れ、ヴァンの真横に鉄仮面が叩きつけられた。

「ちい、予備の剣なんか安物のダガー一本しかもってねえぞ」

セアはそう言い、ヴィヌスカラを警戒しながらヴァンに「デスペル」をかけた。

ヴィヌスカラは耳を覆われた鉄仮面がセアの方を見ながら、暫く動作を確認するような行動をしていた。

やがて異常が無いことを確認できたのかセア達目掛けて鉄仮面を叩きつけてきた。

セアとヴァンはヴィヌスカラの攻撃を避けながら会話をする。

「なあヴァン。一分程囿になつてくれねえか？」

「なんで!？」

「強力な魔法の詠唱をするからさ」

「わかった、任しとけ!!」

ヴァンはそう言うのとヴィヌスカラに向かって斬りこみ、セアは一步引いて魔法の詠唱を始めた。

ヴィヌスカラはヴァンの攻撃をまったく避けずに刺さり、耳が覆われた鉄仮面がヴァンの脇腹に向けて薙ぐ。

が、ヴァンは間一髪でそれを避け、刺さっていた剣を抜いた。

そんな攻防をしばらく繰り返しているうちにセアの「フレア」の詠唱が完了した。

するとヴィヌスカラの内部から爆発し、ヴィヌスカラの体は溶けて、バラバラになり

原形を留めていなかった。

セアはそのヴィヌスカラだった物の中から自分の赤みのある黒い剣を拾った。その後、ヴァンと共に奥にある個室に入ると転移装置があり、それに触れた。そして転移した先でバルフレア達と合流した。

第四十・五話 ケルオン派遣軍

アルケイディア帝国旧デイル王国領新都イスタナにて。

かつてケルオン大陸東端の肥沃な大地にデイル王国という国が栄えていた。

そして216年前にアルケイディア帝国に占領された国の名前である。

当時のアルケイディア帝国は帝政に移行して4年であり、ケルオン大陸進出を計画していた。

まず飛空挺艦隊を飛ばすことが出来るヤクトに無い国で、海岸と接してなくてはいけない。

となると山岳地帯に存在する武装中立国の聖ラルバ騎士団国か、肥沃な大地を持つているデイル王国か、それともデイルの3倍の領土を持っていて南部の亜人と戦争を繰り返しているアルス共和国か。

聖ラルバ騎士団は精強であることで知られ、国土は小さいながらもキルティア教会とかなり強い縁がある。

更に山岳地帯で国土の4割がヤクトと地理的条件が最悪だったので真つ先にこの国に攻め込む事は断念した。

アルス共和国は南部のヤクトに住んでいるバクナムス族の対処とデイルとの貿易摩擦に頭を悩まされ、西方の国々相手に侵略戦争を繰り返して、領土が東西に長く伸びてしまっている。

もし徹底抗戦されれば戦争は長期化するとしてアルスに攻め込むことは保留された。

デイル王国はガルテア連邦成立以前から聖ラルバ騎士団国と領土問題から小競り合いを繰り返していたがアルス共和国との関係も良好であった為に国権の発動による全面戦争というものをここ700年は経験しておらず、軍事力も低かった。

その為にアルケイディア帝国から目をつけられ、攻め込まれた。

デイル王国は2週間程でアルケイディア帝国に降伏し、占領下におかれることとなった。

占領後はデイル地方執政官が政治を行っており、現在のダルマスカ地方のように運営されている。

その後もアルケイディア帝国はケルオン大陸の諸国を占領し、ケルオン大陸総督が皇帝の代理人としてケルオン大陸各地の執政官を監視するようになった。

そんな歴史を持つ新都イスタナの総督府で現ケルオン大陸総督ピクシウス卿は本国からの命令を伝えていた。

「・・・ということで第12艦隊に同乗し、ラバナスタを經由して一度帝都に戻れという

ことだ」

「はあ、しかし遂に宿敵ロザリアとの戦争ですか」

やる気がなさそうに答えるのは第7局ジャツジマスター・グレイスである。

「いや、国境付近に軍を貼り付けているロザリアへの警戒だが、何故戦争になると考える？」

ピクシウス卿が微笑みながらグレイスに問いかける。

グレイスは内心ため息をつき、呆れたような目線をピクシウス卿にむける。

「総督閣下ならわかっているでしょう。最近の奇妙な事態に……」

「奇妙な事態？さて何のことかな？」

「あくまで私に説明させる気ですか」

「その通りだ」

グレイスは内心でこのおっさんは絶対に俺の言葉を理解してるだろ。

じやなきやこんな面に面白そうな笑みを浮かべてるはずがねえと言いたかった。

しかし仮にも上官が説明しろと言っているので仕方なしに説明する。

「最近、やけに暴動の数が減っていることです」

「それは喜ばしい事態だろ。卿達の努力の賜物ではないか」

「そうですか。ここ最近で潰した反乱組織はあまり無いはずですがね」

「では、どうなっていると卿は考えるのだ？」

「ロザリアからの支援が途絶えた。もしくは反乱組織が結集して大規模な反乱を画策している。私は後者の可能性が高いと踏んでいます」

「何故だ？」

「閣下はご存知ですかビュエルバの侯爵のことを・・・」

「ああ、確か病にかかり療養の為にビュエルバを離れているらしいな。早く病を治してビュエルバに戻りたいことだろうな」

「心にもないことを言わないでください。先日捕らえた反乱兵達から侯爵の名前が出ていますよー」

「なんと！恐れ多くも一国の主の名前を出すとはなんと不屈きな輩だ」

「あなた絶対にふざけているでしょう？」

「何を言っているのだね？グレイス君・・・そんな分かりきっている事は聞くな」

「やっぱりですか!?! いい加減にしてくださいよ!! 兵の一部が閣下を頼りないなどと言い出しているのですから!!」

「なんと・・・ならば卿の時以外の時はふざけずに対応しよう」

「私の時もまともに対応しろ！このハゲ!!!」

「うん」

「えくと話を戻しますが・・・何処まで話しましたっけ？」

「ああ、オンドール侯の話が反乱兵から聞けたところまでだな」

「そうでした。それで——」

「反乱組織がオンドール侯の下、集結して我がアルケイディアに対して反乱を起こす。場所は恐らくだがダルマスカの何処かだろうな。亡きダルマスカ王ラミナスとオンドール侯は盟友だ。ダルマスカ再興を望む者達にとつては頼りやすいし、我が国の弱体化を望む反乱組織も支援するだろう。そして我が国と反乱軍の戦いが始まれば、国境に軍を集結させているロザリアは美味しいところをつまみ食いしようとダルマスカ保護とか適当な名目を大儀に参戦してくるといふわけか」

「・・・やっぱりわかつてたんですね？」

「さつきも言ったがそんな分かりきっていることは聞くな。それにまともに対応しろと言ったのは卿ではないか」

「はあ・・・。もういいです」

グレイスは満面の笑みを浮かべているピクシウス卿にそう言った。

グレイスはピクシウス卿と別れると自分が指揮する第2艦隊の旗艦ネメシスに乗り込んだ。

どういいうわけか第12艦隊を歓迎する式典を開くとピクシウス卿が言い出したのだ。第12艦隊はケルオン大陸に寄るだけでそのまま北西に進みラバナスタに向かう予定なののだ。

ここにはピクシウス卿の思惑があり、しばらく最新の戦闘機ばかりの第12艦隊が停泊すると思わせれば反乱組織へのいいハツタリになるからという意図はある。

しばらくすると乗り込んでいる部下から報告が入る。

「北東に艦影！ 第12艦隊です!!」

グレイスは北東の空をみる。

第12艦隊の陣容は以下の通りである。

アレキサンダー級大型空母×1隻

シヴァ級軽巡洋艦×1隻

イフリート級巡洋戦艦×2隻

カトブレパス級駆逐艦×3隻

カーバンクル級軽巡洋艦×1隻

その他小型飛空艇多数と第2艦隊の陣容とは比べ物にならない。

まずシヴァは先の事故で壊滅した第8艦隊に所属していた最新の軽巡洋艦で、防御力はカーバンクル級より劣るものの高い機動性がある。

そして新型空母のアレキサンダーは高い防御力を誇り、小型戦闘機のCB58ヴァルフアーレ戦闘機専用空母なのだ。

CB58ヴァルフアーレ戦闘機などグレイス率いる第2艦隊にはまったくないというのに。

まあこの辺では空中戦なんてめつたいおきないし、対地攻撃力の高いイフリートの方が需要があるのだが。

そして何より上からの報告によれば第12艦隊は最近ドラクロア研究所が開発したというヤクト対応型飛空石完備だという。

ヤクトの多いケルオン大陸が主な活動地域のケルオン派遣軍にこそ必要だ。

そうすればヤクトで燻っている反乱分子を根絶やしにできるというのに。

いや、ロザリアとの開戦に近いこの状況ではヤクト・エンサを飛び越えて直接ロザリアに攻め込めることの方が重要か。

そんなことを考えていると機械を弄っている部下から報告が入る。

「アレキサンダーより入電！」

「繋げ」

「はっ！」

『西方総軍所属第12艦隊、旗艦アレキサンダー。艦長のザルガバースだ。貴艦隊の指

揮官に応答願う』

『ケルオン派遣軍所属第2艦隊、旗艦ネメシス。艦長のグレイスだ。ピクシウス総督閣下直々に貴艦隊を歓迎したいとお考えである。出来れば新都イスタナまでご同行願いたい』

『総督閣下のご好意感謝するが、我が艦隊はヴェイン・カルダス・ソリドール臨時独裁官閣下の命を受けている。よってピクシウス閣下に密命ゆえ、イスタナに行けぬとお伝え願う』

グレイスはザルガバースの返答を聞き、この前の政変の事を思い出した。

元老院議長グレゴロスによるグラミス皇帝暗殺。それに伴うヴェインの臨時独裁官就任。

第8艦隊壊滅の件で失脚寸前だったヴェインが臨時とはいえ一気に国家元首になった。

この政変のせいで帝国は行政に混乱をきたし、一部では暗殺の真犯人がヴェインではないという噂もある。

だが、帝都の市民や軍部はヴェインの独裁を歓迎した。

それもその筈、ヴェインによつて積み重ねられた戦勝や業績の高さから帝都の市民にとつては文字通り英雄なのだから。

そして軍部はロザリアの脅威が迫っている今、「戦争の天才」と称されるヴェインが国家元首に立つのは喜ばしい事態であった。

その影響はケルオン派遣軍にも届いており、兵の士気は高まり続ける一方だ。

『了解。部下に伝えさせよう。それで私は貴艦隊に同乗し、帝都へ帰還せよとの命令が下されている。受け入れを頼む』

『・・・了解した。シヴァで受け入れる。パンデモニウムに乗り込め』

『了解』

そう言つてグレイスは腹心の第7局のジャッジ数名と共にパンデモニウムに乗り込んだ。

第四十一話 背徳の皇帝

先程からずっと下へ下へと階段をが續いていている。

「ミストが乱れているわ」

フランが呟くように言った。

「・・・またなにかでるのか？」

「王墓の時に感じたミストと似ているわね」

「つたく面倒だな」

フランの返答にバルフレアが顔を顰めた。

「なんか寒くないか？」

「地下だから・・・かな？」

「それ以外にもなにかありそうな気はするがな。おつ、ようやくひらけた場所にでたな」
話しているうちに階段が終わり、大きい広間に出た。

その広間はドームのようになっており天井に黄道十二宮の紋章が描かれている。
そして奥の大きな扉に双魚宮の紋章が描かれていた。

「・・・どうやらバルフレアの嫌な予感的中したみたいだな」

その言葉を聞いた全員がセアの方を向く。

「なんのこと？」

「ここに入る前に言ってただろ。バルフレア」

「霸王の伝説の話か？」

「いや、その後の話で俺がミリアム遺跡に宝があるかもよって言っただろ」

「・・・霸王の財宝と同じオチってか」

バルフレアは嫌そうな顔をした後、ふと湧いた疑問をセアに投げかけた。

「なんでそう思うんだ？」

「ベリアスを倒した後、話しただろ。神々に挑んだ12体の異形者のこと」

「確か、そんな御伽噺を言ってたな」

「ああ、その御伽噺の中で双魚の座を司る異形者がいる。フランの言う事を信じるなら

多分奥に居るのはそれだ」

それを聞き、全員に先程より緊張が走った。

魔人ベリアスもかなりの強敵だったのだ。無理も無い。

「その御伽噺で双魚の座を司っている存在はどのよう語られているのですか？」

「【双魚の座、背徳の皇帝マティウス。下界に暮らす人を守り統治する闇の異形者。統治の中、欲に溺れ闇に心を奪われた彼は悪神へと姿を変える。そして氷の世界を司る女神

を拘束し、生きる盾とする背徳的な行為をもつて神に戦いを挑んだ。しかし神の絶大な力の前に敗れた彼は、断末魔と共に地獄の海深くに封じられた」だっけな。確かその話の中では氷の力を操っていたっけ」

「もし本当に氷の力を操るなら、殿下が魔人を召喚すれば大丈夫では？」

バツシユの提案に全員が頷き、双魚宮の紋章が描かれた扉を開いた。

すると中から冷たい風が吹いて、思わず身を震わせた。

部屋の内部はミストが視認できるほど濃く、氷の塊があちこちにあり、中心に奇妙なものがあった。

青みがある美しい下半身が魚の女性が目隠しをされ、両手が拘束されている。

そしてその鎧の肩の部分から腕が生えており、右手に槍なのか杖なのか判断に迷う奇妙な武器を持っている。

その奇妙なものは御伽噺の中で語られた背徳の皇帝マティウスの描写と一致した。

マティウスはセア達の姿を確認すると武器を振り、その動作にあわせて周りの氷が砕けた。

そして砕けた氷が集まって氷の精霊のようなものが何個も形成された。

それは御伽噺の中でマティウスが使役した氷のアーゼという使い魔のようなものだった。

アーシエは自らの魔力を青い魔石に注いだ。

すると魔石からあふれ出たミストが魔人ベリアスの形を成し、氷のアーゼを燃え盛る炎で蒸発させた。

ベリアスはそのままマティウスに向かって突っ込み、武器を振り下ろす。

マティウスはそれを武器で受け流し、空中を泳ぐように後方に下がり、（ブリザジャ）の魔法をベリアスにめがけて放った。

それと同時にマティウスは武器をベリアスに向けて凄まじい速さで突っ込んだ。

ベリアスは正面から炎で飛んできた氷を蒸発させ、自分の周りに火柱を上げる。

火柱がマティウスに当たり拘束されている女神が悲鳴あげたが、マティウスは何の苦も無く火柱を受け止め、魔法で火柱を凍らせた。

「すげえ……」

ヴァンが思わずそんな言葉をこぼした。

周りの皆も声には出さないがそんなことを思っていた。

ベリアスとマティウスの戦闘に気をとられているとベリアスの炎から逃れた氷のアーゼがアーシエに襲い掛かった。

すぐに反応したバツシュの遠隔攻撃で氷のアーゼの攻撃のそれだ。

アーシエの近くに居たヴァンが氷のアーゼに斬りかかり、氷のアーゼが怯んだところ

をセアが真つ二つに両断した。

そして周りを警戒しながら異形者達の方に目を向けるとベリアスが徐々に劣勢になっていった。

バルフレアが銃でマテイウスの左腕を狙撃するとマテイウスは「ブリザド」をこちら目掛けて放った。

全員が一齐に回避し、セアがそのままマテイウスに突っ込み、右腕目掛けて思いつきり剣を振り下ろした。

するとマテイウスの右腕が宙を舞い、拘束された女神が奇声をあげた隙にベリアスに背中から貫かれたマテイウスは左腕で武器を掴み、ベリアスの腹部を貫いて壁に叩きつけた。

ベリアスはミストを放ちながら消えていき、マテイウスはセアに目掛けて武器を振り下ろした。

セアはベリアスが貫いた腹部の穴に剣を差込んで強引に引き裂くとマテイウスはミストを放ちながら消えていき、青い魔石が残った。

セアがその魔石を拾うと

「これは【霸王の剣】を手にいれた後で大僧正に渡そうと思うけど別にいいか？」

セアの提案に全員が頷き、セアは魔石をポケットにいれた。

第四十二話 千年神戦争

「御伽噺を聞きたい・・・？」

「魔人といい、先の異形者といい、貴方の知っている御伽噺がある程度の真実を含んでいる可能性があります。現に王家にしか伝わっていないはずの魔人の伝承を貴方は知っていた」

「確かにそうかもしれません、その御伽噺の中では彼ら異形者は人が倒せるような存在ではない筈ですが・・・」

「どうだかな。神話や伝説なんてものは大抵誇張されてるもんだ」

バルフレアの言葉を聞き、セアは暫く頭を悩ませていた。

そして・・・

「参考になるか知らんが俺の知ってる御伽噺は数百年前のバレンディア西部で伝わってた話だぞ」

そう言つてセアは御伽噺を語り始めた。

遙か昔、日の昇る場所から日の沈む場所まで支配していた神々がいた。

その当時の人は知恵を持たずに寒さに打ち震えていた

それを哀れんだ神が火の扱い方を人に教え、大地に楽園を築き、そこに人々を住まわせた。

みるみるうちに知恵を付け、多くのものを生み出していった。

しかし、知恵を身につけた人々は楽園だけでは満足できず、外の大地を開拓していった。

そして外の大地で人々が土地を巡って戦乱を起こすようになり、神が教えた火も使われていました。

それを知った神々は怒り、外の大地を業火で薙ぎ払い、燃やし尽くした。

しかし暫くたつと再び外の大地を開拓し、戦乱を起こしました。

神々はその度に外の大地に出て行った人々を滅ぼしました。

ある時は外の大地にいた人に雷を落として、ある時は外の大地ごと人を吹雪で氷漬けにして、

ある時は地割れを起こして人を奈落の底に落として、ある時は津波を起こして人を水の底に沈めた。

それでも人々は時間がたつと楽園を捨て、外の大地を開拓していきました。

神々は自分達は人々を導くには次元が違いすぎるのではと考え、異形者を創造しました。

彼らは地上で神々より与えられた使命に従い、地上を統治していた。

しかし彼らの一部が生物の悪意をまのあたりにして徐々に変わり始めていた。

そんな時、黒き翼を持つ墮天使アルテマが異形者達の最高位である聖天使アルテマと接触。

この接触が切欠で黄金の翼を持つ聖天使アルテマは神々に反旗を翻した。

するとすぐさま人々を導く立場にあつた統制者ハシユマリムが聖天使アルテマに従つた。

神々に従順であつた他の異形者達も長き時間の間に変わってしまった。

魔人ベリアスは失敗作と位置づけられ、何の役目も与えられなかつた事に怒り、

背徳の皇帝マティウスは下界の統治中に欲望の素晴らしさを知り、欲望のままに生きることを望み、

密告者シユミハザは己が神の護衛というやりがいのない仕事だつた事に不満を抱き、

暗闇の雲ファムフリートは神々が己が姿をおぞましいと鎧に閉じ込め封じ込めた事に怒り、

憤怒の霊帝アドラメレクは異界の魔物達に慕われ、彼らの主として外の世界に行くことを願ひ、

死の天使ザルエラは天を呪う者たちに魂を侵されてしまい、

不浄王キユクレインは神々が己を汚れを吸う存在として生み出したことに
断罪の暴君ゼロムスは人を断罪する時の快感に心を奪われ、

審判の霊樹エクステスは審判者として心を無にしてきた結果、世界を無に返そうと
し、

輪廻王カオスは世の中にはびこる混沌の渦に巻き込まれ、

このようにして変わってしまった彼らは聖天使アルテマを盟主として神々に反旗を
翻した。

この時に聖天使アルテマに従った異形者達を俗に闇の異形者という。
神々と闇の異形者達は争いは1000年もの長い時間に及んだ。

この戦争を千年神戦争と呼ぶ。

最終的に闇の異形者達に勝利した神々は彼らに獣印を刻み、封じた。

その後、人に失望して神々は楽園を海の底に沈めて姿を消した。

こうして神の時代は終焉を告げ、現在のように血で血を洗う力の時代を迎えること
なる。

「これが俺の知っている御伽噺の内容ですね」

「獣印というのがン・モウ族の伝承にある魂がミストに繋がれた事かしらね」

「さあ、今のところ御伽噺に登場した魔人と背徳の皇帝は実在したってことくらいしか

わからん」

セアは首を振りながらそう言った。

「そんなわかんないことよりさ、早く奥の部屋に行つて【霸王の剣】をとつたほうがいいんじゃない？」

ヴァンの言葉に全員が思考を中断する。

そしてヴァンの方を全員が見た。

「な、なんだよ？」

「とりあえず馬鹿弟子の言うとおりでな。とつとつ【霸王の剣】を持って神都に戻ろう」
セアはそう言うとおりの扉を開き、入っていった。

他の全員もそれに続いた。

第四十三話 霸王の剣

ミリアム遺跡の最も奥にある覇者の間。

細長い通路のような部屋で真ん中あたりに入口に戻る為の転移装置があり、

そして階段を上りきった奥にある壁には幾つもの光る歯車のような物が回りながら

【霸王の剣】を守っていた。

アーシエが近づくと持っていた【暁の断片】が光った。

すると通路を照らしていた装飾の光が消える。

そして歯車のような物から音が出ると共に光が消え、停止した。

ひとつ停止するとまるで呼応するかのように歯車のような物が次々に同じように停止していく。

全て停止すると中央に納められていた【霸王の剣】が光を纏って浮かび、ゆっくりと降下してきてアーシエの目の前で止まる。

アーシエが剣の柄を掴むと纏っていた光が消え、浮力を失った剣を支えきれずに床に打ち付けた。

「こいつで本当に破魔石が壊せるか【暁の断片】で試してみれば？」

「えっ?」

ヴァンの提案にアーシエが少し驚き、ヴァンを見る。

「ヴァンにしてはいい案だ。『暁の断片』は役立たずなんだろう」

バルフレアにもそう言われ、アーシエは『暁の断片』を床に置いた。

すると『暁の断片』が光ってミストが僅かに溢れ出てきた。

「石のミストが——」

「ざわめいてるわ。劍を恐れてる」

そしてアーシエはまた目の前に最愛の夫ラスラの幻影が写った。

ラスラの幻は目を瞑りゆっくりと首を横に振る。

まるで破魔石を壊してはいけないというように。

アーシエは劍を振りかぶると戸惑いの表情を浮かべ、目を瞑り劍を振り下ろした。

劍は『暁の断片』の真横のなにもないところにあたった。

その様子を見てラスラの幻影は頷き、微笑みながら消えていった。

そしてラスラの幻影が消えるとすぐに『暁の断片』は光を失った。

「——ミストが消えた」

フランがそう呟くとアーシエは言った。

「この劍なら、破魔石に勝てるわ」

「当たればな」

「・・・まったくだ」

バルフレアとセアは呆れたように言う。

アーシエが破魔石を壊す気がなかったことに2人とも気づいていたからだ。

それにセアはまた見えていたからでもある。

バルフレアは転移装置の方に歩き出すとセアもその後が続く。

「ねえ」

ヴァンもバルフレアの後を追おうとしたが呼び止められ、振り返った。

「また、あの人が見えた？」

「オレには——」

見えなかった。

兄さんの姿も——

——もう、何も」

ヴァンの言葉にアーシエは少し戸惑いの表情を浮かべた。

すると・・・

「おい馬鹿弟子！ サツサと王女様を連れて来い!!」

セアの叫びを聞き、ヴァンはアーシエの手を掴んでセアの方に走って入った。

第四十四話 神都炎上

セア達がミリアム遺跡から出ると遺跡の管理をしている青年のキルティア教徒が話しかけてきた。

「あ、出てこられたんですね。出来れば一刻も早く神都に戻って欲しいのですが・・・」
「?」 一体どうしたんです?」

「それは——」

青年は事情を説明しようとするけど辺りが影になって暗くなった。

そこでセア達は空中を見上げると第12艦隊の姿があった。

「オレ達がかここに居るのがバレたのか?」

「いや、それなら前みたいなのにヴァルファールを降下させているはずだ」

セアの言ったとおり、第12艦隊はミリアム遺跡に目もくれず、北西の方向に進んでいった。

ヴァンやパンネロがそれを見て安堵している。

「見て」

フランの方に振り向き、指差している方向をみた。

すると神都があつた方角から黒い煙が上がつていた。

「あの艦隊は少し前にブルオミシエイヌで停止していました。それを見てン・モウ族の長老は神都の方に走つていってしまいました。私達も向かいたのですがここをがら空きにするわけにはいかず……」

青年の言葉を聞くとセア達は神都に急いだ。

第12艦隊旗艦アレキササンダーに乗り込んでいた第7局のジャツジ達は不満をぶつかけあつていた。

「何故ラーサー様をお迎えにあがるだけでこのような事態になつたのだ!」

「これも第2局の戦争馬鹿のせいだ!!」

「それもそうだが、あんな男にキルティア教会との交渉を任せるなど臨時独裁官閣下はなにをお考えか!」

ジャツジマスター・グレイヌは自分の部下に冷ややかな目線を向けていた。

だが、不満のひとつやふたつを言いたくなるのも致し方ないかとも思う。

自分達が先程神都でやってきたことはキルティア教会に喧嘩を売るに等しい行為だ。

ヴェインがキルティア教会の力を量り間違えているとは思われないが幾らなんでも強

引に過ぎるような気がする。

帝都に戻ったら今回の密命についての意図をヴェインに説明してもらわねばなるまい。

そう思いながらグレイスはザルガバースの方に顔を向けた。

ガブラスは別室でラーサーの気を宥めているし、ベルガは神都に置いてきた為、このコントロールルームにいるジャツジマスターはザルガバースのみだ。

神都でベルガからヴェイン直々の命令書を見せられたときに顔を顰めていた。

やはり自分と同じく今回のことに少々不満——というよりは不安があるのだろう。アルケイディア帝国もキルティア教圏国なのだ。

今回の件はヴェインを快く思っていない者達にとつては謀反を起こす大義名分になる。

それに信仰心の高い者達もそれに加担するだろう。

そんなことをグレイスが考えていると

「いずれ償うことになるう」

ザルガバースが小さく呟いているのが聞こえた。

確かにいずれ俺たちは今回の事で償わねばならない時がくるだろう……

キルティア教会直轄領神都ブルオミシエイスにて。
神都は悲惨な状態になっていた。

僧兵団の団員やキルティア教徒、避難民の死体はその辺に転がり、
避難民のテントには火がつけられ、黒い煙をあげている。

焦げ臭さと血の匂いが充満していた。

あまりの光景にパンネロが気を失い、倒れかけたがヴァンに支えられた。

「あなたたちは……」

左腕を斬りおとされ、青白い顔した蹲っているキルティア教徒の男性が話しかけてきた。

「一体何があったのですか!？」

「アルケイディア帝国軍が、ここに、きたんだ。僧兵団、団長が……帝国、軍と交渉している、いき……なり向こうのジャツ……ジ達が剣を、抜いて……襲い掛かってきた」

そういうとその男は空を見ながら呟いた。

「神を恐れぬ愚か者共に裁きあれ……ファールム」

言い切るとその男はまるで糸が切れたように倒れ、絶命した。

「おい、あんたら!!」

避難民の人がセア達の方を見て叫んだ。

「なんだ？」

「あんたらも早くここを離れたほうがいい!!まだ神殿の方にジャツジ共が残っているみたいだ!巻き添えを食らうやもしれん。早く逃げるんだ!!」

「さて、神殿にはまだジャツジがいるのか？」

「そうだ!俺たちは家族を連れてユルバにでも紛れ込むつもりだ!!悪い事はいわん!早く逃げい!!」

避難民はバルフレアにそういうと家族を連れてパラミナ大峡谷に出て行った。

セア達はまだジャツジが神殿にいるということで神殿の方に向かった。

途中で凄惨な光景も目の当たりにした。

槍で貫かれて息絶えた僧兵。死んだ親の横で泣き叫ぶ子ども達。

家族と離れ離れになり、探している人物。

火傷をして呻きながら這いずり回る避難民。

帝国軍に視認されまいと大きい窪みに逃げ、その後から逃げてきた避難民の重さで圧死した死体。

まるで戦場だとセアは思った。

神殿の入り口に入るとキルティア教徒が話しかけてきた。

「あなたたちはご無事でしたか！」

「ええ、ところでまだジャツジが神殿に居ると聞いたのですが」

「光明の間で大僧正がジャツジを説得なさっているはずですよ」

「大僧正がジャツジと一緒に!?なら尚更ですよ!!」

「やめてください!あのジャツジは・・・」

「どうしたのです?」

「あのジャツジは化物です・・・」

キルティア教徒はそう言うのと光明の間に入る入り口にある広間を見た。

アーシエもその教徒の視線を追うとそこには数十名の僧兵の死体が転がっていた。

「あのジャツジマスターはこれだけの数を一撃で・・・!」

そこまで言うのと教徒は膝を就き、泣き始めた。

そのジャツジが僧兵を殺す瞬間を思い出したのか酷く震えている。

ン・モウ族の長老がその教徒に近づき、その教徒を宥めながら言った。

「その後、大僧正がそのジャツジに話があると行って光明の間に連れて行った。どうしても行くというのならお気をつけなされ」

セア達は互いの顔を見ると頷き、光明の間の入口の扉を睨みつけた。

第四十五話 傲慢な人の力

アナスタシスと謁見をした光明の間は悲惨な状態になっていた。

殆どの神像が破壊され、奥に残っている女神ファアラムの偶像も半壊している。

そしてこの前来た時にアナスタシスが瞑想をしていた場所で女神ファアラムの偶像を眺めるように佇んでいた。

甲冑を身に纏い、右手に血が滴る金色の剣が、そして背中にはジャツジの紋章が描かれたマントを羽織っている。

主に他国への武力行使などを担当する第2局のジャツジマスター・ベルガである。

アーシエ達が扉を開けると首だけ捻ってアーシエの方を見た。

「ほう、亡国の王女か。帝国への復讐を願って『霸王の剣』を求めたな？」

ベルガはアーシエの姿を認めるとアーシエの方に近づく。

するとベルガの影になって見えていなかったがアナスタシスが倒れている姿が見えた。

一同は驚きも声を漏らした。

「剣の在処を吐かんでな」

ベルガが何の気負いもなくそう言った。

「人間の力を信じず、神などに縋った者の末路よ」

ベルガがそう言い終わるとベルガの背後に影が踊った。

だがそれも一瞬ですぐに消えた。

「あいつは!？」

ヴァンはその影に見覚えがあった。

いや、ここにいる全員に見覚えがあった。

フランの妹のミュリンが人造破魔石に心を奪われていた時に見た影と同じだったのだ。

ベルガは軽く剣を振るうと体内から青白い霧のようなものが溢れ出てきた。

「人の体からミストだ?!」

「このミスト、ミュリンと同じよ!石の力にとりつかれてる!」

バルフレアとフランはそう言うのとベルガは軽く笑った。

「笑わせるな。人造破魔石は人間の力だ! 神々に挑む大志を抱いた人間が——その知

恵で生み出した人間の武器!」

ベルガはまるで自分の言葉によっているかのように続ける。

「与えられた破魔石に頼り切っていたレイスウォールなど——偽りの霸王にすぎんわ

!!

ベルガの言いようにアーシエは顔を歪ませる。

ベルガは女神ファアラムの偶像に向かって払った。

すると女神ファアラムの偶像は音をたてながら跡形もなく崩れた。

その音を聞き、神殿の奥にいた三十人前後のジャツジが光明の間に入ってくる。

「見ておれ！ やがて全イヴァリースに真の霸王の御名がとどろく！ 神々の意志を打ち破り、歴史を人間の手に取り戻す——」

「その名はヴェイン・ソリドール！」

「あのお方の築く歴史にダルマスカの名は不要！ レイスウォールの血筋ともども——時代の闇に沈めてくれるわ!!」

ベルガは左手で腰に提げていた剣も抜き、凄まじい速さでアーシエの目の前に近づき、剣を振り上げた。

アーシエの隣にいたバツシユがベルガの剣を受けとめる。

(——ッ！)

だが、ベルガの剣に押し負け、バツシユは体勢を崩した。

ベルガはそれを見るとバツシユを払いのけ、再びアーシエ目掛けて剣を振る。

だが、セアが突然横からアーシエを蹴飛ばして場所を移動させ、空振りしたベルガの

肩口から剣を突きたて胴体を貫く。

ベルガは激痛をかみ殺すとセアに目掛けて剣を振るったがセアは数歩下がってその剣を避ける。

「・・・今のは致命傷だと思っただがな」

「確かに今のは人造破魔石がなかったら致命傷だっただろうな」

ベルガはなんでもないのでそう言うと言いつつミストがベルガの体を纏い始めた。

セアは直感的にベルガから流れていた血が止まったのだと感じた。

「セアー！」

「馬鹿弟子！お前は他の奴等と一緒に周りのジャツジをどうにかしろ！こいつは俺がやる」

「そういうことだ。サツサとしろヴァン」

ヴァンは何処か納得していなような表情でバルフレア達と一緒にジャツジ達に方向に向かっていった。

「ほう、俺の相手はお前一人で勤まるのか？」

「・・・その言葉そのまま返す」

「ならば一切の遠慮は無用だな」

「避難民を虐殺してる時点で遠慮もなにもないだろうが」

「ははっ！確かに!!!」

ベルガはまるで獅子のような速さでセアに向かって剣を振り下ろす。

セアは咄嗟にその攻撃を受ける。

（なんて速さと重さだ・・・それに幾らジャツジの鎧が軽くて丈夫な金属で出来ているとはいえ、全身に甲冑を纏った奴が、いや、仮に生身だったとしても人間に可能な動きじゃねえぞ）

セアは軽く冷や汗を流すとその攻撃を受け流し、ベルガの足を目掛けて剣を横に振る。

飛び上がってベルガは回避し、セアに目掛けて剣をたたきつける。

セアはその斬激を受け流すとベルガの首に目掛けて剣を突き出したが、ベルガの左手の剣でいなされた。

ベルガはいなす時に僅かに前に力をかけていたお陰でセアの背後に背中合わせで地面についた。

そしてセアもそれに気づき両者が互いに振り向き様に一閃。

ベルガの剣がセアの体を一等両断していた。

セアの上半身が無様に地面に横たわっているのをベルガは確認した。

「久しく見る強者だ。ゼクトと競い合っていた頃を思い出したぞ・・・」

ベルガは少し名残惜しそうにそう言いセアを見るとアーシエ達の方に向かっていった。

・・・セアの上半身が黄色い霧になっていつていることに気づかずに。

第四十六話 記憶

「こは・・・どこだ・・・？」

・・・？

「「万歳！」」

「「グレキア王国万歳!!」」

馬に跨り、俺は道を進んでいた。

そして後ろに武装した兵士が何万も続いている。

ああ、戦に行くんだったか。

「今回の戦は勝ち戦だろう」

「ああ、なんとたつてあの国は南部諸国を併呑し続けていると言つても未だに我がグレキアを始め、シュターン、キャメロットと言つた大国と比べれば小国という括りからは抜けれんわ」

「そうだ！それにあのキャメロットも今回ばかりは手を貸してくれるらしいしな」
「ああ、むしろ今回はそっちの方が要注意だろう。戦闘中に牙を剥きかねんしな」

ええと、何処に戦をしにくんだっけ。

確か・・・

ん？なんか光景が歪んで・・・

全く別の光景に・・・

なんだここは？会議室か？

「申し訳ありません・・・王都に追いつめられるまで敗北を重ねることになろうとは」

「だが、まだ残存兵力を結集すれば勝ち目はあるはずだ」

「しかしキャメロットが寝返ったこの状況で誰が軍を率いるのだ？」

「確かにあんな小国とキャメロットが休戦を合意したなど予想外だったからな。大国の面子というものがあるだろうに一体あの国はどんな条件を提示したのだ？」

「それよりも前線の兵士が言っていた化物とは一体？」

「そんなもの腰抜けの戯言だ!!」

「戯言？大陸西部に覇を唱え、他国と何度も戦ってきた我が軍の精鋭が戯言を抜かした
というのか!!」

負けたのか・・・？

我々が・・・？

「父上」

うん？

「いくさ、まけちやうの?」

「いや、私がいる。何も心配することはないよ」

そうだ、息子がいたんだった。

「あなた・・・」

「お前も心配するな。大丈夫だ」

「ならいいのですが、私の相手はしてくださらないのですか? 相変わらず女心がわからないのですね」

俺から言わせればお前の方が相変わらずだ。我が妻よ。

「悪いが忙しいのでね」

そしてまた場面が変わる。

ここは・・・王宮の一室だな。

なにやら黄色い霧のようなものが出ているが・・・

呆然としているとなにかが飛び掛ってきた。

思わず俺はそのなにかを斬り捨てる。

だが、その斬つたなにかの顔に俺は見覚えがあつた。

これは・・・俺の息子の・・・

また場面が変わる。

今回はまるで宙に浮いているかのようだ。

そして眼下に広がる世界は凄惨としか言いようのない光景が広がっている。

不気味な黄色い霧が出ており、動く屍共が美しい王都を徘徊している。

その中で動く屍の返り血を浴びながらどこか悲しげでありながらも獰猛な笑みを浮かべ剣を振り続けている。

その者は激怒や絶望、狂喜……この世で激情と言えるものを詰め合わせたような狂ったような叫び声を上げている。

やがてその者以外に動くものはなくなり、王都は赤色に塗りつぶされ、切り裂かれ原形を留めていない屍がそこら中に転がっていた。

王都を朱に染めたその者は涙を流しながら返り血に染まった赤黒い剣を自分の腹に何度も刺しながら狂ったように噛み続けている。

そして唐突に分かった——否、思い出した。

あれは俺だ。

「……っ！」

まず目に入ったのが血だまり。

俺はベルガに斬られたんだったな。

それにしても俺は気絶して夢を見ていたのか？

最後に気絶したのは確か二百年以上前だ。

いや、そんなことは後でいい。

まずさつきから戦っている仲間を助けに行かなくては。

夢のせいで最悪の気分だ。

鬱憤晴らしだ。思いつきり派手に暴れよう。

俺の体からミストが溢れ出した。

ジャツジが吹っ飛んでいく。

バルフレアが銃の先端部分を持って、思いつきり殴りつけたのだ。

そういう使い方をすると銃は鈍器として結構優秀だったりする。

最もあまりやりすぎると銃が変形して弾を撃てなくなる可能性もあるが、命に比べたら安いものだ。バルフレアは割り切っていた。

それにそれなりに銃火器について知識を持つているので簡単な修理は自分でできるからでもある。

イヴァリースでは銃の生産法が確立しておらず、大金持ちが道楽で開発する以外は遠方の国からの交易品くらいでしか手に入らない。

「ちっ、次から次へと面倒だな」

「自分から首を突っ込んだんでしょ？」

「ああ、そうだな」

バルフレアはそう言うのと目の前のジャツジを睨みつけた。

するとそのジャツジの首に刃が生えた。

正確にはヴァンが後ろから突き刺したのだが。

「お前意外とえげつねえな」

「そうか？」

ヴァンは不思議そうな顔をしてバルフレアの方を見る。

バルフレアはその様子をみてため息をついた。

まだ10代の子どもがここまで割り切ってしまっているのかと思っただからだ。

しかしヴァンからしたら意味不明なことの上ない。

何故ならヴァンに実戦で鍛え上げたのはセアなのである。

セアの敵に対する容赦ない攻撃に比べれば自分の攻撃は甘すぎるとヴァンは思っているのだ。

はつきり言つて比べる対象が悪すぎるのだがヴァンは全く気づいていない。

実はそのせいでパンネロから若干引かれてた次期があつたのだが、パンネロも数ヶ月も似たような光景を見ていたらなれてしまった。

案外、家畜を殺すのになれるのと似たようなことなのかもしれない。

「そーいや、セアは・・・」

そう言つてヴァンは入り口の方を見た。

そこには血で鎧が赤くなつたベルガが立っていた。

そしてそのベルガの背後に黄色い霧が立ち上っていた。

第四十七話 冷たき者

ベルガがバルフレアとヴァンに斬りかかろうとしたその時だった。

背後から形容しがたいおぞましい気配を感じたのは。

ベルガは首を回して後ろを確認する。

そして……

「……ッ！」

予想外の光景に思わず振り返る。

先程胴体を真つ二つにして斬殺した筈の銀髪の男が無傷で立っていたからだ。

それだけでも信じられないというのに何やらミストを纏っている。

この男も人造破魔石を埋め込んでいるのかとベルガは考えるが自分で否定する。

人造破魔石はドクター・シドが6年の歳月をかけて完成させた代物だ。

どこの誰とも知れないような人物が持っているはずがない。

ならばダルマスカやナブラディアの王家の証のような神の造りし破魔石だろうか？

いや、それもありえないはずだ。

シドはあれは人造破魔石より力はあるが碌に制御できない出来損ないだと言ってい

たではないか。

勿論シドが間違っている可能性がないわけではない。

だが2年前の戦争でのナブディスの惨劇を引き起こせるほどの力が生身の人間に制御できるとはベルガはとも思えないのだ。

となると自分が知らないなんらかの力なのだろう。

それならば幾ら考えても絶対には答えはでない。

ベルガはそう考え、警戒しながらあたりを見回す。

現在ヴァン達とまだ戦えているジャツジが約20名、まだ神殿内にいるのが約20名。

第12艦隊が神都を離れる時にベルガと神都ともに第2局のジャツジが約80名だから実に約半分のジャツジを失っている。

(あの女どもめ……)

実は言うところアルケイディアの中でも精鋭であるジャツジは総兵団を圧倒していた。

計算外だったのがアルシドが連れてきた美女軍団である。

ジャツジ相手に互角以上の戦いを繰り広げた。

そのせいでかなりの損失を第2局は蒙っていたのである。

(ロザリアの脅威がある今はこれ以上の損失は避けたい。となると……)

ベルガは剣を構え、力を欲する。

すると人造破魔石から先程以上にミストが溢れ出した

(とつとと蹴散らすのみだ)

ベルガは人とは思えぬ速さでセアとの距離を詰め、右肩に斬りかかる。

セアは避ける素振りもみせず、ベルガの剣が肩口から胸の辺りまで深く入った。

それに顔色ひとつ変えないセアを見てベルガは本能的に深く入った剣を離して飛びのく。

直後、セアがミストを纏わせた剣を振りぬく。

間一髪ベルガはセアの斬撃を紙一重でかわしたが体勢を崩した。

その隙を逃さず、セアはベルガに向かって突きを繰り出す。

ベルガはそれを転がりながら避け、セアの胸に突き刺さったままの剣の取っ手を掴み、その勢いのままセアを切り裂く。

セアがミストで回復している間にベルガは体勢を整えて再び斬りかかる。

そしてそれをセアが向かえうち、再び激しい斬りあいを始めた。

「どうなつてんだこりゃ？」

バルフレアは目の前の光景を見て、そう呟く。

何故かセアの体からミストが出ており、ベルガと互角にやりあっている。意味不明な光景だ。

「おい、ヴァン。セアがああなのは知ってたのか？」

「ぜんぜん」

ヴァンも頭に？マークが何個も出ているような顔をしているので本当に知らないの
だろう。

嘘という可能性もあるにはあるが、ヴァンがそんな芸当ができるとはバルフレアには
思えなかった。

セアの周りのミストがおかしいということは出会ったときからフランが言っていた。

ということとは……

「あいつもベルガと同じなのか？」

「いえ、違うみたいね」

いつの間にかバルフレアの隣に来ていたフランがそう答える。

「どういうことだ？」

「彼のまわりのミストが凍えているって前に言ったわよね」

「ああ、ルース魔石鉱の時にな」

「そんなのオレは聞いてないぞ!？」

「ヴァンは少し黙ってる」

「・・・」

「で、どう違うんだ？」

「彼の周りのミストが凍えていたんじゃないか。彼がミストを凍えさせていたんだわ」

「どういう意味だ？」

「要するに彼の体は冷たすぎるミストが固まってしまったようなもの」

「・・・つてことはあいつの体はミストはできてるつて言うのか？」

「そういうこと。現にミストが僅かに熱くなつて彼の輪郭がぼやけてしまっている」

フランにそう言われて改めてセアを見ると確かに輪郭がぼやけているように見える。

それにベルガのようにミストが溢れ出ているというよりは体が溶けて出ているように見えた。

「つてことはセアはミストの嵐に巻き込まれたときにそうなたんじゃないか」

「あいつが嘘をついてないならな」

ヴァンの言葉にバルフレアはそう返した。

ベルガはセアとの戦いで徐々に劣勢になりつつあった。

なにせセアは間接を無視した攻撃を繰り返り出し、こちらが攻撃しても動揺すら見せず
に攻撃してくるのだ。

ベルガも人造破魔石の力で傷を治すことはできるが痛いものは痛い。

このままではやばいと感じ、もつと力を欲し続ける。

が、それが仇となった。

「ガッ!!」

急に体に激痛が走り、思わずベルガは剣を離し、蹲る。

予想外の展開に思わずセアは呆然としたが、直ぐにベルガを警戒しながら距離をと
る。

だが、ベルガ苦しそうに胸をかき始め、転げ周る。

やがてベルガの体から青白いミストが解き放たれたかと思うとベルガはそのまま倒
れた。

「ベルガ様!!」

「ジャツジマスターが倒れた! 引けー!!」

「クソツ!!」

アーシエ達を相手取っていたジャツジ達が外へ逃げていく。

そして奥にいたジャツジも数名外へ出て行った。

第四十八話 新たな目的

セアはベルガの鎧を外して、体を調べた。

「げっ……」

ベルガの体の右胸辺りを中心にミイラ化してしまっている。

それにあちこちに石の破片が右胸から円を描くように体に食い込んでいる。

おそらく人造破魔石を右胸あたりに埋め込んでいたのだろう。

「体に人造破魔石を埋め込んでたみたいだ」

セアはそう言うのと倒れているアナスタシスの方を見る。

「大僧正は？」

バルフレアに問いかけると首を横に振った。

「どうやら既に事切れていたようだ。」

「ねえ、ラーサー様は？」

アナスタシスの遺体を置き、パンネロが尋ねた。

「が、その答えはここにいる七人以外の人物から返ってきた。」

「ジャツジ・ガブラスが連れ帰った」

カナートの肩を借り、アルシドが光明の間に入ってきた。

「アルシド!？」

「奴も来ていたのか」

アルシドは腰を下ろすとここまでの状況を話し始めた。

「ラーサーは争いごとを避けようとおとなしく従ったんですが——ジャッジ・ベルガが暴発してね。取り巻きのジャッジどもの相手をするのが精一杯だった」

強さで言えばベルガが率いていたジャッジ達とアルシドが率いてきた部下達は大した差はなかった。

だが、ベルガ達が約80人に対しアルシド達は15人。

数の差に押し負けてしまったのである。

「で、姫——あなたをロザリアに亡命させたいんですが」

「守ってやるとでも?」

「お望みとあらば命に代えても。もつとも、あなたの方がお強いでしょうが」

アルシドはベルガにまったく歯が立たなかつたのでそう言った。

実際にはベルガは倒したのはほぼセアの功績なのでアーシエよりアルシドが弱いということはないだろうが。

というかそれはアルシドもわかっているはずだが・・・

「ヴェインを恐れるあまりうちの軍部じゃ、先制攻撃論が主流で。將軍連中が勝手に戦争を始めないように姫を利用して裏工作をしかけます。それにクライスさんも手伝ってくればありがたいのですが——」

「やだ」

「そうですか・・・姫はどうです？」

「お断りします。私はこちらで仕事があるので」

そう言うときアーシェは立ち上がり宣言する。

「【霸王の剣】で【黄昏の破片】を潰します」

それは聞いたアルシドは少し納得したような顔をした直後、少し気まずそうに言う。

「石の在処はわかってませんか？」

それはアルシドの諜報網を持ってしても探りだせなかった。

それも仕方ない事だとアルシドは思っている。

何故なら破魔石を何処で管理しているかなどアルケイディア帝国の機密事項だろう。

その在処を知っている人物もヴェインが信頼している人物しか知らないだろう。

「見当はつく」

が、あつげなく破魔石が在りそうな場所を知っているとバルフレアは言った。

「帝都アルケイデイス、ドラクロア研究所。帝国軍の兵器開発を一手に仕切ってる」

仮説に過ぎない筈だが、バルフレアは破魔石がそこにあると確信しているように言った。

(そういえば……)

アルシドは6年前にアルケイディア帝国の名門の家の子どもが一人、家出したという情報を手に入れた。

かなりアルケイディア帝国上層部に関わりがある家だったのでなんとか捕らえて情報を手に入れることができないかと考えたことがある。

だが追跡を振り切られ続けた為、断念したが……

もしバルフレアが家出した人物だとすればありえない話ではない。

「オレが案内する」

「行きます。そちらの国での工作は、あなたが」

「こつちはこつちでどうにかしろと？ ご期待に添えればいいんですがね」

カナートに支えられてアルシドが立ち上がった。

「そーいや、お前どうやってロザリアへ帰る気だ？」

セアはアルシドに問いかける。

「南は聖ラルバ騎士団国とアルケイディア帝国の植民地。西はヤクトだぞ」

「とりあえず西のヤクト・デイフォールに入って南西に向かえばロザリア帝国の属庭ア

レイアにつきます。アレイアの領主は皇帝派なので安全に本国に帰れます」

「アレイアって確かケルオン大陸の西の海岸に接する地域だろ？その体で大陸横断なんてできるのか？」

「大丈夫です。まだ優秀な私の部下がいますから」

「・・・一応優秀な部下を直属にしたってのは嘘じゃなかったみたいだな」

「ええ」

「念のために聞いておくが優秀な女の部下だけを直属にしたんじゃないよな？」

「・・・さ、さあ？・・・なんのことでしようか？」

アルシドの挙動不審さにセアは仮説が事実だと確信した。

アルシドもここ居づらくなり、カナートに支えてもらいながら外へ出ようと歩き出した。

そして途中でなにかを思い出したように振り返った。

「ああそうだ。ラーサーから伝言です。」

『国と国が手を取り合えなくても人は同じ夢をみる事ができる』

アルシドはそう言うとかナートの胸元からサングラスを取り出しかけた。

「——では失敬」

アルシドはそう言うのと光明の間から出て行った。

第四十九話 セアの過去

「それで帝都まではどうやって行くんだ？」

「それより前にお前に訊きたいことがある」

セアの問いにバルフレアはそう答えた。

「俺にか？なんだ？」

「お前のさっきの力はなんだ？」

「ああ、不老不死になったときに手に入った力だ」

「不老不死？へネ魔石鉱で聞いた話じゃ不老ってだけのはずだが？」

バルフレアの言葉にセアは顔を顰めた。

そしてアーシエの方に一瞬見ると鋭い舌打ちをした。

「ああ、あの時の話は半分くらい嘘だよ」

「なんで嘘ついたんだ？」

ヴァンが状況を掴めていないのか純粹に不思議そうな声で訊いてきた。

セアは馬鹿弟子の頭のできに内心溜息をつきつつ、バツシユに話しかける。

「そういえば、なんで俺が神都に付いて行くのか疑問に思っていましたね？」

「ああ、そうだな」

「何故嘘を言っていたか、それもこの旅に付いてきた理由に繋がるからそれもついでに説明します」

「では、君は何故不老不死に？」

「それは本当です。本当に何故そうなったのか俺自身よくわかってない。ただ不老不死になったのは300年前よりもっと前だ」

「もっと前？」

「今の時代で言う言葉で言うならば古代ガルテア時代と言えはいいのかね」

古代ガルテア時代とは700年以上前の時代ことだ。

多くの国が興っては滅びていった群雄割拠の時代。

その時代に終止符を打ったのが霸王レイスウオールである。

「まあとにかくその時代にバレンディア西部にあったグレキアって国の人間なんだよ。俺は」

「へえ〜」

ヴァンが感心したような声を出した。

「戦続きではあったけどそれなりに生きがいのある生活をしていた。だが・・・バレンディアで急速に力をつけていた小国が台頭してきた」

「その小国って……」

「おそらくあなたの想像通りですよ王女様」

「……」

アーシエが気難しそうな表情をする。

それだけで周りもなんとなく察したのでろう。

……馬鹿弟子はなんか不思議そうな顔をしているから微妙だが。

「後に霸王となる男の王国とグレキア王国は戦になった。当たり前だグレキアの庇護下にあつた諸国を荒らしまくってくれたんだから。だが、どういうわけか我が国は連戦連敗した。当時はどうしてかわからなかったが化物が敵軍にいたと喚いていた兵士もいたからベリアスを軍事利用していたんだらう。まあその辺はどうでもいいか。とにかく俺たちは遂に首都まで追い詰められ、俺たちは徹底抗戦を決め込んだ。そして……」

「……そして？」

「なぜだ？」

バツシユが不思議そうに言った。

何故敵軍が現れた途端に気を失つたなど尋常ではない状況だ。

「さあな、ただ目が覚めると首都は破壊され、ミストが視認できるほど濃くでていた」

「まさか——!?!」

「ああ、今考えれば破魔石を使ったんだろうな」

「嘘よ!!」

アーシエが叫ぶように言った。

「そんな敗北が確定しているような国に破魔石を使うなんてレイスウォールがするはずないわ!!」

「お前になにがわかる？ 現実はその男の所業を見ていないお前がなにを偉そうに」

アーシエの言葉にセアは睨みながら答える。

だが、そこにバルフレアが疑問を挟む。

「だが、理解できないのは確かだぜ。緒戦に使うならともかく虫の息の敵を倒すのにわざわざ破魔石を使う意味があるとは思えないが?」

「政治的な意味があったんだろう。グレキアは今のアルケイディアやロザリア程ではないが大國だった。その大國をあの男は一方的に蹂躪してみせたのだ。そうなればどうなると思う?」

「周りの国は下手に出るようになるってか。まったく嫌だね政治つてやつは」

「概ね正解だ。グレキアの滅亡後、奴の下に馳せ参じる国があとを絶たなかつた。グレキアと互角の大國であり今のアルケイディアの原形であるキャメロット王国も、だ」

「そうして自分に従う諸国の軍と魔人と破魔石を使ってイヴァリースは統一されレイスウォールは霸王になったってか」

「ああ、バルフレアの言うとおりだ」

セアはそう言うのと再びアーシエの方を睨みつける。

「俺から言わせれば霸王もヴェインも大した差はない。どちらも圧倒的な力で敵対する者を排除して理想を実現させる、な」

「そ、そんな言い方・・・」

「お前はアルケイディアに夫と父と祖国を奪われたそうだが、俺の場合に比べれば遥かによほど！部下も友人も家族も皆殺しにして祖国を物理的に消滅させてくださった霸王に比べればヴェインなど俺には後光がさしているように思えるぞ!!」

セアはアーシエに向かって吐き出すようにそう叫んだ。

その姿を見てヴァンとパンネロは驚く。

セアがこのように激怒している姿など見たことがなかったから。

「しかしいったいどうして君は破魔石の力の直撃をうけて無事だったんだ？」

バッシュがセアに疑問をこぼした。

「さあな、ただ気を失って目を覚ましたら不老不死になっていた。ただあの時俺は自棄になってたから深くは考えていなかった」

「なるほど」

「それになんてこんな体になったのか調べるにあたつてこの旅はなにかと新しい情報が手に入りそうだったんでな。俺は同行することにしたのさ。これであんたの疑問も解決だな」

「・・・ああ」

バツシユがそう言った直後、ン・モウ族の長老が話しかけてきた。

もう時間も遅いので一泊した後、神殿から出て行つて欲しいとのことだ。

なんでもアナスタシス大僧正が殺され神都は喪に服すそうさ。

それに帝国の襲撃で物資もあまりないとのこと。

今回一番損害を受けたのはキルティア教会だとセアは思った。

第五十話 弟子と師

神殿の一室に二人の男が椅子に腰をおろして向かい合っていた。

「なあ」

ヴァンは躊躇いがちにセアに声をかける。

セアとは一年近い付き合いがあるが我を忘れて激怒するところを見たことがなかった。

怒っているセアは普段なら冷たく暗い声で凄まじい笑顔を浮かべていることが殆どだ。

しかし先程レイスウォールに対して憎悪を露わにしているセアはまるで別人のようにヴァンは思えたのだ。

「なんだ、馬鹿弟子？」

セアはどこか疲れたような声でそう返す。

「あのさ……セアはアーシエのことが嫌いなのか？」

「……嫌いかどうかと言われたら嫌いだな」

セアははつきりとそう言った。

「やっぱりレスウオールの血を引いてるからか？」

「それもあるにはあるが、それ以上にあの王女様の君主としての自覚のなさが嫌いだ」
「君主としての自覚？」

ヴァンは首を傾げる。

物知りのダラン爺からヴァンは色々教わってはいるが興味のない政治の話はちゃんと聞いたことがなかった。

そんなヴァンは君主としての自覚のなさというのを理解できなかつた。

ヴァンは義務だの誇りだの言ってるアーシエは王家の人間としての自覚があるとは思っている。

そのことを察していたのかセアはため息をつく。

「いいか、君主というのは私情を国の安寧より優先することなどあつてはいけない」

「え？」

「あいつが本当に国の安寧を望んでいたなら自分の身を材料にアルケイディア帝国に讓歩させ、ある程度の実権を持つてダルマスカを帝国の属国としてでも独立させるべきだった」

「そんなのダルマスカが認めるわけないだろ!!」

ヴァンはそう叫んだ。

少なくとも帝国による2年間のダルマスカ統治を経験したヴァンにとっては絶対に受け入れられることではなかった。

「そうかな？ヴェインが執政官に就任してからのというもののラバナスタでのヴェインの評判はいいものだ」

「・・・そうなのか？」

「ああ、現にカイツもヴェインに傾きかけてたからな」

「カイツが!？」

ヴァンは驚いた。

何故ならヴァンがリーダーを務めている空賊を目標そう団に参加している孤児達は全員反帝国だ。

その空賊予備軍であるカイツが帝国のヴェインを信じ始めているとは信じられなかった。

「なにを驚いてるんだ？お前だってレーザーと仲がいいじゃないか」
「・・・だけどき」

「お前はヴェインが就任してからあちこち飛び回ってるから知らないだろうが、ヴェインが就任してから帝国兵の横暴が減った。それに身分差による差別はほぼなくなった」
「でも受け入れられるのか？帝国を憎んでいる人がたくさんいるのにな？」

「それだけで受け入れられないならとつくに二大帝国は内部崩壊をおこしてないとおかしいんだがな」

「え？」

「あのな、ロザリアもアルケイディアも侵略国家だぞ？ ようはダルマスカのように他国を滅ぼしてきたんだ」

「それは知ってるよ」

ヴァンはなにを当たり前のことをという風に見ている。

セアは自分の馬鹿弟子の頭のため息をついた。

「じゃあもつと分かりやすく言おう。アルゴ地方の住民がまだにアルケイディアに逆らっているって聞いたことあるのか？」

「え？ アルゴってアルケイディアの領土じゃ？」

「ああ、アルゴって国を昔にアルケイディアが滅ぼして自国の領土にした土地だ」
「今から170年ほど前にアルゴはアルケイディアに滅ぼされた歴史がある。」

「当時は今のダルマスカのような状況だった。」

「が、いまは元々別の国だったという歴史が残るだけである。」

「ヴァン、お前はどうか知らないが多くの人間は危険より安全を選ぶ。侵略者が圧政を敷くならば武器をとるのはやぶさかではないがそうでないならば大抵は憎悪を胸に秘

めつつ侵略者の支配を受け入れてしまう」

「……」

「お前が帝国を嫌っていたのはレックスを殺されたのもあるだろうがそれ以上に占領後の帝国の理不尽に耐えられなかったからじゃないか？」

「……言われてみればそうなのかも」

「そういうものだ。だが王女様はその辺がわかっていない」

「え？」

「大切なことは自治独立よりもその理不尽を止める事だ。だがヴェインによつてそれは改善されたといのに王女様は歩み寄ろうとしなかった」

「でもヴェインを信じられなかったんだろ」

自分の父を謀殺してダルマスカを滅ぼしたヴェインをアーシエが信じるわけがない。

ヴァンはそう思っていたから迷わずそう言った。

するとセアはどこか悟つたような様子で言う。

「国を滅ぼされたのだから当たり前といえど当たり前だ。だからこそ現実をみる事ができたウォースラは国の為に王女様を裏切つて帝国と交渉したんだろ」

「……」

「まああくまでこれは俺の持論だ。もし納得できないなら自分で答えを出せばいい」

暗そうな顔をしているヴァンにセアは優しくそう言った。

そしてセアは椅子から立って布団に転がり込む。

(アルケイディアの神都襲撃はそうとう反感を買ったはずだ)

セアは今回の襲撃の狙いについて考える。

(敬虔なキルティア教信者は数が少ないとはいえ、上流階級に属する者が殆ど。ヴェインがそれを理解していないとは思えん)

ベルガのあの言動からこの襲撃の命令を出したのはヴェインだとセアは当たりをつけていた。

(となると破魔石の力を使えば反論を抑えられると思っているのか?)

そこまで考え、首を振る。

少し有能な者ならばそう思うかもしれない。

しかしヴェインは「戦争の天才」と称される軍才の持ち主で、並外れた政治手腕を兼ね備えている。

(つてことは人造破魔石が量産する計画でもあるのか?)

あれが量産され一般兵にまで支給されるようになれば本当に勝ち目がない。

ただ・・・

(幾ら巨大なアルケイディアとはいえ財源は有限だ。たかが2年程度でその段階に届い

ているとは考えにくい)

国家の収入と支出は半固定されている。

インフラの整備とか軍人や政治家への給金など。

ということは穏健派のグラミスが統治していた今までは研究予算は通常通りで行われたはず。

幾らかヴェインからの援助があつたとしても2倍になるなんてことはないだろう。

(となるよ………駄目だ幾ら考えても答えがでん)

セアは考えるのをやめると眠気に襲われ寝た。

隣でヴァンがセアのいびきを聞いて寝るの早すぎと呟いた。

第五十一話 帝都への道筋

帝国軍の襲撃のあつた翌朝。

神都には昨日の惨劇を強調するかのように雨が降り注いでいた。

敬虔なキルティア教徒達は跪いて祈っている。

キルティア教会のトップであるアナスタシス大僧正が殺された為だ。

その死を悼んでいるのだ。

更に神殿の周りにチラホラ黒い煙があがっているのが見えた。

どうやらまだ避難民達のテントは燃えているようだ。

「これからどうするんだ？」

ヴァンは元気がなさそうにそう言う。

流石に目の前の光景でいつも通りの能天気さは發揮できなようだ。

「帝都に行く」

バルフレアはヴァンの問いにそう返した。

「それで帝都アルケイデイスへはどのようにな？」

アーシエがヴァンに続けて質問する。

「ロザリアの侵攻に備えて、帝国は国境の守りを固めているはず。空からは無理でしようね」

「当然、海にも帝国水軍が網を張ってる」

フランの説明をバルフレアが補足する。

「つてわけで空賊らしくもないが歩きだ。サリカ樹林のあたりで本国領に入る」

バルフレアは地図を出してナブラディア地方とアルケイディア帝国本国領の境目に広がるサリカ樹林を指差す。

「いくつか道はあるが、ナルピナを通って北上するのが手っ取り早い」

「サリカ樹林を越えたらハンターたちの集まるキャンプがあるわ。ここまでいけば軍の警戒もゆるくなるでしょう」

フランがサリカ樹林の東にあるフォーン海岸を指差す。

「つて言ってもまだ相当長いけどな」

バルフレアが首を小さく横に振りながらそう言った。

確かにフォーン海岸から帝都アルケイディスまで結構な距離がある。

「そもそもここから陸路で行くとなるとここに来る時通ったルートを逆走してラバナスタに戻らなくてはならないから——強行軍でも最短で数ヶ月はかかるんじゃないか？」

セアは面倒くさそうにそう言った。

「確かにその間にアルケイディアとロザリアの戦争が起こってる可能性もあるな」

「いや、その可能性は低い」

「なぜだ？」

自分の考えをすぐさま否定したセアに顔を向けてバツシユが理由を求める。

「まずアルケイディアはヴェインが政変を起こしたばかりで国内を纏めなくてはならないからだ、おまけに俺がここに来ていたジャツジマスターを一人殺してる」

「それはそうだがロザリアが仕掛ける可能性もあるだろう？」

「ロザリアは年中内部対立状態だ。アルシドならその対立を煽って最低でも数ヶ月は持ちこたえるだろう」

セアの言うとおり確かに今の状況では両国とも戦争できる状態ではない。

アルシドがちやんと働いていればの話だが。

「うわっ！」

話の難しさからか少し離れていたヴァンがなにかを見て驚きの声をあげた。

パンネロがいち早くそれに反応した。

「いったいどうしたのヴァ．．．キヤーー！！」

パンネロがヴァンの目線の先を見たら、ヴァンと同じように声をあげる。

「なんなんだいったい？」

ヴァンの目線の先がちょうど建物の影になっていてよく見えず、近づいた。そして固まった二人の目線の先を見る。

「これは……」

そこには痣だらけの薄い服しかつけない男の死体があった。

骨も幾つか折れており、それが動いていた時の姿はとても想像できないありさまだった。

その損傷の激しさから死んだあとも攻撃をしつづけたことが容易に想像できた。

他の四人も眉をひそめて黙っている。

「これも帝国がしたのか？」

ヴァンが目線を動かさず震える声でそう言った。

「いや、これをしたのは避難民達だろ」

バルフレアがそう言った。

その言葉にヴァンがバルフレアの方に振り返る。

あまりにも予想外な答えだったからだ。

「な、なんで!？」

「こいつの着ている服に心当たりがある。ジャッジどもが鎧の下に着ている服だ」

「ああ、なるほど」

バルフレアの言葉を聞いてセアは首を縦に振って納得する。

その様子を見えますますヴァンは混乱する。

「なるほど!? なにがなるほどなんだよ!!?」

「あんな、こいつジャツジなのに鎧つけてないだろ」

「え、そうだけど・・・」

「避難民たちが金の足しになればと外して持つていったんだろう。その時にお礼にボコボコにしたつてところだ」

セアの言葉にヴァンは首を傾げる。

「金の足しって・・・そんなに高いのかジャツジの鎧って?」

「ああ、いろんな国家が欲しがらるだろうな。特にロザリアが欲しがりそうだな」

「なんで?」

「だってジャツジに変装してアルケイディアの部隊に紛れ込めるんだぞ。お前だって見たことあるだろ」

セアの言葉を聞いてヴァンはリヴァイアサンの時のことを思い出した。

あの時ウォースラはジャツジの格好をして自分達を救出したのだ。

「末端の兵なら自国で鎧を製造して紛れ込ませることもできるだろうがジャツジの鎧は特殊な製造方法で作られているそうで中々複製が難しいらしい。売るところに売れば

高く売れるだろうさ」

セアの説明を聞いてヴァンも理解できた。

「だけどなんかさ．．．納得できないな」

「私も．．．」

ヴァンとパンネロは項垂れながらそう言った。

「納得する必要なんか無い。ただこういうこともあるって知ってるだけでいい」

セアは二人を諭すようにそう言った。

帝都編

第五十二話 聖ヲルバ騎士団国

聖ヲルバ騎士団領港町ソートスにて。

元々聖ヲルバ騎士団とは元々はヤクト・ラムーダ南部に住まう狩猟民族に与えられた名である。

その狩猟民族は幾つもの集団に別れて行動し、集団同士は緩やかな協力関係にあったが国家というには程遠かった。

十数世紀前に当時のキルティア教の大僧正をある集団が助けたことから神話に登場するヲルバという聖人の名を彼らは授かった。

こうして聖ヲルバ騎士団と呼ばれる集団を中心に狩猟民族は国家として纏まり始める。

そして約700年前にガルテア連邦に加盟し、急速に国家としての体制を整え首都ティンダロスを築く。

更に狩猟で手に入れた肉や皮を輸出し、それ以外のものを輸入させる為に南西部に港町ソートスからダルマスカなどと交易を行っていた。

ガルテア連邦崩壊後は武装中立を掲げ、南部の雑穀地帯を狙うデイル王国との小競り合いを繰り返した。

現在ではデイル王国は滅び、アルケイディア帝国の植民地と接する為、どちらかという帝国内部の政治を行っている。

船でソトートスまで行き、道を辿ってティンダロスへ、そこから更に北上するのが一般的な神都ブルオミシエイスへのルートとなっている為、結構人も訪れている。

現在はアルケイディア帝国の襲撃によつて神都を去つた避難民達が首都や港町に溢れている。

「街が見えたぞ!!」

ヴァンが街を発見して声をあげる。

「ようやく着いたか」

「これでも早い方だぞ、将軍様」

バツシュのため息交じりの言葉にバルフレアは苦言を呈する。

当初神都から西進してダルマスカに戻りアルケイディア帝国本国領に入る予定だった。

しかし避難民に紛れば船に乗ってもばれないのではということ以南下して船に乗ってダルマスカに戻ることにした。

それから3日間南に向かってセア達は進んできたのだ。

「ソトートスは交易港だ。なにか珍しいものでも売ってるかもな」

セアはなんとなしにそんな事を言う。

「遊びじゃないのよ、この旅は」

「わかってますって王女様。ただ役に立つ珍しいものとか売ってるかもしれないでしょ」

アーシエの批難にセアは軽く首を振りながら言った。

「そういえばこの国ってキルティア教会と仲がいいみたいですけど帝国と仲が悪くなったりしないんですか」

パンネロはここに来るまでに神都の救援に向かう聖ヲルバ騎士団の部隊を何回か見た。

そこから聖ヲルバ騎士団とキルティア教会が仲がよかったのは容易に想像できる。

ならキルティア教の総本山を襲撃した帝国との関係が悪化しているのではとパンネロは思ったのだ。

「いや、この国の一番の交易相手はアルケイディア帝国だ。なにもしてないということはないだろうが敵対に踏み切るようなことはしてないだろう」

セアは軽く笑いながらそう返した。

実際、聖ラルバ騎士団国はアルケイディア帝国に神都襲撃の件で批難したが、制裁は一切加えていない。

国力が違い過ぎる上にアルケイディア帝国との交易を打ち切られただけで聖ラルバ騎士団国は確実に弱体化する。

聖ラルバ騎士団国の東は海、西はヤクト、北はキルティア教会の直轄領、南はアルケイディア帝国の植民地である。

帝国との関係が断絶されればどうなるか考えるまでも無い。
孤立確定である。

「おっ！門が見えたな。あれをくぐるぞ」

ソトートスの門をくぐると道幅が20 m程の大通りに出る。

大通りのあちこちで露天商が声をあげて客の呼び込みをしている。

「本日仕入れたばかりの魔導書だよ！おひとつ1000ギルから!!」

「新鮮な魚はいらんか！お安くします!!」

「マジックマッシュルームはいらんか!?!ひとつ500ギル!」

露天商の周りには人だかりができていてそれを退かすように兵士がやってくる。

そしてチョコボが積荷を満載した馬車を曳いて通りを横切っていく。

「活気があるな」

セアはなんとなく呟く。

「ラバナスタよりあるんじゃないか？」

「帝国に負けるまでラバナスタもこれくらい活気あったよ」

セアの言葉にヴァンが面白く無きそうに言う。

セアがラバナスタに住むようになったのは1年前なので帝国の支配を受けてなかった頃のラバナスタを知らない。

だからある意味当然の反応だといえる。

「そうか、そういうえば昔はもつと活気があったとか言ってたな」

セアはダラン爺からそんな話をしていた時のことを思い出した。

そんなこんなしている内に大通りを通り抜け港に出た。

港には幾つもの帆船と僅かなグロセア機関で動く水上船を確認することができた。

基本イヴァリースでの船といえれば帆船である。

ミミック菌が金属を腐敗させてしまうので機械は使っているのは少ないからだ。

ただ、地上と海上では海上の方がミミック菌が少ないのか金属の腐敗が遅い。

だからグロセア機関を搭載した機械仕掛けの水上船もあるにはある。

しかしあくまで地上と比べればであって空中とは比べるべくもない。

その為、水上船は長時間の航海に向無い上、メンテナンスなども必要なのでコストも

高い。

「明日の朝までダルマスカ行きの船はでないそうだわ」

港にいる船乗り達に話を聞いてきたフランがそう言った。

「じゃあ一日はここで足止めだな。宿を探そう」

バルフレアの言葉に全員が頷いた。

第五十三話 イヴァリースの外

ソトートスは聖ラルバ騎士団国で最大の港町。

故にこの港による商人たちの為に宿泊施設が多くある。

表通りの宿屋は連日貸しきり状態でセア達はわき道にある安宿しか確保できなかつた。

「あんな部屋に200ギルとかぼったくりだろ」

ホコリだらけで天井にくもの巣がたくさんあるというすばらしい部屋だった。

おまけに借りた部屋の硬いベッドのひとつに赤紫色のキノコが生えていた。

だからセアがそのベッドで寝るのを強引にヴァンにしようとした。

勿論ヴァンはセアに反論したがセアに勝てるわけが無く本決まりとなった。

だからヴァンは頬を膨らませながら愚痴を言っているのである。

「でも仕方ないよ。あそこ以外に部屋がなかったんだし」

パンネロがヴァンを宥めるようにそう言う。

ヴァンを弟子にしてからというものセアは凄まじい特訓と理不尽なことをヴァンに課していたのでヴァンをパンネロが宥めるのが日常茶飯事となったのでこんなことは

慣れっこだ。

「武器商船が入港してるらしいからなんか欲しいのあったら買っとけよ」

セアはそう言っつて港の方に歩いていく。

港では大きいガレオン船が武器の売買を行っていた。

そしてその船の乗り組員である肌が黒い男に話しかける。

「武器を見せてくれないか」

黒い肌の男は自分の口を指差すと首を横に振った。

そして船の方に向かって叫ぶ。

「?????」

聞いたこともない言葉だった。

恐らくイヴァリースの言語ではないのだろう。

「?! ?」

船から下りてきた赤毛の男が黒い肌の男に言った。

「?????」

黒い肌の男の言葉に赤毛の男はこう言った。

「?????」

黒い肌の男は頷くと船に戻っていった。

「?????」

「????」

「??」

「?????」

そして赤毛の男がセアに話しかける。

「私はヘブライと申します。先程のことは失礼。なにせ遠くから来たものでまだイヴァ・ルース語を話せない人もいらっしやるのですよ」

「イヴァ・ルースじゃなくてイヴァリースだけだな」

ヴァンが突っ込む。

「おや、すいません。私はまだ間違えていらっしやるようで」

どこかおかしいな感じのする言い方だ。

「それはそうとイヴァリースじゃないところとなるとどの辺りから来たのですか?」

「イヴァリースに来るまじえは南にある大国、バロン王国って所にいました。そこから幾つかの島を経由しながら北上しようとしてアルカディアの植民都市に立ち寄りなごやらのソートトスに参りました」

ヘブライの言葉がところどころおかしい。

おまけにアルケイディアをアルカディアと言いついて間違えている。

「なあ、ケルオン大陸にバロンなんて国ってあったけ?」

ヴァンが首を傾げる。

「バロンってのはケルオン大陸より更に南にある軍事大国のことだ馬鹿弟子。世界最強の飛空挺師団【赤の翼】を保有してると噂で有名だ」

「世界最強!?!で、でもそんな国聞いた事無いぞ!!?」

「そりゃバロン王国はイヴァリースにある国じゃないし、ケルオン大陸の南にある大陸との間はヤクトだから交通手段が船しかないからあまりイヴァリースに干渉できないんだろ」

「え?イヴァリースの他に大陸ってあるの?」

勘違いしている人も多いがヒュムにとつてイヴァリースとはこの世界全体を指す言葉ではない。

バレンディア・オーダリア・ケルオンの三つの大陸とその周辺からなる地域を指す言葉だ。

何時からその地域がイヴァリースと呼ばれるようになったかは定かではない。

神話の時代に、本当にあつたのか疑わしい伝説のロンカ王朝の時代に、レイスウォールがガルテア連邦を打ち立てたときに、その他諸々と説は沢山あるがどれが真実なのかは不明だ。

因みにガルテア連邦が成立したとき云々は絶対に間違いだとセアは思っている。

何故なら古代ガルテア時代にセアが国王してたころからイヴァリースという言葉はあつたからだ。

勿論イヴァリースの外にも大陸や島があり、国家もある。

だがイヴァリースに割拠する諸国が外に存在する国家と関係を持つていないことは少ない。

何故ならオードリアの西を除いてイヴァリースを囲むようにヤクトが存在し、飛空艇による交通ができないからだ。

となると交通手段は船ということになるがこの世界の航海術は読者の世界でいう中世レベルだ。

更に海にも魔物は当然生息しており、難破の可能性は中世より遥かに高い。

それ故イヴァリースとその他の地域との交流はあまりされていない。

精々神聖ユードラ帝国やロザリア帝国が西方のユトランドと交易をしているくらいだ。

「まあ、それはそれとしておきましょう、どのような武器をお探しておられるのですか？」

「銃が欲しい」

バルフレアは呟くように言った。

先の神都での戦闘で帝国兵を銃で殴つたので弾道が悪くなったので買い換えたいと思つてたのだ。

「おおお得意様あ、銃ですね？ イヴァリースでは銃はあまり普及しちよらないと聞い

て沢山仕入れております。予算は？」

「50000ギルだ」

「そうですかい」

バルフレアの注文を受けたヘブライは船に向かって叫ぶ。

「?? ??」

すると船から二丁の銃を抱えたシークが出てきた。

シークは二丁の銃をヘブライに渡すとのしのと船に戻っていく。

「これはアルクトウルスという銃です。バロンの銃兵部隊ではこれが採用されております。値段は47000ギル」

ヘブライは左手で持った銃を持ち上げてそう言った。

「そうか、でもう片方の手で持つてるのは何だ？」

バルフレアはヘブライの右手に握られている銃を見ながら言う。

「よくぞ聞いてくれやがりました！こちらはバロンで最新式の銃であるフォーマルファウト。お値段がお高くなりますがアルクトウスの1.5倍はよい性能になつちよります」

「値段は？」

「予算をオーバーしますが89000ギルとなっております」

「そうか、じゃあ少しその銃見させてくれるか？」

「かまいやせんが、壊さないでくださいいな」

バルフレアはヘブライからフォーマルファウトを受け取ると銃を見る。

長年銃を愛用してきたバルフレアから見てもすばらしい出来だった。

おまけに近接戦闘をしても弾道がそれないう補強がなされてある。

「少し高いがこれは買いだな」

「ありがとおおごさいあーす」

ヘブライはそう言って手を差し出す。

バルフレアが金を渡すとヘブライは嬉しそうに勘定をする。

「なあ、オレもなんか買っていいか？」

ヴァンが少し興奮した声でセアに聞く。

「ああ、予算は30000ギルな」

「おっしゃー、なんかいい剣ない？30000ギルで」

「さ、30000ギルでございますか？」

「ああ」

「デスブリンガー位しかありませんよ？」

「じゃあそれってこのミスリルの剣よりいいのか？」

「ミスリルで出来た武具はメンテナンスが少なくて済むことを除けばあまりよいところが無い武器ですからーね。間違ひなくその剣よりよい剣でしょう。よければその剣を下取りしましょうか？お高くしやすよ」

「あーこれ兄さんの形見だからいい」

「あ、これは失礼しました」

へブライは丁寧にお辞儀すると近くの樽の蓋を開ける。

そこから剣を一本取るとヴァンに運んでくる。

「デスプリンガー、2900ギル」

「セア、金」

セアが金をへブライに渡す。

「あれ？そーういや皆は？」

いつの間にかヴァンはセアとパンネロと自分しかいなくなっているのに気づいて言った。

セアは嬉しそーうに勘定しているへブライを見ながら答える。

「王女様とバツシユはラバナスタで武器を新調してたから宿に残ってる。バルフレアとフランは銃を買ったら酒場にむかった」

ヴァンはバルフレア達とはかく、なんでアーシエ達が宿から出てなかったのに気づ

かなかつたのだろうかと自分が心配になった。

第五十四話 船旅

ソトートスに来ていた旅商人へブライ達から武器を購入した翌日。

セア達はダルマスカの港町サマルス行きのカレオン船に乗り込んだ。

船はかなり広く、個室まで用意されている。

そしてメインマストに掲げられている旗は2つ。

ひとつはこの船を所有しているバート交通公社の社旗。

もうひとつはバート交通公社が所属するアルケイディア帝国の国旗だ。

「出航だ！帆を広げろッ!!」

船長のその声と共に帆が張られ、船はソトートスの港から離れ始めた。

「なあ、セア」

「ん？」

ヴァンの声にセアは振り向いた。

「乗り物酔いは大丈夫なのか？」

「飛空艇が駄目なだけだ。俺が操縦するなら話はまた別なんだが……」

セアの答えにヴァンはとある疑問を持った。

「なんで船は大丈夫なのに飛空艇だと酔うのんだ？」

イヴァリースでは船酔いする人は大抵飛空艇に乗っても酔う。

どちらか片方でしか乗り物酔いしない人間など稀だ。

「船は昔から乗ってたから大丈夫なんだが、飛空艇は……最近できたものだろう」

「最近って……飛空艇は数世紀前にモーグリ族の機工師が発明したものだからかなり前
だろ」

セアの答えにヴァンはやや呆れながら言った。

その様子にセアは唇の端を僅かに歪める。

「流石空賊を目指してるだけあって飛空艇に関する知識だけは豊富だな」

「だけは余計だって」

「じゃあ他にどんな知識を持ってるんだお前は？」

セアは純粹に疑問に思っただけで聞いた。

するとヴァンは

「あーうー」

あまりに難易度の高い問いにヴァンは言葉にならない声をあげていた。

セアはその様子に呆れて意味もなく船内を歩く。

するとバツシユの姿が見えた。

「帝国兵も乗り込んでるな」

バツシュが船に乗っている帝国兵数十人を視界に収めながら言う。

「そういうどこかでバート交通公社は帝国軍と契約結んでいて資金援助と引き換えに部隊の一部を護衛として使っているって話を聞いたな」

バート交通公社はアルケイディア帝国領や友好国の都市間を飛空挺や船で繋ぐ帝国最大の交通会社だ。

一応、聖ラルバ騎士団国やビュエルバといった中立国にもこの会社は進出している。

事実イヴァリースの東半分での交通会社に頼っていけない場所はないといっても過言ではない。

更に各都市にあるターミナルもこの会社が運営している。

帝国の艦隊の停泊も請け負っている為、会社の収入はかなり高いのだという。

「正直、俺はソトートスから直接アルケイディア帝国本国領のバーフォンハイムに行ってもよかつたと思うだけだな」

「あの港町は本国領とはいえ、自治都市だ。バーフォンハイムにロザリアから密偵が送り込まれていても干渉できないから当然アルケイディアはバーフォンハイムから出る人間を警戒しているだろう」

「バーフォンハイムには何度か行ったことがあるが、あそここの人間が帝都の人間に従順と

は思えないがな」

「ならば余計警戒しているだろう」

セアはバツシユの言葉に思うところがあつた。

バーフォンハイムはアルケイディア帝国本国領南東端にある港町だ。

ならばバーフォンハイムから東へ行つて本国領を出、北上した後、西へゆけば本国領に入れる。

そうセアは考えて提案していたがアーシエやバツシユやバルフレアの慎重さからこの提案は却下された。

セアはそれに対して文句を言う気はないが自分の考えが間違つていゝとは思えないのだ。

なぜならバーフォンハイムには2年前に帝国に雇われて傭兵としてナブラディアで暴れていた時に出会つたあの男がいる。

あの男は帝都の人間にも顔が利くのでバーフォンハイムに確固たる自治権を確立していることだろう。

だから大丈夫だとは思ふのだが無用な軋轢を生んでも仕方ないので黙りこむ。

なんとなしに海をみると小さな船影が見えた。

「なんだ、あの船？」

セアの言葉にバツシユも目を細めて海の果てを睨む。
小さくてよくわからないがどうも軍船——いや、武装商船のようだった。

船長室に一人の船乗りが駆け込む。

そして息を切らしながら船長と水軍士官に報告した。

「船長、不審船が一隻こちらに接近してきます」

その報告を聞いて船長は飲んでいたワインのグラスを机の上に置く。

「旗は掲げているのか？」

「ええ、紋章官によるとシーランド公国の紋章だそうです」

船乗りの報告に水軍士官が眉を潜める。

「シーランドだと？」

シーランドはバレンディア大陸の北東に位置する島国である。

国土全域がヤクトで海に囲まれている為、国外に出るには船を用いるしかない。

そういう理由から優れた造船技術を持っており強力な海軍も持っている。

事実、48年前のアルケイディア帝国との戦争で勝利したことさえある。

数的に圧倒的優位にあった筈であるにも関わらず敗北したこの戦いは帝国水軍に対する嘲りとしてよく使われている。

シーランドの名前を聞いた水軍士官が胸中に複雑な思いを抱くのも致し方ないことだろう。

「それで？どこが不審なんだ？」

水軍士官は不機嫌そうに問う。

「武装商船のようですがこちらに気づいた途端に進路を変えてきたので……」

この報告を聞いて水軍士官と船長は顔を見合わせる。

現在この船はヤクトの領域にいるのだ。

シーランドの武装商船が海賊の類の可能性が高い。

「船長、念のため救援信号の用意を。それと客員に個室に戻るよう伝えてください。私は部下達を配置につけます」

「あ、ああ、わかった」

船長は震えながら頷くと水軍士官は暗い笑みを浮かべながら船長室から出て行った。

一方、シーランドの旗を掲げた武装商船。

そこには全く統一性のない武器を持った男たちが乗っていた。

彼らからは潮の匂いとむせ返るような血の匂いを纏っている。

「船長、バートの客船を襲っちゃって大丈夫なんですかい？」

一人の男が船長に震えながら尋ねる。
すると船長はその男にらみつけて言った。

「なんだ貴様、恐いのか？」

「い、いえ。そういうわけでは……」

「だったらおとなしくしていろ!!」

「へ、へい」

男は逃げるようにして船長の傍から離れた。

「お前は相変わらず容赦ないな」

船長の横にいた男が抑揚のない声で言った。

その男の言葉に船長は頭を抱える。

「ギャンス、俺はお前の方がよっほど容赦がないと思う」

船長は半ば呆れ、半ば恐怖の声でギャンスに言った。

「そうか？」

ギャンスは首を傾げた。

その様子を見て船長はかつての親友に対して恐怖と寂しさを感じた。

船長もギャンスも元はシーランドの海軍士官で心通わせる親友だった。

ある日の海の魔物退治に突然ギャンスが突然新兵達を海の底に放り投げたのだ。

魔物に食われていく新兵を見ながら狂ったように笑い出したのである。

当然、ギャンスは軍法会議にかけられて監獄に入れられた。

それが切欠で周りからギャンスの親友ということまで白眼視されて自分も軍を辞め、商船の護衛の仕事をするようになった。

それから数カ月後の航海中に再びギャンスが現れて武装商船に乗っていた人間を血祭りにあげた。

そして返り血を存分に浴びたギャンスは自分にこう言ったのである。

「一緒に海賊しないか？」

ギャンスへの恐怖から自分は頷いた。

船長はその時の自分の決断が間違っていないとはかけらも思わない。

海賊になったからギャンスが理解不能な殺戮をしているところは見たことがない。

しかし船長には時折、ギャンスが人ではないなにか見えるのである。

どうしてこうなったのだろうと思いつながら船長は首飾りを弄っているギャンスを眺める。

ギャンスの首飾りは朱色の宝石ついており、その宝石には巨蟹宮の紋章が刻まれている。

第五十五話 海戦

水軍士官は自分の指揮下の1個小隊を甲板に集め、不審船を眺めていた。

「かなり高い確率で海賊船ですね。凄い勢いでこっちに向かっています」

望遠鏡で不審船を見ていた水兵が苦笑いしながら水軍士官に報告する。

なにせ望遠鏡で確認できた不審船の乗組員の姿が荒事向きの人間ばかりだったからだ。

その上、大砲の用意をしている様子まで確認できている。

「しかし、かなり分が悪いですね」

「ああ、ある程度武装があるとはいえ、こちらは客船。それに対し向こうはシーランド製の武装商船だ」

水軍士官はそう言った。

商船とはいえ高い性能を誇る有名なシーランド製。

それに向こうは海賊なのだから殆ど戦闘員ばかりだろう。

それに対し、こちらはある程度武装があるとはいえ、こちらは客船だから客を守りつつ戦わねばならない。

まったくもって不利な要素しかない。

「紋章官、船長に救援信号の煙を上げるように伝えろ！ 砲手は右舷の大砲準備！ それと操舵手、不審船の横につける!!」

水軍士官の命令を受けて数人の水兵が動きだした。

「隊長、こちらから近づく必要があるのですか?」

新入りの水兵が気まずそうに水軍士官に問いかける。

「逃げたところで向こうの方が速いのだから追いつかれる。敵に背を向けながら一方的に砲撃を食らう位ならこちらから仕掛けた方がいい」

それに救援信号を確認した帝国水軍が駆け付けるまで時間を稼げばそれでいいのだからな。

その言葉を聞いて安心した顔で新入りは水軍士官から下された命令に従った。

不審船が接近している。

そのことはバート交通公社の社員の口からセア達にも知らされた。

「それで客を一か所に集めるよう軍の方から言われましたので……お願いします」

社員は上から伝えるように言われたことを言い終わると部屋から出て別の個室へ向かった。

「さっきの海賊船だったのかな？」

セアはさっき海上で見た船影を脳裏に浮かべながら言った。

「おそらくそうだろうな」

「大丈夫なんですか？」

パンネロが不安そうな声で言った。

「大丈夫だ。俺がいる」

バルフレアが安心させるように優しい声で言う。

それを見てヴァンとセアが顔を顰める。

「そこはヴァンに言わせてやれバルフレア」

「ヴァンに女心がわかるのか？」

「……無理そうだな。馬鹿弟子には」

「お前ら!!」

ヴァンは女心というのを理解できていなかったが自分が馬鹿にされていると思ったので叫んだ。

「まあ馬鹿弟子はほっとくとして避——」

「無視すんな!!」

「——難場所に移動しようか」

セアは普段から割と無視されてないかお前はと思いつながらヴァンの言葉を無視した。

一方、海賊船ではギャンスが壁にもたれかかり首を傾げていた。

「ギャンス、どうかしたのか？」

「……」

船長が声をかけたがギャンスは全く反応しない。

「ギャンス？」

「……ん？」

ようやくこちらに気づいたのかギャンスは少し驚いた顔をした。

「大丈夫か？」

自分を気遣う船長の言葉にギャンスは申し訳無さそうに

「悪い、少し考え事をしてた」

「そうか。ならいいんだが」

ギャンスの返事に船長は疑問に思いながらもそこを離れて部下に命令を飛ばし始める。

その様子を暫く眺めた後、再びギャンスは考え事を始める。

(……さつきから感じるこの胸騒ぎ。近くに同胞がいるのか？こんなに薄いところだと

水軍士官が敵の海賊の切込みをサーベルで防ぎながら叫ぶ。

その後、鮮やかな動きで対峙した海賊を始終圧倒し、喉を切り裂いた。倒れる海賊を一瞥もせずに水軍士官は周りを見渡して状況を確認する。

海賊船とはすれ違い逆方向へ進んでいたが旋回しだしているのが見えた。

「操舵手！面舵50!!砲手は周りを警戒しつつ砲撃準備!!」

水軍士官と操舵手との距離は離れている上に海賊と護衛隊の戦闘のせいで水軍士官の命令は直接は届かない。

しかし水兵達が水軍士官の命令を何度も復唱して叫び、操舵手に伝わった。

ギャンスは船長に言った。

「このままぶつけて乗り込もう。このままだと乗り移った奴から各個撃破される」

「……そうだな。少し帝国水軍を舐めてたらしい」

水軍はアルケイディア帝国軍の中で一番脆弱な軍団だ。

いや、イヴァリースに存在する諸国の多くの海軍は脆弱である。

というのも海軍が活躍できる場所が極めて少ないからだ。

そもそも火力・機動力共に飛空艇の方が上なのだから飛空艇部隊に仕事を任せただ方が早いし、確実だ。

だからやるべき仕事といえばヤクトの海域に置ける魔物退治や海賊退治。もしくは戦時下にヤクトの海域を通つての輸送任務。

それくらいの仕事しかないのだ。

シーランド公国の様な国土全域がヤクトでかつ島国というような特殊な立地条件にない限り、海軍に力を入れる旨みがほほないのだ。

その為、多くの国の海軍は閑職、もしくは海軍自体存在しないことさえありうる。

だから船長は帝国水軍の護衛がいるとはいえ、バート交通公社の船を襲つたのだ。

だが、流石に二大帝国レベルの大国となるとシーランドに及ばないまでもそれなりの海軍力は持つている。

現に部下から客船に乗り込んだ海賊達が護衛隊相手に苦戦していると報告があがってきている。

「面舵一杯！敵船の横に接舷して乗り込むぞ!!」

船長の叫びに海賊達が鬨の声をあげる。

命令し終わつた後、船長がふと思いついたことをギャンスに訊ねる。

「……ああ、ついでに海賊旗も掲げとくか？」

「了解だ。船長」

船長の問いにギャンスは暗い微笑みを浮かべて短く返した。

そしてギャンスが何もせずさぼっている奴を見繕つて海賊旗を掲げるように命令する。

メインマストに鬮體に劍が交差した海賊旗が掲げられるのとはほぼ同時に海賊船が客船の横についた。

それと同時に海賊船から海賊達が客船に乗り込む。

「野郎ども！金目の物や食料を奪え！！抵抗するものは殺せッ！！」

船長の命令に海賊たちが嬉々として水兵達に襲い掛かる。

「船長、女はどうしやす？」

海賊の一人が下卑た笑みを浮かべながら質問した。

船長はその質問に対してやや眉をひそめた。

シーランドの軍人であつた頃から船長はあまりそういうことは好きではないのだ。

「好きにしろ」

だからそっけなくそう返した。

するとその海賊はより醜い笑みを浮かべて客室の方に向かった。

「いかん！海賊をなんとしても客室にいれさせるな！」

水軍士官が客室の入口無防備になっていることに気づき、声を張り上げる。

水兵たちが入口を守ろうとするが海賊たちに邪魔されて中々入口に近づけない。

そうこうしている内に海賊が客室に続く扉のドアノブに手をかけた瞬間。
「あ、れ……!?!」

銃声と共に海賊は頭から血が出てきて倒れた。

そして扉を開けてバルフレアが出てくる。

「まだ甲板に敵がいるのに客を狙うとはいいいい神経してるな」

バルフレアが扉の前に倒れている海賊の頭を踏みつけて言った。

「あなたみたいな義賊が少数派なだけだと思っけど?」

続いて船内から出てきたフランがバルフレアに言う。

「海賊は……乗り込んできた奴だけで50人はいるな」

セアは船内から出た途端、甲板を見渡し敵の数を確認する。

彼ら3人の腕にはバート交通公社の社印がある腕章が付けられていた。

第五十六話 船上の戦い

船内の避難場所に乗客や乗組員が集まっていた。

その避難場所でのこの客船の船長は小さくなつて怯えていた。

彼は今まで海で魔物と出会つたことは何度かある。

だが、海賊に襲われたことは初めてだったからだ。

魔物に襲われた場合なら最悪でも死ぬだけだ。

船乗りになつた以上、殺される覚悟ならば船長は持っているからそれには耐えられる。

しかし相手が海賊となると話は変わってくる。

万が一彼らに捕まつたりしたならば奴隷にされる可能性すらあるのだ。

公的には奴隷はガルテア連邦成立以来、イヴァリース全域で禁止とされている。

しかし裏では奴隷を売買する輩が存在するのだ。

現にアルケイディアやロザリアのケルオン大陸植民地では奴隷とおぼしき人材が立派な労働力として酷使されている。

そもそも禁止されているのはあくまでイヴァリース内だけの話なのだからイヴァ

リースから出てしまえば奴隷制のある地域もあるだろう。

そういう商人へのルートを海賊達が持っているというのとはよく聞く話だ。

何故なら海賊を帝国水軍が捕まえて尋問した結果、奴隷商に繋がった例が多すぎるからである。

無論、アルケイディア帝国内にそんな商人がいれば判明した時点で潰される。

しかしそれが国外だと中々潰れない。

他国の政府が言いがかりだの内政干渉だの言って話が商人の捜査まで中々進まない。

彼らに言わせれば犯罪者の証言だけで決め付けるなどぶざけているということらしい。

やっと捜査する頃には狡猾な商人は証拠を隠滅してしまっている。

更はその奴隷商人がイヴアリースの外にいる場合は他国に訴える事すら不可能だ。

そういった経緯で奴隷を供給したい奴隷商人の数はあまり減らないのだ。

その為、金を稼ぐのに手段を選ばない無法者達が集まり新しく海賊が誕生する。

そのせいで裏の世界ではいくらたっても奴隷は売買されている。

船長は死ぬのは恐くないが奴隷になるのは嫌だった。

だから客に後で金一封を出すから海賊退治に協力して欲しいと言った。

その結果、セア・バルフレア・フランの三人が名乗り出てバート交通公社の腕章をつ

けて甲板に向かった。

「オレもいきたかったな」

ヴァンは甲板で戦っているセア達を思いながら呟いた。

「だが、無法者相手だと彼らが一番経験豊富だろう。私達はここを守っていればいい」
「えっ？セアってそんな経験あったの？」

バツシユの発言にパンネロが不思議そうな声で問う。

「ああ、彼は傭兵として働いていたときもあるらしい」

「……そんな話聞いた事ないぞ」

バツシユの返答にヴァンがふてくされた声で返した。

バツシユも聖ラルバ騎士団国の首都ティンダロスの宿で興味本位でなぜロザリアの諜報部に所属することになったのか訊いたらセアが酒を飲みながら傭兵としてロザリア帝国に雇われてそのままずるずる諜報部に所属してしまった時の不機嫌そうに話されて初めて知ったことなのだが。

因みにセアは翌日なぜか自分の弟子に猛稽古をつけたらしいが詳細は不明である。

一方その頃、甲板では。

水兵の胸をギャンスの剣が貫く。

ギャンスが剣を引き抜くと水兵は血飛沫を出して絶命する。それを一瞥するとギャンスは周りを警戒する。

「……………」

周りを警戒していたギャンスの目線がある銀髪の男を視界に治め、呆然とする。

どうやら自分の予感はずしかったようだ。

そういう風に思っているとその隙を狙って水兵が槍で貫こうとする。

ギャンスはその槍を左腕で力任せに軌道を逸らせて右手に持っている剣で水兵の金的を貫いた。

「おい、何人かついて来い」

その言葉を聞いて海賊が5人程ギャンスの後ろに影のように従う。

ギャンスたちは船室の入口に向かって走り出した。

バルフレアは海賊を銃で殴りつけ、海に落とす。

近くにいた海賊がその隙を狙ってメリケンサックをつけた拳で殴りかかる。

しかしバルフレアはその拳を避けて、銃口をその男の口腔に突っ込む。

「はらよ」

バルフレアが引き金を引くと同時に海賊の頭から血を吹いて倒れた。

「チツ、汚ねえな……」

そう言いながらバルフレアは自分の銃に弾と火薬を込める。

内心、新しい自分の銃フォーマルファウトの性能の良さに驚いていた。

少し高かったがいい買い物したと思ひ、次の敵を狙う。

「おいおい、イケメンな兄ちゃん。あのヴェイエラはあんたのかい？」

ハゲ頭で筋骨隆々な海賊に話しかけられ、バルフレアは露骨に嫌な顔をする。

「ああ、オレの相棒だ。いい女だろ」

「そうかいそうかい、あれだけの美女だ。さぞいい声で鳴くんだろうな」

「お前は女とより、男と薔薇色の関係結んでた方がしつくりくる外見してるがな」

「何だとツ!？」

バルフレアの発言に激怒した海賊は斧を振り回す。

その攻撃を避けながらバルフレアは頭目掛けて発砲する。

男は目を回して倒れた。

「……キリがねえな」

誰に言うでもなくバルフレアは呟いた。

セアは3人の海賊が斬りかかってくるのを紙一重で避ける。

そして黒色の剣閃が海賊達の足を深く切り裂いた。

「がああああああ!!」

「動脈が！ちくしよおおお!!」

「げが、ぐ、がああ!!」

海賊達は派手に切り口から血を噴出し名から喚く。

「さて、次に血を流したいのは誰だ？」

セアの冷たい声に海賊達が恐怖で後ずさる。

「おい、お前行け！」

「なんでだ!? お前が行け!!」

「いんや！お前は俺様に借りがあるだろう。今返せ!!」

「はああ!? 何言つてやがる！この前の賭けでそれはチャラになっただろうが!!」

「知るか!!」

「んだと!？」

なにやら口論を始めた海賊達の首を跳ね飛ばそうと近づいて剣を振った。

だが凄まじい金属音をあげ、セアの剣は口論していた海賊の首には届かなかった。

「なにやっつてんだ。お前ら」

ギャンスはやや呆れたような声で敵前で口論していた海賊達に言った。

だが、ギャンスの言葉に海賊達の背筋は凍りついた。

なにせ自分達の所屬する海賊団の甲板長——へマした者に対して制裁を与えることができる地位にいる。

この海賊団でギャンスの背中が出血する程の威力を誇る鞭打ちの制裁を受けていない者など殆どいない。

だからこそ彼らはギャンスがある意味船長より恐ろしいのだ。

「もういいからお前らは向こうのヴィエラの相手をしてやれ」

ギャンスはそう言つて顎をしゃくる。

そこではフランが数人の海賊を相手にしていた。

叱咤された海賊達は逃げるようにしてフランの方に叫びながら向かった。

「……」

セアは剣を構えなおし、警戒する。

何の苦もなく先程の自分の剣を止められた。

で、あるならば目の前の男は相当な実力者だ。

男の得物は……細剣か。

自分の突きをいなされた後、(サンダラ)で攻撃しようとして詠唱をしながら突きを繰り出す。

が、あろうことかギャンスは細剣でいなさずに左手の甲でガードする。

ギヤイインと嫌な音を立てて斬撃はそれ、ギャンスの細剣が首筋に迫る。

思わず、セアは詠唱を中断し、受身をとって転がってその勢いのまま立ち上がる。

ギャンスの左手の甲は切り口から銀色の金属が覗いていて鈍く光っていた。

どうやら左手に金属の籠手を仕込んでいたようだ。

ギャンスは立ち上がって硬直しているセアの腹を籠手の仕込んでいる左手で殴る。

セアはその激痛に口から血を吐きながら剣でギャンスの顔を切り裂く。

ギャンスは即座に回避しようとしたが間に合わず斬られた左目を抑える。

「……それで意識を失わないって。まさかとは思うが同胞じゃねえよな？」

ギャンスは怪訝な声で聞いてきた。

だが、セアにとつては意味不明な質問だ。

「意味がわからん。なんだ同胞って？」

「……知らんらしい」

ギャンスはそう言うとなにやら唱えだした。

セアはしばし呆然としていたがそれが自分の知らない魔法の詠唱だと気づき、止めよ

うとする。

しかしギャンスの魔法の詠唱は完成してセアの体が光りだした。

いや、正確にはセアのポケットが光りだした。

「そこかッ!!」

ギャンスは細剣で突っ込んできたセアのポケットを切り裂く。

切り裂かれたポケットから双魚宮の紋章が刻まれた魔石が宙を舞い海に落ちた。

それを追いかけるようにギャンスは海に飛び込んだ。

セアもあの魔石の価値（マテイウスの力）を知っているので取り戻そうと海に飛び込む。

それから数分後、海賊船が謎の光線に貫かれて粉碎した。

第五十七話 水中戦

海に飛び込んだセアは必死に双魚宮の紋章が刻まれた魔石を探す。

「……お前、それほど必死に探すとはこれが聖石せいせきだと知っているようだな」

水の中ではつきりとした声が聞こえた。

驚いてセアはそちらを見る。

そこにはギャンスが双魚宮の紋章が刻まれた魔石を持ってまるで水中ではないとでもでいわんばかりに直立に浮かんでいた。

「まあいい。嘘え知つても所詮は脆弱な人間。消すのは容易い」

そういうとギャンスは持っていた双魚宮の紋章が刻まれた魔石を懐にしまう。

そして腰に下げたある細剣を抜き、まるで放たれた矢のようにギャンスはセアに突っ込んできた。

水中で思うように身動きが取れないセアは右腕を細剣で切り裂さかれた。

セアの右腕の傷口から出た血がまるで煙のように海中に広がる。

海中にいるせいで凄まじい痛みがセアの右腕を襲ったがやがてミストによって修復される。

その様子を見てギャンスは目を見開く。

「ただの人間じゃないようだ。聖石のことも知ってるようだし、もしや……オキューリアの手先かッ!!」

「ボゴツ!」

警戒の色を露にしてギャンスが叫ぶ。

意味不明な問いにセアは一瞬海中であることを忘れて問い返そうとした。

しかし言葉の変わりに空気が海中に出て行き、海水が口に流れ込む。

『それならば、全力で挑むまでッ!!』

そういうとギャンスは首飾りの宝石を掴んだ。

その宝石は眩い光を放ち、あたり一面を朱色の光で染める。

やがてギャンスの両手は巨大な蟹のハサミのようになり、甲殻類のような殻を得る。

ギャンスの体は人外のそれへと変貌を遂げた。

セアはその姿を見て目を見開く。

(まさかあれは断罪の暴君ゼロムス?! いまままでの奴とは違ってグローリア家に伝わる御伽噺の容姿と差異を感じるが……)

ギャンスが変貌している間にセアは海面近くまで空気を吸いに近づいていた。

だが、変貌したギャンスの姿にある闇の異業者との共通点を見つけて驚いていたので

ある。

《いくぞ、傲慢なるオキュリアの手先よ!》

そうおぞましい声で叫ぶとギャンスは右手をセアの方に向ける。

ハサミの間に膨大な紫色の力がたまりだす。

セアはそれに気づいて必死に客船の方に当てまいと海賊船の方に泳ぐ。

ギャンスはいわば自分達の船に被害が及ぶに間関わず、躊躇わずにその力を解き放つ。

その膨大な力は一筋の閃光となりセアの鼻先を掠めて、海賊船を貫いた。

海賊船の中心部に穴が空き、がらがらと船は崩れた。

「ブハアッ!」

セアは海面に出て、海賊船の残骸の上にあがる。

そして思いつきり深呼吸する。

船の崩壊から生き残った海賊がセアに剣をむける。

「てめえ、なにしやがった!!」

「……下に魔物がいる。そいつのせいだ」

「うるせえ!!死ねえ!!」

セアの言葉に耳を貸さず、セアに剣を振り下ろす。

その攻撃を避け、セアは隙だらけになった海賊の背を蹴って海に落とす。そして海からでてきたハサミに挟まれて海賊の胴体は真っ二つになった。

《……先程海中で顔色を悪くしていたことといい、どうやらお前は息を吸わねば生きてはいけんようだな》

「別に生きてはいけるが」

別に溺れたところで別に死にはしないが意識は失う。

昔、航海中に大嵐に遭遇して船が転覆して意識を失い、浅瀬にフオーン海岸に打ち上げられて意識を取り戻したのだが、その時は大嵐の日から2年近い月日が経過していたことがある。

そのことを差し引くとしても水中戦だとセアも普通の人間同様、水の抵抗のせいで動きは陸上より鈍くなる。

《だが、地上よりは弱くなることに違いはあるまい》

ギャンスはそう言って派手に両手のハサミでセアの体を挟もうとしてくる。

セアは剣をギャンスの両手のハサミの間に滑り込ませて防衛する。

《ほう、これ程の力でも切れぬとは随分と頑丈な剣なようだな》

ギャンスの言うとおりに、セアの剣には傷ひとつついていない。

《だが、これならどうだ？》

ギャンスはそう言うのとセアの剣を掴んだまま跳ね上がる。

セアは剣から手を離さず、一緒に空中に放り出された。

そしてギャンスはセアを下にしてそのまま自由落下で海面に叩きつけられる。

「がッ」

《剣から手を離せば俺の手で胴体が真つ二つになって楽に逝けるぞ》

ギャンスはこのまま海底に叩きつけ、セアの意識を奪うつもりだった。

だが、ここでギャンスにとって予想外の行動をセアがしたのだ。

セアはギャンスの両手を止めている剣から左手を離して腰の鞘の位置にもつていく。

するとそこに収まっていた剣を抜き放ち、ギャンスの顔目掛けて突き出す。

ギャンスは咄嗟の回避で致命傷は避けたものの頬に切り傷を残す。

セアはそれを気にも留めず、再び海面に向かう。

《どういうことだ？ お前の腰の鞘に剣など収まっていなかった筈だぞ!》

ギャンスの疑問は自分の両手を塞いでいた剣によって氷解した。

自分の両手を塞いでいた赤黒い剣が黄色いミストを放ちながら消え始めたからだ。

《なるほど、魔霧から剣を精製していたのか……!!》

殺意を新たにしてセアに向けて再び閃光を放とうとギャンスは右手を向ける。

しかし、北の方からやってくる船団を確認してそれを中止する。

《チツ、あいつを消す為に派手な事をして我々が魔霧の外で活動していることをオキューリアに悟られたら元も子もないか。今回は「パイシーズ」を回収できただけでよしとしよう》

ギャンスは忌々しそうに船団を暫く睨むと船団に背を背ける。

《ハシユマリムと合流して情報交換をするべきだな……》

そう呟くとギャンスは光の届かない暗い深海へと消えていった。

客船の甲板では海賊達が混乱のきわみにあつた。

「北から帝国水軍の船が10艘以上来てる！船はさっきの変な光でバラバラになつちましたし、どうしやす?!」

海賊は現状を船長に告げながら、指示を求める。

「チイ、この船を奪う!!そしてから逃げるぞ!!」

船長は悲鳴のように部下達に命令する。

「で、ですがまだこの船に乗ってる水兵がまだ20人近くいやすよ?間に合いますか?」「無駄口叩いてる暇があんなら敵を一人でも仕留めろ!!この役立たず共がツ!!」

「へ、へい!!」

部下達はクモの子を散らすようにバラバラになつて水兵達に襲い掛かる。

だが、ヤケクソになって冷静を失った海賊達は水兵達の相手にはならず、徐々に討ち取られてゆく。

その状況を見て勝ち目がないと船長は見て、小船をおろして一人で逃げ出そうとする。

が、そのことに気づいた水軍士官が海賊達の壁を突破して船長の背後に斬りかかる。

船長は咄嗟に防御しようとしたが間に合わず左腕に剣が食い込む。

「部下を見捨てて自分だけ逃げようとは大した船長だな」

「ク、クソがあ」

「おとなしく縄につけ」

「……年貢の納め時ってか」

船長はそう呟くと狂ったように笑い出した。

水軍士官はその奇怪な行動に警戒をする。

「ハハツ、なんで海賊なんぞ俺がしてるんだろ」

そう呟くと何故だか自分の人生に諦めがついて船長は無表情で剣を構えた。

水軍士官は捕縛は無理だと剣を振り下ろす。

だが、船長は左腕を犠牲にして間合いに入り込み士官の腹を蹴飛ばして馬乗りになる。

トドメをさそうと右手に掴んである剣を振りおろそうとした瞬間、船長の体は凍りついた。

「フランの方が早かったか」

バルフレアは船長を背後から（ブリザガ）で仕留めたフランを見てそう呟きながら銃をおろした。

水軍士官はしばし呆然としていたが氣を取り戻して自分の上に乗っかっている氷人間の首を斬り飛ばして晒した。

「お、お頭!!」

「お頭がやられた!!」

「ど、どうするよ!?!」

「し、しるか!!」

自分達の船長の首を確認した海賊達は完全に混乱して口々に指示を請う。

だが、もう既に彼らに命令を下すべき船長も甲板長もここにはいなかった。

そうしてオロオロしている内に帝国水軍の軍船が客船に接舷して水兵達が乗り込んでくる。

「海賊共に告ぐ! 命惜しくば武器を捨てろッ!! さもなくばこの場で斬殺するッ!!」

水軍将校の怒声が響き渡る。

既に自分達の旗頭を失った状態である海賊たちはおとなしく将校の命令に従った。

第五十八話 ぼったくり野郎に制裁を！

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領港町サマルスにて。

バート交通公社の客船を襲った海賊の生き残りは帝国水軍によって捕縛された。

彼らはこの町で取り調べの末、アルケイディア帝国の法に則って裁判にかけられると帝国水軍がその場で公表した。

その後、軍船に囲まれながら海原を進み、現在はサマルスにいる。

そして港に降りる際に、バート交通公社の社員から慰謝料を渡された。

「あ、貴方がたは海賊討伐の際に協力してくださった人達ですね。船長よりこれを渡すよう申し付けられてます」

セアとバルフレアとフランの3人は慰謝料とは別にギルの入った袋を社員から渡された。

「あの海賊つてどうなるんだ？」

ヴァンが帝国軍によって連行されている海賊達を見ながらつぶやく。

「よくてナルビナ送りだな」

バルフレアがどうでもいいように呟く。

それを聞いてヴァンはやや顔を青くした。

王宮に忍び込んで帝国軍に捕まった際にナルビナの地下牢にヴァンは放り込まれたことがあるのだ。

その時のことを思い出しているのだろう。

「それでこれからどうする？」

バツシユが皆集まっているのを確認して言った。

「このまま地方都市や村に寄りながらナルビナに向かうべきだわ」

「オレもだな」

アーシエの提案にバルフレアも賛成の意を示す。

「俺としては一度ラバナスタに寄るべきだと思うが……」

セアは控えめに提案する。

「なぜですか？」

「ラバナスタからナルビナに向かう商隊は多い。それに紛れていけば安全に国境まで近づける」

「……」

「それに食料やらなんやら買い込んでおくべきだ。地方都市ならともかく村だとそんなに買い込めないと思うからな」

「……そうですね。一度ラバナスタに戻りましょう」

アーシエはセアの提案を受け入れ、バルフレアも渋々頷いた。

「それなら西のギーザ草原から北上した方が早いわね」

「そうか、なら急ぐぞ。今日中にギーザ草原にある遊牧民の集落には着きたいからな」
話が纏まり、周りを見回した時に一人足りないことに気がついた。

「おい、馬鹿弟子は何処に行った?」

「ヴァンならちよつと小便しに行つてくるつて言つてどこかに行きましたけど」

パンネロの返答にセアは少し呆れた表情をして顔を手で押さえた。

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領王都ラバナスタにて。

港町サマルスと出て2日でセア達は王都に戻ってきた。

「アーシエ達のガリフ行きに付き合つて、まだ1ヶ月位しかたつてないはずだけど、随分懐かしく感じるな」

「色々あつたからね」

パンネロの言葉を聞いてヴァンは腕を組んで今回の旅のことを思い返す。

ガルフの里で本音をラーサーと再会したり、アーシエにぶちまけたり、神都行きがきまつたり。

エルトの里がフランの故郷が判明したし、巫人達がごちやませで暮すラバナスタは珍しい場所だと初めて知ったし。

神都だとロザリアのお偉いさんが出てくるし、アルケイディアの皇帝が暗殺されたなんて爆弾発言されるし、他にも霸王の遺産があったことがわかったし。

そしてミリアム遺跡だとなんかベリアスに似た……マンティコラだっけ？とかがいたし。

そうして【霸王の剣】を手に入れて遺跡を出たら神都から火が上がってるし。

戻ったら戻ったでジャツジマスターの一人倒しちゃったし、セアが自分の過去を暴露して珍しく激怒してる姿をみたり。

うん。本当に今まで一番色々なことが起こった1ヶ月だったと何度もヴァンは領いた。

「おい、ミゲロさんに挨拶しにいとけよ。10日間程度で戻れる筈なのに1ヶ月以上留守にしてたから多分心配してるだろうからな」

「わかった。セアはどうするんだ？」

「俺は……そうだな。とりあえず砂海亭でトマジを取っちめる」

セアは明らかに暗すぎる声を出してヴァンとパンネロに言うのと市街地の方に走り去っていった。

その言葉を聞いてヴァンはセアがトマジにぼったくられたとか言ってたことが脳裏を掠めた。

(そういや、破産寸前まで高級の蛇酒を飲まされたとかどうとか……トマジ、生き残れるかなあ)

ヴァンはトマジのことを心配しつつ、空を仰いだ。

「オレらは砂海亭に酒を飲みに行くつもりだったんだが……これだと先に必要なものを買に行った方がいいな」

「そうするべきだとおもうわ」

バルフレアはセアが走り去った方向を見ながら呟き、フランはそれに同意した。

砂海亭の扉を開けたセアはカウンターの方に視線を走らせる。

そしてセアのことに気がついたトマジが目に入った。

トマジは店員を押しつけて逃走を図るが店の奥に入るよりセアの右手がトマジの肩を掴むほうが早かった。

「おい、トマジ。俺が来た途端引っ込もうとは一体どういう見だ?」

「それは……その……」

トマジは顔が冷や汗だらけになっている。

「あのさ、とりあえず飲もうぜ。奢ってやるからさ」

セアの言葉に流石に他の店員が反応を示す。

「おい、まだトマジは仕事——」

セアはポケットからバート交通公社から渡された慰謝料が入った袋を店員に突き出す。

「それは全て君へのチップだ。大目に見てくれ」

「は、はい！」

「ところでトマジ君の仕事時間は終わってるのかな？」

「はい、たった今終わった筈です」

店員の宣言にトマジが口を挟む。

「まだ数時間程働かなきゃいけない筈なんですけど……」

「安心して休め！店長には話を通しといてやる」

「え？ちよ、給料に影響が出ると思うんですが——」

「安心しろ！お前が今日一日仕事する儲けより、この人から貰ったチップの方が高いからな！」

トマジの必死の足掻きを店員は悉く一蹴する。

「では、2名様ご案内!!」

店員はそう言うのとセアとトマジを2階の席に案内した。

「よし、飲むうか。何を飲む? スーパーデンジャラスジュースでも飲むか?」

「いやいやいや! それあれだからね!? 飲みきったら1000ギルあげますっていう企画あるくらいのもまじくアレな液体だからね!!」

トマジが店の壁に張つてある企画のポスターを指差しながら必死に叫ぶ。

「悪いただの冗談だ。シエリー酒でいいか?」

「ああ、じゃ、それで」

セアは店員にシエリー酒を注文すると真顔になつてトマジと向き合う。

「それで数ヶ月前の蛇酒のことについてなんだが……」

「すいません! 出来心だつたんです! 許してください……ささい」

そう言いながらトマジが物凄い勢いで立ち上がるとこれまた凄い勢いで頭を下げる。

……勢い余つて木製の机に頭が激突し、セアは噴出しそうになるのを必死に我慢する。

「……いや、出来心で無一文になつた俺からすればまったく笑えないが、まあいいや」

「いいのか?」

「ああ、おかげで色々気になることができたからな」

「気になることつて……?」

トマジが不思議そうな顔をして尋ねる。

するとセアは悪戯っぽい笑顔を浮かべて言った。

「そうだな。たとえばお前がロザリアの諜報部に所属してるって話とか?」

トマジは出てきたばかりの酒を口に含んでいたため、酒を噴出した。

噴出した液体はあつというスピードでお盆でガードしたセアには届かなかった。

「ああ、もつたいない。20ギル弁償しろ」

「金の話はひとまずおいといてだな! なんて知ってるんだ!」

「アルシドから聞いた」

「……アルシドって諜報部のトップのアルシド?」

「その絶倫野郎以外にどのアルシドがいるっていうんだ?」

トマジは青い顔をして「なんで諜報部のトップと知り合いなの」とか「アルシドに彼女を奪われたって泣いていた上司の話は本当だったのか」とブツブツ呟いていた。

その呟きを聞いてセアが「あの馬鹿はどこまで下半身が元気なんだ?」と顔を青くしていた。

「……それでだ。お前いつロザリアの諜報部に入ったんだ?」

今度アルシドに会ったらとりあえずアルシドの下半身目掛けて〔サンダガ〕をぶつ放そうと思いつながらセアはトマジに問う。

「敗戦直後さ。稼ぎ頭だった父が戦争で死んでからなにかと金が必要になつてな。そんな時にロザリアの工作員と接点をもつてな」

「抵抗はなかつたのか？」

「アルケイディアに一泡吹かせたいと思つてたからな。それに今までどおり砂海亭で働きながらでいいって聞いたからな」

「なるほど」

「一応、このことはヴァン達には黙つてくれよ。色々面倒なことがおきそうだから」

「そうか、ならお前がロザリアの諜報員だと街中に触れ回ればこの前のぼったくりに對するいい復讐になるな」

「勘弁してください!!!」

そんなトマジの魂の叫びにセアは曖昧な笑みを浮かべながら酒を煽つた。

因みにトマジがセアに對して買取攻勢をかけてようやく自分が諜報員であることを秘密にして貰えた様だ。

第五十九話 セアの家

トマジから大金を巻き上げ、もといぼったくりに対する慰謝料を払って貰ったセアは自分の住居の方へと向かった。

自分の借りている住居はダウンタウンにある。

市街地の中心部にある地下へと続く階段を下った場所にある外民の居住区だ。

ヴァンやパンネロもこのダウンタウンで暮らしているのだ。

ダウンタウンは地上とは違い、帝国兵が警備をしていない。

偶に巡回で来るには来るが余程大騒ぎをしない限り、基本的に干渉して来ない。

その為、必然的に治安は地上に比べて悪く、犯罪者のたまり場にもなっている。

セアが自分の住居に向かって歩いてみるとバツシユと鉢合わせた。

「なんでダウンタウンに？」

「解放軍のアジトがどうなったのか気になってきたのだが……。もぬけの殻になっていた。おそらくオンドール候と合流したのだろうな」

「ああ、解放軍のアジトもここにあったのか。ま、ラバナスタに拠点を置くならここ以外置く場所がないか」

セアの言葉にバツシユは頷いた。

「それで、君はなんでここに？」

「いや、ただ一度自分の借り宿に戻ろうと思つてな」

セアの答えにバツシユは興味を引かれた。

「君の家か。よければ上がらせてくれないか？」

「……別にいいけど何も出せないぞ」

「かまわん」

バツシユの軽く笑いながらの返答にセアはこつちだといつて自分の住居に案内する。

セアは自分の住居の扉を開けて中に招き入れた。

「……掃除しないのか？」

「やるだけ無駄だ。また散らかるからな」

セアの住居は足の踏み場ない程、様々なもので溢れかえつていた。

なにかのレポートや用途が不明な器具の数々が床に散乱しているのだ。

一応、奥のスペースに机と椅子と本棚とベットがある為か綺麗に整理されている。

「まあ、踏まれてなんか壊されても困るからとりあえず奥に来てくれ」

その言葉を聞いてバツシユはなんとか床に散乱しているものを踏まないようにして

奥の片付いているスペースに移動する。

そしてセアに椅子をすすめられてバツシユはその椅子に座った。

すると机においてある一冊の本にバツシユは興味を引かれた。

本には「森のオオカミ」と記されてあつた。

「興味があるなら別に読んでいいぞ」

セアは床にあるレポートをひっくり返しながら言った。

バツシユはなにもすることがなかつたのでとりあえず読んでみる事にした。

『山と海に囲まれた小さな街。』

豊かで平和なこの街には、ひとつの心配事がありました。

それは森に住んでいる一匹の大きなオオカミのこと。

いつのまにか棲みついていた凶暴な獣は、時おり遠吠えを響かせ、街人を震え怖がらせるのでした。

しかし、そのオオカミは街人を困らせるつもりではなく、本当は人と仲良くしたい、友達をつくりたいと遠吠えを上げていたのでした。』

挿絵にオオカミの遠吠えに怯える街の人々と寂しさのあまり涙を流しながら遠吠えをするオオカミが描かれている。

お互いの事を知らないが故にこんな状況になっているのだ。

『そんなオオカミの姿をみかねた街の狩人は、手助けをすることにしたのです。』

「オオカミよ。何故あなたが人に恐がられるのかわかりますか？それは、あなたの姿が怖いからなのです。」

どうしたらいいのかとオオカミが尋ねると狩人は言いました。

「あなたに人の姿になる魔法をかけてあげましょう。」

その言葉が終わると、オオカミは人の姿に変わっていました。

感謝するオオカミに狩人は忠告しました。

「あくまで姿だけで人に変わったわけではありません。」

決して声を出してはいけませんよ。

あなたはオオカミなのですから——。」

挿絵にオオカミを哀れんで人の姿になる魔法をかける狩人の姿が描かれている。

『人の姿になったオオカミは、森を抜け街に向かいました。』

これで友達をつくることができる。

顔には眩しい笑顔を浮かべていました。

通り過ぎる人は皆、誰だろう？と不信がりましたが、

その笑顔に緊張を解き歓迎するのです。

これまで恐ろしい形相の顔の人しか見たことがなかったオオカミは、

街の人から向けられた笑顔に感激しました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、辺りは暗くなってきました。』挿絵に人に化けたオオカミが嬉しそうに街を歩く姿が描かれている。今までオオカミに描かれていた寂しそうな顔が嘘のような表情だ。『オオカミは森に帰りました。

人の姿は元に戻り、口を閉じる必要はなくなりました。けれど、もう遠吠えを上げることはありません。

今日という素晴らしい日を狩人に感謝しながら眠りにつきました。そんなオオカミを、狩人は優しく見つめるのでした。

そして――。

山と海に囲まれた小さな街。

豊かで平和なこの街には。その昔、ひとつの心配ごとがありました。しかし、そんな心配を抱くことはもうありません。

街では勇敢な狩人を称える声が響き渡っていました。その声は、街人を震え怖がらせることもなく、

いつまでもいつまでも止むことはありませんでした。

――オオカミの大群が街へ向かってきていることに気付くまでは。』挿絵に街に迫る腹をすかせたオオカミの群れが描かれている。

寂しさを紛らわす為に、大きな遠吠えをあげて自分の縄張りを築いていたオオカミが死んだが為に。

「救いようがない話だな」

バツシユは読み終わった本をそう評した。

「俺は結構好きなんだけどな」

セアは探していたレポートを数枚拾い上げて、整えながら話す。

「基本、生物は無知だ。それが故に喜劇や悲劇を生む。そのことをその御伽噺はよく表現できてると思うんだがな」

セアの言葉にバツシユは言い返すことができなかつた。

しばしどちらも黙り込んでいたが、ふとバツシユがセアが拾ったレポートを真剣に見ているのに気がついた。

「なにを讀んでいる?」

「別になんでも……いや、別に教えても大丈夫か。馬鹿弟子も王女様も何故かドラクロア研究所に詳しい空賊もここにはいないわけだし……」

セアは床に座り込んで、腕を組む。

そしてブツブツとなにかを呟いていたが、やがて考えが纏まってバツシユに話しかけた。

「俺は700年以上生きてる」

「ブルオミシエイスで既に聞いた話だ」

「ああ、その間、どうやって生活費稼いでたと思う?」

「……モブ退治や傭兵をして稼いでいたのではないのか」

「まあ、それもそうだが、他にもフリーの研究者として活動しててだな」

「なるほど。では床に散乱しているレポートや器具は研究の為のものか。しかしこんな大雑把な管理でよいのか?」

「簡単な実験と理論の構築しかこの部屋ではしてないから問題ない」

「そういうものなのか?」

「そういうものだ。少し話が逸れたが最初に砂海亭で貴方と出会う少し前にフリーの研究者として1ヶ月弱活動してたんだ」

セアはそう言うかと持っていたレポートの束を机の上に放り投げた。

バッシュはそのレポートの提出先の場所が書かれている部分を見て目を見開いた。

「ドラクロア研究所に雇われて……な」

「では、君はアルケイディア帝国の兵器開発に協力を……?」

「よく誤解されているが、別にドラクロアは兵器開発だけしてるとって訳じゃない。まあ、帝国の兵器開発を一手に仕切ってるし、兵器開発部門が研究所内で一番大きい部門だか

ら勘違いされるのもしかたないのかもしれないが……」

「なら君はなんの研究をしていたんだ？」

「人工的に魔石を精製する研究をしていた。その割にはひたすらミストの吸収率を高めるだけの研究だったかな」

「それはまさか——」

「ああ、今思えばその成果が人造破魔石の合成に活用されていたんだろう。……ミユリンを狂わせ、ベルガに人外の力を与える切欠を造った一端は俺にあるってことになるな」

「それで……どうするつもりだ？」

「さあ。だが、実はビュエルバから戻った後、俺はドラクロアの所長であるシドと会っているんだ」

「なっ」

予想外のセアの発言にバツシユは絶句した。

「その時にシドからアルケイディアに手を貸してくれないかと誘われた」

「……それで君はなんと答えたのだ？」

「俺は自分から国家に縛られに行くような人間じゃないんでね。答えは保留にしておいた」

「保留……なのか」

「ああ。だが、その時気になることをシドは言っていた」

「気になること？」

「『そう遠くない日に我が帝国は歴史を動かす戦争をする』とな」

「アルケイディアとロザリアの大戦のことか？」

「俺もそう思っただけ聞いてみたんだが『ロザリアなど前座にすぎん』って言ってたな」

「……ロザリアが前座？他にアルケイディアと戦える国家など存在しないだろう。いや、まさかイヴァリースの外にも進出する気なのかシド達は」

「さあな。ヤクト対応型飛空石の開発にも成功しているからそれもありえるだろうな。だが、根拠なんかなにもないんだけどそうじゃない気がするんだよな」

「？根拠もないなら何故そう思う」

バツシュのある意味当然の疑問にセアは軽く微笑みながら答える。

「なんというか、あの所長は人間の国や亜人の集落なんか眼中にないような気がする。ただそれだけだ」

The birth of the tyrant of immortality

平和とはあらゆる争いによつて流された血を吸い上げ、死者の屍の上に咲き誇る一輪の花に過ぎない。

そしてそれは流れた血の量に比例して咲き誇るがやがては枯れ、再び争いがおこる。何故なら人は争いつづけては生きていけないと同時に争わずに生きていくことはできないからである。

—※—

クライス・セア・グローリア。

私、グレキア王国第一王子の名前である。

グレキア王国は非常に古い国家であり、王家であるグローリア家はかつてロンカ王朝に仕えた地方貴族の生き残りであると伝承で伝わっている。

だから建国時期が不明ではあるが少なくとも千年以上の歴史を誇るバレンディア西部に覇を唱える大国である。

—※—

結婚することになった。

相手は中堅国であるセルダ王国の第一王女であるエレーヌ・カヤ・セルダスだ。

所謂政略結婚という奴であり、セルダを味方につければ北の異民族国家シユターン帝国への自国領内の防波堤となる。

更にセルダはキヤメロツト王国とも国境を接しており、シユターンだけでなく、キヤメロツトへの牽制にもなる。

そう判断した父上がセルダ王に縁談を持ちかけてそんな話ができていたらしい。

その為、父上から自分の婚約者の話を切り出されたときは少々驚いたが、祖国グレキアの為、そのことに迷いはない。

—※—

セルダ王国の王侯貴族を招き、王都ランチエスで2週間に渡って宴会を行った後、盛大に結婚式を行うらしい。

この時、初めて私は自分の婚約者であるセルダの王女エレーヌと会った。

不安げな顔をしながら、ギギギ……という効果音でも鳴りそうなきこちなさをもつて礼をしてきた。

……これは実に面倒な予感がひしひしと感じる。

とりあえず2人だけで話したいといって彼女と一緒に舞踏会に出席せず自室で語り

合った。

— ※ —

1週間位するとエレノもとりあえず普通に振舞える位には緊張はほぐれたみたいだ。

こうしてようやく今回のセルダとの宴会の主役である私達が舞踏会に出席することができた。

グレキア・セルダ両王国の重要人物もその様子を見てホツとした顔をしていた。

確かにこれで私達の仲が険悪なものだった場合、両国が戦争に突入していた可能性すらあるから当然だ。

実のところエレノ又大国の王子というだけで異常に緊張していたしただけなのだ。

因みに「1週間前とかなり王女の雰囲気が違うのですが、まさか結婚前に手をだしたんじゃないませんか？」とか妙な勘違いした親衛隊長が訝しげに聞いてきた。

勿論していいない。つーかキルティア教の教義に真つ向から背くまねを私ができるか！

腹が立ったので親衛隊長の妻宛てに「夫が貴族の奥方達」と不倫している」という内容の手紙を送っておいた。

愚かなる親衛隊長に幸あれ、フアーラム。

— ※ —

結婚式当日。

親衛隊に警護されながら私は式場に向かった。

……親衛隊長の頬にビンタされた後と思しき手形が浮かんでいた。

エレーヌは少々緊張しているようだったが、特に問題はなそうさだ。

「大いなる父の名において汝らふたりを夫婦であるとみなす。恵深き神の祝福が汝らの行く道にとこしえにあらんことを」

王宮内の神殿で大司教の文句とともに私とエレーヌは誓いの口付けをかわした。

こうして私達は晴れて夫婦となった。

— ※ —

夫婦になったと言っても私が王都にいる際に同じ部屋で暮すようになっただけで今までの生活とさして変わらない。

東のキャメロットとは表向きは友好関係にあるとはいえ、月に一度は国境で小競り合いが起こる。

北のシュターン帝国とはキルティア教圏諸国とは違う宗教を信奉していることもあり、犬猿の仲である。

南の小国家群も絶えず争いを続けている。

安定しているのは海に接している東位なものだ。

そんなだからあちこち飛び回って、第一王子の私が王都にいる時間は意外と短い。

だからあまりエレーヌに構っている暇はないのだ。

だから常に王都にいる際は可能な限り優しく接しているつもりなのだが……

なぜかたまに不満げな顔でエレーヌが私を睨んでくる。

何故なのだろうか？

—※—※—

結婚から2年後、私が17歳の時。

シユターン帝国の大軍を率いてグレキア王国領に侵攻してきた。

戦争自体はシユターン軍に大打撃を与えて、撃退することはできたものの父上が戦死した。

父上の死が悲しくなかったといえれば嘘になるが私は王族であり、悲しんでいる時間などない。

戦後、すぐに私の戴冠式が行われ、弱冠17歳の身で大国グレキアの国王になってしまった。

王として若すぎる故、私を侮る者は国内外に多数存在した。

だが、王に即位して数週間後におきたランスの地での反乱を早期終結させた私の功績の前に多少改善された。

そして「キヤメロットの」キルティア教圏の秩序を乱した異教徒への制裁」という大義名分で行われているシュタールン帝国侵攻を支持してキヤメロットの関心が北に向かっている間に国内の安定と軍事力の回復させようと試みた。

こうして周辺諸国がグレキアにちよつかいをかける余裕がないように調整した。

そして伝統に則りブルオミシエイスの大僧正へ、国王に即位したという挨拶に赴かねばならない。

慌しく駆け回り、半年近く国を空ける準備が整ったのは年の中頃であった。

—※—

南のケルオン大陸のヤクト・ラムーダにある神都ブルオミシエイス。

キルティア教の創始者が没した聖地。

この神都ブルオミシエイスほど、煌びやかな神殿はイヴァリース中を探しても見つからないだろう。

そうして景色に見入っていると不意にエレーナから声をかけられた。

振り返るとエレーナの顔色が少し悪いような気がした。

心配していると彼女は私を真名で呼んだ上、「愛する男性にそういう態度をとられる

のは悲しいです」などと言われた。

私は互いの国の利益の為にエレーヌは私と結婚したのだと思っていたので愛されているなどとは考えた事すらなかった。

その後に続くエレーヌの言葉に私は羞恥で顔を真っ赤に染め上げて気を失った。なんとも情けない話である。

—※—

気を失い倒れたので、大僧正と会談する予定の日は一日ずれた。

大僧正は理由を聞いてきたがまさか妻からの告白で頭が真っ白になったなどと言えるわけがない。

仕方なく、「長旅での疲労がブルオミシエイヌに着いた途端噴出したのかもしれないぬ」と答えておいた。

一応、長旅の疲労が溜まっていたのは事実なので完全に嘘というわけではない。

別に疲労が溜まっていたなかつたらエレーヌからの告白に気を失うことはなかった……はず。

その後、軽く世間話をした後、キルティア教会との不可侵条約及び政教分離協定を更新をおこなった。

そして……夜に妻から仮名ではなく真名で呼べと言われた。

※
 ヤツちまった。

昨夜、妻のエレーヌ……じゃなくてカヤと臥所をともしました。

……今思えば初体験がキルティア教の聖地つてのは教義的にどうなんだろうか？

いや、時の神・転生神ゾーラとて夫婦の関係は円満であるべきとされているじゃないか。

問題はない……はずというかないと思いたい。

おお、母なる女神よ。どうか我を許したまえ。フアールム。

※
 ————

ブルオミシエイスから戻ってきて1年後。

私とカヤの間に子どもが生まれた。

名前はクライス・ティア・グローリアという。

可愛いな。こいつめ。

※
 ————

ティアが生まれてからも私は王としての国務が忙しい。

はつきり言つて十代の少年にやらせる仕事量じゃないだろうと思う。

宰相がかなり頑張ってくれているが、それでも仕事量は膨大である。

東の大国キャメロットの動向に目を配りつつ、北の異教国家シユターンを警戒しつつ、内政を行わねばならぬのだ。

更に南の小国家群が互いに衝突している為、南からくる難民も警戒しなくてはならぬ。

本当に忙しすぎる。

ただ、王都を離れることが殆どない為、ほぼ毎日愛しい妻や子に会えることが救いである。

—※—

近頃、南が不穏である。

ある小国が凄まじい速さで他国を併呑していつているのだ。

我が国の影響下にある国家も幾つか力づくで併合されている。

その小国は昨年、レイスウォールとかいう貴族が王家を打倒して成立した国家だ。

いまはまだ小国といえる規模ではあるが、このまま放置しておれば面倒なことになる。

—※—

キャメロットと同盟を結び、レイスウォールを倒す為、戦争を行うこととなった。

というのも母上の生国である国にレイスウォールが軍勢を率いて攻め入ったからだ。

ことここに至って私は宣戦布告し、それを知ったキャメロットも援軍を申し出てきたのである。

いまだレイスウォールが治める国はグレキア・キャメロットの10分の1にも満たぬ領土しかないとはいえ、たった1年でこの成長は異常だとこの大陸の列強である両国が手を結び、大軍を派遣したのである。

これだけの大軍だ。レイスウォールもひとりもないだろう。

—※———※———

なんとということだ。

列強2カ国による連合軍が高々数千程度の軍勢に敗れるなど夢にも思わなかった。

更にキャメロットが緒戦の大敗を受けて、全面撤退を決め込み、国境の守りを固めている。

噂ではレイスウォールとの間で内密に休戦協定が成り立ったという噂だが、真偽は不明だ。

とにかくレイスウォールの軍勢はキャメロットなど眼中にないかのようにグレキアの領土を蹂躪している。

こちらも必死に防戦を試みたが結果は連戦連敗であり、王都にまで追い詰められた。

向こうが王都に攻めてくるなら討ち死にするまで戦い続けると会議で決まった。

そのことをカヤとティアにも話した。

するとカヤが「ここまですればもう降伏した方がよいのではありませんか？その方が助かる命は多いと思います」と言ってきた。

……私は何も答えられなかった。

——※——

敵襲を告げる声、私も王宮にある剣を掴み、外へ出ようと走り出した瞬間。

凄まじい光と衝撃が私を襲った。

薄れゆく意識の中、戴冠の際に受け継いだ王の剣が不気味に輝いているのを見た気がした。

——※——

ここはどこだ？ 星空？ 浮いているのか？

いや、堕ちている!!

ガアアツ！い、息が苦しい。

プハア、ここはどこだ!? 海か!!?

だ、誰だ!? 私に話しかけるのは!!!?

とにかく私を元の場所に戻せッ!!

な！なんだ!?

み、水が……体が……沈む……

苦しい……く、空気を……

—※—

私は王宮の一室で目を覚ました。

なんださっきのは？変な場所についてそれで……

？ながあつたんだっただけ？

よく思い出せない。

夢だったのか？あれは？

まあ、そのことはどうでもいい。

しかし、いったいなにがあつたんだ？

敵襲を告げる声が聞こえたところまでは覚えているのだが……

なにやら奇妙な霧も出ているし……

そうして周りを見回してみると、ある人影が私に向けて剣を振り上げているのが見え
た。

曲者だと思い、持っていた剣でそれを斬り捨てる。

斬ったモノをみて私は足元が崩れていくような脱力感に襲われた。

テイアじゃないか……いったいなぜ……？

しばし目の前の光景が信じられずに茫然としていた。

我を取り戻した時には私は囲まれていた。

アンデットと化した親衛隊の隊員達に。

私は泣く泣く彼らと戦い、勝利した。

だが、虚しさと嫌な予感しか沸きあがってこない。

私はそれを否定したくてペランダから街の様子を見ようとした。

果たしてその結果は……私の予感の中していた。

生ける屍となった民達がミストの漂う廃墟と化した王都を徘徊している。

……私は自分でも理解できぬ感情に駆られ、街を駆け回った。

そして片端からその屍共の首を飛ばしていく。

消えろ！消えろ！消えろッ！！

そう咆哮し、涙を流しながら、私は王都中のアンデットを消していった。

そうしてアンデット化した者達を全滅させた。

されど、自分の中で肥大化していく感情に私は恐怖した。

その恐怖のまま私は剣で自分を何度も貫いた。

剣が自分の体を貫通する度に激痛がはしり、血が流れたがそんなことは気にもなら

ず、何度も貫いた。

しばらくして……私——否、俺は灼熱の憎悪をもってこのような地獄をここに出現させた元凶に辿りついた。

……殺してやる。

殺してやる！殺してやる！殺してやる！！

殺してやるぞ！！レイスウオオウルウウ

—※———※——

!!!!!!

あれから幾十年。

……この数十年は長すぎたようにも思えるし、一瞬のようにも思える。

レイスウオールへの憎悪のみがこの数十年の全てといつても過言ではない。

幾度となく奴を殺そうとしたが常に失敗に終わった。

そうこうしている内に……寿命で憎き仇が死んでしまった。

そのことを知った時にどういわけか俺をあれ程支配していた憎悪が消えさせた。

いや、消えさせたというは語弊がある。

正確には憎悪だけに囚われなくなったというべきか。

そして冷静に今を見てみた。

イヴァリースは統一され、戦争など知りもしない大人も珍しくない。

それ程までの平和が目の前にあつたのだ。

レイスウォールがどのような方法で王都ランチェスを消し飛ばしたかは知らないが、仮に俺が国王だった時に、その力を手に入れていたならばどうしただろうか？

考えるまでもない。あれほどの力があるならば他国との戦争も外交も幾らでも有利に進められる。

俺も一国の君主として、レイスウォールと同じようにあの力を活用していたのだから。

所詮人など己の大切なものを守るためならばいくらでも非情な存在になれるのだ。

俺にとつて大切なものがグレキア王国という国と民であり、あのレイスウォールにとつては自分の国と民だった。

ただそれだけのことにすぎないが、理屈ではわかつてても感情はどうにもならない。

古今東西、感情を理屈より優先する君主は歴史に暴君の烙印とともに記されている。

その通りならば俺は国も民も……家族も失い、暴君と成り果てたわけだ。

……既にグレキア王国の名を知る者も少なくなり、その存在すら忘れられてしまったかのようなのだ。

そんな忘れられた国の為に戦い続けることなど憎悪の根源と呼べる存在がこの世よりいなくなつた今となつては俺には無理だ。

虚無感に支配された心のままにイヴァリースをさ迷っているといつしかランチェス

の廃墟に俺は立っていた。

もう知っているものは誰一人いないのだ……

そう思うと同時に孤独感に苛まれ、人と関わらぬ生活を送るようになった。それはさる森であるヴェイエラと出会うまで変わることはなかった。

第五十九・五話 ラバナスタの人々

セア達と別れた後、ヴァンとパンネロはラバナスタのムスル・バザーを散策していた。「父さんや母さんが生きていた頃ほどじゃないけど……、前と比べて活気が戻ってきてるね」

パンネロはバザーを見回しながら呟いた。

バザーは人込みで溢れ、商人たちは熱心に客の呼び込みをしている。

今までなら駐屯している帝国兵がそれに水を差していたのだからこれ程活気のあるバザーは久しぶりだった。

「そうだな」

ヴァンが少し複雑な表情をしながら肯定した。

以前、神都で帝国の理不尽はヴェインによって改善されたとセアから聞かされているからだ。

活気が戻っているのはヴァンも嬉しいのだが、なんともいえない感情を持って余していた。

2年前の戦争といい、とことんだルマスカ人たちのやることは無視されて、ラバナス

夕に対して理不尽を行うのも、それを正すのも全てアルケイディア人がしている。そのことに大国と小国の違いをヴァンは感じずにはいられなかった。

「あ、お久しぶりです」

パンネロが通りを歩いていたヒュムの男とバンガに話しかけた。

昔からヴァンやパンネロと家族ぐるみの付き合いがあった人達だ。

「おお、パンネロ。それに……ヴァンか」

「……その微妙な間はなに？」

男が自分の名前を呼ぶまでの微妙な間が気になって質問した。

「いやな。最近お前を見ると一瞬レックスかと思っちゃってな。もう2年もたってんのかな」

男が少し理由を話そうかどうか迷った仕草をした後、気まずそうに言った。

するとヴァンは首を傾げながら、

「オレ、兄さんとそんなに似てるかな？」

「お前等は兄弟だろ。それにもうお前は俺が最後にレックスを見た時と同じくらいの歳だからな」

男は感慨深げに言った。

それに対してヴァンはそういうものなのかな？と思った。

ふと男がなにか思い出したように、

「そういや、お前達。妻から聞いたんだが最近街にいないらしいな。なにしてるんだ？」
男の質問にヴァンは口籠った。

まさか死んだ事になってる自国の王女と一緒に行動しているなんか言えない。

ヴァンがなにか適当に理由をでっちあげようと思ったところで、

「ヴァンと一緒にあちこち旅してるんです」

パンネロがヴァンに助け舟を出した。

「あちこちつてどこにだ？」

「西の砂海に行ったり、南のガリフの集落とかです」

「……結構遠いな。そんな場所まで2人で行ってるのか？」

「2人じゃありません。セアさんや他の大人の人達に混じっていつてるんです」

パンネロの説明に男はホツとした表情を浮かべた。

「よかった。妻もなんか危険なことやってるんじゃないかって心配してたんだ」

「そんなに危険ことしてないよ」

ヴァンが何のためらいもなく言い切った。

その言い切りようにパンネロが内心非常に驚いた。

イヴァリースに割拠する諸国に指名手配されている空賊が2名、国王暗殺の濡れ衣を

着せられた将軍が1名、亡国の王族が2名というとてもない人達とともに旅をしているのだが、ヴァンはその危険度をはつきりと認識していなかった為である。

立場的にはともかく根は良い人ばかりなのもそれに拍車をかけている。

「そりゃ、よかつた」

男が安心したように言った。

「それにしても懐かしいな。お前よくこの辺で悪さしてはレックスに叱られていただろう」

バンガが笑いながら言った。

パンネロも当時のことを思い出して笑い、ヴァンは赤面した。

「レックスが死んでから、お前は空賊になるだの言つて、帝国兵相手にスリばかり繰り返して心配だったが、セアやパンネロの他にも一緒に遠くへ旅をできるような仲間ができたんだな。……自分の足で歩けるようになったってことか。レックスも喜んでると思うぞ」

バンガはヴァンの顔を真つ直ぐに見ながらそう言った。

それを聞いてヴァンはさつきとは別の意味で赤面した。

「そ、そうかな」

「大方、旅の間になにかあったんだらう。見違えたよ」

「ああ、随分といい顔するようになったと思うぜ」

2人にそういわれてヴァンは気恥ずかしくて頭を掻いた。
するとバンガが少しおどけたような声で言った。

「そういえばお前達、ミゲロさんが心配していたぞ。帰ってくるのが遅いつて」

「あ、そうか。今回の旅は追加でブルオミシエイスにも行ったからミゲロさんに伝えた日数よりだいぶ長くなったんだった」

「ブルオミシエイスつて……お前等、巡礼しにいくほど経験なキルティア教徒だったか？」

男は怪訝な顔をして2人に問いかけた。

神都に行く人間など難民か、巡礼しに行くほど酔狂——もとい敬虔なキルティア教徒位だ。

2人とも巡礼目的でブルオミシエイスに訪れた訳ではないのでヴァンとパンネロは首を横に振った。

「そ、そんなことより、ミゲロさんに帰ったって伝えにいい。それに今度のことも言っておいたほうがいいし」

「うん？ ああ、そうだな。じゃ」

「おう。無茶すんじゃねえぞ」

ヴァンとパンネロは2人手を振りながら、市街地の方に走って入った。バザーからヴァンとパンネロの姿が見えなく男はバンガに話しかけた。

「ヴァンもいい顔になってきたな。レックスにも見せてやりたいぜ。お前が命に代えて守った弟は、こんなに立派に成長したぞって、な」

「ああ、まるであの頃のレックスのようだ。ずいぶんとたくましくなったもんだ」
2人は互いに談笑しながらバザーの人込みの中に消えていった。

市街地にあるミゲロの店にヴァン達は入った。

「いらつしやーい」

店員が声をかけて近づいてきたが、ヴァン達の顔を見ると何故か疲れた顔をした。

「お帰り。ミゲロさんが帰るのが遅いからなにか事故にでもあったのかって心配してたよ」

「いや、色々あつてさ」

ヴァンが頬を掻きながら言った。

「とにかく、ミゲロさん呼んでくるからちよつとまってて」

そう言つて店員は店の奥に入つていった。

しばらくすると青い肌のバンガであるミゲロが出てきた。

「おお、ヴァン、パンネロ。無事じゃったか」

ミゲロはヴァンとパンネロのそう言つて何度も触つた。

「なにすんだよ」

「ガリフの里に行くだけにしては1ヶ月は長すぎる。なんでそんなに時間がかつたんだ？」

「そ、それはアーシエが——」

「それ以上言うな!!」

ヴァンの言葉を掻き消すようにミゲロは叫んだ。

第8艦隊壊滅後にミゲロはセアからヴァンが空賊以外に死んだ事になっているダルマスカの王女と将軍が同行している事情を説明されている。

だからその名を軽々しく口にしようとしたヴァンを叱咤したのだ。

周りの店員や客は何事かという風にヴァン達3人組の方を見ている。

店内にいる人間の視線が自分たちを集まっていることを悟つたミゲロは疲れた声で言つた。

「ヴァン、パンネロと一緒に裏の倉庫へ行きなさい」

「え、あ、ああ」

「ヴァン、行くよ」

ヴァンの手を引いてパンネロは店から出て行った。

そして店の裏にある倉庫に入る。

2分ほど倉庫で待っているとミゲロが倉庫の中に入ってきた。

「ヴァン。お前さんは自分がどれだけ危ない事につつこんどるのかわかっとなるのか？」

「つい、いつもの癖で」

「……ということはお前は普段は王女を呼び捨てでよんどるわけだな」

「え、だって皆普通にそう呼んでるし」

「……本当なのかパンネロ？」

「えつとセアは王女様って呼んでるし、バツシユ小父さんは殿下って呼んでる」

「フランは……自分からアーシエに話しかけてるとこ見たことないから知らない」

「無防備すぎないか？」

「でもアーシエなんて珍しい名前でもないから大丈夫だろ」

ヴァンの言う通り、ラバナスタに住んでるアーシエさんだけでも探せば25人前後はいるだろう。

別に珍しい名前でもなんでもない。

「そうかも知れんが……それだと【殿下】とか【王女様】と呼ばないほうがいいんじゃないかな

「いか？」

その言葉を受けてヴァンとパンネロはハツとした表情をした後、黙り込む。気まずい沈黙が倉庫内を包み込む。

「とにかく、それはセアや王女様にお任せするとして、いったいどうしてガリフの里に行くだけでこんなに1ヶ月もかかったんだ？」

その問いにヴァンとパンネロは今回の旅でのことを話した。

ガリフの里でラーサーと出会い、ダルマスカ再興させて帝国との友好を訴えて、二大帝国の激突を止める為にブルオミシエイスに行ったものの、アルケイディアでヴェインが政権を握り、それが不可能となっただけではなく、ブルオミシエイスそのものが帝国軍の襲撃で壊滅状態に陥った事を。

そして今度は「黄昏の破片」を砕く為に帝都アルケイディアに行く予定であることも。「なんと……よく2人とも無事だったのう」

ミゲロが疲れた声で言った。

死んだレックスやパンネロの家族に代わって、ヴァンとパンネロの世話をしている身から言えばこれ以上旅をさせぬようにとめるべきではと思う。

しかし……もうこれはどう言ってもとめられないだろうとミゲロは思った。

2年前、志願兵として軍に所属したレックスと同じような目を2人ともしていたから

だ。

「とめはせんが、2人とも無事にラバナスタに戻ってくるんじやぞ」

ミゲロの言葉に2人は頷いた。

「それはそうとお前さんらを慕ってる孤児達も心配しておったから会っておきなさい」

「わかった」

そう言つて元気よく倉庫を出て行く2人を見送りながら、ミゲロはため息を吐いた。
「中年の男をあんまり心配させんでおくれよ」

ミゲロの年齢はヒュムに換算すると既に50手前である。

そんな歳の人物に自分の子同然の子ども達が危険な旅に出ている心労はかなりのものなのだ。

だが、八つ当たり気味に街の警邏をしている帝国兵相手にスリをしていた時よりヴァンは生き生きしているように見える。

ならばこの程度の心労は耐えねばなるまい。

「さて、ヴェインさんが代官として残っていた部下に渡す商品を王宮に送らんとな」

ミゲロはそう呟くと倉庫をあさり始めた。

因みにミゲロがヴェインをさん付けでいう理由はヴェインがラバナスタの執政官に就任した際の歓迎の宴会を手配したのはミゲロの商会でその時にヴェインと顔を合わ

せた際に、以下のようなやりとりがあったのだ。

「ミゲロと申します。次期皇帝とられます殿下のお迎えできることは、まさに誉れほま。市民一同、まことに——」

「殿下はよせ」

ヴェインはミゲロの歓迎の言葉をそういつて遮った。

「私は陛下の子ではあるが皇子ではない。わがアルケイディア帝国の皇帝は市民が選ぶもの。……私はただの候補にすぎんのだ」

この200年近くに渡ってソリドール家の人物が帝位についている為、よく誤解されているが、アルケイディア帝国の皇帝は血筋によって決まるわけではない。

軍部独裁時代に軍部の暴走を許した反省として、皇帝は血筋ではなく帝都の市民の選挙によって決まる。

なので現皇帝の息子が必ず次期皇帝となるわけではないのだ。

「これは失礼をば」

自分の失言に気づいたミゲロは頭をさげて、謝罪する。

「かといつて……【執政官閣下】などとは呼ばんでくれよ」

「はあ。」

ヴェインの言葉にミゲロは不思議そうな顔をして見上げた。

するとヴェインは微笑みながら、

「私も今日からラバナスタ市民だ。ヴェインでかまわんよ」

「しかし、それでは——」

「呼び捨ては抵抗があるか？　ならば今夜は、君が私をヴェインと呼ぶまで飲んでもらうぞ」

その日の夜の宴会でミゲロはヴェインからやたら酒を飲まされて、泥酔寸前のミゲロは折衷案としてヴェインさんと呼び、ヴェインがさん付けか……と軽く笑ったところで解放軍が王宮を襲撃したのだ。

その後もミゲロの商会はラバナスタ有数の大商会であったこともあり、毎日というわけではないがヴェインがグラミスによって帝都に召還されるまでかなりの頻度で顔をあわせており、ヴェインの人柄の良さもあってさん付けで呼ぶことに全く抵抗がなくなつたのである。

第六十話 空賊予備軍

ラバナスタ・ダウンタウン。

外民身分の者達の居住区であり、治安の悪いこの場所は犯罪者のたまり場でもある。

そんな地下街の隅で3人の孤児達がひそひそと話し合っていた。

「ジャン、それってホント?」

「うん、さつき見たんだ。この前見たきれいなヴェイエラ」

「……確か、仕事して帝国兵から逃げる為に前見ずに走ってたらそのヴェイエラの尻に顔から突っ込んだよな」

2人の孤児がジャンを羨ましいとばかりに睨む。

するとジャンは叫ぶように反論した。

「そんな目で見えるな! それにその後、そのヴェイエラの連れの男に凄い目で睨まれたんだ! 『子どもでもよかったな』って許してくれたけどさ!」

「んで、その後、砂海亭で見た空賊バルフレアの手配書の似顔絵に男の顔が似ててムツチャビくついたらんだろ」

「ポン! お前、一回あの人から睨まれてみる! セアさんほどじゃないけど恐いよ!!」

「いや、セアさんより恐い人なんかこの世にいるの?」

「……いないだろ。だつてセアさんが怒つてるときつて、無茶苦茶爽やかで優しい笑みを浮かべてるのに、目が凍りついたように笑つてなくて、何も無いはずなのにセアさんの背後にヤバゲな黒いミスト的なものを幻視して、地獄の底から響くような低い低音で話しかけてきて、凄まじい力で折檻してくるんだもん」

「わかるわー」

当時のことを思い出したのか震えながら言う、ジャンの言葉にポンとケンほうんほうんと頷いた。

しばらくその状態が続くとふと思ひ出したようにジャンが言った。

「なんか話脱線してないか?」

「そうだな。つて何の話してたんだっけ?」

「えーつと確か……フィロになにか頼まれてて……」

「そ、それだー!!」

ジャンとポンの2人が一齐にケンの方を指差して叫んだ。

ケンはあまりに突然に自分に向かって叫ばれたので、少し驚いた。

「そうだよ! そうだったよ!!」

「なんで俺らまだここにいんだよ! こんなところにガルバナなんか生えてるわけないん

じゃん!!」

「あ、そうだったね……」

2人の言葉を聞いてようやくケンもガルバナを持ってくるよう頼まれていた事を思い出した。

「とにかく急ぐぞ。フィロに頼まれてからけっこう時間がたってる!」

「この前、ダラン爺から聞いた話だと確か南門から出てすぐのところに生えてるんだつたよね」

「よくそんな話覚えてるな。ケン」

「南門ならダラン爺の家の方の出口が出た方が早いよね」

「ポンの言うとおりだ。行くぞジャン!」

「ああ、空賊予備軍ファイヤー!!」

「ファイヤー!!」

謎の掛け声をあげて走っていく3人組の孤児をダウンタウンの人達は何か哀れなものを見る目で見ていた。

セアとバツシユはそろそろ上に戻ろうとダウンタウンの道を歩いていた。

「あ、セアさん?」

聞き覚えのある声を聞いて振り向くとそこにはカイツがいた。

「やっぱりセアさんだ！つてことはヴァン兄も戻ってきてるの!？」

「ああ。馬鹿弟子ならミゲロさんのとこじゃないかな？」

「そうなんだ！僕、ヴァン兄とパンネロ姉ちゃんに教えたいことがあったんだ」

カイツはピョコピョコと飛びながらそう言つて、初めてセアの隣にバツシュがいたことに気がついたようだ。

「あの、セアさん。隣の人だれ？ アマリアさんみたいに一緒に旅をしてる人？」

「ああ。俺達と一緒に旅してるシユトルテハイム・ラインバツハさんだ。遠方の国の出の人でな。無口だがかなり強いんだぜ」

バツシュはあんまりな自分の説明——無論名前の部分について抗議しなくなったが、主君殺しの上に、ダルムスカを滅亡に追いやり、2年前に帝国に処刑されている筈の自分の本名を名乗る訳にもいかず、釈然としない気持ちになった。

カイツはというとセアにシユトルテハイム・ラインバツハさんの半分嘘交じりの武勇伝を長々と聞かされて目を輝かせていた。

「すっげー!!あなたとつても強いんですね!」

「カイツ、大きい声だしすぎだぞ。目立ってる」

背後からの声にカイツが振り返るとそこにはヴァンとパンネロの2人が立っていた。

「なにつてシユトルテハイム・ラインバツハさんのことだよ」

「しゅとるて——なんだつて？」

「ハハハツ、馬鹿弟子！お前は未だにシユトルテハイム・ラインバツハさんの名前を覚えてないんだな」

突如会話に乱入してきたヴァンがボロを出さないうちにセアがバツシュの偽名を言った。

そしてセアはバツシュを指差して、

「名前が長すぎるから覚えづらいのはわかるけど、そろそろ覚えてやれ」

「えつ、だつてシユナイダーなんとかじゃなくてバツ——デガフツ!!」

ここまで話して、状況を察することができない馬鹿弟子に制裁を躊躇う必要はあるまい。

そう考えてセアはヴァンがバツシュの名前を言い切るより前にヴァンの喉を掴んで黙らせた。

「デイーゴだつて？お前いい加減に間違えるのをやめろ」

「……その名前、なにかの本で読んだ記憶があるようなないような」

セアの嘘まみれの言葉にカイツは首を捻りながらその名前のことを考えていた。

「ヴァン、セアさんもそう言ってるんだし、いい加減にしなさいよ」

パンネロの微妙な言葉でヴァンはようやくバツシユを名前で呼んではいけなかったのだと思出した。

だつて生きてるはずがない人物なわけだし。

「ご、ごめん。えーつと……ギルデンスターンさん」

「シュトルテハイム・ラインバツハだぞ。馬鹿弟子」

「ああ、そうだった」

ヴァンは神を手でくしゃくしゃにしながら苦笑した。

「そーいや、カイツ。2人に教えたことつてなんなんだ？」

ふと思ひ出したようにセアがカイツに問うた。

「あのさ、空賊を目指そう団つてあつたじゃん」

空賊を目指そう団という名に心当たりがあつたセアがすかさず話す。

「ああ、馬鹿弟子が率いてた孤児達だよな？つてかもつとまともな組織名は思いつかなかつたのか？」

「だつて皆空賊に憧れてたから……」

「だからつて安直すぎるだろ」

「満場一致だつたからいいだろ」

「私は反対した記憶があるんだけど」

「……パンネロはメンバーってわけじゃないだろ」

「なによ。あなた達が地下水路で修行とかしてた頃、治療してあげてたの私じゃない！」
「ほう、俺がお前を弟子にする前はそんなことを10才にもなつてない孤児達としてたわけか……」

「べ、別に魔物退治してたわけじゃない。ただ仕事スリの練習とかを……」

「俺の記憶が正しければそれは犯罪のはずなんだが……」

3人の思い出話をバツシュは微笑ましい顔で聞いてきた。

カイツはいうと話をどのタイミングで切り出したものかと真剣に悩んでいる。

十数分後、3人の思い出話はようやく一区切りついた。

「で、オレ達に教えたことってなに？」

「あのさ、最近2人ともラバナスタにいないじゃん。空賊に弟子入りしたとかで」

「……なにそれ？」

「え？だってミゲロさんが『あんな空賊についていきおつて何考えとるんだあの2人は』とか言つてたから空賊になる為の修行をしてるんじゃないの？」

ヴァンが助けを求めるようにセアを見た。

するとセアは意地の悪い笑みを浮かべた。

これは最近ヴァンとパンネロがあちこちに旅をしている孤児達への良い言い訳にな

ると思ったからだ。

「あながち間違いないじゃないだろ」

「あんな奴に弟子入りなんかしないよ!!」

「だけど色々空賊をやつていく知識を教えてもらつてるんだろ」

「それはそうだけど……。まだ飛空艇の操縦の仕方を教えてもらつてない」

「早すぎるつて考えてるんじゃないか？聞いた話じゃお前のせいでゴッグ製のエアバイクが墜落したと聞いたぞ」

「あれはオレのせいじゃない!!」

「ちよつと！本当に墜落したの!？」

「ああ、ちよつと王宮に忍び込んだときにバルフレア達に……」

「そういえば、ヴァン兄。王宮に忍び込んだ時に手に入れた戦利品はどうしたの?」

カイツの純粋な質問にヴァンは返答に窮した。

まさか自分達の死刑の免除と引き換えに戦利品である【黄昏の破片】をギースに渡したなどと言えるわけもない。

「あ、あれは……。その……」

「予想外にもあんまり価値がなかったからにはした金で売ったんだよな」

「そ、そう。セアの言うとおり!!」

「そうなんだ。ナルビナ送りにまでなったのに残念だったね」

セアの出した助け舟にヴァンが全力で乗っかり、カイツがそれを信じてヴァンに同情した。

バツシュはというと嘘だと分かっているのだが王家の秘宝に価値がないと言われて釈然としない気持ちになっていた。

もつとも、その思いを表に出すことはなかったが。

「それで2人とも殆どラバナスタにいないから皆でヴァン兄が一人前の空賊になってきた時に部下になれるよう練習しようって頑張ってるんだ」

「はあ、それで誰が仕切ってるんだ？」

「僕とフィロだよ。と言っても僕は最近グリモア魔導書を読んで魔法の勉強してるからあんまり参加してないんだけど」

「魔法？カイツはなにか魔法使えるようになったの？」

「うん。といつても（ケアル）と（ファイア）を日に数回使えるようになったけど」

「凄いいじゃない！」

パンネロが驚きながら、カイツを褒めた。

この短期間で仮にも魔法を使えるようになるのは並大抵の事ではできない。

「うん。フィロからもそう言われたよ」

「随分と魔法の才能があるんだなカイツ。……今度稽古つけてやろうか？」
「ごめんなさい」

速攻でカイツはその申し出を断った。

以前、セアがヴァンを稽古で半殺しにしていたのを見たことがあるからだ。

当然ながらちゃんと後でセアが魔法で治療したのだが、その場面を見る前にカイツは命の危険を感じて逃げてしまったのだ。

余談だが、そのせいで後日、ヴァンと会った時にカイツがヴァンをアンデットの類と勘違いした。

「あ、それでヴァン兄が率いてくれないなら空賊を目指そう団じゃないってジャンが言い出して、フィロや他のみんなも賛成したから組織名も皆と一緒に新しくしたんだ。皆と一緒に考えたんだよ」

「それもそうだな。以前の名前が安直すぎたし」

「そんなふうに言うなよ。なんて名前にしたんだ？」

ヴァンが尋ねた。

セアもどんな名前にしたんだろうと少し期待を込めて耳を傾けている。

「僕らの慕ってるヴァン兄とパンネ口姉ちゃんの名前をとって」

「名前をとって……？」

「空賊予備軍ヴァンネロって名前にしたんだ!!」

カイツが胸を張って答えた。

ヴァンは自分はこのままで慕われていたのかと感激していたが、他の面々は違った。

「ヴァンネロって……」

「空賊予備軍……そのまんまだな」

「馬鹿弟子を慕う奴もネーミングセンスがなかったか」

3人とも微妙な表情をしながら思い思いの言葉を呟っていた。

「あー!!」

「ヴァン兄!!パンネロ姉ちゃん!!」

ヴァン目掛けて3人の孤児ジャン・ケン・ポンが突っ込んできた。

幾ら十歳にもならない子供達とはいえ、3人が一斉に突っ込んできたらタツクルにも等しい衝撃がヴァンを襲うことになった。

「どけよー痛いッ!!」

そのままヴァンの上に乗ったままになってた3人はその声で一斉にヴァンから降りた。

ヴァンは少し文句を言っただけでやろうと3人を睨むと、3人の孤児が持っているものに注意を引いた。

「それ、ガルバナじゃないか。どうしたんだ？」

「ヴァン兄のお兄さんのお墓の花が枯れてるからお兄さんが好きだったガルバナを探して来いってファイロに言われてたんだ」

そう言われてヴァンは軽い衝撃を受けた。

今まで墓の花が枯れるほどの長い期間、レックスの墓参りをしなかったことなレックスが死んでからのこの1年間ほぼなかったからだ。

レックスが死んでからというものなにか嫌な事があるとヴァンはレックスの墓を訪れていた。

だが、ケルオン大陸での数ヶ月に渡る旅の最中は色々なことがあってすっかり忘れてしまっていた。

「そうだヴァン兄。聞いてくれよ!!」

孤児達の声にヴァンは意識を戻した。

「なんだ？」

「ファイロの奴、人使い荒すぎるんだよ！訓練だつて異常な程厳しいし」

「そうだよ。ヴァン兄から一言ファイロに言つてよ!!」

3人の絶叫にも等しい訴えにヴァンは少し困惑した。

カイツの方に視線を向けるとカイツは視線を逸らして口笛を吹いている。

「どうやらフィロは相当厳しく孤児達にあたっているようだ。」

「わかった。オレも兄さんの墓参りしたいしな。セア、パンネロ、バ——」

「「バ？」」

カイツとジャン・ケン・ポンの三人が不思議そうな顔をしてヴァンを見た。

ヴァンはとうとうとバツシユの偽名、なんだったけ？と必死に記憶を探っていた。

「えーあー、セア、パンネロ、ゲファツハー。先に戻つ——ぎにやああああ!!」

「ゲファツハーじゃなくてシユトルテハイム・ラインバツハだぞ馬鹿弟子!!」

ヴァンに右ストレートを決めながらセアはそう叫んだ。

バツシユは自分の偽名、自分でも覚えるのが大変そうだと思いつつ、なんでこんな

ことになったのだろうかため息をついた。

第六十・五話　ロザリアの諜報部

ロザリア帝国。

イヴァリース最大の領土を誇り、イヴァリースの覇権を争う二大帝国の一角。

肥沃かつ豊かな大地に恵まれ、国民の総数はアルケイディア帝国の実に三倍以上に達する。

これだけならば、とても大きな国家と思えるかもしれない。

しかし、その実態は読者達の世界の中世に存在した神聖ローマ帝国に匹敵するモザイク国家である。

というもののロザリア帝国の成立の原因はガルテア連邦の解体にある。

連邦解体にともない、ガルテア連邦に加盟していた諸国が分裂した。

しかしオーダリア大陸中央部に存在した諸国は肥沃な大地に存在してこともあり、解体後も友好関係を維持していた。

そしてガルテア連邦解体から4年後、マルガラス家が治めていた侯国が中心となってロザリア帝国が成立した。

その当時のロザリア帝国の体制は殆どガルテア連邦におけるガルテア家の立場をマ

ルガラス家に置き換えただけのものだった。

当然、ガルテア連邦の頃と同様にロザリア帝国に参加した諸国の領土はそれぞれ属庭と改称されたものの諸国を治めていた氏族は領主としてマルガラス家の監督の下に治外法権が認められており、巨大な領域国家というよりは数十の国家による複数国家の連合体と言った方がしっくりくる。

ロザリア帝国は成立から約100年の間に戦争は何度かあったものの比較的平和な時代が続いていた。

だが、軍部独裁時代のアルケイディア帝国とのバストウーク戦争にてロザリア帝国は敗北し、マルガラス家は求心力を失い、帝位を追われた。

その後、別の氏族から皇帝が即位し、直属軍の編成を強行したが、氏族達の謀略により、直属軍は皇帝直属ではなく氏族達の代表によって運営されている大本營の直属とされた。

おまけに軍の拡充を優先するあまり属庭の監督が疎かになり、各領主は自分の治める属庭の中央集権を推し進め、ロザリア帝国の属庭同士が主義主張を持って対立することとなった。

要するに各氏族の領主が属庭の王様のような存在となってしまう、誰も皇帝の言う事を碌に聞かなくなったのである。

約50年前にマルガラス家が帝位に返り咲いてからは皇帝の権力は強化されてはいるものの、まだまだ氏族達の力が強いのが現状である。

属庭領主同士による小競り合いは絶えず、属庭同士の結びつきは良いとはとても言い難い。

極端な話、長年の宿敵アルケイディア帝国の脅威と今の封建的体制のみがロザリア帝国を支えているのである。

近年はアルケイディア帝国と技術力で差をつけられ始めており、二大帝国の総合的な実力はほぼ同じだったりするのである。

ロザリア帝国皇帝直轄領帝都ルブラ。

先程入手した情報を伝える為、アダス・マルガラスは諜報部の長である遠い親戚の下に急いでいた。

長い廊下走りきって、諜報部の長官の執務室に続くドアをあけた。
すると……

「……………」

実に美しい美女が全裸で諜報部の長にもたれかかり、艶かしい吐息を立てていた。

そして諜報部の長はその美女の背中に手を回しい手から見合っている。

その2人はまるでアダスが入ってきたことなど気づいていないかのように交わっている。

アダスは予想外の光景に暫し呆然としたが我を取り戻すと自分の懐に手を伸ばす。

そこから機工都市ゴークから輸入した最新式の小銃を取り出し、天井に向けて発砲した。

その銃声でようやく気づいたのか、アルシドは全裸のカナートを執務室の奥にある部屋にいかせると居住まいを整えた。

「……………さて、これはどういうことか説明して貰いましょうか？」

眉間に青筋を浮かべながらアダスはアルシドを睨みつける。

その目には侮蔑と嫌悪の感情が込められている。

「なにか私が問題なるようなことをしていたか？」

「ありまくりだろうがあああああああ!!!」

地震でも起こったかと思わせるほどの絶叫にアルシドは少し怯んだ。

「公務中になにをやってるんだお前は?!」

「部下のアフターケアは公務の内でしょう」

「いったいどこにアフターケアで部下と性交する上司がいるんだよ!ええ?おい!!」

「まったく少しは落ち着け。ゴーク製の小銃なんか使いやがって、あれ弾だけでも高い

んだぞ？」

「……それは悪かった」

ゴークはイヴァリースで他国より百年以上進んでいると言われる機工技術で栄える都市国家だ。

政治的には中立であり、その機工技術を学ぼうとアルケイディアからもロザリアからも留学しに来る機工師は多い。

主な収入は優れた機工技術による製品の輸出である。

それ故、政府の認識せぬ所で自国の機工技術が流出することをなにより恐れており、政府の承認を得ずに入国及び出国することは喻え自国民であろうとも見つかれば次第に刑に処される。

アリー一匹見逃さぬその国家体制の厳しさから周辺諸国からは監獄国家と呼ばれることもしばしばある。

そんな国の輸出品は高値で取引されている。弾一発でも千単位でギルが飛ぶのである。

「ところでなんでアレがアフターケアなのか詳細な説明を求める。長官殿」

アダスは絶対零度の目で同期のアルシドを睨みつける。

するとアルシドは落ち着き払った態度で答え始めた。

「何故、私の直属が女としての自己主張が激しい体型の人ばかりなのは知っているな？」
「お前の趣味のせいだな」

アダスは今にも目の前の上司を絞め殺してやろうかと言う目をしながらそう吐き捨てるように言った。

「ああ、それが私の直属が美女ばかりな理由の9割近くを占めているが——アダス、腰の剣を抜くのは話を聞き終わってからにしろ——残りの1割は酷く現実的な理由だ」

そこまで聞かされてアダスはほほ手放しかけていた理性を僅かながらに取り戻した。趣味以外の理由でアルシドが部下を美女で固めている理由に興味が沸いたのである。

「アダス。我々が集めるべき情報はアルケイディアやファアラ教会のものを除くとほぼ大本営に対するものだ。そして大本営は氏族の代表者達で構成されている。彼らから情報を引き出すのは困難だ。尾行・買収・脅し・潜入……それらに対する対抗処置を氏族達は持っている。尾行を排除できる護衛・金に誘惑されない自制心・そしてマルガラス家の脅しを物理的に無効化させる属庭軍・そして間者を常に経過する猜疑心。こういったものを兼ね備えた者から情報を引き出すのがどれ程の至難の業か、諜報部に所属する者ならば分かるはずだ」

アダスは重々しく頷く。

「だが、私の経験上どういいうわけか、こういった者に限って女に弱いことが多い」

「へあ?」

変な声を出してアダスはの体中の力が一気に抜けた。

抜けすぎたせいで盛大に座っていた椅子から転げ落ちて、重力に従い床に叩きつけられる。

その様子を見てアルシドが呆然とした顔をしていた。

「どうした? アダス」

「……なんでもない」

あまりといえばあまりな答えに緊張の糸が切れただけだ。

そうだ。緊張を切らした俺が悪いのであつてアルシドのせいじゃない。

アダスは心の中でそう何度も呟きながら平常心を保とうとする。

「それでカナートに強硬派であるエレウス家のバルト卿に偶然を装って接触してもらい、彼女は非常に重要な情報を手に入れてきてくれた」

「バルト卿って……あのバルト卿?」

バルト卿はエレウス家属庭領の要職につく男だ。

勿論その地位に就く値するほどの有能な男で有名なのだが……とにかく容姿が酷い。貴方はシークですかと思わず問いたくなるほど、まんまるな肥満体型をしている。

常に彼の額には汗が必ず流れているという酷い理由でも有名である。

「ああ、中立派のクロイツ家を抱き込もうと違反行為を行っている。このことをクロイツ家に伝えたら、エレウス家の違反行為の証拠探しに協力してくれることを確約してくれた」

「それは喜ばしいことだが……、それと俺が入室してきたお前達の行為に何の関係が？」
アダスの疑問の声にアルシドは眉を擡めた。

「どうやって猜疑心の強いバルト卿から情報を引き出したのか……カナートの美貌も考慮すればわかるだろう」

「ああ、ハニートラップだろ。だが、それとは関係ないだろう」

「……カナートが言うには汚されたので心の洗濯をしてくださいって」

「……………嘘だろ？」

アルシドはゆっくりと首を振った。

「……」

「……」

嫌な沈黙が続く。

数分後、アルシドが咳払いし、話を戻した。

「それでいったい何の用でここに来た？」

「ああ、強硬派のバドレー將軍の情報を掴んだぞ」

アダスは懐から書類を取り出し、それを渡した。
アルシドはその書類に目を通す。

「暫くおよがせよう」

「やっぱりか」

バドレーを追い詰めるだけの材料が整つてはいたが、これは氷山の一角に過ぎない気がするのだ。

捕らえてバドレーを尋問している間に関係者は証拠隠滅に走る可能性すらある。

いや、先日の内部の問題の件も含めると……

「我がマルガラス家の中に裏切り者がいる可能性がある」

そういう予測が容易に立つ。

いる確率としては3割といったところだが、無視できる数字ではない。

「ユリウス陛下も反戦派の氏族の代表方と共に大本営で強硬派と激しい議論を戦わせている。」

陛下には私から伝えるが、他の者達には決して伝えないよう徹底させる。

それにバドレーには腕のたつ監視をつけておけ。こいつは重要な存在だ」

「ハッ」

アダスは敬礼すると、気安く話し始めた。

「無理って分かっているけどクライスさん復帰してくれないかな。」

あの人がいれば、主戦派を抑えるのが楽になると思うんだけどな。」

アダスはアルシドから神都で尊敬するクライスと会ったことを聞かされているのである。

同時にセアが不老であることも教えられている。

「無理だ。あの方は今は自分の弟子と一緒にダルマスカのアーシエ王女殿下に同行している。」

それに……上司に辞職願を提出した上で国外逃亡したらしいから戻りたくないとも言っていた」

「あの人、冗談みたいなことを本気でやっている一方で普通に冗談も言うから本当のことかどうか判断するのに困る」

アダスは苦笑しながらかつての上司であるクライス・セア・グローリアのことをそう評した。

第六十一話 国境封鎖

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領東ダルマスカ砂漠にて。

チヨコボに曳かせた馬車が何台も連なって、砂漠を東へと進んでいる。

「よく乗り込めたものだな」

「ミゲロさんはラバナスタ有数の商人だし、あちこちの商隊に伝があるから上手くいっただんだと思います」

バツシユの眩きにパンネロが答えた。

ちようどラバナスタからナルピナに向かう商隊があつて、ミゲロが彼らも連れて行つてくれないかと頼んで貰い、セア達はその商隊の馬車に乗せてもらっているのである。

東ダルマスカ砂漠には魔物が多くいるが、ダルマスカにとつては欠かすことのできない交易路なので馬車が進む事のできる程度の道は整備されている。

もつともその道であろうと砂漠の魔物は容赦なく襲つてくるのではあるが。

その為、商人たちは護衛の為についての駄賃目当てで冒険者等が商隊に同行するのは珍しいことではない。

ただそれらは商人ギルドが信頼できる業者を通して行われるものであり、ミゲロを介

したとはいえ、直接商隊と交渉して同行するのは中々ないことだ。

交渉が上手くいったのは一重にミゲロが他の商人たちに信頼されているためだ。

暫く馬車の中で思い思いに過ごしていると馬車が停止した。

「このキャンプで30分ほど休憩する」

商人の大きな声が聞こえ、馬車の中にいた商人や護衛の冒険者や傭兵が出ていく。

「オレ、ちよつとトイレ行つてくるわ」

「……いちいち言う必要あんのか？」

ヴァンがそう言つて馬車から飛び出して言つたのを見て、バルフレアは顔を顰めながら呟いた。

「あのな。馬鹿弟子は子どもだぞ？一応な」

「子どもつて……あいつ何歳よ？」

「17」

「フラン。ヒュムの17歳は子どもの中に入ると思うか？」

「微妙ね。18歳なら間違いなく大人でしょうけど」

「なんでだ？」

「だってバルフレアは18歳の時に家出して空賊になったから」

「……お前、家出少年だったのか」

たぶんバルフレアのキザったらしい態度を見かねた父親と喧嘩別れでもしたのだらう。

そんな予想をしたセアは哀れなものを見る目でバルフレアを見る。

セアの視線を嫌ったバルフレアはフランを恨めしそうに見た。

「フラン、余計なことは言わないでくれ」

「気をつけるわ」

フランは特に気にした様子もなくそう言った。

「お、そこにいるのはセアか？」

声が聞こえたほうにセアが振り向くと一人の男が立っていた。

セアにとっては5ヶ月くらい前に見たことある顔だった。

「モブ討伐の依頼者のダントロさん。集落にもどってはいなかったんですか？」

「ああ。5ヶ月前から交代が来ないからずっとこここの番をしている」

ダントロはそう言ってセアを睨みつけた。

だが、睨みつけられた本人はまったく交代が来ない心当たりがなかった

「俺はちゃんと花サボテンの花を貴方の奥さんに届けたときにちゃんと交代を寄越してくれて伝言は伝えておきましたよ」

基本的には人畜無害なサボテンだが、稀に強いリーダーシップを発揮する好戦的なサ

ボテンが生まれる。

そのサボテンは決まって頭に花が付いていることから花サボテンと呼称されている。花サボテンは亜人種もかくやというほどの知能を持ち、他のサボテンを従え、砂漠の商人を襲ったりするのだ。

因みに花サボテンの頭の花は良い薬の材料となるので高値で売買されている。

その為、ダントロがその花サボテンをモブとして登録し、そのモブ討伐に現れたのがセアだったのである。

討伐後にセアはダントロの頼みでダントロの妻に花サボテンの花を渡し、ついでにダントロの伝言も伝えてきたのである。

「……ならなんで交代が集落から来ないんだ。まさか集落に何かあったんだろうか。いや、また帝国軍が演習でもしてるだけか？」

てつきりセアが伝言を伝え忘れたから交代がこないと思ひ込んでたダントロは少し集落のことが不安になったが、ヴェインが執政官に就いてから演習やらなんやらでよく帝国兵を見かけることがある為、交通封鎖でも行われているのかと思つた

「なんだ。もし集落に寄るなら交代を寄越せつて伝えといてくれないか？」

「たぶん寄らないと思うぞ。集落つてネブラ河沿いにあるだろ？ 目的地はナルビナだから」

「ああ……。じゃあ待つしかないわけか」

ダントロ口は脱力して丁度いい高さの木箱に腰を降ろした。

それを見たセアはダントロに深く同情した。

すると再び商隊のリーダーが休憩終了を告げ、再び商隊はナルビナへと向かい始めた。

アルケイディア帝国旧ダルマスカ王国領城塞都市ナルビナにて。

旧ダルマスカ王国の北の国境線近くにある城塞都市であり、ダルマスカ建国初期から国境を守る要害であったため2年前の戦争での激戦地となり、多くのダルマスカ兵がこの地で散っていった

そしてその戦争の和平協定の際に、ダルマスカ王国の国王ラミナスが停戦に意を唱えたローゼンバーク將軍に暗殺され、ダルマスカ王国の滅亡が決定付けられた場所。

数ヶ月前にセアがこの都市を訪れた際には、そんな感慨しかなかったのだが、あの戦争の裏側の一部を知った今となってはまた違った感慨がわいてくる。

「またここに来るとはねえ」

城門前にある手ごろな石に腰を降ろしているバルフレアはそう言ってため息を吐い

た。

「なんだか嫌そうだな？」

「ヴァンから聞いてないのか？俺達は一時この地下牢にぶち込まれてたんだぞ」

「ああ、馬鹿弟子が無謀にも一人で王宮に忍び込んだ時に帝国軍に捕まってここの地下牢にぶち込まれたんだつたな」

王宮に忍び込んだヴァンは「黄昏の破片」を盗んだはいいものの、同じものを狙っていたバルフレア達と邂逅して口論になっている最中に、執政官に着任したヴェインの首を狙う解放軍が王宮に乗り込んできてヴァン達は地下水路から帝国軍の包囲網からの脱出を試みたという。

途中でアーシエ——その時はアマリアという偽名を名乗っていたそうだが——を助けて、ダウンタウンまであと一歩というところで帝国軍に捕縛され、このナルビナに送られた。

その地下牢の最深部に囚われていたのがバツシュで彼の協力を得てヴァン達は脱獄に成功したらしい。

その間セアは帝都アルケイデイスにあるドラクロア研究所で仕事をしていたので、ラバナスタに戻った時はその状況に——特にヴァンには逃げ切れないなら王宮に忍び込むなど呆れたものだ。

おかげさまであれ以来ヒマがないとセアは思った。

「……国境が封鎖されているみたいですね」

ナブラディア地方へと続く道を封鎖している帝国軍を見て、アーシエが小さい声で言った。

「私達がここにいて知られているんでしょうか？」

パンネロも不安そうな声で言った。

「いや、それはないとは思いますが……」

「でも聞いてみるのが一番早いな。ヴァン……いや、パンネロ。悪いが聞いてきてくれ」

「なんでオレじゃなくてパンネロに替えたんだよ!!」

「今は黙ってる馬鹿弟子。頼むよパンネロ」

「え？ はい、わかりました」

パンネロはやや困惑しながらも道を封鎖している帝国軍に事情を聞きにいった。

数分後、城門前に戻ってきたパンネロが事情を説明した。

「帝国軍の演習か……」

帝国軍が国境を封鎖している理由は旧国境地帯で軍事演習を行っている為だという。

昔はナブラディア軍とダルマスカ軍が合同演習する際にもよく使われていたので、別段不思議なことではない。

ロザリア帝国の脅威が迫る今、アルケイディアも軍の錬度を上げておきたいのだから。

「2週間もする予定ですって？ そんなにここで時間を潰している余裕はないわ！」

アーシエが声を張り上げる。

事実、こんなところで2週間も足止めをくらっている余裕など今はないのだ。

「かと言つて、うちのシユトラールが【暁の断片】のせいで動かない以上、危険を覚悟でターミナルから定期便に乗るしか方法はないぜ」

「……別ルートがないか聞いてみるか？」

セアの言葉にバルフレアは怪訝な顔をする。

「誰にだよ？」

「無論、あそこで国境を封鎖している帝国兵の奴らに」

「どうしても陸路で帝都に行きたいんですってか？ 怪しまれるのがオチだろ」

「幾らでも偽装できる。そこで出番だ馬鹿弟子」

「え？ オレ？」

急に水を向けられて驚くヴァン。

「いいから。行くぞ」

セアはヴァンの手首を掴むとやや強引に引っ張って行った。

こちらに向かってくる青年と少年の2人を認め、帝国兵数人が彼らを囲む。

「悪いがここは通行禁止になっているんだ。本国領に用があるなら定期便を利用してくれ」

隊長である帝国兵が面頬を上げて申し訳無さそうに2人に言った。

「そうなんですか。じゃあナブラディア地方に行くにはどうしたらいいですかね？」

「ナブラディア？ あの廃墟に用でもあるのか？」

青年の言葉に隊長は怪訝な顔をしながら問う。

ナブラディアはダルマスカと違って先のガルテア戦役で帝国軍の猛攻を受け、首都が謎の大爆発で消滅したこともあり、殆どの都市が廃墟と化している。

結果、ナブラディア地方は帝国の影響下にある一部の都市を除いて魔物が我が物顔で徘徊し、それを承知で帝国から逃げ込んだ犯罪者達が巢食う無法地帯と化している。

そんな場所にわざわざ好き好んで行きたがる人など殆どいないのだ。

「ええ。実は師匠から我が弟子の最終試練の監督を任せられてね。死都に行かなくてはいけないんです」

青年はそう言う少年に首に腕をまわした。

そして少年が喋れなくなる程度に腕に力を入れる。

「死都って、あの死都ナブデイスのことか？」

「ええ」

死都ナブデイス。

ガルテア戦役でかつて栄えた美しきナブラディアの都の成れの果て。

謎の大爆発が原因で首都の街並みは不気味な湿原となり、今はミストが荒れ狂い、凶暴な亜人と死霊がさ迷う魔境となっている。

王宮だけは何うしてその原形を留めているというがそこも死霊の住みかになっていることに変わりはない。

あんなところに行きたがるのは余程腕に自信がある者か、ただの自殺志願者だ。

「それくらいうちの師匠は厳しいので。かくいう自分も死都で業物を手に入れて師匠から免許皆伝されたんですけどね」

そう言ううと青年は少年の首を絞めている腕とは反対の方の手で腰の剣を抜いた。

「これがその業物なんですが」

「ほく。確かにその辺で売られてる数打ちの剣じゃないな」

「そうなんですか。隊長」

「ああ。かなりの達人の鍛冶屋じゃないとこんな剣は打てねえよ」

部下の質問に隊長は快く答えた

隊長はそれなりに剣の目利きができたので、青年の剣が相当な業物わざものであることがわかった。

それを聞いて部下たちがセアの赤黒い剣を見る。

「なるほど。事情はわかったが、ここの封鎖をとくことはできん。」

だが、ネブラ河を渡ってモスフォオーラ山地を越えるルートなら4日程で死都に行けるだろう」

「ネブラ河はどう渡ればいいんですかね？」

「河沿いにあるそれなりに大きい集落なら対岸に渡る為の渡し舟がある。それに乗せてもらえばいいだろう。」

しかし、今からこの街から出ると砂漠で一夜を過ごすことになるぞ」

「夜の砂漠は寒いですからねえ」

「そうだ。だから今日はこの街で一泊していくといい」

その説明を受けてセアはヴァンを引きずってさっきの帝国兵から距離をとるとヴァンの首を絞めていた腕を解いた。

するとヴァンから妙な視線をセアは感じた。

「どうした？」

「……別に」

よくもあんなにペラペラと嘘を吐けるなど言つてやりたかつたが、そうした場合ほぼ確実にセアから稽古という名目で激しい報復を受けるのが容易に想像できたのでヴァンは何も言わなかつた。

(今までなんで嘘があんなに上手いのか疑問だつたけどロザリアの諜報部に所属してたことがあるなら当然なのかな?)

ヴァンはそんな風に考えたが、セアは元々一国の君主なので腹芸は昔からできる。

更に700年以上に渡つて蓄積された豊富すぎる人生経験がその技量を更に向上させているのだが、ヴァンの思考はそこまで回らなかつた。